別冊宝島356

実録!
サイコさんからの手紙

ストーカーから電波ビラ、謀略史観まで!

嫌がらせ電話、タレコミFAX、
投書魔、天皇陛下への告訴状、
クレーム・パラノイア、Eメール“エヴァ”論争、
歴史教科書問題系怪文書、ACの告白、
個人情報＝ゴミ追跡者、求婚ホームページ、
逆ギレ・レター、電波系自費出版——。

ムカツキと依存と
自意識肥大症のすき間から溢れ出る、
高度情報化社会で
ブチキレた人びとのそのまんま!!

8/1 前略
電話しちゃってご免なさい。9月5日
に先生が来た日にさ ちょっと まずいな
ぁナーと思いまして。先生が来ないなら
行こうと思ってたもんで…。すなら 気軽が
[illegible] きんちょうしちゃって 鈴木さん
と気が合わなくて 喋れなくなっちゃう
からです。ヨシ やっぱり 止まりはるの
で [illegible]なっちゃうと思いますが…

実録！
サイコさんからの手紙

ストーカーから電波ビラ、謀略史観まで！

隣のサイコさん

帰ってきた、サイコさん!!

実録!
サイコさんからの手紙

ストーカーから電波ビラ、謀略史観まで!

高度情報化社会で
ブチキレた人びとのそのまんま!!

あなたの中のサイコさん

INTRODUCTION

「とくしまに実家がある、十一歳の小学生です。さいきん、色のどすぐろい男につけねらわれます。55～60才ぐらいなのですが、こちらの動きをよくしっていて、きけんな目にあわされます。顔をかくすようにしたり、パトカーにのったり、トラックにのったり、いろいろしています。又、いたづら電話もよくかかり、電話口に出るとホーホーしかいいません。特にウィルというビデオやに行くとよくあらわれます。ストーカ（ー）はふせげないのでしょうか。友人によく手紙をだすのですが、封をあけたようなあとがあるとよくいわれます。毎日こわいので、土、日はしんせきの巡査のところに泊まっています」

これは、小社に届いたある手紙の全文である。差出人は不明。中太の黒マジックで綴られた作為的な筆跡の〝ミミズ文字〟。十一歳の小学生と言っているが、本当に子どもなのかと思わせる妙な文体……。

この手紙の差出人は何を伝えたいのだろうか？　「ストーカー」とやらを懲らしめてほしいのか？　「色のどすぐろい男」とは誰か？　「ホーホー」という擬音の正体は……？

メディアの世界で仕事をしていると、今紹介したような妄想系電波レター、怪文書ファクス、あるいはほとんどボーダーライン（人格障害）としか考えられない人物からの電話など、ようするにまったく見ず知らずの人間が放つ、奇妙で熱だけのこもった「メッセージ」に接する機会がちょくちょくある。約一年ほど前、この本の前身、『隣のサイコさん』（別冊宝島二八一号）が出た直後は、その手の手紙や電話をもらうことが多かった。

「昔、パラノイアでした」「電波のマインドコントロール、といてください」「親友の×××は虚言癖ひどく、今度ぜひ記事にしてほしい」、そして「一人にして下さい」という書き出しで始まる、意味不明の手紙……。

この本は、編集部がそうしたメッセージを受け取ってきた経験から企画されたのだが、『隣のサイコさん』が、はなから社会的にオカシイと印づけされている人々の話題が中心だったのに対し、本書は、取材を続けていくことで、まったく逆の発想から生まれたかのような本になった。その主旨をずばり言えば、こうだ。

「あんたらも、オカシイ」

「あんたら」とは、市民社会の中で一応マトモと目されて暮らす多くの人々のことである。いささか挑発的な言い方と思われるだろうが、平たく説明すれば、そういうことになってしまう。

たとえば、本書には、こんなメッセージが登場する。

作家への「ストーキング・ラブレター」、〝反権力〟雑誌『噂の真相』に送られてくる数々の「タレコミ」、小さな親切運動の本部に応募された投稿魔的「涙が出るほどいい話」、個人売買の世界で詐欺を見破られて〝発狂〟した女からの「逆ギレ・レター」、企業にかかってくる「クレーム・パラノイア系電話」、〝歴史教科書問題〟の中心人物に届くサブカル左翼からの「怪文書」、神戸事件謀略説をマスコミに訴える「告発ファクス」……。

それらを眺めていて気づいたことがある。「メッセージ」の数々は、一見突出したもののように見えるが、実は、そこから炙(あぶ)り出されてくる発信者のメンタリティこそ、どうやら今の時代の主流派なのだと――。

八〇年代の「消費社会」はオタクを生んだ。バブル崩壊を通過した今もその流れは続き、そこに加わったのが、現在着々と地盤固めを進行させている「高度情報化社会」だ。では、高度情報化社会は何を生んでいるのか？

ずばり、それは〝ブチキレた人々〟としての〝サイコさん〟である。

高度情報化社会が目指すのは、いつでもどこでも、さまざまな情報を自己中心的に入手できる「世界はオレのもの」的社会のはずである（とりわけ、ネット社会とは、そういうものである）。それは「自意識肥大症」を招き、満たされない欲望は「ムカツキ」、あるいは他者への「全面依存」となって、人々をサイコさん化する。この先、おそらくそんな人種が、クローン人間さながらに、もっともっと増殖するのではないだろうか。これは少なくとも、ノストラダムスや長谷川慶太郎のものより、うんと確度の高い予言のはずだ!?

経済の地盤沈下がどんどん進んでいる今も、世間は相変わらず「消費」への強迫観念に翻弄されている。

本書は、来るべき時代に向け、一人でも多くの読者の方がオカシクならずにいてほしい――そんな願いを込めて処方された、「吉外につける薬」なのである。

別冊宝島編集部

別冊宝島三五六号　実録！サイコさんからの手紙　目次

PART 2 世紀末スラム空間を行く！

PART 3 電波来襲!!

表紙立体イラストレーション＝野崎一人
表紙撮影＝任博
本文写真提供＝小島義秀＋平山法行
本文イラストレーション＝唐沢なをき＋丹波鉄心＋中野豪＋森口裕二
本文写植印字＝江口正文（マリオ・アイズ）
表紙・本文デザイン＝中山銀士＋杉山健慈＋平澤眞佐子

PART 1
キレ者まかり通る!!

実録!・女ストーカーからの手紙!!

魂のスカッドミサイル被爆体験記!

日に数十回の電話、毎日の郵便物、ファクス攻撃……。
「あれだけどなられながらも、先生の事〝大好き〟と言い張る私は、確かにキチガイでしょう。惚れてる人に殺されたら、キチガイはそれで満足です。でも、出来れば、絞殺にして下さいね」
恐怖と爆笑渦巻く、「いるとこわかったよ〜ん」の手紙の中身!

見沢知廉（作家）

〈ストーカー〉という単語がマスコミにちらほら出始めたのは、だいたい九六年半ば以降のことだったと思う。

マスコミは、〈横文字の単語〉をブームの波に乗せてしまうと、必ず調子にのって、ドラマや本、映画などの題名あるいはテーマに取り入れ、単語本来の意味を思いっきり拡大解釈する。その影響もあるのか、最近では、男や女が、異性に（それも、まったく会ったこともないというわけではなく、一定の付き合いがあったりする場合まで含めて）熱烈な片想いをしてアタックすることさえ〈ストーキング〉などと軽薄に呼ぶようになった。

違うんだよ！〝本物〟のストーカーってのはなあ、もう、そんな生易しいもんじゃなくて、一種の宗教というか狂信、いや精神病理学の立派な対象になる凄まじいサンプルなんだよ！

俺は「イギリス大使館火炎瓶襲撃事件」「スパイ処刑事件」などの実行犯として十二年の刑期を終え、九四年の十二月八日に出所した。

出所して一週間ほどたったとき、獄中で書いた「天皇ごっこ」が新日本文学賞を取ったので、新聞の社会面がスクープとしてそれをかなり大きく扱った。その後、週刊誌や月刊誌の取材が続き、「天皇ごっこ」の単行本化、そして獄中体験を書いた『囚人狂時代』もすぐに発売され、これはかなりマスコミにも取り上げられ、大ヒットとなって結局八万部を売った。

民族派右翼の一水会や統一戦線義勇軍の活動家として事件を起こす以前は、ヤンキー、ゾクもしていたから、獄中で愛読していたヤンキー専門誌『ティーンズロード』に、出所後半年たった九五年の半ば頃から人の紹介で連載を始め、それがいつの間にか、ヤンキーやゾクの人生相談のコーナーになり、キレ系の手紙をずいぶんもらった。『ＢＵＢＫＡ』『ＢＵＲＳＴ』『ＧＯＮ』『ｗａｆｆｌｅ』といった、これまた少しキレ系の雑誌で連載を始めたのも、その半年後のことだ。

第一号めのファンレターは、これは今でも定期的に必ずくれるのだが、広島に住む〈ヤクザオタク〉で、『天皇ごっこ』出版直後に送られてきた。いつも住所・名前を書かず、一度『ＢＵＢＫＡ』の誌面で「住所と名前を教えてよ」と呼びかけたのだが、「とにかく僕は臆病なので。万が一のガサ入れが怖いから……」と、住所も名前も相変わらず明かさない。「何々会系の何々組の何々派が何々をしたことについて、先生ぜひ書いてください」といった具合に、とにかくヤクザ知識に詳しい手紙だけは送られてくる。そうかと思えば、プロレスラーのカードやシールを突然同封してくる(笑)変わったファンだった。

いや、変わっているファンでもいい。ファンはファンだ、ありがたい。ここのところ少しサボってはいるが、原則としてファンレターには必ず返事を書くことにしている。ファンの反応は、実にありがたい。文筆の励みになる。

もちろん、自分にもひょっとして、松田聖子や美空ひばりを襲ったり、「森進一の子どもを産んだ」と喚いて大騒ぎになったような「サイコなファン」がいつかは出るのかもしれないぞ——という恐れはあったが、なかば他人事のように、甘く考えていた。ただし、あの女につきまとわれるまで

はだ！　俺は、本当に、神経がおかしくなったんだ！

統一戦線義勇軍の神経衰弱

その女の名前を仮にS田としておく。埼玉県に住み、年齢は今年三十。バツイチの子持ちにして何か手に職を持っているのか、自宅で仕事をしているようだ。彼女から届いた郵便物、ファクスは三千を超え、今では読者関連の手紙類の大部分を占めている。

あれは九六年春のことだ。それ以前から、S田は俺の自宅住所、電話番号を突き止めようと、関係のある出版社、政治団体に「ライターなんですけど、見沢さんのアシスタントとして勤務したいんで」と偽って、電話をかけていたようだ。マサダ、第三書館、『ティーンズロード』『GON』『BUBKA』『BURST』『週刊プレイボーイ』の編集部、宝島社、新潮社、一水会など。しかし、やはりその道のプロはプロ、簡単には教えない。

ところが、たまたま一水会の事務所に、よく事情を知らない一般会員が泊まっていた夜、運悪くS田から電話があり、これがなんと住所、電話番号を教えてしまったのだ。

ある日、速達が来た。

「ちーちゃまへ。いるとこわかったよーん。そのうち襲いにいくからね。ワーイ、ワーイだ。♡♡♡」

作家なんて、だいたい夜型だ。俺の場合、特に午前中の約束がなければ、午後二、三時に起きて、夜の三、四時頃まで仕事をする。夜中の十二時頃が「夕方」の感覚だ。

だから、速達（午前九〜十時に来ることが多い）や午前中の宅急便は、まさに「真夜中に叩き起こされる」という感覚なのである。その速達が三日連続で続き、以降、執拗な電話攻撃、ファクス攻撃にさらされたため、とにかくそういった用件は事務所宛てにしてくれ！　と、強く言い聞かせた。

じつは事務所への攻撃は、それ以前から始まっている。当時俺は、「見沢知廉事務所」を統一戦線義勇軍の事務所に置いていた。『天皇ごっこ』が出たとき、できるかぎり読者の反応を実感したかったため、本の中でその事務所の連絡先を公開していた。

事務所の所在地を知ったS田は、手紙は言うに及ばず、変な死体写真集、『ORUG』『TOO　NEGATIVE』『世紀末倶楽部』といったキレ系の雑誌、さらには不二家のペコちゃんチョコレートなどの飲食物を送りつけてきたり、執拗な電話攻撃、ファクス攻撃を続けていたのだ。

義勇軍の書記長で事務をやっているHは温和な人間なのだが、ときには三十分おきにS田から電話がきて、「あのぅ……言い忘れたんですが、チョコレートよりガムとか送った方がいいかな？」などという、本当にどうでもいい内容の電話を受け続け、事務所に寝泊まりしていたものだから、ある日さすがにキレた。

「見沢さん、もうオレ、あいつにだけは我慢できません。電話を取ってあの声が聞こえるとゾッとするんです。夜の仕事なのに、朝から電話がかかってくるから、寝られないんです。その旨、手紙で書きますけどいいですか？」

ああ、是非やってくれやってくれ、あり

や、ひどすぎる——。

しかしその何日かあと、Hの書いた手紙に赤ペンで直しを入れ、「誤字」「この字は汚い」「文脈がヘン」、おしまいには「60点、もっとがんばるように」と書き加えたものが、私の元に送られてきた……。

さすがにこのことはHに言えなかったが、そのあとも事務所への電話、手紙（例えば、分厚い大きなダンボールを便箋代わりに——S田が言うには「普通のハガキ、封筒を使うと他のファンレターとまぎれて読まれないと思って」そうしたとか——色とりどりのマークや文字、それに蛍光ペンでアンダーラインを引いた手紙を送ってくる。恥ずかしくてたまらない）が続き、Hはとうとう爆発した。

「僕は、天下の統一戦線義勇軍の書記長を務めています。いいか君、君のせいで僕の生活も事務もメチャクチャだ。宣言しておく。義勇軍の名前で抗議を出せば、右翼に高飛車などんな企業や官庁だって、すぐに謝罪してくるんだ。我々はプロの軍隊だ。もう我慢できない。いいか、これ以上君が我々に対して不当な攻撃、嫌がらせ、事務

の妨害等を加えるなら、我々としても政治的に対応せざるを得ない。街宣車でそちらに行って、君の不当性を訴えてやるからな！」と、受話器に向かって宣言した。

のち、事務所には頻繁に、取っては切れる無言電話が続いた……。

見沢知廉に生まれ変わってヤル！

「見沢さん、もうオレはキレました。政治のためだったらム所に入るのは厭わないです。馬鹿な刑事事件は絶対に起こしたくなかったが、あの野郎は別だ、天誅を下します！」

いや、分かった分かった、興奮するなよ――俺は、なんとかHをなだめた。

「しょうがない、以後手紙、電話、ファクスはこっちにくれるよう手紙書いとくから、我慢してくれ……」

もちろん、進んでS田に自宅の住所、電話番号を教えたわけではない。事務所への攻撃の最中に自宅の情報を捕捉され、いったん軌道を事務所へ修正させたが、義勇軍の事務所にこれ以上迷惑はかけられず、あえなくまた自宅を標的として差し出さざるを得なくなっただけである。

しかし、甘かった。

まず電話だ。とにかく、本当に意味のない、ただかける口実を一生懸命捜した――としか考えられない電話を、一日に何十回もかけてくる。

リーン。

「……あのう、先生の家に行っちゃダメですか？」

「ダメ。仕事です」

ガチャン。リーン。

「……えーと、さっきの件ですけどぉ、仕事が忙しいなら、休憩の時間をお知らせくだされば、その時間に合わせて行きますけど……」

「ちょっと、電話やめてくれよ。物書きはプライベートなときは独りでいたいの」

ガチャン。リーン。

「……じゃあ、ドアの前で黙って握手だけでも……」

「そういう例はつくりません」

ガチャン。リーン。

「……じゃあ、握手はいいから、小林ひとみに似てる（笑）そのお顔を一瞬、ほんと一瞬だけ、ね、見せてくださいよぉー、ケチ！」

そして、手紙。『ティーンズロード』で人生相談をしていた頃、かなり変な手紙はもらった――入院先の精神病院からの手紙（診断書付き）、拘置所やネリカン（練馬鑑別所）の中からの手紙、封筒、便箋一杯に菊のご紋や「夜露死苦！」「バリ」とめいっぱい書き込んだ手紙、「昨日、急に英語がわかるようになりMASITA。月と地球とスフィンクスの三角形の法則からです。次はドイツ語がわかるようになるでしょう」と書いた図解入りの手紙（笑）。しかし、やはりファンレターはもらえば嬉しい。全部目を通す。

ところが、S田の手紙はケタが違う！　あるときは、ノート一冊を字で埋め尽くした手紙（というか、何というか……）が届いた。

どうやら、本は結構読んでいるらしい。いきなり難しい文学論をぶち、次のページに「ちーちゃま大好き！　ねえねえ、絶対に私をお嫁さんにしてね！　♡♡♡…」的

PS.① 具合まだ悪いの?? 早く治して下さいよー!!!
【私からTelが、かかって来なくなる法方】→ 私が、先生のところへかける前に、仕事とか眠る前に先生が私のところにかけりゃ済む事でしょ!! 「今から、仕事に没頭するからね! おりこうさんにしていてちょ!」とか、「今から、眠るから夢の中でじゃれようネ!!」とか…!!
――そうだ! そうしましょ!!!
PS② 【先生が〝獄〟に12年もいた本当の理由が、分かりましたぜィ!!!】→ こりゃ形而上学にもとずいて、私とめぐり逢わす為、神がそうさせたのであーる!!!
――本当! 本当!!! プラトンもヘーゲルもキルケゴールも、みーんなそう言ってたよ!!! 〝哲学やってるんじゃ、そのぐらい判かんなくちゃだめですよー!!!〟――ってアリストテレスも云ってました!!!
以上!!! 私からの超わがままな追信でした!!!（血圧に悪いから、おこらない様に…!!）

ノリの文が続く。手紙の宛先の場所に「見沢ぶりっこ知廉様」などと書くのはまだしも（しかし、郵便局の配達員に恥ずかしい!-)、その内容と量は、鬼気せまるエネルギーの洪水である。

「〈先生が〝獄〟に12年もいた本当の理由が分かりましたぜィ!!!〉↓こりゃ形而上学にもとずいて、私とめぐり逢わす為、神がそうさせたのであーる!!!――本当！本当!!!プラトンもヘーゲルもキルケゴールも、み～んなそう言ってたよ!!!〝哲学やってるんじゃ、そのぐらい判かんなくちゃだめですよー!!!〟――って、アリストテレスも言ってました!!!」

「ジュゲムジュゲム見沢のチレン、カイジャリ水魚のみみずの哲央（筆者注：本名）の知廉様へ。☆ヤワハダノ、アツキ血潮に、フレモ見ず、さみしからずや、ミチをトク、きみ……！　――つまりー！　文学で頭の中をガチガチにかためてばかりいないで、少しは女の気持ち分かんなくちゃ、ダメですヨ!!――って事!!!（略）私、何があっても、一生イヤイヤ、死んでも先生に付いて行きまス!!　私の愛こそ、メタフィジィクスなのだよーん!!!!↓～を超えた、それ以上の次元!!（略）私も見沢になりたーい!!!　でもだめだ～！　ポコチンがない!!!　イイナ!!　イイナ!!　私、生まれかわったら、絶対、〝見沢知廉〟になってヤルゾ!!!」

「昨日、私の〝夢まくら〟にソクラテスが現われて、こんな事云ってました！　ちー先生に伝えてほしいって……『馬術に長ぜんとする者は、ジャジャ馬に乗るだびょ～～ん!!　これを乗りこなせば他の馬も、チョチョイのチョ～イ!!　見沢がS田をガマ

ン出来れば、天下にくみし難き人はいないだぴょ〜ん!! それと『水車の回る音も、なれれば苦じゃない』ーってさ!!」

保険書類のコピーが……

むろん、何回か電話や手紙で、「頼むからやめるか、せめて回数を減らしてくれ」などと言ってはきたのだ。仕事に支障が出るため、簡単には電話番号を変えられない。

「先生、私ってそんなに〝変〟なヤツだと思ってるんですか???　まァもっとも、手紙に、へんな事ばかり書いてたので、ムリもないでしょうけど……」

「先生のおたん生日って、ルイ16世と同じ8月23日じゃない!!!　この人死刑になったんでしょ……!!　あらら!!!　白虎隊が割腹したのも8月二十三日だわァ……!!」

「私が、30才を目前にしてこの年になって生まれて初めて食べた物が、ふたつあります。

〝カツドン〟と〝メロンパン〟です。カツドンに関しては、『なんで、せっかく揚げた物を、あえて煮る訳???』って事で、〝まずい〟って云うイメージがあったのと、〝メロンパン〟に関しては、本当に見るからに〝まずそう〟だったので食べたことがなかったんです。でも、どっちも、おいしかった。でも今だに（ママ）、レバーとウニとホワイトアスパラガスとえびとキャラメルコーンと、ホタテ貝は大嫌いなのだ!!」

あるとき、「もし私が死んだら、生命保険を、子供と先生の二人で分けて下さい」という文とともに、保険書類のコピーが送られてきた。子どもは十一歳だった。通常の死亡時が三百万円、災害死亡は五百万円……。無視、した。とにかく、恐ろしいのだ。

我慢して、無視し続けるとこうだ。

「これは、不幸の手紙です。この手紙が届いてから10日以内に、S田さんに辺事（ママ）、もしくは電話をしないと、貴方の体内に潜む女性ホルモンが、活発になり早くて一ケ月、おそくても半年後には、女性化してしまいます。これを信じなかった為、千葉県の角田源太郎さん（元とび職）は、今ではすっかり女に興味がなくなり、〝ばら族〟や〝さぶ〟などのモデルとして活役（ママ）しています。また新宿の見沢の助さん（元暴走族）も、今では2丁目のNo.1として、第二の人生を楽しんでいます。貴方も、このようになりたくなかったら、S田さんに、こまめに返事を出すようにしましょう！」

「おお……ちれん。貴方はどうしてちれんなの……。貴方を私の部屋に閉じ込めてしまいたい。まるで、いたずらな少女に飼われている小馬のように、絹の細紐でつないで……」

そして、急にエロ本を同封してくる。

「いい本あったので送る事にしました。おかずに使って下さい。お礼は見沢さんの写真（出来ればヌードがいいなあ！）をほんの100枚ぐらい、送ってくれ！　送ってくんなきゃビービー泣くぞ!!（略）あんの〜……。お願いが、あるんですが、プロフィールあんまりわかんないんで、出来ればたん生日と、血液型と身長体重と、好きな食べ物と好きなタイプ（ランちゃん以外に）とかおしえて下さい。おしえてくれなきゃ、ビービー泣くぞ!!」

「私が、今夏たくらんでる事、題して『渋谷の共産党本部に手紙を出してあるいは直

接行って、見沢知廉（作家）に会ってあげて下さいと宮本けん治さんにお願いする、とうていかなわぬダメモト夢の計画大作戦!!」

確かに俺は、宮本顕治に会ってみたいと言ったことはある。起こした事件の性質や刑期がそっくりだからだ。しかし、さすがに実行してみようとは思っていなかった。そんなの絶対に無理だ！

「ねえ先生、先生のプリクラ、ちょーだい」

「先生って本当にその時によって写真写りが違うですね。先月号の写真はユダヤ人の青年みたいだったし、GONの時は佐野しろうみたいで、TVに出たときは小林ひとみみたいにかわいかった!!」

俺の前が、つのだじろう??

S田から、出演するイベントにビデオカメラ持参で来ると電話で予告されたときなど、それに「来るな！」と大人げもなく、警告の言葉を浴びせかけてしまった。

「22日と26日（ロフトプラスワン出演）は他の先生のファンも結こう来る訳でしょ?! どうして私は先生本人から『来るな！』って言われるのか、どーしてもふに落ちないんです。私は今だかつて、清志郎が見たくて並んだ時に、清志郎から〝ダメ〟と云われた事ないし、武道館で並んでる時に、リッチーブラックモアから〝NO！〟と云われた事ないし、これは先生が私に対して特別な感情を持っていると考えて（とらえて）宜しいのでしょうか……？　先生が私の事を、群衆の一部ではなく、特別な角度で、考えていると思っても良いのでしょうか（好き嫌いは別として）（略）まあ、今回は、ちょっとあく迄もユーザー側として意見を云わせて頂きました」

「生　S43　1／3（まん30）　Aがた、やぎ座　身長148　体重40〜49のあいだ、

趣味　ギター、水彩画、油絵、プロレスかんしょう、マンガ（特に楳図かずお）、料理そうじ気ちがい、昔のハードロック、ガレージキット

宝もの　子供、うちの姉と友人、自分で作った和ダコ、見沢さん

性格　女の好きなもの（シャネルとかディオールとか）にうとい。好きな人間には、すんごくやさしい。嫌いな人間には、〝どーしてそんなに性格わるいの〜〜?!　みんなあんたを嫌ってるよー！〟などといわれる」

「あーあ、なんて悲しい運命なんでしょう……。貴方と私を隔てるこの壁は、空よりも、ずーっと高くて、シベリア鉄道のレールの様に重くて冷たい。私は、この壁の反対側で、インフィニィの臣大迷路をつくり、何度も何度も同じ場所をさまよっては苦しんでいます。（略）胸が痛くてむせ返る思い何度もする程好きなんです。逢った事も無いのに、こいつバカじゃねーの?!　って思われても、なんでもかまいません。私は、死んでも貴方のもと、はなれないつもりです。ちーちゃま、こんな常識はずれの私をどうか許して下さい……」

「私の手紙、届いたとたんに、捨てられているような気がするんですが……これって〝御もっとも〟かなあ。でも紙は勿体無いから、ヤギを一匹飼って、私の手紙の処理係にして、ある程度コロコロしてきたら、ジンギスカン料理にして食べて下さい」

心配しなくても、何かやらかしたときのための証拠として、ちゃんと取ってある。

「見沢はS田が好きになる見沢はS田が好きに（略）手がいてーよー！」

俺は、頭がいてーよー！

「私の友人のNちゃんは、某有名マンガ家つのだじろうと知りあいなのです。私が楳図かずおの吉祥寺の住所をきいてというと、Nちゃんがつのだに〝楳図かずお〟の住所と名前を言ったとたん、〝おまえら、何もしらないくせに、知ったような口を聞く(ママ)な〟などと怒りまくったそうです。あげくのはてには〝オレは、自分の描いたマンガは、全部読んだ〟などと、訳の分からぬ事をぬかしはじめたそうです。もともとNちゃんはつのだの悪口ばっかり言ってたし、〝頭にきたから、S田ちゃん、一緒につの

だの家にいたずら電話しよーよ!!〟てな具合になってしまいました」
　手紙はともかく、一日に何十回の電話、ファクス攻撃を受けてとうとうS田のことを警察に相談したら、じつは俺の前に、つのだじろうのストーカーをやっていたらしく、つのだの家に行ったりした前科があったことを知った。つのだじろうと自分に、いったいどんな共通点があるんだ?!
　しかし、相手がいくら替わっても、やることは同じ、S田は相手かまわず、自分の頭の中の妄想にしか興味がないらしい。
「私の勝手な解釈ですが、ちーちゃまは、私にとって〝いのち〟そのものです。……なんかこう、〝ピリピーン〟と来るものがあるんです。〝あっ!! この人は絶対、赤い糸だなっ!!って」

『チンボー怒りの脱出』

「犯罪者は、国家の競争相手であり、国家の暴力独占権をおびやかす存在である。この役割も古い。往時の盗賊や山賊は、この役割をもっと純粋に演じていたのだから。byエンツェンスベルガー、スベルガー?! スペルガー??? スペルマ???!! 私の家にはＳＭの本がいっぱいあります……」
「大好きな見沢ちゅちゅれんさま」(手紙の宛名……)
「ひょっとして、ちーちゃま、私からの、『好き! 好き!』コール、ふざけてると思っていません…? だとしたら、大変心外です」
「前略、敬愛なるミサワ先生、何日か前に〝先生の所へ行くよ〟って手紙に書いたのですが、返事がなければ、行ってもよいと解釈して行きます。ダメならダメでお返事下されば、こっちもその様にします」
　そう、無視もできないのだ。
「――ここ半年の間、私の電化製品バタバタと調子悪いのですが、先生が、サイコキネシスかなんかで、イタズラしてるんでしょう????」
「ちーちゃま最近、ほっぺとか、口のまわりとか、〝ヒリヒリ〟っていいますか、変な感じがしませんか?! 実は私、寝る前、必ず、〝枕元〟のちーちゃまのお写真に、ちゅうちゅう吸い付いているので有ります。気持ち悪がる事ではない!! 色々と知ってほしいものですから……(略)いいんだ! いいんだ! ちーちゃまが、そうやって私と遊んでくれないのなら、都内のどこかの駅のトイレに〝ぼくは、モーホーです〟等のらく書きをして、ちーちゃまのプロフィール書いちゃうもーん!(略)あらためて、お願いがあります……。〝私の恋人さんになって下さい!!〟ビェッ!! ビェ〜〜!!」
「宮本顕治さんに囚人狂と手紙を送っても宜しいでしょうか? もう年だし、時間がありません。べつに宮本さんは知らないでしょう。(略)ちーちゃまに何か送りたいんですけど、何を送ったらいいでしょう? 札束とか金塊とか、100g一万円のキャビアとか、フェラーリとか、純金のＣＢ４００とか、徳川の埋蔵金とか、ツチノコとか、北一輝のサイン入りのTシャツとか……ｅｔｃ」
「あーあ、また、ちーちゃまにおこられてしまった…。仕方ない、私が悪いのだから……。いつも、迷惑かけて、御免なさい……。(略)私が、いつもどんな気持ちでいるか、

貴方はちっとも分かってくれない！　ちーちゃまなんか、大嫌い！　いつもいつも、自分ばかりが、忙しいと思わないでね！　バカ！　世界一のわがまま野郎！　ナルシストのエゴイスト！　天狗野郎！　ちょっとぐらい、いい男だからって、つけあがるな！（略）長い長い年月……私は、ずっとずーっと、貴方を待っておりました。こうして、貴方の存在を確信することが出来、私はとても幸せです。いつになるか分からない……でも、でも……いつか貴方に……逢える日が来ることを信じて生きて、行こうと思います。もしも逢えたときには、私はきっと、泣いてしまうでしょう……。（略）私と一緒に、劇団を作って上演しましょう。第一回目の上演は『罪と罰』

　キャスト

ラサスコリニコスリハン（ローンレンジャー）……見沢知廉
金貸しの婆さん……伊藤蘭
斧……見沢くんのチンコ
婆さんの妹……女装した水谷豊
ルージン弁護士……横山弁護士
ソーニャ……私

〈劇団にわとり〉第二回目の公演
『チンボー怒りの脱出』

　キャスト

チンボー……見沢知廉
トラートマン大佐……設楽さん

［内容］ベトナム戦争帰りのチンボーを待ち受けていたのは、なんと、風俗産業の破滅であった。チンボーはそれを怒り、八王子周辺の村の中に立てこもる。『キャンディーズ再結成！』などと、わがまま極まりないチンボーに、軍服で身を固めたトラートマン設楽大佐が、『あの時代は、もう終わったんだ！』……と必死で説得!!　ミリタリーマニア必見の大格闘劇。

第三回上演
シェークスピアの「リア王」改め、「ヤリ王」

　キャスト

ヤリ王……見沢知廉
コーデリア……私

［内容］読んで、字のごとく」

例えば、これノート一冊ですよ、一冊……！

結構面白いヤツじゃん？

「本当に本当に貴方が好きです。もし、貴方が死んだら、自分も死のうと思います。（略）どうしてちーちゃまはいつも毒々しいセーター着てるんですか?!　似合ってるからいいけど……。（略）ちーちゃまを中野の自宅から、ら致、かんきんする場合はどうしたらいいかおしえて下さい……!!」

「あっ、そうそう!!　私、先生に急用があったんです。政治のなんやらとかで、かなり忙しいの分かってはいたのですが、〝明日の結意（ママ）は結意（ママ）にあらず〟とか〝思いたったが告白〟などと勝手な感情を起こしまして……。お願いします、今はだめでも10年後ぐらいに、私を先生のお嫁さんにして下さい!!!　今の内に、先生の予定に入れておいて下さい!!!」

「最近、私、血液型を問われると、まともに応える前に〝みやまくわがた〟と言ってしまう。いい年して、かなりのバカだが、

こんな自分が、大好きだ!!　自分が、大好きである以上に、他人様とかも、どうどうと愛せるのだ!!」

「私は、私生活等において〝揚止（ママ）能力〟を持っています。特に、女同士の識場（ママ）は、ちょっとした事で、モメたり、ぐずぐずグチる人間が多いもの。やれ、〝誰ちゃんがどうとか、こうとか〟、うわさばなしなる物は、つねに付き物。私は、その様な事は、全て揚止（ママ）してしまい、よーっぽどの事がない限りは、怒らん人間です（どこにも属さないが、由にみんなに好かれるS田ちゃん）——でも、唯一私が、揚止（ママ）出来ず、困っている事があります。他ならぬ、先生の事であります。先生に対してだけは、常にアンビバレンスで、ちょっとした下らぬ事でさえむきになってしまうんです……」

「秋の陽は、つるべおとしと申しまして、日ごとに陽ざしが短くなってまいりました。夏の暑さがなごりおしそうに時々、顔をのぞかせては来るものの、あんな未練がましさをうち破るかの如く、夕ぐれの風は、しごく冷たく、アスファルトにうつる、後影が長くなりにける、今日、この頃、私の愛する先生は、……」

　こういうふうに書き連ねると、「結構面白いヤツじゃん」などと思う人もいるかもしれない（いくら宝島社から引き受けた仕事とはいえ、ヤツの文を読み返し、それを書き写していくのはきつい。一見ハチャメ

チャでも文字の流れには人格構造が出るので、その〈特有のリズム〉をなぞっていると、相手の〈狂気〉に圧倒されるのだ！）。
「ちーちゃま」——まあ、どう呼んでもいいよ。ハデで下品なイラスト——私がかなりネタにされてるけど、まあこれもいい。
『ティーンズロード』の読者の女の子、ティーンは、マークやシールを手紙に貼り、色をつけたり友達口調だったり、いろいろあったけど、むしろそれは創作の疲労の骨休めとなり、楽しかった。
違うんだ、S田は。
例えば、一時、Hとケンカしたとき、
「私自身は勿論、Hさんと何の関わり合いもないし、昨年電話や手紙などで話もしたりしたけど、HさんはHさんなりに先生の事大事にしていた様で、以前先生私に言ったでしょ、『お前のせいで事務のやつノイローゼになったんだぞ』って。当時私は『バカじゃないの』みたいに思ってましたが、後になって考えてみると、それ以外の面でも色々Hさんは苦労したのでしょう……」
お前が、その大きな要因なんだよ。お前の電話やファクスのことがあって、お互いピリピリしてたからケンカにもなったんだよ！

「私の様な人間が出て来ても仕方ない」

……一歩譲って、手紙ならまだいい。しかし、電話やファクスは凶器だ。今思えば、本当にどうでもいい、何十という電話やファクスに、当初私もHもしばらく、丁寧に応対をしていたのがまずかったのか。
かなり目上の人と、かしこまって話をしているときでさえ、S田は携帯電話を五分おきに鳴らす（番号は、迂闊にも留守録のメッセージから捕捉された）。事務所にもイタ電が何度もかかっていたから（S田は自分ではないと言うが）、極度にピリピリしていた俺は、ある日、出版社からの電話をS田と勘違いし、連続して切り続けてしまった。おかげで、仕事がひとつだめになるという大打撃を受けたのだ！　絶対に怒らないでいようと誓っていた俺も、出所して初めて怒鳴って怒るはめにもなったのだ！

次の文を読んでほしい。とにかく説明はいらない。読んでくれれば、「面白いヤツじゃん！」どころでないのが分かる。
「一時間程前に、先生にTELでどなられたのですが……とりあえず、私の云い分を聞いて頂きたい。〝許さん〟とかに関してですが、この様な事で、私の信念が変わる程、弱い考えで先生に接しているのではありません。私が一番怖いのは、先生に忘れられる事です。私はあの時（先生がどなった時）正直申しまして、〝なんて、子供っぽい人なんだろう〟と思いました。先生も、もうちょっと大人になって下さい」
（てめぇ！　てめぇの携帯TELでまた仕事がひとつつぶれ、自宅に一日四十回もTELしてきやがるから怒鳴ったら、遊びにきてた先輩作家の方が怯えて逃げ帰ったんだぞ！）
「あくまでも恋愛感情を優先に行動している女こどもへの対ショの仕方は別にあるでしょう。☆義勇軍（筆者注：Hのこと）さんの件ですか、これは私、メチャクチャ腹が立っております。（筆者注：HがイタTELの犯人をS田と言ったことなどで）北新宿

の事務所まで、〝ちょっと足を運んで、（略）けんかでも売りに行こうと思いましたが、（略）必死に感情を押さえてがまんしました。とに角この件は、上に立つ先生が、ちゃんと説明してくれなくては、**私への人権侵害**以外のなにものでもありません。（略）実際にまだ一度も逢った事すらないのですし、逢って（筆者注：文句を）云われるのなら、ともかく、この様な中学生のレベル以下の問題等で、私もガタガタ云われるのは腹の虫がおさまりません。こんなことで**世の中を変えよう**とか**悪政を何とかしよう**とか、よく云えるもんですね。自分の立場だけを、正トウ化しようとする人間に**何が出来るのですか??** 先生は、文筆業の公的な人間なのですから、私の様な人間が出て来ても仕方ない事を、ちゃんと（筆者注：Hに）説明すればいいじゃないですか。もう、いい大人なのだから。先生の力量で丸くおさめられるでしょう。（そんなに信用されてないの?）**本当に逢いたくて、どうしようもない感情を必死に押さえている私の身にもなって下さい。とても、残コクな事です。**

それと、義勇軍さんがノイローゼ状態みたいな事もおっしゃってましたが、〝ノイローゼ〟とは、個人のパーソナリティの問題でしょう。以外（ママ）と根性ないんですね。私に対して**キチガイ！**と、おっしゃってましたが、**すばらしい誉め言葉**です。あれだけどなられながらも、先生の事〝大好き〟と言い張る私は、確かにキチガイでしょう。惚れてる人に殺されたら、キチガイはそれで満足です。でも、出来れば、絞殺にして下さいね。（略）〝二十回TEL〟についてですか、おそらく何かの数とダブったのでしょう。私はお昼に8回と、渋谷から9回かけて、先生に〝二十回〟と云われるまでに、17回しかかけていません。その後は、私も頭にきて（ガシャンガシャン切られたので）かなり何回もかけましたが……。（略）『こんなに迷惑かけて騒いでんのはおめえだけだよー!!』と先生云っておりましたが、**あれだけ〝ダンカ〟を切ったのだから、来年の5％消費税もなんとかしてくれるんでしょうネ!!** へらず口は問題解決の後に云いましょう。（略）どうも先生が一方的に怒っているけど、もうちょっとちがう角度で物事を見て下さい。〝文筆業について勉強しろ！〟とおっしゃっていましたが、私は、先生に生活を含めてめんどう見てもらっている訳じゃありませんので、関係のないことです。話は、ぜんぜんそれちゃうけど、鳩山（邦夫）の家は、それにしても、でかいなー」

キムタクに比べれば、楽でしょ?!

ついにはNTTに行って、かかってきた特定の番号をブロックするイタ電防止の手続きを取った。それでもめげずに、携帯電話にかけてくる。速達が来る。挙げ句の果てには自宅玄関の前までやってきた。

ある日、自宅のチャイムが鳴った。インターフォン越しに、「どなたですか？」と尋ねると、しばらくシーンとしたままで、やっと「あのう……」と声が聞こえた。あわててインターフォンを切ると、ドン！ドン！と五分間、戸を叩き続けて消えていった……。

結局、一度実家からファクスを送ってきていたことを思い出し、S田の親へ手紙を書いて送信し、本人には内容証明郵便で「以後電話、FAXをした場合業務妨害等で告訴する」と、神経科で書いてもらった診断書を同封して手紙を送り、やっと嵐は静まった。今度は誰を標的にするつもりなのか（鳩山邦夫?!）。

最後に、この一文の締めくくりを、S田本人に語ってもらおう。

「ちーちゃまは、私の様なファンに付け回（ママ）されてかなり迷惑してると思いますが、これはメディアに出てしまった人間の〝性（さが）〟と御理解下さいませ。キムタクや小室さんに比べれば、楽でしょ?!……」

（PS　ちゃんとしたファンレターは読みますよ。別冊宝島気付見沢宛で。普通の人なら、あくまで普通の人ならば——）

（註　太い字体の文は赤字、破線以外にも赤、黄、緑のマーカーでラインや字を埋めた所もあるが、それは省略した——）

個人売買のブラックホール

競馬グッズと《逆ギレ・ミザリー》の面の皮

手口は「世界でたったひとつの」逸品。偉そうな手紙、付け焼き刃のレプリカ製造、善意の倒錯！
高度情報化社会の落としダネ、その限りなくミザリーに近い自意識の爆発劇を徹底フィールドワーク！

大月隆寛（民俗学者）

その物件を初めて目撃した時のことは、よく覚えている。

『オグリキャップ、600M先』

通り過ぎて思わず、海沿いの国道の何度となく通った退屈な風景に飽きて、それまで助手席で引っくりかえっていた調教師と顔を見合わせた。

「見ました？」

「見た」

「なんです？　あれ」

引き返して確認した。その頃、現役を終えて種牡馬として帰ってきたオグリキャップが繋養されている新冠の牧場の案内看板。どこかカントリー調の真新しいそれが、冬の陽の中に立っていた。

そうか、競走馬ってのはもはや観光資源にだってなり得るんだ——○○観音だの、××秘宝館だのと選ぶところはない、そんな路上の客寄せ看板と同じ位置づけをオグリキャップがされ、そしてその看板を見て牧場の彼を眺めに行く「ファン」が大量に現われ始めたのは、ちょうどその頃だった。観光バスまで立ち寄るような「名所」としての牧場と、競走馬。敢えて大文字の能書きを言えば、競馬が高度大衆社会に呑み込まれてゆき、それまではある囲い込みの中にあった生産地の現実までもが不特定多数の「ファン」＝「消費者」の傍若無人な欲望の視線にさらされるようになった、そしてそのことを生産地に生きる人々の側もまたよしとせざるを得なくなった、それはそのことの最も明快な〝証（あかし）〟だった。

〝競走馬ストーカー〟誕生前夜

北海道日高地方の牧場にこういう「ファ

ン」がちらほら出没するようになったのは、今をさかのぼること三十五年ほど前、かの五冠馬シンザンが人気を呼んだ後からだったらしい。今は牧場をやめてしまったシンザンの生産者Mさんは以前、こう述懐していた。

「まったく知らない人が駅からいきなり電話してくるんだわ。オレ、びっくりしてクルマでよく迎えに行ったよ。厩に案内すると、馬房の前でじっとすわって何時間でもいるのさ。で、そのうち〝ありがとうございました〟って言って帰ってく。帰りも駅までよく送ったし、たまには泊めてやったこともあったなあ。いやあ、都会の人は熱心なもんだなあ、って言ってたんだわ。その後からだなあ、そんな人らがこっちにやってくるようになったんは」

馬などさわったこともない、競馬場の競馬だけで、あるいはテレビの競馬だけで馬に接した、そんな都会育ちの「ファン」が、馬を仕事にして生きる牧場に現われるようになった、言わば第一次遭遇の時期だった。

もともと、牧場というのはまず看板など出ていないものがほとんどだった。そんなに昔ではない、ほんの十数年ばかり前でも、目当ての牧場を探すのに往生することが珍しくなかった。それが新冠や静内あたりの牧場から、地区で揃いの看板や案内板、時には大きな広告塔などを作るようになっていった。

もっとも、それまでも種牡馬を繋養している牧場などは、その種牡馬の名前を並べた広告看板を出したりはしていた。あれはきっと自動車ディーラーが扱っている車種を並べた看板を立てる、あの感覚に近かったのだろうと思うのだが、地元の人の話では、七〇年代の半ばから後半あたりにかけて、ちらほら見られるようになった光景だという。馬と名がつけばなんでも売れた、今でもそう語られる競馬ブームの頃だ。折からの減反で米が作れなくなった農家が軒並み競走馬生産に手を出していった時期で

もある。
それが今や、ちょっとした牧場なら大きな看板を掲げ、現役時代の人気馬が繋養されている牧場などは、道路沿いに眼を引く案内板を出すことも珍しくなくなった。まさにオグリキャップ以来のことだ。
数年前、ＪＲＡのコマーシャルで、時任三郎、中井貴一、真田広之の三人が井崎脩五郎扮する観光ガイドとともに牧場を訪れる、という設定のものがあった。そこで彼らが放牧場に入り込んだり牧柵に腰掛けたりするシーンがあり、それを真似するファンが続出して現地で問題になった。競走馬をただのっぺりと「かわいい」としか見ない、たとえ現物をナマで見てもそのような見方しかしない、できない、そんな眼にフィルターがかかったような新種の「ファン」がうっかりと日高にやってくるようになった。
その「かわいい」の中身がどんな美辞麗句、どんな思い込みで組み立てられていようが、基本的にそれが現物の存在を覆い隠してしまうような効果を持っていることにおいては変わりない。まして、その現物の馬をめぐってどんな生身の人間が関係を持ち、そしてどんなゼニカネが動き、どんな思惑が取り巻いているか、といったあたりのことなどは、彼ら新種の「ファン」にはその眼にすら入らない。

野に放たれた「脱腸人間」

かつての「ファン」は、おそらくそこまで極端ではなかったはずだ。馬で食ってる人たちがいて、その人たちの現実の片隅にちょっと立ち寄らせてもらう。そのことに当然持つべき世間並みの謙虚さと遠慮とを持ち、その「ファン」の「分際」をまだわきまえていた。
けれども、昨今どうやら事態は大きく変わってしまっているらしい。ただ競馬が好き、馬が好きという〝純粋な〟「ファン」か

ナリタブライアンも繋養されているＣＢスタッドにて

らどこかで横転、逸脱し、「ファン」＝「消費者」という名の横暴丸出し、身勝手な自意識が脱腸してそれをケツから引きずって歩いているような「何さま」状態を平然と牧場や、厩舎や、生身の馬のまわりの関係者に押しつけて恥じない醜態が、うっかりするとそこここに繰り広げられる。

「なんかねえ、今もある牧場からの電話でね。ファンが放牧場やってきて、発情期の繁殖牝馬の鳴き声を録音したテープ流してるって言うんだわ」

静内にある「競走馬のふるさと北海道案内所」の松田洋一所長は、そう言って苦笑した。日高の牧場をめぐる、そういう今どきの「ファン」の生態について話を聞いていた時のことだ。ここには、こんな「ファン」がウロウロしているから気をつけてくれ、という〝報告〟が牧場から飛び込んでくる。

笑いごとではない。人気のあった競走馬が引退し、種牡馬として、あるいは繁殖牝馬として牧場に帰った場合、「見学」と称して放牧場などにファンが群がる。なかには、放牧場に入り込み、タテガミを切ってしまったりという、とんでもない事故まで起きるようになった。だったら、逆に放牧場をもうそのような「見世物」にしてしまった方が管理もしやすいのでは――そう考えて、ファンがやってくることを前提にした仕掛けをしているのが、ナリタブライアンの繋養されているCBスタッドなどだ。

だが、種牡馬とて生き物、いちいち見ず知らずの人間に群がられて、カメラをカシャカシャやられた日には落ち着いていられない。いきおい、ファンがいるのと逆の方向に逃げる。それを呼び寄せるための手段として、繁殖牝馬の鳴き声テープを持ち出した知恵者が出現したというお粗末。いやはや、なんとも言いようがない。

生意気千万な詐欺師根性

そんな昨今現われるようになった新種の「ファン」のなかには、いつしか犯罪まがいの行為にまで平然と足を踏み込み、なおかつそのことに自覚がないという、まずきれいに〝サイコさん〟の領域に達したケースまで出てくる。

岩手県の地方競馬で敵なしの強さを誇ったトウケイニセイという馬がいた。盛岡競馬場の所属。今回は『別冊宝島』とは言え、競馬の特集じゃないからいらぬ能書きは禁欲するが、とにかく強かった。ひと頃のカウンテスアップやフェートノーザンみたいなものだ、などと言うと、こちとらの趣味がバレたりするが、ともあれ、ほんとに近年の地方競馬では出色の英雄だった。

そのトウケイニセイの勝った重賞の肩かけがC・Kという女性から売りに出されていて、それを買った下地さん（仮名）という男性から、本物かどうかという問い合わせが、日高の生産者のもとにあった。

「びっくりしましたよ。普通そんなもの、馬主さんと調教師さんとがふたつに切って持ってたり、関係者以外に出回らないものじゃないですか。だから、まずそんなことはないと思うけれども、僕もわざわざ厩舎に電話して問い合わせてみたんですよ。調教師さんも〝いやあ、そんなものどこにも出してないし、現物はひとつうちにあるよ。田中さん、なんでそんなこと尋ねてくるんだ〟って逆にヘンに思われちゃってねえ」

（トウケイニセイの生産者・田中哲実さん）
事情を話すと調教師が馬主にも問い合わせてくれた。だが、やはり現物は手もとにあるという。じゃあ、その売りに出ていたものって……。
肩かけなどを作っている業者に事情を話して尋ねてみた。確かに、そのKの依頼で作ったことがあるという。ニセモノだ。こりゃ立派な詐欺行為じゃないか。
この肩かけを買った男性は、田中さんから返事をもらった後、事の詳細を記した手紙をKに送り、ニセモノだと判明したのだから代金を返して欲しいと要求した。すると、しばらくしてそのKからこんな居丈高な手紙が返ってきた。
「下地様は、競馬界の事情のことをどれだけご存知のうえであのようなお手紙を下さったのでしょうか？　数人の関係者を知っている程度では内部事情などはわからないのではないのでしょうか？　私は、競馬界のほとんどすべての関係者と面識があり、ウラではどういうことをしているのかも知っております。いい人も居ますが、悪い人の多い業界です。けれど、私は馬が好きで、好きな馬に人参やりんごなどを送ったり、生産者や馬主にたのまれて、馬具などを手作りで作り、それをつけレースにのぞんだり、ときには競走馬の名前をつけたりと親しくおつきあいしております。（略）今回のお取り引きの件ですが、ご希望に添えかねます。なぜなら、私が手に入れるまでの経緯はそんなに安っぽいものではないからです。」
ここには「自分は厩舎や牧場、馬主などの関係者と親しい」ということを自慢気にひけらかす以外には、何も触れられていない。その肩かけを「手に入れるまでの経緯がそんなに安っぽいものではない」ことと、本物ではない肩かけをいかにも本物であるかのように思わせて高い値段で売ったこと

下地さん（仮名）がつかまされたトウケイニセイの肩かけ（レプリカ）

の責任との間にも、当たり前だがなんの関係もない。
　けれども、このKの自意識にとっては、「何も関係者とつき合いもない、競馬の現場も知らない分際で、その肩かけがホンモノではないなどと言ってよこすなど生意気千万」ということだったのだろう。
　逆に言えば、わざわざ業者に肩かけのレプリカを作らせ、それをさも貴重な本物であるかのように売り飛ばす詐欺まがいのことまでやって懸命に演じてきた「関係者と親しいワタシ」という望ましい自分像が崩れ、そのプライドが傷つけられそうになった、それこそが彼女にとっては詐欺まがい云々と言われることへの対応などよりも、よほど重要な問題だったということになる。
　もっとも、こういう自意識の本末転倒な肥大の仕方とそれにまつわるけったいな身振りや言動こそが、今どきの〝サイコさん〟の典型なのだが。
「肩かけの件ですが、一年以上も前に私から買ったときに下地様自身が私から買ってすぐに手にとって納得してお買いあげになったのではないのですか？　ですから、お

礼状書いて下さったのではないのですか？違うのでしょうか？　いったいどういうことなのか説明して下さいね。平賀様のお手紙を拝見しましたが、なぜ貴方がお怒りなのか私には理解できませんので、私はこうして誠意をもって対応していますが、誠意のない手紙を送ってきているのは貴方なのではないですか。貴方のことに対しても、もちろん弁護士をたてて早急にしかるべき法的解決をはかりますので了解下さい。もちろん刑事と民事で解決致しますのでご了承下さい。（略）今さらどうして売買したものについておっしゃってくるのでしょうか？」

　つまり、自分が本物だと思わせてレプリカを高い値段で売ったことについては棚に上げ、「あんた、納得ずくで買ったものなんだから、今さら言ってもダメよ」ということだ。詐欺まがいのことをしでかした奴からこんなことを言ってよこされたら、これは確かにキレる。ったく、なんて野郎だ。

偉そうな手口

　実は、このC・Kという女性、テレカやぬいぐるみ、その他いわゆる〝馬グッズ〟を売買するファンやマニアたちの間では、三年ほど前から少しずつその名を知られるようになっていた。常識的な交換や売買のレートからすれば、品物にべらぼうに高い値段をつけてくる、言わば〝札つき〟として、である。

　年齢は二十代前半。本業は、都内杉並区の産婦人科O医院の看護婦。競馬雑誌のグッズ売買欄や読者投稿欄などに「○○関係のグッズ、おわけします」といった投書をし、それを見て連絡をとってきた〝客〟に手書きの「カタログ」を送りつけてくる。何かを買うと、それをきっかけにまた随時「カタログ」が送られてくる。

　Kの「カタログ」に並べられている〝馬グッズ〟の品目は、テレカや写真（生写真、パネル）の他、蹄鉄、ゼッケン、トレーナーやTシャツ、マグカップ、色紙など実に多岐にわたっている。単なるファンであるにしては、種類も量もかなりのものだ。そして、その多くに、いかにも厩舎や馬主など関係者が製作した限られたものである、といった印象を与えるような説明がつけられている。

「馬主、調教師（厩舎）などでつくられ、販売にならなかった非売品などです」

「※特別品※　馬主や、調教師（厩舎）で、優勝や引退記念などにつくった記念品です（各一ずつのみ）」

「こちらのほうはすべて馬主発行の非売品のテレホンカードです」

「★蹄鉄の額★非売品　優勝すると関係者の方々が記念に……ということで、使用した（レースで）蹄鉄にメッキをかけてステキな額をつくります。ただでさえなかなかファンの人たちの手にわたらない蹄鉄ではありますが……手に入ったのでお分けします」

　このように、「関係者と何か親しい立場にある特別なファン」である自分というのが、演出されている。時には、次のような特権意識のにじみ出た、人の神経を逆なでするいやらしい文章が付けられていたりもする。

「雑誌の写真（雑誌に投稿して掲載された写真と思われる、おそらく厩舎か牧場などでの関係者ヅラしたKが写っているものか：大月注）

を見た方が、etc、厩舎にいきたいというお手紙がたくさんありました。しかし、厩舎は中央馬も地方馬も、本来は一般ファンも一般の人の入場は禁止されています。今では心なきファンがふえ、フラッシュさつえいや、たてがみのむしりとりも数多く、牧場見学中止の牧場もふえています。また、中央のほうでは一般ファンをいれている厩舎も数多くあるようですが、こちらも中止しているところが眼（ママ）だっています。本来はあまりいれてくれない厩舎地区ではありますが……。競馬場でのつかれをいやすためにも、あまり知らない人の出入りが多いというのも考えものだとも思います。本当のファンの人ならば気持ちは通じるハズだと思いますが……。」

ああ、ムカつく！　この高みに立った説教調の能書きは、読んだ瞬間ムカッとくるものがある。だいたい、そこまで偉そうにいきなり説教こくてめえは何さまなんだ？

競走馬のブルセラ市場

それにしても、ただのファンがここまで多岐にわたったグッズを単独で集められるものだろうか。僕がまずいぶかったのはこの点だった。何かプロのグッズ業者などがブレーンにでもついていて、彼女は単なる販売の窓口だったりするのではないか？

だが、この疑問は取材をしてゆく過程で後退していった。なぜなら、プロがついている商売にしては、その手口があまりにズサンなのだ。そのズサンさの一部は後述するけれども、一方ではまた、馬グッズ市場そのものも急速に成長したのでいろいろと素人の入り込む空洞もできやすいという事情もあったようだ。

「テレカについて言えば、値段の相場がはっきりつけられるようになったのはごく最近のことですからね。ついこのあいだまでは、ナリタブライアンのテレカだって、コンビニで買ったテレカと同じように実際に使われているようなものでしたから。

まして、競馬場の関係者などは記念に作ったテレカをもらっても滅多に使うことがなくてしまってある場合も多いですから、額面の値段に少し色つければ、そこらの素人でも結構集められたと思いますよ」（あるコレクター）

このような馬グッズ市場がブレイクしたのは、テレビの『ハンマープライス』でナリタブライアンのタテガミが四十数万円でせり落とされ、『開運！なんでも鑑定団』でミスターシービーの三冠レースの蹄鉄ひと揃いに百五十万円という値段がついた、そのあたりがきっかけだったらしい。ほんの数年前のことだ。

競馬関係のそのような〝もの〟はカネになる、そう気づいた人たちがいた。それまでは売れるものだと思われなかったような品物までが、みるみる取引されるようになった。今や競走ゼッケンなどは平場のなんでもないレースまでもが売買の対象になっていたりする。パートで来ている穴場（馬券売場）のオバちゃんたちが開催が終われば捨てられるゼッケンを山ほど抱えて帰ってゆく、という話も聞いた。レースに勝った後、ウイナーズサークルに群がるファンにステッキなどを投げようとすると、その場でシャレにならない奪い合いになったり、時には手に入らなかった連中から後で怨まれたりするからうっかりそんなこともでき

なくなった、と苦笑いする騎手もいた。競走馬が現役の間は「足をすくわれる」などとゲンをかついで絶対に外には出さない蹄鉄を、引退が近づいたんで、さて、ひとつ整理しようか、と厩務員さんが確かめたところ、箱にためてあったそれまでの蹄鉄の数が明らかに減っていた、といった話もある。

ファンにブツをやらないでください――そんな貼り紙でもしておかないことにはいけないような状況が、厩舎や牧場といった競馬と競走馬をめぐる現場に出現するようになっていった。

なるほど、テレカ以外でも、蹄鉄やゼッケンなど、Kの取り扱う馬グッズにはそういう〝関係者周辺から出たと思わせるもの〟が多い。いや、むしろそのようなグッズ販売業者としてのKの〝売り〟は、そういう〝関係者周辺から出たと思わせるもの〟を豊富に持っているということにあったと言っていい。

「馬主とか厩務員といかにも仲がいい、みたいなことを随所に書いてくるし、生写真にしたって馬の前に立ってピースサインしてるような通りいっぺんのものじゃなくて、ほんとに馬房で馬に寄り添ったところを撮ったりしてるから、やっぱり何か関係者と親しい特別なルートを持った子なんだろうなあ、と思いますよ、これは」(下地さん)

そのようなグッズを求める側の意識としても、まさにそんな「現場」の痕跡が貴重な価値として認識されている。だから、レースのゼッケンにしても、泥や砂、馬の毛、ショウブ鞍や腹帯の跡などがついているものが珍重される。でなければ、確かにその馬が使用していたという〝証明〟がなんらかの形で求められる。「現場」からの疎外感が裏返しにそのような「消費」への欲望を刺激し、組織してゆく。そう、馬グッズ売買の市場とは、つまりは競走馬にまつわるブルセラ市場、なのだ。

知らぬはヒシアマゾン

そのような「現場」性を濃厚にまつわらせた〝馬のブルセラグッズ〟を収集してゆくKの手口というのは、おおよそこうだ。

まず、目をつけた馬の生産牧場や厩舎などに「ファン」を装った手紙を送りつける。その手紙の内容というのが、今どきどうかと思うような大時代なお涙頂戴モンなのだが、馬まわりの世間というのは良くも悪くも純朴なところがあって、これが結構通用したりする。

それに、確かにいろいろ問題は起こしてくれるしつき合うのは面倒だけれども、ファンはとにかく大切にしなければいけない、ということがすでにある倫理として蔓延しているから、現れが「ファン」であるということだけでそれ以上の内実については判断停止してしまうところもないではない。しかも、若い女の子だ。まさかそんなことまでするとは、普通は思わない。

「私はヒシアマゾン様が、馬を好きになったきっかけでした。母がガンで入院し、家族もめちゃくちゃ、友達もいなくて一人ぼっちだったとき、本当に死のうと考えていたときに、彼女に会いました。そして、今、こうして生きています。今も生活がたいへんだけど、頑張ってやってこれたのは彼女のおかげでした。

(略)どうしても牧場で彼女が私のプレゼ

私はヒシアマゾン様が、馬を好きになったきっかけでした。母がガンで入院し、家族もめちゃくちゃ、友達もいなくて1人ぼっちだったとき、本当に死のうと考えていたときに彼女に会いました。そして今、こうして生きています。

ントした頭絡をつけている姿がみたいのです。カメラを同封しました。POWERを押して黄色いボタンを押すと写真がうつるしくみです。すいませんが、本当に申しわけありませんが、写真うつしていただけませんか？　無理なら無理でこちらにそのまま送ってかまいませんが……できればあつかましいお願いですがよろしくお願いします。ブラッシングしたときでよいので、彼女のたてがみ一本でも、もしいただければお願いします。」

　これはヒシアマゾンが引退後、しばらく身を寄せていた牧場へ送られてきた手紙。この牧場の場長は、忙しいなか、送られてきた頭絡を馬につけて、同封されてきた使い捨てカメラで写真を撮って送り返してやったという。

　そうしたら、その同じ頭絡がKによって売りに出されていた。しかも、「証拠写真」と称してアマゾンがその頭絡をつけたところの写真を添えて。なんのことはない、販売される頭絡が本物であるということの証明写真を撮らされていたわけだ。

　もともと、Kは馬主にもしつこく手紙などを出していて、あまりしつこいので馬主が調教ゼッケンをひとつつくれてやったのだという。そのゼッケンのポラロイド写真もこの牧場への手紙に同封されていて、馬主など関係者の名前をちらつかせながら、何か深い関係がすでにあるかのように思わせる。その写真には「頂いた新馬戦のゼッケンです。一生の宝物です。もう死ぬなんてこと考えません」という〝説明〟まで書かれていた。

　だが、このゼッケンもその後、売りに出されていた。

「ヒシアマゾン（新馬戦）ダービーを一生遊ぶ馬うま鑑定団の評価A－50000円とついていますが、これも友達が売ってお金にしたいといっているので、だれかいないかなといっておりましたところ、○○様（常連の客の名前：大月注）をおもいつきましたので、筆をとりました。トウケイニセイ（みちのく大賞典）優勝のゼッケン売ります。どちらとも、人からもらったものなので、値段はそちらで決めて下さいね。正（ママ）し、こちらの希望値にそっていない場合は譲れません。必ず返事下さい。他の人にも売り

たいので。」

「世界でたったひとつ」の誘惑

こうやって収集したグッズが「カタログ」に載せられ、売り飛ばされてゆく。もちろん、この同じグッズ収集の手口を他の馬主さんや牧場などにも平然と使う。手紙の場合はこの「お母さんがガンで……」というのがKの〝おはなし〟の定番のようだ。

あるいは、いきなりその牧場が生産した活躍馬のTシャツやトレーナーを送りつけてくることもある。熱心なファンかと思って礼状を出すと、それをきっかけにいろいろと言ってくる。何か〝もの〟が入手できるか、さすがに呆れられて相手にされなくなるかまで、そのアプローチは続く。

先の下地さんがこのトウケイニセイの肩かけを買った時には、Kからの手紙には次のような誘い文句が記されていた。

「最強、最多勝としていたトウケイニセイ号の引退レース〝桐花賞〟のかたかけ、シルク調ー本まるまる、ロ取りひも2本つき…もちろん世界でたったひとつ。これにニセイのいんたい記念2枚くみテレカ限定300枚、ニセイのライバルであったモリユウプリンスのジャンパー（厩舎でのオリジナル、他ではつくってません）をともに売ります。」

この時の手紙にはその他、「イナリワンの（東京：大月注）王冠賞の肩かけ、（東京：同）大賞典のときの鉄があります。もちろん額入りです!!」、第二十回エリザベス女王杯のサクラキャンドル（七番）、第百十二回天皇賞のサクラチトセオー（一番）のゼッケンなども売り物として並んでいた。おいおい、ほんまかいな、イナリワンの東京王冠賞の肩かけって。馬主の保手浜さん、そんなもの本当にKに渡したんかあ?

とは言え、普通のファンにしてみればどれも珍しいものには違いない。もちろんなんでこんなものが手に入るんだろう、本物なんだろうか、といった素朴な疑問も抱くだろう。だが、そのような疑問も先に紹介したような「関係者と親しいワタシ」の演出によって案外後退してしまうもののようだ。馬主さんなど関係者にブツの真偽を問い合わせるにしても、普通のファンにはそのやり方がわからないし、またそこまでの手間をかけることもしないし、できない。たまたまこのトウケイニセイの肩かけのケースは、買った下地さんが自ら確認に動いたために明るみに出た。

下地さんは、このトウケイニセイの肩かけをテレフォンカードとともに二十八万円で買っている。「世界でたったひとつ」とあるからには、当然、なんらかの理由で関係者から流出した本物だと思っていたのに、送られてきた肩かけは新品同様で、どう見ても実際に使用した形跡がない。不審に思って、つてをたどって生産者の田中さんに問い合わせたのだという。それが幸いした。

「そりゃ本物だと思うよね。だって、いかにも関係者の知り合いみたいなこといっぱい書いてきてるんだからさ。そしたら、なんかまっさらの肩かけなんだもん」

額装というアリバイ

実は、下地さんはこれ以前にも、Kからチョウカイキャロルのオークス優勝時の蹄鉄（額装したもの）と肩かけを買っていた。

この時の肩かけは半分に切ってあったという。確かに実際の肩かけは額装するためには半分に切るのだが、その肩かけには実際に馬の毛や泥などがついていて、本物だと信じるに足るものだったという。

ただ、トウケイニセイの肩かけの一件があったので、もしやと思ってこちらも問い合わせたところ、確かにオーナーがKのしつこいアプローチに辟易して半分くれてやったことがあるとわかった。こちらは一応本物だったわけだ。とは言え、今度は関係者の側が、そんなものが売り物になって出回っているのも外聞が悪いので下地さんが買った値段で買い戻したいという話になり、これには下地さんも快く応じたという。

前出の肩かけ同様、下地さんがC・Kから購入した有名馬の蹄鉄

こんな調子だと、これまで買ったものにもニセモノが混じっているかも、という疑いが生じるのは人情だ。げんに、このトウケイニセイの肩かけ以外にもKから買ったグッズが本物ではないことが判明したケースが出始めている。トウカイテイオーの有馬記念の時のものというふれ込みで額装された蹄鉄をKから買った人は、人を介してテイオーの装蹄を担当していた装蹄師にその蹄鉄の写真を見てもらったところ、即座に「こんなの、違うよ」と否定された。

Kの「カタログ」には、メジロドーベル（まだ現役バリバリだっつーの）のオークスの時の蹄鉄と称するものや、ナイスネイチャの高松宮杯勝ちの時の蹄鉄、メジロマックイーンの第百五回天皇賞、サクラスターオーの菊花賞、オグリキャップの有馬記念、ナリタブライアンの日本ダービー（おいおい）、同じくトウカイテイオーの日本ダービー（わし、もう知らん）……いや、もう、どうやってこんなものをそこらのファンが

手に入れられるのか、マジに聞いてみたいような品物が並んでいる。
　競馬場の装蹄師に尋ねると、確かに、活躍馬が出ると厩務員や馬主など関係者から記念にするから競走鉄を別に打ってくれ、と注文されることは珍しくないという。「○○（馬名）の蹄鉄なら俺、目つぶってでも打てるよ」と苦笑するほど大量に注文されるケースもある。それらの一部がなんらかのルートで関係者以外に流れることは充分あり得るわけだが、にしても、このKの「カタログ」にあげられてある蹄鉄の多様さ、そのふれ込みのとんでもなさは、競馬ファンならばすぐわかってもらえるだろう。
　ちなみに、そのKの売ったという額装した蹄鉄の現物を何軒かの画材屋に持ち込んで見てもらったところ、確かにこれは額縁屋の仕事だけれども荒っぽいし、材料も高いものではない、注文で一万五千円から二万円ぐらいあればどこでも作るだろう、ということだった。僕もこれまで、馬主さんなどが記念に作った額装の蹄鉄はいくつか見たことがあるけれども、このKが売ったものは、本当に関係者が記念に作ったものにしては安っぽい作りであることは確かだし、なにより、馬主も所属厩舎も活躍時期も違い、ときには地方競馬所属の馬さえ混じるこれらさまざまな蹄鉄が、一様に同じ作りの額に収められ、同じデザインのプレートがつけられているところが目一杯あやしい。
　いくつも注文する人が出てくれれば、まずそこで疑い出すだろうことは常識的に想定できると思うのだが、そのあたりのことをまるで考えていないらしいのが、このKの〝サイコさん〟なところだ。

あくまで取材拒否

　Kとのこのようなグッズ売買のやりとりは、基本的に手紙（封書）で行なわれる。それ以外のやりとりは嫌がるという。
　連絡先は都内杉並区の「ギャラクシー」（仮名）となっていることが多い。一見、個人の住まいでもなさそうな気配もある。やりとりしてゆくうちには、自分の職場のO医院の住所を記してくる場合もあるが、こちらも封書オンリー、ハガキもダメという指定がつく。何か急いで連絡する必要があって、こちらから電話番号を調べて電話をかけたところ、「これは患者さんの電話なんで迷惑ですッ」と、ものすごい剣幕で怒られた人もいる。
　げんに今回の取材過程でも、このO医院に電話をしたら同じようにKから「これは患者さんの電話ですッ、患者さんに何かがあったらあなた、責任とれるんですかッ」とまくしたてられ、一方的に電話を切られた。まあ、素朴に考えれば、グッズ売買の件が職場でおおっぴらになるのはまずい、ということなのだろう。
　多くの場合の連絡先になっていた「ギャラクシー」というのは、調べてみたらそのKの勤めるO医院のすぐそばにある不動産屋の名前だった。そこのオヤジさんに尋ねると、なんでもKの親と何か関係があって、頼まれて手紙のやりとりの窓口になっている、ただ、そういうグッズ販売のことについては詳しく聞いていない、とのことだった。だとすればKは、親の知り合いであるこの店の住所をグッズ販売の窓口にしていたことになる。

この間、この馬グッズ売買の件について会って話を聞かせて欲しいと何度もKに連絡をとったのだが、「時間をください」と言って一方的に電話を切ったきり連絡が来ない、締め切りギリギリまで待ったのだが、結局なしのつぶてだった。事と次第によっては事件性もあることなので、彼女の勤め先であるO医院の院長にも事情を説明し、正面からも取材を申し込んだのだが、そういうことは個人でやって欲しい、私は関わり合いになりたくない、と拒否された。同僚の看護婦たちがこのKのことをどう見ているか、それはわからない。

馬主さんの仰天！

このK、ごく最近では、「××××を引き取りました」という能書きを並べて活動している。『ダービーを一生遊ぶ』（なんだ、宝島社だぞ）には、写真とともにこのような投稿が載せられている。

「'97優駿9・10月号に特集されていた××××号をこの度引き取りました。彼が死ぬまで面倒を見ていくつもりです。彼のことが大好きなので彼に関する物を譲って下さい。」

ここであげられている馬は、ある地方競馬場の所属で、積極的に中央との交流戦に出走し、地方代表としてジャパンカップにも挑戦した馬だ。勇躍ジャパンカップに挑んだ時は、不肖大月、担当だった獣医たちと一緒に府中まで応援に行ったこともある。『厩舎物語』（小生のデビュー作です）以来、長年つき合わせてもらっている地方競馬場の厩舎で、しかも知ってる馬をネタにこんなふざけた真似をしてやがるとなると、はばかりながらこの大月、さすがに黙っちゃいられねえ。

下地さんがKから買ったというブツのなかにも、明らかにこの競馬場の厩舎で撮ったとおぼしき「生写真」があった。なるほどなあ、こんなものが売り物になるなら、これまで俺が撮りためたネガなんかも結構カネになるのかもなあ、と呆れながら眺めた。はあ、こりゃ○○厩舎の厩務員さんだな、こっちは××厩舎か、てな具合に、そこに写っている光景や被写体の人物はじきに特定できた。

厩舎に尋ねてみると「ああ、Kさんね、何度もよくやってきて写真は撮ってたよ、ポーズなんかもつけてやったし」（某調教師）とのこと。なるほど、引き運動中とおぼしき途中に、厩務員さんが花束を持ってポーズをつけたところを撮っている一枚などもある。お前なあ、これって厩務員さんも馬も仕事中なんだぞ、あつかましいにもほどがあるっつーの。

この馬の馬主さんも、もしかしたらこのKのグッズ売買についてはご存じないのでは、と思ったけれども、事が事だけにさすがにうかつには問い合わせられない。取材をしてまわりを充分に固めたうえで、最後の段階で思い切って話をぶつけてみた。そうしたら案の定、「ええっ、私はただの熱心なファンだと思っていたんですけど、裏でそんなことをやってたんですか」と呆れ顔。やっぱりなあ。

聞けば、やはり先のヒシアマゾンの牧場に送られてきたのとほぼ同じ内容の「お母さんがガンで……」という手紙が早い時期に送られてきて、この手紙には奥さんなどもすっかり感動していたという。何をか言

わんや、だ。
実は、先のトウケイニセイの時と同様、この馬についても、Kは業者に肩かけを作らせている。確認できただけで二本。去年の三月五日に納品された「第二回関東盃(×××の名前入り)」と、今年の四月二十四日に納品された「××××」(レース名はなし)だ。
この肩かけの件も馬主さんは全く聞いていないとのこと。そうだろう。てめえが勝手に作っているのだから。
このようなレプリカの製作費は高いもので一式十万円程度という。応対した業者によれば、この時、Kはこの二本の他に中央競馬の関西方面でのレースでの別の馬の肩かけも作ってくれと言ってきたというが、そちらはその業者のもとに雛型がないので作れないと断わったという。この馬の肩かけのレプリカの行方は今のところわからないが、どこかでKからこの肩かけを結構な値段で買ったファンがすでにいるのかもしれない。とりわけ、関東盃の方はものすごくあやしいぞ。
この××××という馬の一件では、KはS・Tという女性と二人組で動いている。このTも以前からグッズ売買をやっている女性らしい。この夏まで、この馬が種牡馬として繋養されていた種馬所から馬を移動させるについても、このふたりの「ファン」が支えているという〝おはなし〟になっている。なるほど、「美談」ではある。しかし、「美談」には往々にして裏がある。

美談の向こうに透けて見えるもの

そのTが送ってくるという「カタログ」には、最近、こんなことが書かれている。
「私をはじめ競走馬の引退後を考えるということでいろいろと活動をしています。引退しても成績が悪い馬達はほとんど殺されていきます。また、種牡馬になった馬も産駒が走らなければ殺されていきます。そんな馬達を少しでも救ってあげたいのが願いです。そんななかで署名運動もしていますので同封の用紙に署名をいただけたら光栄に思います。また、リスト内の売り上げに関しては、すべてそちらの活動のほうで一頭でも多くの馬達を救うために寄付します。」
先のKの能書きと自意識のありようはよく似ている。「関係者と親しい特別なワタシ」と、そんなワタシが馬たちの生命を考えてあげる、という陶酔。だから、グッズ販売の利益もみんなそっちに捧げます、というアリバイ。馬主さんによれば、新たな繋養先である門別の某牧場には、月に十万円プラス装蹄や医療費その他ということでお願いしているという。種馬所から馬が移動したのがこの九月だが、「ワタシたちが引き取った」と吹聴して回っているKとTからは先月、現金書留が送られてきたという。
だが、馬主さんはこの馬をまだ種牡馬として使うつもりだし、繋養先を移動させたのもそのためだ。なのに、どこまでが自分たちのファンの領分か、だらしなく肥大しきった自意識ですでにおのれの分際のわからなくなっているらしいKとTは、タネつけ先も自分たちで探します、などと言い回っていて、実際にそう持ちかけられた牧場関係者もすでにいる。
「つけるのはいいけど、だったらあんたら生まれた仔を絶対に引き取ってくれるんか

い、って言ってやったらキョトンとしてるんだわ」（ある牧場関係者）

ああ、情けねえ！　仕事で馬とつき合う、稼業として馬を扱う、そういう身の丈の現実に対するこの想像力のなさは、てめえの都合のいいようにしか競馬を見ることのできなくなっている今どきの「ファン」＝「消費者」の横暴丸出しじゃねえか！

牧場であれ厩舎であれ、はたまた馬喰さんであれ何であれ、その生き死にの消息も含めて、生きものである馬をまるごと抱え込むしかない立場に対するこういう横着な冒瀆だけは、いかにそれが「純粋に馬を好きだというワタシの気持」から発したものであっても、いや、だからこそ、僕は絶対

私達は、あなたの全てを知っています。
今まで尊敬していた人だけにショックです
今、田中哲実様に ■■ という人が
何か被害でも与えたのなら分かりますけど
何かあなたに彼女がしたのですか？
私は昔、■■ という人から写真を
何万もだしてゆずってもらった立場なので
なんとも言えませんが、あなたはトウケイ
ニセイ様にかわって ■■ という人
お礼をしなくちゃいけないのは
なのではないですか？ あなた
なって ■■ のことを
報道関係者や新聞に
たたいてやる

たくみに　おどして　あなたの
都合のいいように　面白おかしく
にせものの　蹄鉄を　前金とって　レプリカ
作って売りさばいている　まで流して　あなたが
各報道人や新聞社　そして色々な厩舎に
TELし、FAX流し　一体どれくらいの人に
流したのか教えてもらえませんかね？ あなた
警察なんですか？ ただの生産者だろ!!
都合のいいようにトウケイニセイ様をだしに
使うんじゃねえ ファンを甘くみるなよ
トウケイニセイ様の オーナーの 住所も 知っている
知っている ■ 先生の 住所も
あなたという 人間が どれほどの
ひどい奴か 知る いい機会がやって
来た。お前のことは 全て 知っている

このことを 近いうちに この事実を
近いうちに 訴えてやるからな！
ファンを 甘くみるなよ　ファンあっての
競馬だろ　だからお前らも メシ 食えるっ
てことを 忘れんじゃねえ。

に許したくはない。まして、それをてめえの詐欺まがいの所業のアリバイにしようなど論外だ。こいつら、いったいどういう神経をしてやがるんだろう。本当に謎だ。

そのまんまミザリー!?

トウケイニセイの肩かけの一件は現在、被害者の下地さんが裁判に訴えられないかと考えている。一方、生産者の田中さんのところには、Mという差し出し人からのこんな怪文書めいた手紙が舞い込んだ。便箋十六枚にわたる膨大な代物だ。

「(略) 私達はあなたの全てを知っています。今まで尊敬していた人だけにショックです。今、田中哲実様にC・Kという人が何か被害でも与えたのなら分かりますけど、何かあなたに彼女がしたのですか？ 私は昔、C・Kという人から写真を何万もだしてゆずってもらった立場なのでなんとも言えませんが、あなたはトウケイニセイ様にかわってC・Kという人にお礼をしなくちゃいけないのは、あなたなのではないですか？ あなたが中心になってC・Kのことを全国的に報道関係者や新聞に実名を載せてたたいてやる、さぎ師だと言葉たくみにおどして、あなたの都合のいいように面白おかしくにせものの蹄鉄を前金とってレプリカ作って売り、さぎしているまで流して、あなたが各報道人や新聞社そしていろいろな厩舎にTELLFAX流し一体どれくらいの人に流したのか教えてもらえませんかね？ あなた警察なんですか？ ただの生産者だろ！ 都合のいいようにトウケイニセイ様をだしに使うんじゃねえ。ファンを甘くみるなよ。トウケイニセイ様のオーナーの住所も知っている。光田先生(仮名、調教師：大月注)の住所も知っている。あなたという人間がどれほどのひどい奴か知るいい機会がやってきた。お前のことは全て知っている。このことを近いうちにこの事実を近いうちに訴えてやるからな！ ファンを甘くみるなよ。ファンあっての競馬だろ。だからおまえらもメシ食えるってことを忘れんじゃねえ。」

いやはや、もう、完璧にキレとります(苦笑)。

このMという名前に田中さんは全く見覚えはないというが、筆跡や文体はもちろん、何よりこの「ファン」に居直った自意識の脱腸状態がこれまで送られてきたKの手紙と酷似している。この種の誹謗中傷の手紙は、実は今回の取材中、他のトウケイニセイの関係者の手もとにも複数舞い込んだ。こちらも田中さんその他のトウケイニセイの関係者について、事実に反する悪罵の限りが尽くされていたという。

このMの住所を当たってみたところ、不思議なことにそこは労働基準局の独身宿舎だった。庶務課に問い合わせると、確かにMという女性が住んでいることは確認できたが、苗字は同じでも下の名前が違っていて、なおかつ、手紙で自称していた「32歳の主婦」などではない、もっと若い女性だという。現在、内部調査をしているとのことだから、また何か別のKをめぐる関係が今後明らかになってくるかもしれない。

『噂の真相』タレコミ事情

ムカツク人びと、その最後の防波堤!!

『噂の真相』は、トバ口なき世紀末日本の駆け込み寺!?
マスコミ界の〝ミスターカウンセラー〟岡留安則氏が語る、マルキ読者と誌面づくりにまつわる一大法則！

米本和広（ルポライター）

ちょっとしたことが気にくわなくて、分別ある男が機内でスチュワーデスに暴力を振う。十年前には考えられなかったことである。

バブル崩壊以降、日本の社会に閉塞感がいっそう漂いはじめ、些細なことで「超ムカツク」ようになっている。電車内の子どもたちの会話に耳を傾ければ、最も頻繁に登場するのは「超ムカツク」だ。そして、いまや「超ムカツク」は小中学生の専売特許用語ではなくなり、大人たちが日常的に使う言葉になりつつある。

「ドタキャンして超ムカツイタ」という流行語に悪乗りしたような言い方もあるが、自分の力ではどうにも解決できないことが増え、そのためにムカツキ現象が生じているように思う。したがって、ムカツキ、怒りを発散させてもストレスの解消とはならず、ムカツイタあとはオチコム。そして悩んだあげく部屋に閉じこもり、自傷行為に走る。そこまでいかないまでも、各種相談センターに電話をかけ、悩みを打ち明ける。

例えば、本来、警察は防犯関係以外の相談窓口ではないが、年間二十万件ある相談のうち、結婚、離婚、失業、遺産相続、身の上相談、生活困窮、転職など、管轄外の相談事がここ数年六万件も寄せられているという。

ムカツキやオチコミが深刻であれば、自己改造セミナーや新新宗教に走り、さらに嵩じてくると妄想が始まる。「日本の経済が上向かないのは、ユダヤが世界を支配しているためだ」「俺の運が向かないのは、電波によって誰かが操作しているからにちがいない」……。

ムカツク人もオチコム人も、自分の力で

解決できない原因を、誰かに訴えたい。もちろん、相手は公的機関だけではない。民間企業にもぶつけてくる。

その種の電話や手紙が舞い込んでくるところといえばマスコミだが、なかでもスキャンダル主義を方針とする総合月刊誌『噂の真相』ほど、訴えが寄せられるメディアはないだろう。ファクスと手紙を合わせると、毎月二、三百件に及ぶという。背後に利権の絡むリーク情報もあるが、ムカツキの憂さ晴らしも少なくない。

殺人と自殺がそうであるように、ムカツキとオチコミは紙一重だが、『噂の真相』に寄せられる訴えはどちらかといえばムカツキ型、攻撃型が多いようだ。例えば「怒っている女」から寄せられた投書では、要旨次のようなことが判読しにくい手書き文字で述べられている。

〈『噂の真相』の連載「ペログリ日記」で田中康夫がよく登場させるI氏は、私が何度かセックスした男で、芸術家を気取っているが、フリーセックスが大好きで、来日するフランスの芸術家にも女を紹介している。けしからん〉

便箋二枚に綴られた彼女の投書をひとことでいえば、「I氏にムカツク」ということに過ぎないのだが、それだけではムカツキが解消しないからなのか、「ハゲ」「粗チン」「乳をつかんで身悶え」「モノがでかく」といった、読むに耐えない言葉を散りばめI氏を中傷している。

こうした投書、ファクスを丹念に読むのは編集長の岡留安則氏である。『噂の真相』に届いた手紙をもとに、岡留氏の話を紹介しながら、訴えに情熱を注ぐ、サイコさんたちのことを考えてみたい。

岡留安則氏

◎ マルキのオーラ

『噂の真相』の公称発行部数は、現在二〇万部である。一九七九年の創刊当初に比べると、約四倍にまで伸びてきたという。岡留氏が語る。

「うちの雑誌の当初の支持者は、比較的雑誌の方針（反権力・反権威）に共鳴する人が多かったのですが、『朝日ジャーナル』が廃刊になったあたりから部数が増えはじめ、やがて立場の違いはあれ、面白いから読むという人が増えてきました。その結果、右翼の人たちからも、あるいはオカルト派の人からも投書が来るようになった。前には考えられなかったことです。

昔だったら、情報をくれる人も、きちんとした意識を持っていた人が多かったんだけど、最近は会社でこき使われているんで頭にきた、というレベルの情報をファクスで送ってくる人が結構いる。

例えば『DIME』（小学館）という雑誌のネームの入った用紙でファクスを送ってくるんですよね（笑）。上司が、別会社

の女性社長のところに経費を流しているとか、彼女と男女関係にあるとか、そういうレベルの話ですよね。私憤といえば私憤だが、それをうちは〝公憤〟にして記事にする（笑）」

かつて『宝島30』に掲載された岡留氏へのインタビュー記事では、精神病の患者からも訴えがくるという話が紹介されていた。

「精神病といっていいのかどうか分からないけど、それに類するような人からは常時連絡が来ますね。精神病院から直接電話をかけてくる人もいる。病院そのものから電話がかかってきたこともあった。〝今、患者さんが抜け出してそっちに向かった〟なんてね。精神病院を退院してまだ治療中だとか、そういう読者は結構いるんですよね。なんか、うちの雑誌に感じるものがあるんでしょうねえ。

読者で実際に会社まで訪ねてくる人もいますよ。警察に追われているんだと言ってね。完全な妄想なんですが。あるいは会社の前で一日中、僕が来るのを待っている人もいる。僕を恋人だと勝手に思い込んでいた女の子も二人ほどいた。雑誌を読んでいて、〝この人があなたの恋人だ〟なんていう神の御告げがあったらしく、それで会いにきたようだけど、怖いですよ、こちらは。相手のことを全然知らないですからね」

もともと、出版社には何かを訴えたいという読者からよく電話がかかってくる。しかし、精神を患った人たちは、出版社ではなく病院の医師・カウンセラーに訴えればいいはずだ。それなのに、直接『噂の真相』に訴えをぶつけてくるのは、病院では解決できない不満を持っていること、また『噂の真相』なら言い分を聞いてくれ、不満を解決してくれるのではないか、という思い込みがあるからである。岡留氏は「何かを訴えたいことは確かだが、（精神病の患者の）話には脈絡のないものが多い」と言う。

「うちの編集方針はタブーを作らないことにあるため、なんでも取り上げてくれるという期待感があると思います。『朝日新聞』など大手の新聞社にタレ込むんだけど、相手にされない。その結果、うちが駆け込み寺のようになってしまう。最低、『一行情報』には載るのではないか、という期待感もあるようです。

駆け込み寺のようになってしまったのは社会の変化、読者の質の変化に加えて、ファクスとワープロが発達したことが大きい。ファクスとワープロは一大革命をもたらしましたね。内部告発が、すごく手軽にできるようになったわけです。

昔であれば、直筆で書かなければいけなかったわけでしょ。直筆だと自分の正体がバレやすい。そのため昔は、誘拐犯人がやるのと同じように、新聞などの活字媒体から活字を切り抜いて切り貼りして送られてきていた。手が込んでいましたよ。それがワープロを使えば、筆跡はわからないし、ファクスの発信元もわからない。郵便局に行かなくても、夜中にワープロ打って、そのままファクスで流すことができる。実にお手軽なんですよ。フリーライターだったら、原稿を書きながら、〝あの編集長め〟というノリで送ってくる。多いですよ、そういうの（笑）。

しかし、ワープロだと困る場合がある。直筆であれば、字体によって几帳面な性格の人だとか、ある程度内容の信憑性を判断

する材料になりうるけど、ワープロでは判断できないですよね。一見インテリっぽいんだけど、なんかちょっと危ない、とかね。判断する基準がすごく難しい。その点、手書きで書かれたものだと、マルキの人って、だいたいわかっちゃう。例えば、こういう系統というのは、ちょっとヤバイですよ」

超粘着質タイプ

岡留氏が「こういう系統のもの」と言って見せてくれた投書は、三つの色を使い分けて書かれていた。全文を紹介しよう。カッコ内は筆者、一部の句読点以外は原文のままである。

〈今度は別荘を購入。史上最大のパクラー、盗作億万長者、盗作金満家、森高千里（和久千里）。今や月収700万円、年収8000万円※きっさ店の収入だけでも月200（万円?）CM一本8000万円、いつでもどこでも森高だけは特別扱い。※笑っていいともに出た時も番組、始まって以来の拍手と歓迎ぶり、森高もその気になって、なんと詞のことなどを自マン気にかたっていました。なんでも、前列（前例）のない独創的な詞をかいてきたとのことです。たしかに、アレ程パクリにパクった列（例）は前列（前例）がないでしょう。ぬすっとたけたけしいとはコノ事でしょう。来年の年収は1億をこえるようです。渡良瀬橋を歌った時など、足利市から町のPRをして

くれたということで金一ぷう付名誉市民として足利市長みずから大変なもてなしをうけたそうです。ただ単に歌の中に渡良瀬橋、足利市にあるナグモ神社という単語が入っているだけなのにです。金、名誉、権力、に対する欲望は病的な程です※特に名誉には目がないようです。※最近又、ウワ真(噂の真相)のことをハレンチ雑誌などと気違いのようにコキおろしていました　盗作をバラされたのがよほどくやしかったのでしょう。「東京FMで」※コジキ雑誌とも〉

　字体からすると、投書主は女性のようである。この女性が訴えたいのは、事実かどうかはともかく、森高千里氏は盗作しているということなのだが、ムカツキが嵩じて偏執狂的になっているようである。「盗作をバラされた」のであれば、それでこの女性は満足すべきなのに、怒りは収まっていない。このまま症状が進行すれば、小包爆弾でも送りかねないストーカーになってしまうのではないか。『噂の真相』に手紙を書くことで本格的なストーカーへの豹変が抑止されているとすれば、結果として同誌が彼女を救っていることになる。

「同じような例では、ある有名な劇団で、マルキ扱いされたというスタッフから実名で何度も来ています。劇団の主宰者への批判だけど、精神が病んでいるような気がする。

　訴えてくる人たちは妄想型、ルサンチマン型、暴露型などいろいろいます。大きく分ければ、粘着質タイプと、どう考えても誇大妄想かなというタイプです。内容はわりとその人の身近なことに関係したものが多い。例えば悪徳セールスの勧誘で頭にきたとか、会社の上司が気にくわないとか、そういったレベルのものが中心です。まったく馬鹿げた、宇宙とか地球を語るといったような誇大妄想はありません。身近な妄想が多い。現代病なんでしょうねえ」

　実例をいくつか紹介する。表現は変えていないが、いずれも要旨である。最初は特定個人に不満を持つ粘着質タイプである。

〈僕は演出家の蜷川幸男(雄)氏にひと言言いたい。高いお金を出して観に行ったけど、この所の蜷川氏演出する舞台にはタレントばかり出演させて「金返せ!」と言いたいくらいひどい〉

　次のは、粘着に若干正義感が加わったものである。

〈××通信政治部A記者は、ペルー人質事件の長期出張から帰国後、出張費用清算時に一千万円の法外な額を会社に請求。会社は横領の嫌疑をかけ本人に自宅待機を命令、懲戒処分も辞さない強い構え。現在、同記者の処分をめぐって総務局と政治部が対立〉

　文体は、何やら『噂の真相』の「一行情報」もどきである。実際、この情報は「一行情報」に載った。ファクスの送り主はさぞかしスカッとしたことだろう。

　さらに、超粘着質タイプの訴えもある。

〈テレビ朝日の丸川珠代アナがAVレイプビデオに出演していたというのは本当ですか?〉

　内容は単純だが、同じものが表現を少しばかり変えて何通も送られてくるという。単なるオタクなのか、それとも丸川珠代氏を叩いて欲しいという願いなのか、はたまた妄想を抱いた丸川氏のファンなのか。

訴え常習者への道

「投書を送ってきた人のなかには、〝俺の投書が載らないのはどういうわけだ〟と文句を言ってくる人が多いですよ。自分をなんだと思っているんでしょうかねえ（笑）。

最近は投書を載せる雑誌が少なくなってきているでしょ。うちは九ページもスペースを取っていますから、載る確率は高いだろうということなんでしょうね。いわゆる投書マニアも少なからずいて、月に二、三通送ってくる人がいる。どれか載るだろうって、宝クジのように考えてる（笑）」

『噂の真相』の投書ページ「読者の場」を読んでいて気がつくのは、やはり採用されたものも粘着質タイプだということだ。とにかくしつこい。どうやら、投書欄をコピーしてファイルしている人もいるようで、「何月号でこんな投書が載っていたが」という反論も目につく。本題から外れて、相手の人格に関わるような低劣な攻撃をするものも多い。同じような粘着質タイプの投書は、例えば『週刊金曜日』にも共通して見られる。『噂の真相』が攻撃型の粘着質タイプとすれば、『週刊金曜日』は正義型の粘着質タイプだろう。

『週刊金曜日』の投書は正義オンパレードで、もっていき場のない持てあまし気味の正義感を思いっ切りぶつけた内容のものが目立つ。正義を実現する運動団体が消滅したこと、単純な正義の主張をマスコミが敬遠するようになったことが大きいのだろう。携帯電話が危ない、歯磨き粉が危ない、水が危ない。確かにそうかもしれないが、『週刊金曜日』の投書者たちの主張を実行していたら、とても生活が成り立たない。

粘着質という点から見れば、『噂の真相』投書欄には、『週刊金曜日』の元編集長だった本多勝一氏に関したものが目立つ。例えば、本多勝一氏が『噂の真相』のコラム「蒼き冬に吼える」で百名山に短期間で登った重広恒夫氏について批判的に書くと、賛成、反対の論争が起きる。

九六年十二月号に「蒼き冬に吼えるに吠える」（本多批判・重広擁護）が載ると、九七年一月号で「百名山早巡りは壮挙か」（本多擁護・重広批判）、「十二月号本多勝一批判へ」、二月号で「再度本多氏のエッセイに想う」「本多氏の日本百名山論に賛成」、三月号で「三たび本多勝一氏へ」「志村氏は本多氏を理解できていない」、五月号で「日本百名山の評価について」「再び本多勝一応援団へ」、九月号で「日本百名山について」といった具合である。真面目に論争することが少なくなった今日、論争が起きるのはいいことだが、重広氏が百名山を短時間で登り、それをマスコミが報道したというだけのことに、これだけの論争が起きるとは驚くばかりである。と書けば、「オマエは冒険の精神がわかっとらん」と叱られそうだが。

「百名山論争はあまり広がりませんでしたが、すごい人たちですね。載せないと怖いみたいな感じの人たちばっかりで（笑）。本多勝一に噛みついたわけでしょ。だから、本多応援団も反本多勝一もどっちも似た者同士だから、すごいんですよ。とにかくしつこい」

読者からの投書を読んでいると、何かを訴えたいという熱意だけは伝わってくる。それは自己表現したいという欲求である。

もちろん、自己表現欲は昔からある。投書から伝わってくるのは、むしろ近年の「自分史」ブームに通じるような、自由があるようで自由な生き方ができないという閉塞感のなか、自分の存在を訴えたいという欲求である。そういう欲求があるから、何度も何度も投書する「常連投書者」「訴え常習者」が生まれるのだろう。

「爆発しそうな自分」のための防波堤

毎月、『噂の真相』を実名で批判する人がいる。

〈こちらの意見投書を、よくもまあ完全に無視・黙殺してくれたもんだよね。噂の真相にとって好感のもてる投書ばかり掲載しちゃってさあ。さて、今回も噂の真相の投書者たちに文句を言わなきゃならん〉

こんな内容で、採用された人たちの意見がことごとく罵倒されている。自分の意見がこの世の多数派にならないことへの激しい不満、もっといえば自分が認められないことへの強い憤りが伝わってくる。読んでいると、ある種の危なさを通り越して、悲しさを感じてしまう。

〈マスコミ・電通・Ⓚはいちいち注文をつけよる、オレはドタマにきている。断じてゆるしがたい！断罪ダ〉

マジックで殴りつけて書いたようなこんな葉書が届いても、何のことか意味不明である。Ⓚというのは講談社のことか。電通とマスコミ関係の仕事をしていて、嫌な思いをしたのだろうということはわかる。それだからといって、こんな葉書を書いても問題が解決されるはずはない。しかし、差出人にすれば、書くことによって少しは気が晴れるということなのか。

「いちいち注文をつけよる」不満を、交番のお巡りさんにぶつけるわけにはいかないし、国民生活センターやいのちの電話相談に持ち込む内容ではない。それでも、この人はどこかにぶつけたい。岡留氏が言うとおり『噂の真相』は駆け込み寺、もっと言ってしまえば「爆発しそうな自分」のための防波堤である。

葉書を書かず、一人悶々と夜を過ごしていたら、この人は刑事事件に発展しそうな陰湿な妄想にふけることになっていたかもしれない。

「管理化が進んでいるでしょ。自我を主張する場がますますなくなっている。組織に言っても圧殺されてしまう。社会全体が高度な管理下にあって、そのなかでストレスが溜まっている人たちが、ひとこと言いたいという層を生み出していると思いますね。

例えば、現場の警察官からだって来る。オウム事件のときなんて、他のマスコミで報道されたもののなかには、警察情報じゃないかと思われたものがある。警察官にもいるんですよ、ひとこと言いたいという人が（笑）。警察ほど官僚機構が発達しているところはないわけだから、現場の意見はいちいち聞いてもらえないでしょう。自分の意見を言えない不満は蓄積するはずなんです。

うちの雑誌の読者は世の中に不満を持っている人が多いから、権力や強い奴をバッタバッタと叩くと、喜ぶ。有名人とか文化人、あるいは芸能人とかの実態を載せるでしょ。偉そうにしている奴の裏側を書いたものを読めば、ストレスの発散になる。そういう読者は多いんじゃないかなあ」

「内部告発はバブルの頃より増えているような気がします。バブルの頃はイケイケドンドンでしたから、会社に不満を持っていてもすぐに解消された。しかし、今のように経済が停滞していると、内部矛盾が溜まってしまうから、それが吹き出してくるんじゃないでしょうか。

新聞など大きなマスメディアが政界のスキャンダルを抜くことがあるでしょ。あれなんかは『リークジャーナル』という言葉を作ってもいいくらい、出所は内部告発、リークの仕掛け人たちが実はやらせているようなものなんです。泉井の告発だって、仕掛け人がいますよ、きっと。要は自民党の執行部をつぶそうってわけでしょ。

大手の週刊誌も同じで、政界のスキャンダルは、九〇パーセントは仕掛け人によるリークですよ。（ジャーナリズムの側にだって）一般の人と同じように、面白がりたい気持も不満もあるしね。

自分では解決できない不満が溜まっていて、不満の対象を批判しても事態がいっこうに解決されないとなれば、今度は自分の生き方を見つめ、自分の内面を変える方向に動いていく。そうやって、宗教がはやるようなインフラが形成されるんです。

宗教がはやる時期と『噂の真相』への投書量には、比例関係があるかもしれませんね（笑）。宗教から脳にきて、生まれ変わりたいという欲求が生まれる。それと並行して詐欺師が跋扈する（笑）」

◎ 気分は民間ボランティア

「面白いのは電話ですよ。電話の人は、とにかく長いんです。夜の遅い時間は、僕一人で仕事をしていることが多いんで、電話を取るんですが、夜の時間帯ほど変な人が多いですね。こっちの事情を無視してずっとしゃべりっぱなし。医療過誤にあったというような話から、有名人の誰それにヤラレちゃったみたいな話とか、延々としゃべっている。スクープになるかなと思って聞いていると、どうも怪しくて、最後には妄想かなって（笑）。身の上相談のような話も結構あって、民間ボランティアですよ。ホームページを開設して、電子メールも受け取れるようにしたらと言われることもあるけど、それをやったら、きりがなくなるだろうから、考えてませんね（笑）」

『噂の真相』には、マスコミ業界に関する記事が比較的多い。最後にマスコミ内部からのタレコミについて話を聞いた。

「業界の人も一般の人と同じように何かを言いたいんです。講談社なら講談社の内部の人事のことを訴えたいと。業界の駆け込み寺にもなっている。小学館、集英社、講談社、文春が多いですか。新潮は少ないですね。

読んでいると、出版社の体質がわかりますよ。新潮は社内の締めつけが相当強いでしょ。それでなかなか告発してこないと思います。いちばんオープンなのは文春。文春の便箋で平気で書いてくるからね。だから、文春がいちばん風通しのいい会社だと思っています（笑）。

集英社と小学館は、社員の誰それがこんなアルバイトをやってるとか男女関係とか、細かい話が多い。講談社は編集者のスキャンダルだね。ちょっと陰湿ですよ。陰湿という点では小学館も陰湿だけど、レベルの低い陰湿です。

その点、繰り返しになるけど、文春は明るいねえ。デスククラスの奴が編集長の悪口を平気で文春の原稿用紙に書いてきたりするレベルですからね（笑）」

この原稿を書いているとき、株式、債券、円のトリプル安を記録したというニュースが流れてきた。

経済は先行き不安である。安心を買ったはずの生命保険ですら、契約時の保証金が保証されないことが、日産生命の破綻で明らかになった。会社の内部では能力主義という名のもとに実質賃金のカットが行なわれ、リストラはとどまるところを知らない。バブル期に入社した社員でさえ、三十二歳になると出向要員に回される。イライラしているときに、眉毛を細くし、ピアスをつけ、ソックスをだぶつかせたミニスカートのホステス風女子高生を見れば、つい殴りつけたくなってしまう。ムカツク、オチコムことだらけの状況下で、真面目に考えれば考えるほど、精神は病んでいく。

そして、「隣のサイコさん」が増え続ければそれだけ、『噂の真相』へ持ち込まれる情報の量も増加していく。

ほとんど投稿依存症

小さな親切運動の大冒険

偏見と相手からの感謝という見返りに支えられた「親切」メイクドラマ。
「小さな親切運動」の投稿作品に見る、
小市民的贖罪物語の作られ方、全見取り図！

高橋秀実（ルポライター）

「本当に今のままでいいのだろうか？」

阪神大震災、地下鉄サリン事件、いじめ自殺、神戸小学生殺人事件……。

マスメディアの〝語り〟のパターンをなぞるように、元来、世を憂うことが好きな日本人にとって、語るべき材料に事欠かない時代である。

「私たち、何か大切なものを忘れていないだろうか？」

よくある語り口だが、たいてい、答えは「心」やら「やさしさ」「思いやり」で落ち着いたはずである。ところが、どうもそれでは済まないのである。

できる親切はみんなでしよう！

今、日本中が感動！

日本は世界平和に向かって「小さな親切」の感動にあふれているらしいのである。

親切な至上命令

東京・三崎町の小さなビルに、社団法人「小さな親切」運動本部がある。世間では、さほど知られていないが、全国に会員数二百六十万人（累計）、三十六道府県に地方本部、百九十六市町村に支部を持つ巨大組織である。昭和四十一年に、総理府、文部省共管の社団法人として認可され、以来、総理府、日本宝くじ協会、日本小型自動車振興会などからも補助金を受け、

「心のかよう地域社会をめざして、組織的に、エネルギッシュな運動を展開」（パンフレット）しているのである。

いったい何をしているのかというと、日常的に行なわれているのが「この冷たい社会の中に埋もれているあたたかな親切行為」の発掘と表彰である。例えば、毎朝、

公園を清掃しているおじさんを目撃したとする。目撃した人が「小さな親切実行者推せん用紙」にその人の善行の内容、住所、氏名を書き入れ、運動本部に報告する。すると、選考の結果毎月開かれる表彰式で、おじさんに「小さな親切実行章」というバッジと表彰状が授与されるのである。善行内容によっては、親切した人とされた人が対面して「あの時はありがとう」と握手したりするのだ。

現在、このバッジを胸に付けているのは全国に約三四〇万人。「バッジを付けていると、いつも身が引き締まる思いがします」（愛媛県の会員）と好評のようで、マラソンの有森裕子も横綱貴ノ花も持っている。デパートの三越など全社員を挙げて「親切」している会社もあり、町で〃双葉に太陽印〃のバッジを見かけたら、その人は間違いなく「親切な人」である。支部によっては二十四時間テレフォンサービスで、会員たちの親切の内容を聞くこともできる親切なシステムもある。

「心の空洞化に気がついてきてるんじゃないですか。今、橋本首相とエリツィン大統領が笑顔で会談していても、それが正しいかどうかなんて、分からないじゃないですか。そういう大きな問題を捉えるんじゃなくて、まず足元からやれることやっていこうよ、ということなんです。親切に出会った時のうれしさ、あったかさ、それを自分で確認する。親切って楽しいぜ、という感覚は生きるうえで大きな力になるでしょ。それが社会を動かす力になるんじゃないのかな」（運動本部事務局長・楠田景子氏）

本部のスタッフは女性が多く、もちろん皆「親切な人」である。一日に何度すれ違っても挨拶されるので、くたびれるくらいである。

群馬県にある明和高校などは全生徒が会員という「親切な学校」である。

昭和三十九年にこの運動に参加以来、施設の慰問や清掃など、「考えられるものはやり尽くしたと思われる」（同校校長）のち、現在では全校を挙げて、電車・バスの席ゆ

社団法人「小さな親切」運動本部

illustration▶中野豪

ずりに励んでいる。生徒たちは一日何回席をゆずったかを累計してゆき、昨年ついに百六十万回を突破した。入学試験もいじめもないという、この親切な学校では、偏差値ではなく、それぞれ卒業までに何回ゆずれるかを競い合っているようである。

電車に乗れない寮生は「席ゆずりの心だけは負けない」と、実家に帰省する時に席ゆずりに励む。友達と話すのが苦手だった生徒も知的障害者が席ゆずりをするのを見て「私にもできるんだという勇気をいただいた」結果、百八十四回を達成し自分自身が変わったと言う。彼女によれば「席をゆずるにはまず自分が座ること」だそうで、必ず座って年寄りが来るのを待ち構える。思いやりと気迫にあふれる親切なのである。

いじめ自殺で話題になった東京の中野富士見中学も、「この学校はもっといい学校なんだと知ってもらおう」と学校周辺の清掃に努力の末、実行章を認定され、親切な学校の仲間入りを果たした。長野県本部では、小学生に書道で「しんせつ」と書かせた作品展まで開いている。

「みんなが親切心を持つようになったら、教育も政治も経済も今のような混迷から脱出できるでしょうね。世界的に見て、親切という精神を基盤にした相互扶助の精神が人類のものとなれば、つまらない戦争や対立がなくなっていく。これは人間として生きるうえでの至上命令であると思います」（運動本部前代表・塚原富衛氏）

皆で「小さな親切」をすれば万事が解決するというわけである。

ずいぶんと大袈裟な話だが、政府をはじ

め、NHK、読売新聞、毎日新聞などの大手マスコミもこの運動を積極的に後援しており、すでに日本は親切大国への体制ができあがっているのである。

涙が出るほどいい話

さて、ここで注目すべきは、当運動本部主催の「小さな親切ハガキキャンペーン」である。これは「心がじーんと熱くなる忘れられない親切の思い出」を公募し、審査の結果、郵政大臣賞など四賞が選ばれ、切手帳と図書券一万円分が贈られる。いずれは『涙が出るほどいい話』（河出書房新社刊）などの単行本に収録されるという特典も付いている。

言うなれば、美談の全国大会である。今年で十三回を数えるが、『読売新聞』や、『賞とるマガジン』『公募ガイド』などの懸賞雑誌に募集広告を出したせいか、年々応募者は増え続け、今年の応募は七千通近くにも達した。

なかには、読みにくいまでに細かい字で自らの善行の歴史をぎっしり数枚に綿々とつづる老人や、まったく訳の分からない親切ポエム、結婚式のお礼、「ありがとうをありがとう」という標語があるかと思えば、「一緒に卒業しようね」という明らかな勘違いなど、かくも面倒な手紙を図書券欲しさに送るとも考えられず、私はただその熱意に感心するばかりである。

これまでに寄せられた作品を読みながら、「小さな親切」とはいったい何なのか考えてみたい。その前にまず、運動本部制定の「小さな親切の歌」を歌って、コンセプトを理解しよう。

♪みんなのみんなのしあわせは
山の彼方にあるかしら
いやいやみんなの身のまわり
ほらすぐそこにあるのです
ほんの小さな親切が
ひとの心に灯をともす

そういうことである。全財産をボランティア団体に寄付するのは善行だが、これは親切としては大きすぎる。親切は小さくないと人の心に灯がともらないのである。もちろん小さすぎてもいけない。次のような作品は予選落ちである。

コンビニに行った時のことです。朝弁当と飲み物を買った時、高校生ぐらいの店員が割り箸とストローを入れてくれ、アリガトウゴザイマシタと言われ、一日中気分が良かった。

（二十一歳・男性）

不思議な作品である。これだけのことで気分が良くなるには、よほど不幸な身の上か、外国人、あるいはコンビニの回し者かと、深読みしたくなるが、字面から察するにとりたてて何もないようである。応募作を読んでゆくと、このようにどこが親切なのかよく分からない作品が意外に多い。

　うちの隣家のおじさんはいい人だ。
我が家は、色々と音をたてて、きっとうるさいと思う日が毎日だろうに、おじさんは文句を何も言わない。なんていいおじさんなんだといつもおじさんの親切を感じる毎日である。ありがとう!! 本当に感謝してます。
　この思いをハガキに託します。
P・S
うるさくないですか?と聞いても「うるさくないよ」と怒っていなかったおじさん…大きな心の持ち主だ、あなたは。サンキューベリーマッチ♡
（二十四歳・女性）

　二十四歳が書いているとなると、日本の将来が不安になる作品である。一方、賞を狙うがあまり、過剰に感動的な作品も散見する。

　私は以前、見知らぬ男性にむりやり車の中に連れ込まれ、体を触られるというイヤなたいけんをしました。
　結婚を目前に誰にもいえずに悩んでいました。女性の友人にｔｅｌして話をしたら、やはり彼に話をした方がよいということに

なり、真夜中に彼にtel。
すっとんできて、「何もいうな」って一言いって、ずっと抱きしめていてくれた。次の日、一っすいもしないで仕事に行った彼。
（中略）
一度はあきらめた結婚だったけど、今、その彼は私のだんな様です。
（二十八歳・女性）

筆者はこの話の親切の部分が分かるように、きちんと傍線を引いている。そのうえ、ハガキには、今回の募集とは関係ない『賞とるマガジン』のプレゼント応募シールが貼ってある。
「その彼が今は私のだんな様」というオチはよくある手だが、それにしても「親切」を語るためにレイプまがいの体験を『賞とるマガジン』で応募するだろうか。「私の見た〝小さな親切〟駅員さん」と題するこんな作品もある。

8月。私は海水浴に行こうと電車に乗りました。電車は混んでいて、すし詰め状態。駅が近くなり、奥から「降ろして下さあい！」と聞こえてきました。そして、電車が停まり、やっとの思いで高校生ぐらいの女の子が降りました。
なんと、その女の子はブラジャー姿だったのです。女の子は疲れと恥ずかしさのあまり、その場に屈み込んでしまいました。まもなく駅員さんが来て、女の子に上着をかけてあげました。私は親切な駅員さんに、心の中で拍手をしておりました。
（四十九歳・男性）

拍手している場合ではない状況である。言うまでもなく、これらの作品はすべて予選落ちになる。「小さな親切」の基本というものが分かっていないのである。
さりげなく、そして心にしみ入る小さな親切。
過去の入選作を集めた『涙が出るほどいい話』の帯にも、作家・立松和平が書いている。
「小さないい話とは、暑い日に飲む冷たい水のようなものだ。いろんなまちがいをしたりもするが、つまるところ人間はそんなに捨てたもんじゃない。私たちはいい話を水を飲むように聞きたいのである」
さて、それでは本部スタッフが目をうるませながら「グッときますよ」と勧める感動の入選作を読んでみよう。ちなみに、これらは現代の聖書と言われ、ティッシュなしでは読めない名品とされている。

親切連続技

今年の読売新聞社賞受賞作。立ち喰いソバ屋での美談である。

ある日、私が「立ち喰いソバ」を食べていたら、一人の老人（おじいさん）が入って来て「花屋さんはどこですか」と、たずねてきました。店員は忙しく、恥ずかしい話ですが、私も聞こえないふりをしていました。すると、私の近くにいた20歳ぐらいの男の子が食べている途中だというのに「すぐ近くですから一緒に行きましょう」と、老人の荷物まで持ってあげ出て行ってしまいました。近くなので、ものの１分ぐらいで帰って来ましたが、なかなか出来る

事ではありません。
店員のオバサンも感心したらしく気をきかせ、温かいソバにかえてあげました。なんか小さな親切「2本立て」を見てしまったようで、嬉しい気持にもなり、反省もした次第です。髪の毛が長くて茶色でも気持ちのきれいな、心が澄んだ若い子もいるのですね。

拍手&感激

（三十五歳・男性）

受賞のポイントは、この「親切2本立て」である。わが身を振り返れば分かることだが、老人に席をゆずるなどの善行は、文章で表現すると一行かせいぜい二行で終わってしまい、とてもハガキを埋めるに至らない。

この完成された美談のように、全国大会で勝ち残るために大切なのはドラマである。誰でもできる当たり前のことを当たり前にやろうというのが小さな親切だが、当たり前の親切を、感動もなく当たり前に書いてはとうてい無理なのである。

これまでの入選作にもこうした親切連続技が多く使われている。

「おばあちゃんのパートナー」と題する四十八歳の女性の作品はその典型である。やや長いが我慢して読んでほしい。

「小さな親切」実行者推せん用紙

年　月　日

推せん月日

推せん者
個人の場合　氏名
住所〒
団体の場合　団体名
代表者名
連絡先住所〒

個人	団体
氏名	団体名
年齢・学年	代表者名
自宅住所〒	連絡先住所〒
☎	☎
所属先	団体の人数　名
所在地	団体の内訳　大人(　)中学生(　)子供(　)
実行内容	実行内容

この用紙によって「親切な人」が推薦される

あのおばあちゃん、今でも元気だろうか？

昨年の九月初め、私は父の容体が急変したとの連絡を受け、急いで駅のホームにかけ込んだ。そんな時、中年の女性と杖をついたおばあさん連れが大きな声で、

「どなたか二日市まで行かれる方はおられませんか」

と言うのが聞こえた。

私は勇気を出して、「はい、行きますよ」と近づいた。女性は、「実はこのおばあちゃん、太宰府まで行くのですが、途中までもいいのでご一緒してください」と、私

に話し、去って行った。
　ほどなくして列車に同乗して、「先ほどの方はお嫁さんですか」と尋ねた。
「いいえ、知らない方だけど親切に駅まで案内していただきました。今日は息子の命日なので太宰府から一人でお墓参りに来て帰るところです。主人も二十年前に亡くして、今は老人ホームでお世話になっているんですよ」
　と話された。そして、
「この年（八十六歳）まで生きていると、人様のご親切が身にしみます。心から感謝いたします」
　と語られたその言葉がいつまでも忘れられず、自分自身も反省させられ、教えられる思いがした。
　私はおばあちゃんの次なるパートナーを探さなくてはと、一人の学生さんに声をかけた。偶然にも太宰府まで通学されている方で、こころよく引き受けてくださったので私もホッと安心した。
「おばあちゃん、ここで降りて乗り換えて、この学生さんと一緒に帰ってくださいね。いつまでもお元気で」
　と、私は手を振ってホームを後にした。

親切でいっぱいの会報誌

　実に感動的な話である。善行を施した時の筆者の感動ぶりが手にとるように伝わってくる。まさに小さな親切がつなぐ人の輪である。
　この運動の提唱者である物理学者で元東大学長の茅誠司氏の「小さな雪がころがって〝なだれ〟になるように、小さな親切をきっかけに社会のすみずみまでもなにげなく、またまんべんなくおこなわれるように」というコンセプトにぴったりの美談である。
　連続技で重要なのは登場人物がみんな感動し、その状況にさわやかな風が吹くぐらいがいいのである。
　次の作品などは誰が誰に親切したのか分からないほど高度な親切の連続である。
　勤務を終え、疲れた身体で帰宅を急ぐ路

線バスの車中、誰もが座って帰りたい。だが、その日は風雨が激しく、超満員で多くの人が立っていた。前から三番目に、老人・身体不自由席があって、すでに二人が座っていた。

そこに白い杖を持った眼の不自由な青年が乗って来た。横に立っていた女性がその座席の人の肩をたたき、この青年に座席をかわってあげなさいと言った。

「ハイッ!!」と立ち上がったその人は、もっと足の不自由な、立っているのがやっとの人だった。瞬間、私はドキーッとした。すると、すぐ横の一般席の男性が、どうぞここにかけてくださいとその眼の不自由な青年の手をひいて、座席を譲った。

今迄満員でじめじめした空気の車中に、涼風が一ふき、さわやかな笑みが人々の顔に浮かんだ。とっても気持ちの良い場面であった。〝ゆずり合う心ひとつで笑みが交う〟

（五十三歳・女性）

さすがに入選作はどれも名品ばかりである。

反省できる親切

すでに気づかれた方もいると思うが、入選作のなかには「ゆずった人はもっと不自由な人だった」や「反省した」「逆に教えられた」という文句やニュアンスが入っている。親切ドラマには、この種の「ひねり」技がどうやら不可欠らしい。「ひねり」のなかで最もオーソドックスなのは一見、親切しそうにない人が親切するのを見て、反省しつつ感動するというパターンである。

ハガキキャンペーン第一回の入選作品、「黒サングラスの救い神」がいちばん分かりやすい例である。

何年かぶりで、病床の身を妻と嫁に付き添われて墓参りに上京した。東京駅から乗った山手線は大混雑。人に押されて右に左によろめいているうちに、気分が悪くなり冷や汗がしきりに出る。妻も嫁も心配するが、どうするすべもなくおろおろするばかり。

その時、前の席の人がすっと立って、黙って私の肩を押すようにして座らせてくれた。思わず大声で「ありがとう、助かりました」と言ってその人を見ると、黒いサングラスをかけて白服白靴、胸には金バッジをつけた一目瞭然、その筋の人であった。しかし、その人は私たちの口々のお礼に「おおよ」と一言つぶやいて、次で降りるかのように出口に人を押し分けて移って行った。私にとっては、あわや卒倒寸前の救いの神であった。しばらくたって池袋を過ぎたころ、少しすいた車内を何気なく見回すと、出口付近に黒いサングラスのその人がまだ立っていた。私たちに遠慮させまいとして、いかにもすぐ降りるふりをしてその場から離れたのだ。

人は見かけで判断してはならぬと思い、しみじみ人のあたたかさを感じいった。

（五十九歳・男性）

ヤクザ風の人は横柄なはずなのに親切だったという「ひねり」がきいて入選である。これなど、ヤクザ風でなかったら成立しないドラマである。ヤクザ風だったおかげで、選評にも「人生経験を積み重ねた方の忘れ

難い記憶はさすがに重みがあり、これが私たちの心を打たなかったら不思議でしょう」（前出・塚原氏）とまで評価されている。

しかし、そこまで評価する塚原氏のほうが私には不思議である。

「今時の若者」も格好の反省材料である。

人は見かけによらぬもの

五年前のことです。その日は京都で、大阪と京都の身体障害者のボウリング同好者が集まり、京阪試合が開かれ、体の不自由な人、目、耳の不自由な人、そして車椅子の人たちが自分に合った投げ方で、ボウリングを楽しんでいました。

終了後、貸し切りのバス乗り場まで、重いボールの入ったバッグを持って、各自が歩いて行きます。けれども皆、体の不自由な人ばかり。あまり長い距離だと、歩くのに時間がかかります。

ボウリング場の人が、カウンター横の喫茶室から裏口に続く近道を提供してくださいました。しかしドアが重く、一人が出るたびに反動で閉まります。裏口近くのテーブルには、リーゼントにダボダボズボンの若者が三人、たむろしていました。

何人かが通った時です。若者の一人が、スッとドアに寄って片足を広げ、そして片手を力いっぱいドアに押しつけたのです。そしてドアは閉まることなく、開いたままになりました。

二十人近くの障害者が通り過ぎるまで、若者はそのままの状態でじっと押し続けていました。最後に通った難聴の私が「ありがとう」と言うと、顔を赤らめて照れくさ

そうに目を伏せました。
　本当に人は姿形で判断できないものですね。今でも私たち仲間は、若者のことを思い出すたび、感謝の気持ちでいっぱいになるのです。

（四十五歳・女性）

　この人は反省するために、無理やり姿形で判断しているようにも読める。入選作の中には反省ついでに「自民党の若手議員と同じ世代の若者の勇気を見直した」（五十八歳・男性）とさりげなく政治宣伝までしてしまっているものもある。いずれにせよ、ただの善行を感動の美談にまで持ちあげるには「親切しそうにない人」というかなり鈍感な偏見を土台にしなければならないのである。偏見があってこそ「人は見かけによらないのね自分が恥ずかしい」と反省する喜びも味わえる。ヤクザ風、ダンプの運転手、死を待つ老人、茶髪の若者、病気の子ども、犬の親切まである。郵政大臣賞の受賞作には、空港で隣の中国人に毛布をかけてあげたイラン人の見かけによらない美談も入っている。

切り札は「障害者」

　最も目立つのは、障害者の美談である。障害者の善行は人の心に灯をともすらしく、どうやら健常者の親切より感動的なのである。
　四十四歳女性の作品「すてきなお嬢さん」はただ道を教わっただけで郵政大臣賞である。

　あれは梅雨時のむし暑い午後、ＪＲ秋葉原駅から都営地下鉄岩本町駅に向かっている時のことです。その岩本駅（ママ）がわからず、ちょうど通りがかりの若いお嬢さんに駅を尋ねました。すると身振り手振りで教えてくださって、その時初めて「お話できない方なのだな」と気づいたのです。
　でも私は、丁寧に教わったので、しばらく行ったところで駅の入り口を見つけることができ、ほっとしました。何気なく後ろをふり返ると、なんと、そのお嬢さんは私が間違いなく岩本町駅がわかるかどうか、見届けてくださっていたのです。
　私も「おかげさまでわかりましたよ」と心で言いながら目礼すると、遠くでお嬢さんも笑顔で手を振ってくださっていました。
　思いがけない出会いから心と心がかよいあって、言葉を介さなくても、こんなにもあったかな思いをさせてくださったあのお嬢さんに、感謝の気持ちでいっぱいでした。私もどんな方にもやさしく接してあげたいと、心底思ったものでした。心やさしいお嬢さんの前途に「幸せあれ」と、願わずにはいられませんでした。

　筆者は健常者が道を教えるのでは味わえない感動にひたり、「どんな方にもやさしく接してあげたい」と決心している。かわいそうな障害者は親切を施される側にいるはずなのに、「人間のやさしさ」は忘れておらず、それを「教えられた自分」に感動しているのである。
　次の作品など感動にあふれすぎて、善行の障害者に思わず声をかけてしまっている。

あの席はこころの座席
　朝、時々利用するそのバスには盲導犬を

連れた女性が乗ってくる。ある日、久しぶりにそのバスに乗った私は、乗車口に一番近い席に座ろうとして、ふと彼女のことを思い出し、ドアの後ろの席に座りなおした。

次のバス停では、何人かの乗客とともに若い娘さんが乗り込んできた。時々見かける彼女は小児麻痺の後遺症でもあろうか、歩くたびに体が左右に大きく揺れる。

彼女は私が先程座ろうとした乗車口の席に座った。が、いったんそうしながら、また立ち上がると、不自由な体で私の座席の横に移ってきた。

「よく気がつくのね」

私は思わず小さな声で言った。彼女はひっそりと微笑み返してきた。

ところが次のバス停で乗り込んで来た中年男性の一人が、せっかく彼女があけておいた座席にどかりと座り込んだ。二人の失望のうちに、盲導犬の女性が乗ってくる次のバス停が近づいた。その時、中年の男性は急にキョロキョロ辺りを見回すと、前のこんでいる席に移っていった。明らかに彼もその席をあけたのである。

やがて次のバス停が来て、盲導犬に続いて目の不自由な女性が乗り込んでくると、彼女は背もたれにちょっと手をやって誰も座っていないのを確かめると、その席に腰を掛けた。彼女はもちろんその席が三人の小さな善意であけられていたことを知らない。

そのことが嬉しくて、私はもう一度隣の人に微笑みかけた。自分の知らないところで、私もこうして多くの人の善意を受けながら生かされているのだろう、と思いながら……。

（四十八歳・女性）

誠におめでたい感動で、そうやって筆者は一生微笑んでゆくのだろう。「よく気がつくのね」というほめたつもりのさりげない失礼を受けた娘さんのひっそりしていた微笑みをはにかみだと思えるのはかなり幸せな感性である。

他の入選作にも、障害者が電車に乗っているのを見ただけで、「彼の勇気と努力には涙が出る」（二十八歳・女性）などとあり、

“親切原理主義”のプロパガンダ・ポスター

まるで障害者は生きているだけで親切だと言わんばかりなのである。

時代を暗くして美談光る

人間、感動する心を失ったら終わりといえうが、ならば私は完全におしまいである。私には、わざわざ応募されてくる「小さな親切」話の数々からは、善意という安全な場所で感動したいという「小さな欲望」しか読みとれないのである。

親切ドラマのオチは親切された人の感謝である。「小さな親切八カ条」の第三条にも、

他人からの親切を心から受け入れ
「ありがとう」と言いましょう。

とある。

「おかげでその日はほのぼのとした心持ちで過ごすことができました」
「涙で後ろ姿がかすんで見えました」
「脳内出血で不自由なはずの左目からも、熱い涙が頬を伝いました」

障害者がかかわると、
「私たちの心も、そして雨模様の空もいつの間にか明るくなっていた」

と天気が変わるくらいの感動なのである。偏見と相手からの感謝という見返りに支えられた「親切」メイクドラマ。

平和な日本の中、彼らは美談を求めているように見えて、実は手近な悲劇を欲しているのである。そのくすぶった思いが投稿ハガキ上で反転して美談となるのではないだろうか。

運動本部のスローガンの一つは「日本の心をとりもどそう」である。日本人は本来、親切だったはずなのに、戦後、教育勅語を捨てたことで、すっかり不親切になってしまったのだそうである。

善行を説く勅語の一節には「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」とあるが、本部の理事の一人、故植村甲午郎（当時経団連会長）は次のように書き記している。

「これはもしもわが国が他国から侵略を受けるようなことが起こったら勇敢に防衛戦線に立つということが要請されているのであって、そこにいわゆる帝国主義や侵略主義の臭いは全くない。そして、かかる場合にかかる行為を国民に要求しない国は世界中に一つもない。社会主義国でも、共産主義国でも、例外はないのである。それが日本だけで否定されることは、平和に徹する宗教的態度としては肯定できても、教育としてはどうであろうか。そこに夢に現実の撞着を感ずるのは私だけであろうか。（中略）私は『教育勅語』がその最たるものたることを信じて疑わない。この大きな忘れものを正しく再評価することによって、どうか国民教育を正しくあるべき姿に再建していただくことを切望してやまない」（『日本の心・日本の文化』小さな親切運動本部刊）

親切を国是とする日本。小さな親切運動とは、日本を守る親切部隊なのである。

平成七年九月。阪神大震災ののち、都内では恒例の実行章贈呈式が盛大に挙行された。会場は「大震災をめぐっての感動が終始あふれていた」らしい。この日、震災時にボランティアなどに参加した人々一万八千人が親切バッジを胸にした。

大震災という災害は、人と人が助け合う人間のすばらしい原点だったそうである。

時代を暗くして美談は光輝くのである。

アイドル個人情報追跡者

ゴミに賭ける〝新新新人類〟の肖像

消費の反復では満足できないオタクは、この世でたったひとつの〝お宝〟＝ゴミを漁る！
高度情報化社会が生み出した、ポスト宅八郎、ポスト石丸元章の日常！

宝泉薫（著述業）

「カンノの実家に来襲したときは、たまたま大掃除をやったあとみたいで、ドアの前に雑多なゴミが置かれていたんです。即座に持ち帰ろうと思いましたよ。あらかじめ用意しておいたバッグに詰め込み、近くの公園のベンチで中身を鑑定しました。

　いざ調べてみると、弟のものが多くてがっかりしたけど、カンノ本人が中学時代に使っていた社会のノートを発見したときは感動ものでしたね。表紙にしっかりと〝菅野美穂〟と書かれてあって。あと、弟の女友達が書いたとおぼしきラブレターに〝お姉ちゃん、どんどん有名になってくね。あのCM、ちょーカワイイじゃん〟なんてフレーズを発見できたのも収穫でした。

　うしろめたさ……？　そりゃ、もちろんありますよ。でも、そのスリルがたまらなかったりもするんです。こればかりは、一生やめられないでしょうね」

　二十代半ばのアルバイター・堀越日出夫（筆名）は、アイドル・菅野美穂の〝ストーキング〟に成功した日のことを淡々と振り返った。五年にわたるストーキング歴のなかでも、とりわけ恍惚の瞬間だったという。

　彼は九七年七月二十四日号の『週刊新潮』にも登場している。題して〝アイドル300人を丸裸にした「ストーカー」の告白〟――この中で、彼は、

「彼女らの暮しの実感が味わえると、支配した気分になれる」

と、語っている。なるほど、この言葉から見る限り、彼はストーカー、しかもアイドルなら誰でもいいという無差別のストーカーということになる。しかも「この体験をいつか本にまとめるつもり」というのだ。

編集部が連絡をしたところ、スムーズに取材の運びとなった。
　じつは同じ頃、筆者も知人の雑誌編集者から「アイドルの自宅をつきとめては『投稿写真』で報告している人物がいる」と耳にし、興味を持ち始めていたところだったのである。

〝洗濯物〟のリアリティ

　十月中旬の日曜日、待ち合わせ場所の新宿の喫茶店に、彼はほぼ定刻に現れた。その姿は――この本の読者は今さら驚かないだろうが――中肉中背でごく普通の格好をした青年である。物腰も口調も穏やかで、落ち着きがあり、自らが非日常的な快楽にハマっていく過程を理路整然と話し始めた。
「きっかけは五年前の夏、友達とコンビニの前でたむろしていたら、自転車に乗った高橋由美子が偶然通りかかったんです。夜だったし、眼鏡をかけていなかったんで、はっきりとは分からなかったけど、このあたりに住んでいて、よく自転車に乗っているというのはインタビューなどで読んでいたし、友達が〝あっ、高橋由美子だっ！〟と叫んだ瞬間、あとを追っかけていました。まわりの雰囲気がそうさせた、というのもあるけど、足が勝手に動いてた、という感じですね。生のアイドルに遭遇できるなんて、地方から出てきたばかりの大学生にとっては、夢みたいなものですから。
　ただ、このときは結局、追いつけなかったんです。距離にして二、三キロ、トップスピードで走ったにもかかわらず……。これって、ゲームだとしたら、僕は負けて、向こうは勝ちってことじゃないですか。この敗北感が、今につながっている気がします」
　高校まで、北関東の中都市で過ごした彼は、「東京のコアな空気」に憧れ、大学も都心にある偏差値Ａランクの某有名大学を選んだ。サークルは、アイドルと同じくらい好きなプロレス関係を選択。だが、プロレスファンにはなぜかアイドル好きが多く、彼はある日、先輩から一種の〝啓示〟を受ける。
「サークルのノートに、ＣｏＣｏのメンバーの自宅に行った話が書かれてあったんです。〝女物の洗濯物が干してあった〟とか、かなりリアルで、これはすごいな、と。で、実際にそこへ行ってみると、やはり興奮するわけですよ。
　僕は〝コレだっ〟と思いましたね。アイドルの自宅をできる限り、つきとめてやろう、と。そこから、今の行為が始まったんです」
　と言っても、最初のうちは「先輩から三浦理恵子の情報を仕入れて現場に行き、写真を撮ったり、隣の建物の二階から母親が家に出入りするのを眺めたり」という他愛のない（？）ものだった。それが、場数を踏むうちにエスカレート。自力で住所をつきとめ、ゴミ袋を漁るなど、さまざまなアプローチを始めるに至る。

捕捉のための「三種の神器」

　九七年の夏、ＳＰＥＥＤの四人が住むマンションを発見したときの手口は、こうだ。
「まず、生写真屋で登校風景の写真を何枚か買ったんです。着ていた制服と持っていたバッグから通っている中学校は分かった

illustration▶森口裕二

んだけど、問題は住所。と思って、写真をよく見ると、背景に電柱が写っていて番地表示の〝12〟という数字が判読できました。そこから、その中学の学区内で〝12〟のつく地名をしらみつぶしにあたったところ、一つだけ合致し、マンションを推定したんです。

さっそく張り込みを開始して一週間、コンビニの袋を持った島袋寛子と上原多香子を〝捕捉〟しました。あとをつけて、そのマンションに入るのを確認して、すべて完了。ちょうどひと月くらいかかったかな。かなり運が良かったですけどね」

まさに、プロの探偵や写真週刊誌のカメラマンも顔負けの緻密な追跡劇。そのために、彼は自宅に〝三種の神器〟を常備している。

「都内の主要な区の住宅地図と、学校総覧。これには『プチセブン』などの女子高生向け雑誌から切り抜いた制服の写真を学校別に貼ってあります。あと、数年前の電話帳。どこかの業者が捨ててしまったのを、東京二十三区分まとめて拾ってきたんですけど、これは実家の住所を割り出すのに重宝して

います。最新のものだと、アイドルの実家の番号は、電話帳から削除されますからね」
　その他、アイドルが登場する雑誌はペット専門誌に至るまで目を通し、女子中高生の「うちの学校にアイドルの誰々がいる」といった〝街ネタ〟にも注目。ありとあらゆる情報を駆使して、隠された住所を発見していく行為は、難解なゲームをクリアする喜びに似ていると言う。
　また、十代のアイドルとはあまり関係なさそうだが、一万数千円もする『長者番付』も購入。じつは、著名人全般の〝住所録〟を作るという遠大な目標があるからだ。
「現在、自宅のワープロには五百人くらいの著名人の住所が打ち込んであります。そのうち、アイドルは三百人。ストーキング歴があるのは、百人にも満たないですけどね」
　それにしても、なぜ、彼はこの趣味にこれほどのめり込むのか。
　話を進めるうちに、鍵となる人物の名が飛び出した。
「僕は中二で『投稿写真』を読み始めて以来、石丸元章さんのファンなんです。影響は、かなり受けていますね。自分の中の三〇％くらいは、石丸さんのエキスが注入されてるというか」

石丸元章への恩返し

　石丸元章――八〇年代後半の〝ウワサ〟ブームの火つけ役であり、自らのドラッグ体験を描いた『スピード』等の作品でも知られる〝怪人〟的ライターである。
　が、筆者にとっては古い友人でもあり、

名前を聞いた瞬間、不思議な感慨にとらわれた。
話は十数年前に遡る。
当時『よい子の歌謡曲』というミニコミ誌に関わっていた筆者は、姉妹誌関係にあった『東京おとなクラブ』の中森明夫に呼ばれ、新人スタッフの石丸や後の宅八郎とともに、制作に参加した。宅についてはほとんど印象がないが、石丸は「とにかく話の面白いヤツ」として鮮明に記憶している。
余談だが、現在『危ない1号』で悪趣味雑誌ブームの一翼を担っている青山正明も当時、ミニコミ『突然変異』を主宰していた。鬼畜系と呼ばれる九〇年代のサブカルチャーは、この時期に準備されていたのだ。
その後、石丸とは二、三の商業誌で活動をともにしたが、なかでも印象深いのが『投稿写真』である。彼は持ち前のアジテーション能力とゲリラ的精神で、アイドルの噂をランキング化する企画をヒットさせた。〝つみきみほの母親はサル〟などの絶妙なネタの数々を、筆者は今も懐かしく思い出す。
目の前にいる堀越日出夫が影響を受けたのは、まさにこの企画なのだ。
「たまたま『投稿写真』の編集部に、大学の先輩がいまして、〝アイドルに詳しい奴〟ということで、石丸さんに引き合わせてもらったんです。それから、僕がつきとめた情報を提供したり、その情報をもとに一緒に出かけたりするようになって……。アイドルの通う学校の偏差値ランキングを作成して、掲載されたときは嬉しかったですよ。石丸さんも喜んでくれたし、近所のコンビニでふと隣を見ると、いかにもおたくっぽいヤツがそのページを食い入るように読んでいたんです。あれは、なんとも言えない気分でしたね」
どうやら、石丸と出会ってメディアに参加できたことが、彼に優越感をもたらし、その趣味をさらにエスカレートさせたようだ。

燃えるゴミの日、お宝の日

「東京パフォーマンスドールの市井由理の家から、サボテンの鉢植えを持ってきて『投稿写真』に掲載されたこともあります。最近では、奥菜恵の実家の電気料金請求書とか。悪いなぁ、と思いつつ、ちょくちょくやっちゃいますね、エヘッ」
とは言え、相手に文句を言われたり、警察に通報されたりという失敗は一度もない。それは「歌舞伎町で可愛い女のコを尾行したり、一般家庭のゴミを練習台にしたり」という日頃の研鑽もあるが、何より彼が、一線を越えないよう慎重に行動しているからだろう。
「そりゃあ、好きなアイドルの姿を見たら、声をかけたいどころか、抱きしめたいと思いますよ。でも、そこを抑えて、ある一定の距離を保ちたいんです。この関係を崩したくない、というか」
この自制心、もしくはバランス感覚は、いわゆる〝ストーカー心理〟とは別モノにも思える。むろん普通の〝ファン心理〟とも違うが、この疑問を解決するには、一度、彼の〝ストーキング〟に同行してみるべきだろう。
その旨を話すと、彼は快諾した。
「じつは今、奥菜恵の自宅を狙っているんです。月、水、金が燃えるゴミの日なんで

すよ。ま、ゴミを漁れる確率は少ないけど、そのかわり、彼女、バスで高校に通っているんです。そのバスに同乗して、自分がどう興奮するか確かめたいんですよね。ラッシュアワーだから、からだを密着できるかもしれない。それこそ、夢のような体験ですから」

　念のため、張り込みの注意点を聞いたところ、「いや、普通の格好をして、目立たなくしていれば大丈夫」と言う。実際、彼には自分が特別変わっていることをしているという意識があまりないようで、別れ際、

「僕のこと、読者の人はそんなにすごいと思ってくれますかね」

　と自信なげ（？）につぶやいた。

標的は「バス停ひと区間」

　それから一週間たった月曜の朝、目黒駅で彼と落ち合った。

　黒いジャケットに、同系色のズボンという「普通の格好」の彼は、ゴミを入れるためと思われる大きめのバッグを持ち、

「ここから歩いて十分弱です。なんとなく、心地よい緊張感がありますね」

　と冷静に説明する。

　そして、十分後、

「この細い路地を入った奥の木造の建物が、奥菜の家です。ポストに〝○○〟ってあるでしょう。アレが本名なんですよ。ゴミの回収場所については、近くに二カ所あって特定できないんですけどね。理想は、彼女がゴミ袋を持って出てきて、捨てたゴミをゲットしてからバスに乗るっていうパターンかな。とりあえず、あそこにちょうどいい具合にカーブミラーがあるんで、その近くで待ちましょう」

　てきぱきと解説しながら「ちょうどいい具合」のミラーの下で張り込みに入った。

　とは言え、興奮している様子などなく、

「普段は、そのアイドルのCDを聴きながら待つんです。そうやって気持を盛り上げて。でも、期待したときに限って、空振りに終わったりもするんですけどね」

　実際、七時四十分頃から待ったものの、奥菜はなかなか出てこない。三十分以上が経過し、彼は腕時計を見ながらつぶやいた。

「日出（女子学園）は八時半が始業なんです。あと五分がリミットですね」

　それから三、四分――。ミラーに女子高生らしき人影が映った。一瞬、表情を固くし、筆者に目で合図する彼。その少女が奥菜であることを、筆者が確認している暇に、彼はもう、あとを追っていた。

　その直後、バスがやってきたのを奥菜が見つけ、走り出す。彼もあわてて走り、バス停のところで追いついた。奥菜のすぐあとから乗り込むのを見届け、筆者もひと安

心（？）だ。

筆者は、徒歩でバスを追うことにしていた。彼女が乗るのはひと区間だけで、学校の最寄りのバス停まで歩いても五分とかからない。実際、彼女も最初は徒歩で、少し前までは自転車で通っていたらしい。バスに替えたのはもちろん、彼のような追っかけ対策である。

約束のバス停に着いたとき、彼の姿はなかった。おそらく、正門のあたりまでついていったのだろう。筆者も十代のアイドルを生で見るのは何年ぶりかで、「さすがは数少ない正統派だけあって、マジで可愛かったな」などと、心の中でつぶやいていると、何やらメモをとりながら、彼が歩いてきた。

シャンプーの甘い匂いが

「お互いにとって、喜ばしいことになりましたね」

例によって、平静さを装いながらも、さすがに興奮は隠せない。湧き上がってくる笑みを押し殺しながら、いっきに話し始める。

「見つけたときは、ドキッとしましたね。途中で走られて、ちょっとあわてたし。でも、ここで会ったが百年目。チャンスを逃すわけにはいきません。

車内は意外に空いていて、肌と肌を密着させるとまではいかなかったけど、そのかわり、奥菜の匂いを嗅ぐことができました。僕はちょうど真後ろにいたんです。そしたら、彼女の後ろ髪が濡れていて、そこからシャンプーの甘い匂いが……。今も、鮮明に再現できるし、完全に記録もしました。この達成感は、ゲームよりはるかに上ですね」

そして「さっきの彼女、完全に〝女子高生〟になってましたよね」と、満足げに語った。それこそ「暮らしの実感が味わえると、支配した気分になれる」ということなのだろう。

興に乗った彼は、駅に戻る道すがら、

「ここが、奥山佳恵の父親がやっている中華料理屋です」

などと、情報をサービス。さらに、

「さっき〝匂いを嗅いだ〟と言いましたけど、それよりも〝アイドルのいる空気を食べた〟という感じですね。異常接近遭遇によって、画面では味わえないものが味わえる。こういう体験は、三年前の秋、Ｍｅｌｏｄｙの田中有紀美を中野駅で捕捉したとき以来です」

と、わざわざ言い直した。

駅に着いたのは、八時五十分。

「僕はこれからバイト先に行くんですけど、何もなかったように出勤するわけですよ」

それがさも快感であるかのような笑みを残し、駅構内へと立ち去ったのだった。

堂々とした異常さ

彼を見送ったあと、自宅に戻る途中で立ち寄ったコンビニで、筆者は『投稿写真』を買った。おそらく、七、八年ぶりだろう。

中身を見て、少々驚いた。

目玉企画として、〝まる見え　奥菜恵をＣＡＴＣＨ!!〟という七ページの特集が組まれ、そのラストページに〝お宅訪問　オキメグ・朝のマラソンコース〟という記事が掲載されている。それはまさに、今朝、

自分たちがたどった道筋を紹介するもので、丁寧にも、自宅のポストやバス停の写真付きだ。

一週間前、彼が口にした「僕のこと、そんなにすごいと思ってくれますかね」という意味が少し分かる気がした。彼がやっていることは、数十万の部数を持つ雑誌が堂々と誌面にできるレベルの〝異常さ〟なのである。

雑誌全体を見ても、石丸の〝バレなきゃセーフ!!〟（そこには堀越がつきとめたSPEEDや奥菜、奥山のネタもしっかり提供されていた）をはじめ、〝宅八郎月報〟〝パパラッチB級ニュース〟といった記事が連載され、筆者が書いていた頃よりも、覗き趣味やストーカー志向が強まった印象を受ける。

思えば十五年前、生写真ブームをあて込んで創刊された『投稿写真』がさらに躍進したのは、アイドルをサブカルチャーとして捉えたからだった。前述した種々のミニコミ群から、中森をはじめとする書き手を集め、アイドルの多様な楽しみ方を提示したのだ。

筆者は、オーソドックスな楽しみ方を手がけ、石丸はユニークな楽しみ方を打ち出した。が、アイドルが低迷するにつれ、より過激な方向に転換していったのだろう。ウワサブームやストーカー現象をも取り込むことで、安定した部数を維持しているわ

けだ。
十数年、執筆を続けている知人に聞くと、
「そういう傾向が強まってきたのは、三年くらい前から。お宅訪問企画はたしか第三弾で、かなり好評らしいよ」
と言う。それはまさに、堀越日出夫がメディア参加した時期と符合する。彼のような人物の出現が、雑誌の方向性を微妙に変えたのだ。
では、彼は、これからどこに行こうとしているのだろう。

こうした刊行物が、アイドル“ゲット”の機会を確実なものにする

好きになるための手段

四日後、彼の自宅を訪れた。
「あれから何度も、奥菜の空気を反芻(はんすう)しましたよ」
と、にこやかに迎え入れられた部屋はほどほどに整理され、テーブルの上にアイドルの住所が打ち込まれているだろうワープロが置かれている。書棚には、芸能やプロレス関係の雑誌と書籍、住宅地図をはじめとする〝三種の神器〟、哲学書が並び、文学系ではなぜか三島由紀夫の文庫本だけが揃えられているのが目についた。
「この部屋を見た知り合いは、いろいろと不審に思うみたいですけど、何人かの友人以外には適当にごまかしています」
彼は笑いながら、執筆中の原稿を見せてくれた。折しも、冒頭に紹介した菅野美穂の実家来襲の場面――せっかくなので、少し引用してみよう。
《待てよ、今ここに菅野が住んでいないにせよ、以前は確かに住んでたわけで、とすると、このエレベーターに毎日乗っていたことになる。てことは、このボタンを、えーと365日×18年で6570回も押したのか！　ナント、単純計算で6570回も！　これはスゴすぎる!!　6570回ですよ、アナタ！　指紋クッキリ、ベットベトですよ！
人間、思考するよりも速く、行動することがある。
ブッチュー〜！
エレベーターのアップのボタンに、ボクが熱い口づけをするのに全く時間はかから

なかった。いやボタンにしたのではない。「カンノ」にしたのだ！　完全に！》

ひと目で石丸元章の影響が分かる、トリッキーな文章だ。が、筆者が興味を惹かれたのは、次の一節だった。菅野の弟の生活予定表に〝オナ〟という文字を発見した彼は〝姉をオナペットにして自慰にふけっているのでは〟と妄想を繰り広げる。

《一度でいいから、こんなオナニーしてみたいね。「アイドルであるカンノ」と「姉である美穂姉ちゃん」双方のイメージを有機的に結合させ絡み合わせつつ、内的歓喜を高め、そして絶頂へ……。至高のレシピじゃないか！　身内にアイドルがいないと、こんな芸当は不可能だ。あれっ？　オレ、カンノのこと、好きになってるぞ?!》

そう、彼が一般的な〝ストーカー〟と決定的に違っているのは〝好きになるための手段として相手を追いかけている〟ことなのだ。

〝お妃選び〟の感覚

しかも、最近は「別の目的が加わった」と言う。

「本になることが決まってから、そのためのネタ探しというかたちになってきたんです。〝アイドル〟ライターがいろいろいるなかで、普通のネタじゃつまらない。僕はこの手でいけば、イケるんじゃないかなと。

石丸さんに言われて、ペンネームも考えました。普通の名前じゃ方向性が出ないんで、こういうのにしたんです」

と、紙に書いて見せたのが〝堀越日出夫〟という筆名だった。堀越学園と日出女子学園という、アイドルがよく通う学校名を組み合わせるという発想――中森明菜をもじった〝中森明夫〟や、たこ八郎とおたくを掛けた〝宅八郎〟と同質である。

「将来、文章でメシを食っていきたいんですよね。テーマもあと二つ、温めているのがあります。一つはアイドルの〝学歴〟もので、もう一つは〝アイドルと結婚する方法〟。

アイドルと結婚したい、というのは半分本気ですよ。どうせできやしねえだろうなっていう冗談も半分ですけど、アイドルの私生活を覗いているのも、自分としては〝お妃選び〟をしているんだという感覚なんです」

半分本気で半分冗談――これはまさに、彼のスタンスを言い表わしている。

彼はまた『特冊新鮮組』という雑誌に自分が紹介された記事も見せてくれた。そこには石丸もコメントを寄せており、彼について、

「ストーカー行為の中にゲームの裏技を見つけるような面白さを感じているんだろうな」

と分析したうえで、カメラ小僧や追っかけ、社会性が欠如した〝おたく以下の人々〟のいずれにも属さない「新種のパターン」だと評している。

筆者も、同感だった。立場上、数多くの危ないアイドルファンを見てきたが、彼はかなり異質だ。それは〝老成〟という言葉で形容したいほど、醒めていることである。

「おニャン子」の落としダネ

「確かにミーハーな中にもどこか退いて見ているところはありますね。コンサートや

ファンの集いにも行かないし、もっぱらCDを聴いて楽しんでいます。
こういう傾向は、昔からなんですよ。子どもの頃から、部屋にこもって一人で遊ぶのが好きで、本やゲーム、そしてアイドルにハマったんです。それでいて、友達と付き合えないわけじゃなくて、イジメられたことも、イジメたこともない。クラスでは学級委員長ではなく、副委員長におさまるタイプでした。女のコとも普通に話せますよ」
そんな彼は思春期に、あるブームを体験する。
「おニャン子直撃の世代なんですよ。中学の三年間、ピタリと重なってます。アイドルと結婚できないかなと思うようになったのも、秋元康が高井麻巳子と結婚したからなんですね。こんないいことがあるのか、と」
おニャン子クラブは、アイドル性以上に、教室というコンセプトや、アイドル業界の舞台裏を見せるという手口で成功したプロジェクトだ。それはメディアの中のアイドルと、その外にいるファンとの距離をいっきに縮め、両者に存在していたはずの壁を取り払った。いや、おニャン子のみならず、この時期は個人とメディアとの関わりを根本から変化させる事象が相次いだ。
写真週刊誌の創刊、『ときめきメモリアル』に代表されるシミュレーションゲームのヒット――こうした風潮に、彼が影響を受けたことは想像に難くない。
同時に、あらゆるモノが横並びに商品化される狂乱の時代が訪れた。アイドルとて例外ではなく、消費システムに組み込まれ、没個性化し、偶像性を失っていく。そんな中で、彼は独自の楽しみ方を見つけたのだ。複雑に発達した情報化社会は、塩酸をぶっかけたり、事務所に手紙を送りつけなくても得られる、こうした快楽を可能にしたのである。それは、エアマックスのデッドストックを血眼になって探し回るマニアの快楽にも似ているが、対象が生身の人間であるだけに、ややこしい。
「本当はもっと圧倒的な魅力を持ったアイドルに出てきてほしいんですけどね。向こうが提供してくれないなら、こっちで楽しみ方を作っていくしかないという思いが、無意識のうちにあったのかもしれません。
それを発表することで、自分がライトを浴びたいというのもありますね。半分以上、そうかもしれない。まあ、こんな人間が著名になっちゃいけませんがね、へへッ」

イビツな幻影、その未来

その言葉を聞きながら、彼がストーキングをする意味について考えてみた。
『隣のサイコさん』、そして今回と、数多くの危ない人たちを見てきた編集のI氏は、
「ストーカーをやる人に共通しているのは、親に依存するように他人に依存してしまうことだ」
と言う。だとすれば、彼は明らかに違う。彼はむしろ、自分を頂点とした世界を構築し、アイドルたちを支配しようとするのだ。
象徴的なのは、I氏が最初、挨拶がわりに「別にガイキチ扱いするつもりはありませんから」と言ったことに対し、
「いや、そうしてもらっても構いませんよ」
と、彼がこともなげに答えたことだ。死

体や性倒錯を扱う鬼畜系カルチャーが一部で認められつつある今、社会性を失わない限り、これくらいは大丈夫という確信があるのだろう。奥菜とバスに同乗した朝、「何もなかったように出勤するんです」と笑った姿が思い出された。

　しかも、彼はむしろ、その異常性を演出することで、特異なキャラクターを確立し、メディアの世界に居場所を獲得しようとしている。

　筆者はここで、アイドルというものの奇妙さに思いを馳せずにはいられなかった。〝少女〟というものをパッケージ化して大量に売りさばく——こうした文化は、この国以外ではあまり見当たらない（日本化してきたアジア諸国に伝染しつつあるようだが）。

　その背景には、精神的にも肉体的にも、成熟しないでやっていける戦後日本の風土が関わっているのだろう。若者の歪んだエロスのはけ口として、アイドルが必要なのだ。

　思えば『投稿写真』ほど、その奇妙さを体現しているメディアは他にない。それは夢やら郷愁やらの小奇麗な言葉でカムフラージュされてきた、アイドルのエロス的実体を露（あらわ）にし、かつその楽しみ方まで指南してみせる。アイドルブームが下火になった八〇年代後半、この雑誌がむしろ部数を増加させた理由はそこにあったのだろう。

　アイドルの夢や郷愁の部分にこだわりたかった筆者は、途中で離脱したが、状況はさらにエスカレートして、堀越のような〝新種〟を生んだ。「中森明夫さんはちょっと住む世界が違う気がする。むしろ宅八郎の根性を見習いたい」と語る彼は、つまり、八〇年代のサブカル的空気に飽き足らず、九〇年代の鬼畜系カルチャーの中で、自分なりの快楽を見出したのだ。

　八〇年代半ば、中森が〝新人類〟として世に出たあと、石丸や宅は〝新新人類〟の名で売り出された。とすれば、堀越は〝新新新人類〟ということになる。〝人類〟はついに「ゴミ漁り」へと進化する、のか。

　おそらく、アイドルがエロスに従順な商品に成り下がった今、独自の妄想を得ようとすれば、なんらかのかたちで飛躍するしかない。洗濯物や使い古したノート、シャンプーの匂いといった日常的断片を集積することで、彼は自分だけの〝アイドル〟を構築する。あたかも〝アイコラ〟マニアが、勝手にアイドルのヌードをコラージュするように。

　ただ、彼が特異なのは、その快楽が情報によって成立していることだ。独自に入手したアイドルの住所や日常的アイテムを、自己の管理下におくことで支配欲を満足させる。その過程で生じるスリルや罪悪感（これらが彼のエロスに具体的な形を与える）をも含めた〝自分だけが知ってる〟という密かな優越感によって、自我を確認しようとしているのだろう。

　堀越は言う。

「アイドルの自宅をつきとめ、その日常的な空気に触れているとき、僕は〝生きている〟という実感を得ることができるんです。もし自分がストーキングされたら……？　それは最もイヤなことですね（笑）」

　確かなのは、アイドルというイビツな幻影が存在する限り、彼のような〝新種〟は増殖の一途を辿るだろうということである。

　それは、情報化社会の性（さが）なのかもしれない。

高度情報化社会と疑心暗鬼

ストーカーの勝手でしょ！

高度な情報化社会は、自分が世界の中心にいるという認識を肥大させる傾向がある……
それは幼児性を助長させるものである……だとすれば、
日本人の誰もがストーカーになりうる素因を有していることになる。

遠山高史（精神科医）

「烏（からす）なぜ泣くの？　烏の勝手でしょう」

この「七つの子」という童謡の替え歌の登場は、日本の市民社会が大きく変質しつつあることを暗示するものであったように思う。すなわち、執着気質型社会から分裂気質型社会への変化である。

この替え歌が出る八〇年代前半あたりまでは、日本は「甘えの社会」と言われ、曖昧な取り決めでも大きな支障を生じることなく社会秩序が保たれていた。甘えの社会とは、相互に依存しあう関係によって成り立ち、かつ機能し、そこでは依存しあうがゆえに相手を裏切ることが抑制される。なるべく相手の意を汲む努力をしながら調整が図られる。もしそうでなければ、村社会的集団から排除されることになるからである。

このような村社会的集団依存関係を利用して組織を形成したのが、終身雇用制の日本企業であろう。定年まで会社に依存できるという条件の見返りとして、全身全霊を企業に傾注させ奉仕させてきたのである。この集団依存関係は構成員になかなかの安心感を与え、日本の高度経済成長を発展させてきたと考えられよう。

このような社会構造を支えたのは、小さいときから群れて生きることを運命づけられた人々である。いわゆる団塊の世代に代表されるような子沢山の中で成長した人々である。彼らはその中で生き残るために、多少なりとも執着気質型人格に変わる。あまり対人関係に過敏とならず、勤勉な努力家であろうとし、自己を殺し、集団のイデーを重んじることで、集団の中の上部構造へ昇ろうとするような性格を言う。彼らは原則的に定住を好み、それを保障するに不

photo▶小島義秀

可欠な調和や博愛の信奉者である。しかし、直観的な感受性にはやや劣り、集団の持つ保護機能に頼り、危機意識には疎くなる。

だから、執着気質型の大人たちにとって、「勝手でしょう」という替え歌にはさしたる共感はなかったにちがいない。しかし、子どもらは、この歌に強く共感したにちがいない。彼らは、大人たちとはまったく異なる環境の中で成育してきたからである。

▼分裂気質化する日本

トノサマバッタは、食料の不足しやすい環境でたくさんの仲間と育つと、茶色になる。茶色のバッタは胸の筋力が強く、飛翔力に富む。しかも、集団で移動してゆく傾向がある。逆に、比較的食物が豊富なところで孤立して育つと、大型で緑色のバッタとなる。外見は優美だが、飛翔力は茶色のバッタに劣り、集団的行動はとらない。まったく同じ種でも育ちと環境が異なると、まるで別の種のようになることを示しているが、人間ももちろん、この例外とはならないのである。

「七つの子」の替え歌に共感した子どもらは、学校という集団生活にまだかなり縛られていたが、自分たちの部屋を持ち、他の兄弟をある程度無視しうる経済的余裕下にあり、何よりも彼らの親たちと異なり、自ら餌を捜し歩く必要がなかった。だから、子どもらは茶色のバッタとはならず、緑色を帯びだしていたであろう。

当然、子どもらは集団より個を重んじ、他者と距離をおく生活を好み、集団的ストレスを受けなかったため、鋭い感受性も擦り減ることが少なく、また、枠にはまらない自由な発想もできるだろう。ただ、粘りにはやや欠け、臆病であり、厳しい状況を闘って克服するよりも避けてかわす傾向がある。特に他者からの干渉には過敏である。

たとえば、誰かの問いかけに、少し尊大かつそっけない態度で「勝手でしょう」と言ったりすることのある人はあんがい、対人関係における過敏さを押し隠していることがあるものである。

このような過敏さがあり、他者と距離をおく心理的傾向を持つ人を分裂気質型人格と言う。分裂病を発症しているわけではな

いが、分裂病者の心理構造に似ていることからこう呼ばれているのである。彼らは敏感で直観的認知力に優れ、目前の現実より予兆や徴候の変化を重視し、周囲に対しては警戒的である。流動的で危険の多い自然の中では、この特性は有効に働くことが多く、多くの動物は分裂気質的行動様式をとるから、このタイプには生物的普遍性があると考えられる。

すると、執着気質の親たちが苦労して作りあげた、安全で豊かな環境に育った子どもらが、流動的で危機的な状況に合う分裂気質に変化してゆくとしたら、その理由はどうしてであろうか。おそらく、なんらかの警告が発せられているのであろう。

警告は外部環境からではないとしたら、内部からであろう。子どもらの精神や身体という内なる自然が、むしろ解体の予感をはらんでいるからではなかろうか。そういった予感が起こる理由はさまざまあるだろうが、動物の飼育においても、あまりに定常的な環境で充分な食物を与えすぎると、逆に動物が病気がちになり、寿命を縮めることがあることと、無関係ではなさそうである。

▼死角だらけの都市文明

今日の文明情況は、分裂気質的傾向の人々にとってそれほど暮らし易い場とはなっていない。都市は村社会のような集団的な人間関係が希薄であり、一応、分裂気質の人々が好む、干渉の少ない離散的環境である。身近な居住地周辺の情報を無視して、メディアからの遠隔的情報に頼るだけの生活も可能である。

だが、人間の数は多く、実態は相当に過密な環境であり、その中である程度の離散的環境を実現するためにかなり細かいルールが作られていて、わずらわしい。しかも個人情報が、離れたところの人間にも容易に知り得るところとなっている。都市はエネルギーのすべてを外部に頼らざるを得ないし、都市で生きる限り、生存のためのエネルギーを他者を介して調達せざるを得ない。それゆえ、完全に他の干渉を排し、自己の痕跡を消し去ることはできない。これは充分な安全を得るまでには至らないことを意味する。

危険に対し、集団での対処がしにくい離散的環境では、動物は常に警戒しつつ、移動することで危険を回避する。

しかし、人間の作った都市は、かなりの安全を実現しているが、移動を繰り返しにくく、狙われたときには決して万全とは言い得ない。豊かさというものはプラスの面だけでなく、しばしば大きな危険をももたらすことが、少しずつ明らかになってきたのである。

特にアメリカのような、村社会的な集団生活がなく、孤立して生きることの多いところで、しかも銃の所持が日常的である場では、狙われることはきわめて危険である。だから、危機意識が発達しやすく、些細な遠くの出来事にも過敏に反応する傾向が助長され、アメリカ人は基本的には分裂気質的であると考えられる。追跡したり、つきまとってくる人間をストーカーという概念で取り出したのはアメリカだが、それは他者との距離感に過敏な彼らの分裂気質によるところが大きいであろう。

▼精神科医のストーカー体験

ストーカーは、一方的につきまとい、相手の迷惑も顧みない人のことを言うことになっている。しかし、具体的なストーカーの像を捉えようとすると、なかなか明快とならない。

たとえば、男が言い寄ってくることを望んでいる女性もいるし、それを嫌う女性もいる。一人の女性においても、ある男はいいが別の男は嫌だという好みの問題ともなる。ストーカーであるか否かは、受ける側が決めることになる。つまり、ストーキングであるか否かは、関係の中でしか語り得ないことなのである。ただ、その関係のあり方が大人同士の助け合いや信頼のかたちをとらず、一方的な依存を相手に受け入れさせようとする形態をとるところに特徴がある。

私も何回か、ストーカーと言うべき人物につきまとわれたことがある。まだ、私が若い駆け出しの医者であった頃の話である。教育者の息子でなかなか優秀な営業マンであったが挫折し、地方に流れてきた男に、一万円ほど貸したことがあった。以後、その男はしつこく私に一万円か二万円程度を借りようとしてきた。断ると、そのたびに病院の外来で駄々っ子のように騒ぎたてた。

あるいは、一日に何度も電話をしてくる人物に、数年間悩まされたことがある。電話に出て一応話を聞かないと、ますます頻回に電話をし、回線を埋めてしまい、他の電話がつながらなくなってしまうのである。

また、別の女性は、私を恋人であると決めつけ、私の住まいまで捜し当て、玄関で騒いだため（当時、私は独身であった）、大家から誤解を受けるはめになったこともある。

このような人物に共通するものは、私に一方的にサービスを求めてくる強い依存欲求であった。ただ、そのきっかけとなったのは、確かに私が彼らの依存を一度、安易に受け入れたことにあった（一万円貸してしまった。電話で丁寧に相談に乗った。好きと言われて、つい顔を赤くしてしまったらしい）。以後、つきまとわれたのであるから、こちらにまったく責任なしとはでき

ない。
　ただ、私を当惑させたのは、あまり有効な撃退方法をすぐには思いつけなかったことである。こちらが根拠なく困らされているのに、容易には追い払えないということ、しかも、他の人間にはほとんど関係がなく、私一人が対処しなくてはならないことに驚いたのであった。

▼暴走する依存欲求

　本来、定住しながら危険を回避するためには、集団で防衛するしかない。しかし、個人主義の高まりや、互いに干渉し合わない風潮は、定住しながら、しかも互いに協力し合わない文化を生みつつある。それでも今までのところ、日本では大きな問題とはなっていなかった。
　しかし、ストーカーは都市の無関心を利用しながら潜伏し、しかも相手の位置（電話番号でもよく、職場でもよいが）がめったに変化しないことにつけ込んで、攻めてくるのである。
　人間は安全を求めて文明を起こし、ルールを決め、ルールに従った予測可能な行動を人々にとらせるため、都市を作った。日本はスラムすらも消滅させ、奇跡的と言えるほどの安全な都市を作った。女性が夜間歩いて帰宅できる都市は、今日でも世界にそれほどたくさんはない。しかし、ストーカーはそういった安全神話に水をさしたのである。スラムのような貧しさがもたらす暴力でもなく、はっきりとした恨みがあるわけでもなく、物盗りでもない。
　小奇麗でよく整った、そこそこの住宅街を背景に、父や母にしか認めてもらえぬ一方的依存欲求という不可思議な願望に駆られ、行動を起こし、人につきまとう。
　以前、アメリカに行ったとき、アメリカ人が初対面の人間に木で鼻をくくったような態度をとることに、相当当惑したことがあった。親しげな表情をしたおかげで、見知らぬ相手と不愉快な関係が生じることを恐れてのことであるとは、最近認識することができた。アメリカ人は電話をしても、相手が誰か分かるまではハローとしか言わない。それほど、マークされることを恐れているのだ。
　マークされることを恐れるのは、精神分裂病者にきわめて普通に認められることである。分裂病者の示すさまざまな奇妙な行動やクールな対応も、自分の存在を可能な限り韜晦し、目立たなくさせようとする努力の結果であることは、精神病理学の常識である。目立てば追跡されるかもしれないのである。
　アメリカ人は、一方で非常な派手さを求める人々であるが、セキュリティには過敏であり、日常は目立たぬように行動し、自分についての情報の流出には用心深い。このような分裂気質的文化状況では、「烏の勝手でしょう」は当然の文言であるが、それは単に干渉を排除するだけではなく、安全のための防衛的な含みを有しているのである。

▼無意識からの警告

　アメリカ社会は、日本より自由だが厳しさがあり、家族が崩壊し、幼児期にさまざまの外傷体験をこうむる子どもが少なくない。アメリカの病理はそのようなところか

ら由来し、それを背景に暴力的になりやすい人格が生じやすく、ストーカーの問題もその文脈で語られている。

しかし、日本にはアメリカと同様の社会病理があるとは言えない。むしろ、日本の子どもらは、はるかに手厚い保護を受けてきたとさえ言えるのである。だから、ストーカーの問題が日本で取り沙汰されていることについて、もう少し考察がいるだろう。

日本で出ているストーカーに関する本を読むと、ストーカーになりやすいタイプとして必ず、境界型人格障害、あるいは精神病質者、あるいはそれと同様の意味をもつ言葉が出てくる。そのような人々とは、要するに精神的に何らかの病理性があると考えられるが、それをきちんと定義したり評価することが困難なため、精神病の中には入れられず、また、正常であると言い切ることもできない人々を指す。

言い換えれば、大多数の人々の直観的認知において、病気っぽく変な人だと感じるが、うまく定義できない存在ということになる。このような人々を病気とするか性格とするかといった論争も続けられているが、いずれにせよ、存在していることは確かであり、しかも増えているという認識だけは概ね一致している。

存在しているのに定義できないのは、定義の方に欠陥があるのだろうが、そういった人々のもつ病理性が、普遍的に日本人の誰もの心理の中に多少なりとも潜んでいて、自分と重なるところが大きいため、区別したり排除したりすることが不能となっているせいでもあろう。

とするならば、最近の日本人の精神に病理的要素がかつてより大きな部分を占めるようになっていると考えられるだろう。おそらく、その病理的要素とは、意識が排除した無意識的なるものから成り立っていると考えられる。すなわち、無意識的なものが、意識の中に侵入しやすくなっているのである。侵入し、ついに意識を解体せしめれば病気であるが、侵入が部分的にとどまっている人々も多くなっているのである。それは、簡単に言えば、日本人の精神の構造が弱くなっているということでもある。内なる解体の危機が増しているのである。

豊かで他の兄弟や同年代の子どもとの軋

轢が少ない環境は、やはり過保護となりやすいのである。人間の精神において、意識と無意識を分離するためには、ある程度の厳しい環境が必要である。しかし、過保護な環境はその分離を甘くし、また強い依存的性格を作る。ただ、その依存は、執着気質型人間たちの形成する集団的な相互依存とは異なるものである。小さな子どもが父母に対し依存するような、未熟な一方的依存である。

▼幼児性に傾くわけ

多くの識者は、ストーカーとは、意識的なこと(理性的なこと)と無意識的なこととの区別がつきにくく、幼児的な依存欲求をもつ人々であると説明する。そして、欲求が満たされなくなるような厳しい局面で、つまり、親などへの依存が困難となりだしたとき、安易に別の対象にそれを求めてくるのである。一人自立していく力はなく、幼い子どもが親に対して物をねだるときのような、単純な執拗さで迫る。そもそも自分が世の中の中心にあるわけではないという理性的判断にも乏しい。そしてメディアから伝わるバーチャルではあるが、圧倒的な迫力をもった有名人の情報をリアルと感じてしまい、あたかも友人知人であるかのような錯覚にも陥りやすい。実際、高度な情報化社会は誰にも、自分が世界の中心にいるという認識を肥大させる傾向があるのである。

それは幼児性を助長させるものであることに他ならない。心の底に幼児性をもったまま成長し、都市という人工空間に住み、生身の人間同士のダイナミックな交流の経験が希薄なうえに、バーチャルな情報に囲まれて暮らす日本人は、いつのまにか幼児的で自己中心的な心理に傾きやすくなる。しかも、もともとは厳しい状況を克服するために無意識から立ちあげられた意識(物事をはっきり見分ける心の働き)は、過剰な豊かさの中で構造的に甘くなっている。意識が無意識の中に潜む欲求や衝動を制御する力が弱くなっている。

かつて、厳しい飢えを執着気質的努力で克服してきた日本人は、まだアメリカ人のようなはっきりした分裂気質への変換は達成していない。むしろ、境界型人格障害のような曖昧で依存的な心理状態にとどまったままでいるのではなかろうか。だとすれば、日本人の誰もがストーカーになりうる素因を有していることになる。

PART 2
世紀末スラム空間を行く!

新宿「ロフトプラスワン」
〝解放〟治療居酒屋のアブナイ面々

医者にも、カウンセラーにも満足できない、あなた！
〝狂った〟と思ったらここに行け！
今、ニッポンで、いちばん懐の深い空間のディープな人間絵巻！

今一生（フリーライター）

九六年十一月二十一日夜、僕はある居酒屋の入口の前の廊下で、猫背の小男に首を絞め上げられていた。

店にある楽屋で、電波系鬼畜ライターの村崎百郎氏から「オレとオマエが一緒にいると何かよくないことが起こりそうだから、近づきたくないんだ」と忠告された、わずか二十分後のことである。

ロフトプラスワンの出入口附近

その日の同店では、『愛欲ナイト／ケダモノと鬼畜が語る濃密なエロ話』というトークイベントが行なわれていた。出演者は村崎氏のほかに、漫画家の森園みるく先生、伊藤結花理先生、性感マッサージ師で作家の南智子氏という顔ぶれ。

僕は自分が主催するイベントに出演をお願いしていた森園先生に挨拶するため、先生がステージから帰ってくるのを出番待ちの南氏と歓談しながら楽屋で待っていたのだが、そこに見知らぬ小男がふらっと入ってきて、立ったままこっちを凝視し始めた。

謝ること、あんだろ、オレに!!

最初は「イヤに視線がこっちに来ているな」と気味悪く思っていたが、彼に一瞬目をやった僕は、明らかに憎悪の眼で僕だけを睨みつけている彼に気づき、にわかにからだが震えてきた。

僕はそれを悟られないように、素知らぬフリをして南氏と歓談を続けていたが、ステージからの要請で、ビデオテープを届けに楽屋を出なければならなくなった。

「イマ、イッショウさん、ですか?」

テープを届け、楽屋に帰ろうとした僕の背に、小男が声をかけた。

「いえ、コン・イッショウと読むんです」

「いいから、ちょっとこっち来いよ!」

小男はものすごい力で強引に僕の胸ぐらをつかむと、出入口のドアを蹴って廊下に引きずり出し、外に連れ出そうとした。

「ちょっと待って! 話ならココでしょうよ。いったい何! あなたは誰なんです!」

揉み合いになりながら抵抗すると、小男は無言のまま、浮わついた腰で僕の首を両手で鷲づかみにして本気で絞め上げた。

「謝ること、あんだろ、オレに!!」

この後、押し問答になったが、彼は「女が……」と言ったきり、具体的に問いつめるわけでもなく、僕は苦しくて声が上げられないまま、なんとか落とされまいと意識を保つのが精一杯だった。

その間、おぼろげに目に入ってきたのは、廊下の壁に何十種も貼られているマイナーな芝居やイベントのチラシ群——アナルコ・ソサエティ……ああ、今さら自殺ネタ

の芝居をやるダメ劇団……絶対メジャーになる日の来ないダメアートばっかだな、このチラシの山は――などと現実逃避していると、ほどなく店のスタッフが現場に遭遇し、小男は彼に羽交い締めにされた。

だが、小男は収まらない。楽屋に逃げ込んだ僕を追ってくると、「今度会ったら、ぶっ殺してやる！」と絶叫した。事態を呑み込んだ南氏が、小男に驚くほど落ち着いた優しい声で諭すと、途端に脱力し、店員によって外に連れ出されたのだった。

「私も、勤めてる店の客に、プラットホームからつき飛ばされそうになったりしたし、友達の風俗嬢には郵便受けに爆弾を仕掛けられたコもいたから」

わなわなと小刻みに震えたままの僕の手に手を当てながら、南氏がそう言った。

僕はその後すぐタクシーに乗って家まで帰ったが、床についても、かつて韓国で試した非合法薬によるバッドトリップ以上に支離滅裂な電波系の夢にうなされて熟睡できず、翌朝目覚めたときも、どよ～んと全身が重たかった。

子どもの頃から、「復讐したら相手を殺しかねない」自分が不安で、いじめにも報復できずに逃げてばかりだった僕は、二十代後半の頃に芦原空手の門弟となり、白帯の大学生から「相手を身障者にしてやるつもりで、最初から手でも足でも一点狙って壊せ」と聞いて妙にホッとし、空手を覚えるうちにやっと攻撃性をセルフコントロールして発揮できるようになった。

そんなことを考えて空手をやってきた自分もどうかしているが、意味不明の攻撃を仕掛けてくるサイコ野郎が相手では、攻撃性の発揮も鈍る（次は壊したるわ）。

事実、この小男は、その後、傷害事件まで起こした真正のキチガイだったのだ。

九七年一月二十三日、小男は新宿の喫茶店にいたSM雑誌の女性編集者と編集長をナイフでメッタ刺しにして入院させた。当日の夕方には、TVでその事件のことが報道されたそうだ。刺された女性は、実は以前、僕と問題の店で一度名刺交換をしたことがあった。そう言えば、小男が店員に強制退去させられる際、偶然その店にいた彼女が、小男の背を押して、外に連れ出す手伝いをしていたのを見かけたような気がする。

彼女があるムックにこの一部始終を書いた記事によると、小男は自称プロデューサーで、彼女と出会った翌日から電話を毎日かけてきてはしつこくSEXを迫り、相手にしないと「てめえぶっ殺してやる」と何度も怒鳴りちらすサイコ野郎だったのだそうだ。

こんな有言実行型サイコさんが出入りする店の名は「LOFT/PLUS ONE」（略称LPO）。九五年七月のオープン以来、毎日違ったテーマでその日の「一日店長」が語るのを楽しむ、異例のトークライブハウス居酒屋だ。

“逆サンクチュアリ”と呼ばれる空間

そもそも、この店で起きた暴力沙汰を取り上げたら、キリがない。

酔客どうしのケンカはもちろん、イデオロギーの対立から特定の個人に集団暴行を働く輩。殴り合いまではいかなくとも、トークライブのゲストに事前に襲撃宣言をし、出演を見合わせるように脅迫した愉快犯や、

ゲストに「宇宙人」がノミネートされた『スペースバトル』の模様

出演者をめぐる根拠不明な悪い噂を流布させるために怪文書を撒き散らす者。パック買いした卵を出演者に投げつけた自称「鬼畜」グループまでいた。すでに「襲撃を許さないロフトプラスワン常連客有志」というグループも誕生しているくらいだ。

　要するに、本当に困った人たちが日々うごめいているところで、通い始めて二年が経った僕も、正直言えば、首を絞められた瞬間に「いよいよ自分の番か」と思ったものだ。開店当初からよく通っていたが、最近では足が遠のいているという二十代後半のある女性は、「チャネラーの間では、空気が邪気で澱んでいる〝逆サンクチュアリ〟として有名。よく近寄れるねって言われた」とか。

　しかし、そうしたニューエイジ系のトークイベントも相変わらずの人気で、一見（いちげん）の客がふらりと入ってこようものなら、サイコな空気の毒気にあてられるはずだ。

　政治色の強いイベントにしろ、鬼畜系の悪趣味ビデオを店内モニターに映しながらのイベントにしろ、「一日店長」はもちろん、常連客も本気になってステージトークに向き合っているから、怖がる人がいても無理はない。常識にしか慣れ親しんでいない人なら、電波系のイベントに足を踏み入れた途端、「どうかしている人たちの中に入ってしまった」という違和感を覚えること必至である。

　たとえば、『スペースバトル』と題されたイベントがあった。司会はお笑い芸人の正狩炎氏。ゲストは「毎晩宇宙人から電波を受ける女性」「宇宙人（本物）」と、店が客に配っている月間スケジュール表には印刷されていた。

　当日覗いてみると、電波を受けているという女性は、黒のワンピースに身を包んだ三十代半ばのオミズ風。アイリーン・レークスのペンネーム（!?）で『未来人アリオンのユートピア』という著書をたま出版から出している。

　さしたる宣伝もせず、集まった客はおよそ三十名。真顔で電波系の話を語る人間に正狩氏がいちいち生真面目にツッコミを入れるところを面白がる企画と思っていたのだが、客たちはくすりとも笑わず、ステージを見上げてアイリーンの答えに神妙な顔つきで聞き入っているではないか！

　この日、「宇宙人（本物）」も来るはずだったが、前夜に胆石のため緊急入院したとかで、代わりにその宇宙人を収めたビデオが、店内モニターに映し出された。ビデオによれば、その宇宙人は「マイマイ・マルガリータ」と名乗る、自称「プリプリ星人」。ビデオは、来年の一月にAVメーカーのKUKIから『衝撃宇宙人解剖』とい

うタイトルで発売される予定のものだという。

要するに、AV女優ということらしいが、ビデオの中のピンクのウィッグをつけたプリプリ星人は、どう見ても〝不思議少女〟崩れといった感じの、トロそうな顔をした若い日本人の女だった。

後にそのビデオのプロデューサーに話を聞いたら、「車でロケ先に来たのに、〝これはUFO！〟と言い張る。二十一歳でアル中のAV女優だよ。あんな性格だから、どこのAVメーカーも使ってくれなかったみたい。かわいそうなコなんだ」と教えてくれた。

ダメ人間どうしのナマナマしい出会い

僕は、プリプリ星人をかわいそうだとは思わなかったが、笑うこともできなかった。LPOにやってくる人間たちは、一日店長だろうが、客だろうが、彼女とシンクロする部分を、その心のどこかに持ち合わせていると感じているからだ。

げんに僕自身、LPOでイベントを十五回も主催してきた。力不足で書きたい原稿も満足に雑誌に発表できなかった僕にとって、言いたいことを存分に、しかも不安材料を抱えることなくプレゼンテーションできたことは、不意に襲ってくる自殺衝動に歯止めをかけるいいチャンスになっていたのだ。Q^2、テレクラ依存と売れないライター生活で作った借金の累積が三百万円。ハコ代を取られるどころか、むしろ出演ギャラをくれるという条件の場所はここしかなかった。

童貞・処女をゲストに呼び集め、初体験の相手を客の中から選んだり、〝SM版イエスの方舟〟と呼んでいる素人参加型SMサークル「くるくる」を招いて客席の女のコたちにSMを初体験させたこともあった。〝三日セックスできないと、死にたくなる〟というセックス依存症の主婦（46）の千人めのエッチ相手を客たちから立候補させ、決めたりもした。

僕は、自分のイベントを通じて、ダメな僕とダメなゲストとダメな客とのナマナマしい出会いを組織してきたのだ。話す人、聞く人という「役割（立場）を前提とした関係」ではなく、ダメな部分を自認し合った人間どうしとして向かい合えるチャンスの提供こそが、LPOにはふさわしいと思ったからだった。

「お客さん有名人」の症例群

実際、ここにはダメ人間たちが、街灯に呼び寄せられる蛾のように、ふわーっと集まってくる。つねに満席状態の集客が見込める大人気のイベントは、鬼畜系、『裏モノの本』関係、作家の唐沢俊一氏、岡田斗司夫氏らが関わるオタク関係、ルポライターの藤井良樹氏率いる独立夜間学校「ライターズ・デン」など。

神軍平等兵を自称し、天皇陛下にパチンコ玉を撃ったことで有名な奥崎謙三氏の出所記念イベントでは、ビッグネームのサイコさん登場を待ち望んでいた客たちが殺到——初めて徹夜組も現れたという。

だが一方で、無職者どうしがトークし合う「だめ連」や、童貞やセックスレス、非婚などの男たちの問題を考える「メンズリブ東京」のイベントなども、彼らの活動が

地味でありながら席は埋まってしまうし、まったくの無名で、僕の「弟子ライター」を自称する工藤ゆうえんちが「クズの言い分」と題して集客してみたら、補助席まで必要になるほどの人気ぶりだった。
　ライブチャージがなく、ドリンク単品だけで入場できる居酒屋スタイルが、お金に余裕のないダメ人間を来店しやすくしているのは確かだろう。おかげで店のほうは、

これが「プリプリ星人」だ！

食い逃げされたり、居酒屋なのに一晩のビールの注文本数が一人あたり二本未満、なんてこともあるらしく、経営は大変なんだそうだ。
　しかし、そんなことはLPOを語るうえで大したことではない（経営者は大変でしょうが）。LPOが、ダメをこじらせて、気がつけば住所不定、無職、ヒモ、挙動不審、神経科通い……になっているプチ・サイコさん、サイコさん予備軍の溜まり場になっていることに注目すべきだろう。
　たとえば、エロ系や鬼畜系など、人騒がせなイベントのときになると必ず来る常連の「お客さん有名人」（略して「客有」）たちのことが、店のスタッフや一日店長の間で話題になる。一日店長が話す内容よりも、彼らが今夜何をしでかすかが、LPO通の注目の的でもあるのだ。
「お客さん有名人」の一人、黒眼鏡&白マスクの若いデブ男は、ステージで女王様に奴隷志願者を呼びかけられ、進んでムチで打たれたり、『人格改造マニュアル』の著者・鶴見済氏の呼びかけでリスロンS（睡眠薬／ブロム）とエスタロンモカ（覚醒系／カフェイン）を飲んで、「いつもクスリ飲んでますから」と言いながら、なんでもないように振る舞っていたが、まったく効果ナシとは恐れ入る。

LPOは社会復帰の足場か？

　こんな「客有」もいる。チックでまばたきが止まらない紺のスーツ&眼鏡の男は、神経科に通い、デパス（抗うつ剤）とドグマチール（精神賦活剤）を処方されている。彼は「先生から病名は聞かされていない」と言っていたが、後者は「抗うつ剤が効かない場合に医者から出される精神分裂病薬」であると、通院経験十三年の鶴見氏が書いた『人格改造～』にはあった。
　このチックまばたき男には奇行も多い。ある晩、新宿西口で救急車を呼び、「睡眠不足で酒を飲んだら酔っ払った」と自己申告したため、新宿病院のベッドに運ばれた。
　医者が保護者の連絡先を求めた。すると男は、「一回しか会っていない」LPOの店員の名刺を医者に見せたという。病院から連絡を受けたLPOでは、「心当たりな

し」と答えた……当然のことだ。
この一件は『みのもんたのヨッパライ爆笑ウォッチング！』（フジテレビ系）というTV番組に撮影取材されたが、彼は「酔っぱらうといつも病院をホテル代わりに使う常習犯」として紹介されていた。
あるとき、LPOで会った彼から、いつもケースに入れて持ち歩いているという出刃包丁を見せられた。「調理師学校に通い始めた」かららしいが、彼は別に小さなナイフも取り出した。
「御守り代わりみたいなもんで。コレを、首にあてて切ろうとしたんですけど、切れなくて。剃刀負け以下だったんですよ」
彼によると、LPOに来るのは「店員や客と話ができてホッとするから」だが、一度彼と名刺交換をしようものなら、時間に関係なく電話をかけて寄こす。人なつっこく一方的な話を始めて、延々と終わらない。
こうしたトーク・ジャンキー（会話依存症）はLPOに出入りする人間のなかでは珍しくないが、常連になるうちに、会話の間合いや疎外されない話術、礼儀などを少しずつ学習していく人もいる。

その他にも「薬はなんの癒しにもならない」と言って自殺予定日を宣言している女子大生、一般人にはどうでもいいような質問を一日店長に浴びせかけるオタク風のデブ男など、さまざまなダメ人間たちがいる。
ついでに書くなら、『別冊２８１号　隣のサイコさん』（小社刊）で僕がレポートした三人の自殺未遂男たちも、LPOの「客有」だったことがある。
抑うつ神経症で閉鎖病棟に一カ月入院した経験のある通称「かなぶん」は、自己啓発セミナー、催眠療法、宗教にも救われなかったが、東京で一人暮らしを始めた後、バイト生活の傍らLPOによく出入りしていた。最近では「AV男優になりたい車椅子の障害者」と友達で、イベントにも積極的に足を運び、先だって中止となったが、自主開催が強行された早稲田祭にも足を運んでいた。
女装をし、「中川小夜子」を名乗ることで自殺癖がひと段落した男は、上京し、友人・知人の家を転々としながら、LPOが毎日のトーク内容を収録した本『TALKING　LOFT』を刊行（既に発売中）するためにロフトブックスという出版部を立ち上げた九七年春、LPOを作った平野悠氏に気に入られ、事務所のMacオペレーターとして住み込みスタッフになった（既に職を追われたが）。
川崎駅からの飛び降り自殺未遂男Sは、LPOで僕と偶然に再会した。僕を家に呼んで親に会わせたり、幼児虐待カミングアウト・ミニコミ『LOLITA　GO　HOME』を発行するエロ絵師の合田ケムリ氏と出会って、その雑誌に寄稿するなど、自分の苦しみが親子問題にあると開眼したのか、最近では、毎晩電話をしてきた取材当時のような、切羽詰まった間合いの会話はしないようになってきた。
以前僕は、仕事とあらば暴行も請け負うという「現代版仕置人」のオジサンに取材したことがあった。彼は「春になるとつまんない動機で〝人を殺してくれ〟と依頼してくるガイキチが増えて困る。早く取り締まらないと日本は大変なことになる」と自分の稼業を棚に上げて、客の無謀なリクエストに困惑していた。
翻ってLPOは、九五年七月に開店して

店内に置かれたらくがきノート

“解放治療居酒屋”にふさわしいノートの中身

超“個性的”書き込み

以後、約二年半の間、一目瞭然のサイコさんでさえ、ただ一人として「出入り禁止」にしてこかったという。LPOとは、いったい何を目的に作られたのか。

「二十六年物」の熟成度

LPOの歴史は、自称「席亭」の平野悠氏(53)が、七一年に京王線の千歳烏山に山小屋風スナック「烏山ロフト」を作った話から始める必要があるだろう。

平野氏が、ロフトブックスから出版した『ROCK is LOFT』によれば、

「その頃広告代理店に勤めてて、企画室で毎日毎日頭がパンクするほど考えてて。やっぱり仕事終わって疲れた時にね、ほっと自分の好きな居場所が欲しいなと」(同書)。

同店の成功から西荻窪、荻窪、下北沢、新宿、自由が丘などに系列のライブハウスをオープン、いずれも成功を収めてきたが、平野氏は八二年から十年間にわたって世界中を放浪する。そして、帰国後の九三年、「新宿ロフト立ち退き問題」に巻き込まれた氏は、一万八千人の署名を得て立ち退き問題を解決し、やがて、自分自身の遊び場が欲しくなった。

「興味のあるヤツを自分の店に引っ張り込んで、いろんな話し聞けるってコンセプトはやっぱり好きだった」(同書にあるLPO開店理由のインタビューより)

「店に落書きノート置いたの、俺が最初なんだよ。烏山ロフトはテレビドラマのネタにもなったんだから」と言う平野氏は、西荻窪ロフト開店当時をこう振り返る。

「ロック居酒屋で自分たちの支持する(ミュージシャンの)テープやレコードをかけまくって、(彼らの)ライブで一人でも同志が増えていくことがうれしかった」

出演者と客を分け隔てせず、出会いを組織することで次の面白さを期待する氏のコミュニケーション観は、現在のLPOに反映されている。

「面白ければ、客なんか入んなくていいんだ」と豪快に笑い飛ばす平野氏だが、聴覚障害や環境問題、幼児虐待など、真摯なテーマのイベントにも、そっと楽屋の隅に陣取って、真剣に耳を傾ける。

平野氏はLPOの開店当初より一年半にわたり、毎日ロフト事務局の仕事をこなすかたわら、その晩の一日店長の著作を読んで予習し、イベントでは自ら積極的に質問、終了後は復習するために自分のノートに学んだことを書き連ね、今ではそのノートが十冊にまでなった。

最近では、LPOのお馴染み一日店長でもある平野勝之監督のAVに出演して、ハゲオヤジ相手にSEX中のコギャルに時代を説いていた。

そうかと思えば、自ら連載していた『ROOF TOP』というロフト・グループの月刊ミニコミで某ジャーナリストのプライバシーを暴露、その男に呼び出され、刃物を突きつけられてボコボコにされたというのに、「お互い全共闘だからね、ケジメだよ」と言ってケロッとしている。こうしたキャラクターに惚れてか、はたまた呆れてか、若いスタッフにもLPOの醍醐味は充分に理解されている。

二カ月で〝故障〟するスタッフ

ある男性店員の一人は言う。

「ここはどんな人だって受け入れてくれる。人生の吹き溜まりのようないいトコロ(笑)。薬物とか犯罪とか何かやってんじゃないか、と思われるような人もね。何度来ても、名前も仕事も教えてくれない人もいますからね。

面白いイベントとして成立してしまえば、(出演者の方が)多少酔っぱらっててもいいかって感じで、煙たがらずに逆に面白がったりするような店です。右翼の人が最初にこの店でイベントやったときなんて、〝街宣車から演説しても、街の人に聞いてもらえないのに、ここではちゃんと聞いてくれる〟って感動してましたし。

宇宙人から電波メッセージを受けてる人の話も、ここなら聞いてくれるわけでしょ」

新宿の父(?!)平野悠氏

だからといって、「思想的に、あるいは電波的にイッてしまったおかげでマイノリティの孤独に苦しんでいる人」ばかりに場を与えているだけの店ではない。

僕が編集した子ども虐待告発本『日本一醜い親への手紙』の出版記念トークを昼の部で行なったら、人気の臨床心理士・信田さよ子先生をゲストにお招きしたせいか、中高年の主婦も集まった。店自体、昼は単なる喫茶店だから、イベント中でも肩肘張らないトークができ、終了後は即席自助グループというか、客席ごとに互いに自分の辛さを語り合う人々の島が自然発生的にできた。依存症の臨床経験を神妙に聞くだけの精神科医の独演会ではありえない光景だった。

毎日のイベントをブッキングしている加藤梅造プロデューサー(30)も言う。

「ホームレスから社長まで来る溜まり場。あらゆるマイナーな欲求に対して、できるかぎり開いてます。自分にとってのアナザーワールドを気軽に覗きにこられる店です。普段はオタクに興味がないとか、あるいはそういう集まりに出たくても、怖くて出られない人も、気軽に覗き見できますし」

先物取引の営業マン、素股性感「新宿女学院」従業員を経て入店したという脇田敦店長(28)は、LPOならではの苦労も語ってくれた。

「皿にウンコ盛って店の中をぐるぐる回る人がいたり、ステージで女性がオシッコしたのを客がゴクゴク飲んでいたり。あんまりスゴいことが次々に起こるんで、一日過ぎたら内容を忘れることにして、今では忘れる習慣がついてます。

ほぼ毎日入っている俺らスタッフは(入店)二カ月くらいでおかしくなるんですよ。ホワイトボードに〝故障中〟と書いて一カ月休んだスタッフもいます。だから最近は、他で接客経験のある人を能力重視で採用してます。そういう人ならイベント中の話を聞いてないから、もちますね。俺も、テン

パッた夜は、近くにあるデニーズ行って頭冷やしてから、歩いて家に帰っていましたから」

確かに、AV監督とAV女優によるハメ撮り実演があったり、出演者でもないのに〝アナル腹話術〟を披露する常連客の女性がいたり（どんなものか気になるでしょ）、ステージでシャブ経験をコギャルが告白したりするので私服警官もよく来るが、警察を告発するイベントもあったりして、刺激には事欠かない。

ミニコミ『解放治療』

こうした空気の中で働いているせいか、店員スタッフの間にも、おのずとサイコさんへの関心が高まっているらしい。

LPOのスタッフが中心になって編集しているミニコミ『解放治療』創刊号（九七年六月発行／発売中）では、村崎百郎氏へのロングインタビューや、「きちがいを追い続けるいやーな男／フジタク（藤村卓也）」へのインタビュー、プロのライターである金井覚氏（『アイドルバビロン〜外道の王国』著者）が自ら実践した「ポジティヴ・ストーキング」の記事など、全編通じて鬼畜系&電波系の愛読者には垂涎の内容になっている。

こうした編集方針は、そのままLPOの空気を象徴しているように思われる。

「北原ミレイの歌でね、『懺悔の値打ちもないけれど／私は話してみたかった』というのがありますが、そういう感じですね。そういう告白をしたい人は来てくださいね」（脇田氏）

脇田氏は現在、「プラスワン・ネットワーク」（略称「プラネット」）の活動を始める一方、『衝撃のUFO』というアナログ盤の復刻CD化に動いている（オリジナルのジャケット・デザインは横尾忠則）。

これは平野氏が七八年にロフトレコードから発表したもので、円盤からの声やUFOを呼び出す儀式などの音源が収録されている。

「当時は、宇宙語を喋る人に会ったり、UFOを呼び出す人たちに交じって輪になったり、スプーンを素手で焼き切った男を目の前で見たりしたんだ。何があっても不思議じゃないと思ったね。UFOも四回以上見てんだから」（平野氏）

人生解毒酒場

この雑食的な好奇心を持つ男は、「キチガイだって人間だよ、なんでも書いてくれよ」と真顔で言った瞬間、頬を緩め、「フン！」と得意のヒゲを揺らして笑った。特殊漫画家・根本敬氏ふうに言うなら、平野悠という男こそ「因果者を解毒するオヤジ」、いや「特殊学級」の校長先生と言う輩までいるくらいだ。

巷では「ウザいオヤジ大嫌い！」と言ってはばからないコギャルが出演した折、平野氏が「コギャルと売春婦、どう違うんだか教えてくれ」と場を揺るがすセリフを怒鳴り、キレたコギャルが帰ってしまった。だが、数カ月後、そのコギャル（家出中の女子高生）が、LPOのカウンターの中で働いているではないか！

「あの後で平野さんからピッチに電話来て、〝言い過ぎた、ゴメン〟だって。もう〝見ざる、聞かざる、平野悠（言う）〟って感

じィ〜？　なんちゃって〜！」
　いつのまにか「大人の手に負えない」とされるコギャルの可愛いアイテムになっている平野悠氏。ＬＰＯは、この茶目っ気と勉強家の両面を持つ解毒オヤジを中心に回っている。平野氏の極端な大らかさがあればこそ、壊れてもＯＫ、人生何やってもＯＫと思えてくるような「シロウトの物語」が許される。
　人騒がせなイベントがあるたびにマスコミで紹介され、マンスリー・スケジュールがインターネット（http://www.bekkoame.or.jp/~loft/）やニフティのフォーラム（ＦＴＯＫＹＯ15番会議室）で見られる昨今では、全国から東京見物のかたわら立ち寄る客も続々と現れているとか。「はとバスのツアーに組まれるらしいぜ」といった冗談もまことしやかに囁かれているらしい。
　人気をうらやんだ他の店がフランチャイズを申し込んでも、平野氏を慕う集客力のある出演者の面々が率先してスケジュールを埋めるというカリスマぶりを見て、「うちでは採算が合わない」と逃げ出す一方、ＬＰＯは今夜もダメ人間、プチ・サイコさんたちでひしめいている。なぜ、ここまで人が集まるのか。今さら多くは語るまい。他人からダメ人間呼ばわりされてすぐカチンときてしまう人には、何を言っても理解できないだろうから。
　開店初日、一日店長になった元ＡＲＢのドラマー・キースに、司会の平野氏は彼が入れ墨を入れるわけを聞いた。キースはつめかけた大勢の客たちの前であっさり言い放った。
「俺は弱いから。生き方で。強くなるため」

店内を切り盛りする脇田敦店長と、復刻CD化が模索される『衝撃のUFO』ジャケット

アダルト・チルドレン世代との往復メール

実録！エヴァンゲリオン症候群!!

自我を過剰に防衛しようとする僕の弟子――。
アダチル世代の弟子とオタク系師匠が交わした、前代未聞の往復書簡！

唐沢俊一（評論家）

精神医学というのはなんとも困った学問だと思う。というのは、人間の行動やもろもろの社会現象が、これを用いるとまことに明瞭にスッキリと切って分析することができるのだ。あまりにもその説明が明確すぎることで、かえってどこかにウサン臭いイメージを抱かせてしまうのである。トランプで言えばジョーカーであり、万能ではあっても、どこか卑怯な感じをぬぐいきれない。

新語が流行語のように次々出てくるのも、このイメージを増幅する。最近の流行語大賞「アダルト・チルドレン」などは、その最たる例であろう。昔流行っていた「ピーターパン・シンドローム」ってのもそうだったが、英語で言われると、なんとなく病理がカッコよく、時代の先端にいるような気がする（〝キャッチー〟ってやつ？）ところが妙である。ますますウサン臭いではないか。

エヴァハマリ男との攻防

このアダルト・チルドレンという言葉は、もともとはアルコール依存症の両親の元で育てられたために、外社会との接触に対する興味を失い、表面的ないい子を装って暮らしてはいるものの他者との精神的交流能力を欠く人々のことを指して言ったものだが、最近のマスコミでは、そこから転じて、自我に対し異常に固執して、外界との摩擦によって自我が侵されることを極端に嫌い、反発する一群の若者たちを指すのが一般的らしい。なんにしても、社会不適応者であって、先日、ＮＨＫの番組で二十代の文化人が、

「僕ら、アダルト・チルドレン世代ですから」

と自慢げに話してしていたのがすさまじく違和感をもって聞こえたものだ。いばるなよ、そんなこと。

アダルト・チルドレンがカッコいいもの、として評価された元凶が、アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』であることは確かだろう。この作品の主人公、碇シンジはこの典型的症例として描かれている。AC（アダルト・チルドレン）専門のサイコロジスト、信田さよ子氏によればACの子どもに共通した特徴は、

「自分はこの世に存在してもいいのだろうか」

という、〝居場所のない感覚〟であるそうだ。このセリフは、まさしくエヴァにおいて繰り返された、シンジのセリフとイコールである。評論家の永瀬唯氏は『スタジオ・ボイス』九七年三月号の「エヴァンゲリオン特集」において、エヴァという作品を、「世代の悲鳴」と表現した。僕が僕であることを認めてくれないこの世界に深く絶望し、世代の共同性による時代の変革という〝物語〟への悲鳴とともになされる反発なのだ、と。

しかし、物事は関係の中にしか存在しない。世界に対しての自分、時代に対しての自分、それを拒否して世界や時代を意識に入れず、ただ自分のみを見つめていて、それで果たして〝自分〟という存在が理解できるものだろうか？

そういう相対的な距離感覚を欠いたまま、自我のみをハリネズミのように刺を立てて守ろうとし、それを侵そうとするもの（侵すと思われるもの）にエキセントリックな罵倒を浴びせかける「いい子」たちは、まさにアニメとシンクロして、増加してきているように思う。

社会不適応症例と言えばオタク、と連想するのはもう古い。実際、社会との折り合い、対人・対事象においての関係性を適当な距離感をおいて保つ技術、などというものを古手のオタクたちはとうにマスターしてしまって、社会のオタクへのニーズの増大も手伝ってちゃんと「シンクロ」を完了しているのだ。逆に言えば、エヴァに関し、最もクールに対応できたのがいわゆるオタクたちであった。ここに最も捕らわれて大騒ぎしていたのは、非オタクインテリ層のアダルト・チルドレンどもであった。

事実、この九七年の夏を通し、僕はある一人のエヴァハマリ男と連日のようにやりあい、振り回されていたのだ。

（バカ）の反発

そのハマリ男というのが、他でもない、僕ら唐沢商会のスタッフだったというところがなんともイヤハヤである。彼をIくんという。Iくんは国立大学の理系学部を出て、一流企業に就職したあと脱サラし、マンガ家をめざして奮闘。某大手青年誌でのデビューが決まるが、ドタンバで編集長の

「おれ、この作者の描く主人公がどうも嫌いだな」

の一言でボツになる。これが彼にはよほどのショックだったのだろう。彼自身は決してそれを認めようとしないが、その後の彼の行動原理にはすべて、このこと（理不尽な世間の仕打ち）が微妙に影響していく。

そんな失意の中、Iくんは唐沢商会にス

タッフとして参加してきた。弟（唐沢なをき）のもとでマンガ家の、僕のもとでライターとしての修業をするためである。当時すでに二十代末だったが、少年ぽい顔立ちで、顔立ちだけならともかく、心も碇シンジ同様十四歳の少年のままだった。常に蓮實重彦や柄谷行人の口マネでものを言い、

「幻想共同体への無批判な依存」

をののしり、

「終わらない学園祭のノリへの嫌悪」

を標榜していた。要は集団の中で生きていくことにすさまじい摩擦を感じる体質だったのである。彼のことをちょっと変だと思ったのは、彼がそれを僕やオタク評論家の岡田斗司夫が進行役を務めている、オタク系ネット会議室で表明したからだった。ここは知ってる人は知ってるが、とにかくアニメや特撮の大マニアたちの参加している会議室だ。そこにいきなり「アニメオタクは意識が低い。ザ・スミスやテクノを聞け！」と書き込むのだから驚いた。彼はしょっちゅう〝世間と自分の存在の間のささくれ、ノイズ感〟を口にしていたが、そんな場所でそういう発言を行なえばノイズが生じるのは当たり前で、こいつはただ単にTPOをわきまえぬだけなのではないか、と思ったものだった。

あまりのことに、その会議室では、Iくんは〝（バカ）〟というニックネームで呼ばれることになった。これは、国立大理系学部卒の彼のプライドをいたく傷つけたようだ。弟がある日、彼のことを〝バカ〟と言ったら、彼は火がついたような激しい口調で、

「僕をバカと言わないでください！　僕はこれまでの人生、人に〝利口だ〟と思われるために生きてきたんですから！」

と言いつのったという。弟はなんという人生だ、と唖然としたらしい。

八〇％シンジくん！

まあ、こういうキャラクターの持ち主ならば当然のこと、と言えるかもしれないが、あの『エヴァ』に出会ったことで、というより主人公の碇シンジというキャラクターに出会ったことで、彼の（バカ）ぶりは、いっきにブレイクした。弟の事務所で仕事もせずにエヴァ論議に熱中し、怒った弟は仕事場に、

「エヴァ論禁止」

の貼紙を張った。すると今度は僕に電話してきて、

「僕は八〇％シンジくんなんです」

と告白した。

「エヴァは僕が描くべき作品だったんだ」

とまで言い、当時、自分で受けていた仕事でアシスタントを呼んだときには、自分で選曲したノイズバンドのサンプリング・テープを流し続け、

「うちの仕事場ではエヴァのテーマ曲、これだからね！」

と宣言し、友人の作った同人誌に、エヴァのパロディマンガを描いて発表した。

たぶん、彼のような青少年が日本中に一万人はいたと思う。べつにエヴァにハマることが悪いわけではない。しかし、モノをクリエイトする人間にとって、あるひとつの他人の作品にそこまでハマることは、決して誉められたことではない。いわゆる〝つく〟というやつで、どうしても、その作品のイミテーションのような感じのもの

photo▶小島義秀

しか作れなくなってしまうし、ましてそれがエヴァのような超メジャーなものであれば、どんなに自分が心血を注いで描いた作品であっても、

「エピゴーネン作品群」

というククリの中でしか語られなくなってしまう。モノカキにとって、やはり一番の財産はオリジナリティなのだ。僕は彼から電話があるたびにそのことを注意した。彼は一応はうなずき、春の総集編公開あたりでは、

「もう飽きました。脱会信者みたいな心境です」

と言ってくるまでに〝回復〟した。僕も、ホッと一息ついたのだが、ビョーキは回復期が最も危ないという。彼もそれだった。

まずいことに、この夏の初めは、神戸の酒鬼薔薇事件で〝現代の病理〟のインカーネーションのように言われた犯人の少年像に、ネット会議室では参加者が、

「あの（バカ）くんはこの事件に関しなんか意見を言わないんですか」

と言い出した。確かに、あの少年の犯行声明文にあった〝透明な存在〟という文句や、社会に対する過度の嫌悪の表明は、それまでのIくんの発言とかなりシンクロしていたのだ。

酒鬼薔薇聖斗と庵野監督

ある日、【尋ね人】というタイトルで、

会議室参加者からこんな文がUPされた。
「（バカ）さんは最近どうしておられるのでしょうか？
酒鬼薔薇はスミスだ！　とか
酒鬼薔薇は僕だ！　とか
酒鬼薔薇はプログレだ！　とか
そういう発言を楽しみにしていたのですが、どこへ行ってしまわれたのでしょう？」

まあ、かなり意地悪な挑発ではあったが、するとそれに対し彼は以下のような露骨にフテたレスポンスを返した。

「ーす。
ちゃんとＲＯＭ（閲覧）してましたよ。
酒鬼薔薇については、不特定多数に向かってとくに何か言う気が起きなかったです。
僕はたぶん、あの犯人は〝なんとなく〟猫や淳くんを殺してしまったのだと思う。
で、〝殺しちゃった〟後から、後づけであの声明文を書き、死体を加工し、自分で、あとになって物語をこさえたのだという解釈をしています。〝なんとなく〟では怖いから、落ち着かないから。〝後づけ〟だからこそ、理屈が手近にあったもののパッチワークにしかならない。当然、中味には何もない。
この〝空虚さ〟というか〝どうしようもなさもなさ〟が事件の本質だと思っています。だから、情緒的な感情移入のしようがない。少なくとも僕には。
もちろん、こうした〝どうしようもなさ〟の果てに人が殺される事態が、実は本当にオソロシイことだとも思っていますが。
ご期待に添えなくってスイマセン」

ことが酒鬼薔薇だからというわけではないが、この文に投影されている彼の意識下のものを分析するならば、〝酒鬼薔薇〟を〝エヴァンゲリオン〟に、〝あの犯人〟を〝庵野監督〟に、〝殺しちゃった〟を〝作品を作ってしまった〟に置き換えてみると面白い。まるでわざとしたかのようにピッタリと符合することに気がつくだろう。〝なんとなく〟できてしまった作品に、〝なんとなく〟では怖いから、理屈を〝後づけ〟でつける。〝後づけ〟だからこそ、パッチワークにしかならない。当然、中身は何もない……。

彼も実は内心でそのことに気がついていたのではあるまいか。そのために、この酒鬼薔薇に関してはことさらな無視を決め込むしかなかったのではないか。

バカをツラリとやってこそ……

しかし、僕はそれよりなにより、書き込みのあまりのつまらなさと、人を見下してフテているような態度に唖然とし、彼のパティオに以下のように書き込んだ。

「Ａーくん
今日はちょっと、〝師匠〟モードで書き込みます。
キミの発言、読みました。
せっかくひさびさの発言なんだからさ、もうちょっとオモシロイことを発言してくれよ。暗いよ、ありゃ。
モノカキになるつもりなんだろ？
酒鬼薔薇に対してもさ、意地でも、他人と違う感想持ってやろうとか、笑ってやろうとか、自分の発言を売ってやろうという、そういう〝積極性〟持ってほしい、と思うんだよ。一般人じゃないんだからさ、モノカキってのは。

まだ、キミ、完成品じゃない。ものの考え方とか、見方とか、キミの自然体の言葉がそのまま商品になる段階じゃない。落語家で言えば高座声を作る段階というヤツで、お客の目を引くことに一生懸命になる時期だ。意識してひねくれるというか、笑いを取るとか、そういう姿勢が必要な時期じゃないか、まだ、と思うんだ。年齢が年齢だけにキツいとは思うけど、それだけに必死にならないと身につかないぜ。

これはキミが酒鬼薔薇を語る立場にいるかどうかというのと、全然別次元の話だよ。誰もがあの事件について語らねばならないということはないけれど、マスコミに身を置く、ということは、それについて語らねばならぬ場合がどうしても出てくる可能性があるということだ。それでご飯をいただく職業なんだから。そのときに必要なのは、何か〝おもしろいこと〟を言う才能だよ。それを訓練することも大事だと思う。

マンガ家になろう、ってヤツ、モノカキになろうってヤツ、僕はいろいろ見てる。キミを含めて。その中でキミが特異なのは、なんとか「常識性」を保とう、という意識を持っていることだ。他の連中がなんとかキチガイになろう、鬼畜になろう、って頑張っているのにね。

われわれモノカキは物の考え方、その表現の仕方がそのまま〝商品〟だ。酒鬼薔薇について語れないというのは、店の棚にそ

の商品を置いてないということで、来たお客をみすみす帰してしまうことになる。カンバンをかかげたばかりの商店としてはそれは、非常にもったいないことだ。
　最初から専門店としてカンバンをかかげている人や、すでにお得意さんがついて、それだけでやっていかれる人は別として、やはり語れる語れないの幅がせまいことは（特に酒鬼薔薇のような「人気商品」を扱えないというのは）商人として不利、ということになる。それを認識してもらいたいと思うんだな。
　キミにないもの、それはバカをツラリとしてできる能力だ。で、それをやれるのは今のキミがギリギリの年齢だぞ。今から良識ぶっていて、どうする。
　〝くっだらねー〟
　ってことやるヤツがクラスの人気者になるんだよ。
　とにかく、今のキミに必要なことは、森羅万象全てにわたって、
　〝オレならどう言うか〟
　を自分自身で開発していくこと、ではないかい？」

　その苦言に対し、彼から返ってきた返事は、以下のとおり。
「唐沢様
　お言葉、身に染みます。
　酒鬼薔薇に関しては、実はかなり困惑している部分があります。しかも、それが何か、はっきりしていないからタチが悪い。
　事件に〝ハマる〟よりも、タチが悪いもののような気がしています。すごく深いところの、形にならぬものがあるのです。触れるとヤバイ、という感じすらします。
　切通理作がエヴァについて沈黙しているのもこういう理由からかもしれません。
　事件について語っていくと、その先に自分の無意識の闇が待っているような予感がするのです。
　それとは別に、最近のあの会議室の〝通夜の席にやってきて大酒飲んで大騒ぎしたあげく、お土産まで持って帰る顔もよく知らない遠縁の親父〟というか、〝物陰に隠れて罵声を浴びせ、石も投げるが自分の顔は絶対見せない〟ノリに辟易していたので、〝これ以上サービスしてやるものか〟という気持になったのも事実です。
　客を選べる分際じゃないのは分かっていますが。馬鹿にも通じなければ芸ではない、というのも分かってはいますが。
　それでも、やはり」
　やはりここでも、聞いてもいないエヴァが出てくる。読んで、どうしてこの男はここまで自分の意識にこだわるのだろう、と思った。触れるとヤバイ、と言っておきながら、ここまで露骨な反発をしたということは、逆の意味でのハマりぶりを示しているようなものではないか。やはり彼もまた、自我を過剰に防衛しようとするアダルト・チルドレン世代の人間であった。

お話ししづらいこと

　この稿は、彼のバカさをあげつらうのが目的なのではない。彼のこの〝世間〟という場所に対する嫌悪がある種の病理に基づくもの、ということに気がつかなかった筆者自身への叱責の意味をこめて書いている。
　だが、彼のあまりの女々しさにこれは少しカツを入れねば、と思った自分も、無理はなかった、と思うのだ。今でも。

「へーくん
通夜の客の譬え、これは非常によく分かるんだが、危ない。

これをやっていると、〝選別されたよき読者にしかメッセージを送れない〟作家になっちゃうぞ。

読者の九〇％、いや九九％は通夜の席の客だ。われわれモノカキは彼らににこやかな顔をして〝故人もよろこんでおります〟と酒をつがねばならない喪主なのだ。
　忘れてはいけない。サービス業は客を選んでは喰っていけないのだ。
　キミは、それだけ嫌っているオタクたちにレスをつけた。つけるくらいならサービスしろ。キミの出世をさまたげているのはその潔癖症的なプライドだ。プライドなんか、偉くなればいくらでもついてくる。
　今は、彼らの足を舐めろ」
　すると今度はそれに対して、個人的メールでの返答がきた。
「題名：パティオのことなど。
唐沢さま。
　モノカキとしての姿勢について、いつも貴重なご意見をありがとうございます。
　この件については、メールか電話でやりとりをしたいと思います。正直な話、意見を異にするギャラリーのいるところでは僕がちょっとお話ししづらいところがあるからです。
〝潔癖症的なプライド〟と唐沢さんはおっ

しゃいますが、無理してバカをやっても、自分で面白いと思えぬのでは、ツライばかりで得るものがないような気がします（バカをするのも、失敗するのも、吝かではありません）。ただ〝面白くもないことを無理に面白がる〟ことに抵抗を感じるのです。〝無理に面白がっているうちに面白くなってくる〟ということも承知はしていますが。〝なんとしてでも客にサービスする〟というスタンスが欠けていた（というか、考えていなかった）のは事実です。だけど、今のあの会議室のオタクたちには、やっぱりつらいものを感じます。〝どんなことに対しても当事者にならない。当事者意識を持つ者をあざ笑う〟空気が蔓延していることにはかなり抵抗を覚えます。

　先の通夜の譬えを、唐沢さんは〝大衆とはそうしたものだ〟というふうに解釈されたようですが、あれは、僕としては〝対象に、当事者として関わらないことを美徳とするようなオタクの気風〟の譬えとして出したつもりです。

　これは、「良識」の問題とは微妙に異なると思います。

オタクの靴をなめるにしても、彼らのこういう〝全部シャレ〟〝マジになるのは常に馬鹿〟というドグマとは相容れないものを感じるのです。これはバカをやること、ジャンクの楽しみを知ること、とはちょっと違ったところにある違和感なのです。

　僕としては、こと酒鬼薔薇についてはことさらに良識ぶっているつもりはありません。やはりそう見えるのでしょうか？」

　他者から見れば、無害なやりとりに思えるかもしれない。しかし、僕にとって、このやりとりは彼の内面における、

「作家（モノカキ）になりたい」

「しかし、こんなせまい場所（会議室）ですら自分の意見を通すことができない自分にモノが書けるだろうか」

「いや、自分がウケないのは、相手がバカだからにすぎない」

　という論理のスリ替えが露骨に見えるものだった。芸人の世界ほどきちんとはしていないが、仮にも師匠・弟子の関係にある仲だ。彼を一丁前のモノカキに仕立てあげなくては、という無意識の責任感が、僕をやけに説教臭い人間にしていたのかもしれない。

〝あっちの〟世界＝夏エヴァ

こういう無意味なやりとりが行なわれているうちに、夏エヴァ『まごころを、君に』公開。Ｉくんとその彼女（生意気に彼女がいるのだ）は、パティオ内で〝すごい〟〝傑作〟〝あれに感動しない人は駄目だと思う〟などというやりとりをかわし、挙げ句の果てに、彼は会議室にこんな発言を上げた。とうとう、完全に〝あっちの〟世界へ行ってしまったのだ。

「僕はあの映画を大傑作だと思います。一昨日、二回目を見たときには感情をフルに解放して見ました。

　あれを、ロジックで見ようとしたのでは、とまどうばかりです。映画から距離をとる、オタク的な見方では何も分かりません。

　あの映画は、きわめてポジティヴで、今まで僕が忘れていた「ちから」に溢れたものだと思います。なによりも、絶望的な孤独の煉獄の果てに、きっちりと他者と出会うあのラストは、断じてハッピーエンドだ

と思っています。
あれを笑うのも、おもちゃにするのも、批評をするのも、さまざまな解釈で議論を戦わすのも、まずは、今感じている気持をしみじみと自分の中で消化してから、でも遅くはありません。この映画は、僕たちにとって（あえて複数にします）、本当の意味での『福音』になったのでは？とすら思っています」

一読、何やら背中にウソ寒いものを感じた。どこかで似たような文章を読んだ、と思った。そうだ、新興宗教のソレだ。あの教団のPR誌に載っている、信者たちの信仰告白。あれに感じがソックリだ。特に、〝ロジックで考えるのでなく、まず受け止めることだ〟というあたり、ニューエイジ系の宗教臭さがぷんぷんとにおう。

もちろん、これはヤバい、と思った僕は、すぐさま彼の発言に「これは幸×の科学ではないか、まるで」という意味のレスポンスをつけた。だが、それに対し返ってきた答は、「僕は、大丈夫です」というヘッダ（発言のタイトル）の付された、しかし大丈夫どころか、いっそうウスっ気味の悪いものだった。

「>唐沢さま
ご心配なさらないでください。僕はそんなに了見が狭くはありません。
当然のことながら、僕の中のエヴァは僕の中でいつか終わります。自分の中で完結

するのです。そうなったら、なんらかの方法で、キチンと相対化して語ることができるようになることでしょう。しかし、今それをするのは、性急にすぎると思うのです。

あの途方もない高みにまで達した庵野という人は、やはりスゴイ、と思います。見事、とまで思います。

今まで、かわいい（快感に満ちた）マンガの絵を描くことに一抹の後ろめたさを感じてきた僕にとって、あの〝高み〟は非常に心強いものでした。〝ああ、あそこまで行けるのだ〟という。

僕はこれから、エヴァに〝さよなら〟を言うことでしょう。それでしか、前には進めませんから」

関係を清算しましょう

これには完全に僕も呆れ、以下のようなチャチャを入れるのが精一杯。

「Ａ－くん

ごめん、訂正する。

『幸×の科学』ではなかった。

キミのソレは、『ラエリアン・ムーブメント』のアレだ。

自分では、なんかすごく考えて、理性的に取り組んでいる気になっている。実は、すでに軸足がソッチへ行ってしまっているというのに。

ラエリアンに〝あなたがたはラエルを盲信している〟と言うと、〝ご心配なさらないでください。われわれは考えて、そしてラエリアンになったのです〟

と答える。それとキミのコレはあまりにアレだ。

ちなみに、今日、渋谷で夏エヴァ、見ました。あれはなんだな、つげ義春であった、オレには。人類、〝いかようにもがけどもせんなかるまいに〟であって、シンジとアスカはそれからどうなったかというと、

〝じつはまだ二階にいるのです〟

ってオチ。〝ポキン、綾波レイ〟ってのもそういえばＴＶにはあったし。ああ、ガロが休刊になったのは残念であった」

……最後はギャグで落としたが、こちらの胸はムカついていた。

なにしろ「キチガイアニメ」という肩書がアニメファンの間で通り相場になったようなアニメである。かぶれてキチガイになるのが何人かは出るであろう、とは思ったが、身内から出たショックはやはり大きかった。自分が育てていた人間が知らぬ間に異形のものになっていた、という、例のあやしげな精神医学タームで言う〝フランケンシュタイン・シンドローム〟というやつだ。

腹立ちながら、何か頭が痛くなってきて、僕は眠れない夜を過ごし、その明け方、午前三時半ごろ、以下のような縁切り状を彼の個人パティオにＵＰしたのだった。

「Ａ－くん

あれから（あえてどの〝あれ〟かは記さないけど）かなり考えて、こんな時間にこんなことを書いてます。で、僕なりの結論を出しました。

これまでのやりとりの中に、これまでの僕と君の考え方の齟齬の要因がかなり表出している気がします。君がいつまでも僕を敬う立場をとってくれていることで、僕自身も甘えていました。そもそものところで思考方法が異なっているのです、僕と君は。

これは、スタイルの問題なのです。

君は君のスタイルで成功するしかないでしょう。この業界で。だとすると、僕が君に教えられることというのは、何もないのです。正反対なんですから。これから先、こういう関係を続けていても、お互いに得るところは少ない。

それよりは、ある程度、立場の違いを認め、対立する関係にそれぞれを置いた方がいいのではないか、と思えます。

一度、両者の関係を清算しましょう。こういうとホモっぽいですが。

とても悲しいことです。弟子と一度は呼んだ者に自分のスタイルを受け継いでもらえなかったということは。ああ、なおホモっぽいぞ。ホモだったら、むしろさっぱり相手は相手、と割り切ってケツだけ求め合っていけたんでしょうが。彼らは究極の個人主義者ですから」

他人は苦痛、独りもイヤ……

僕はこの発言を最後に、彼のパティオへの発言を停止した。それに対し、Iくんからの返事はなかった。もちろん、せまい業界だから、さまざまな人からさまざまな噂が入ってくる。彼はその後、年下の東浩紀にベタベタになり、エヴァ賛美とオタク非難を繰り返しているとやら。

「エヴァの出現で、これまでの創作シーンは根底から覆されることになる。唐沢さんはじめ、これまでのオタク系言論人はすべて淘汰されていくことになるだろう。その後に、僕のようなメンタリティを持った作家が迎えられる世界が来る」

ある人には、電話でこのように語ったそうだ。僕には、これを論評する言葉がない。何も出てこない。他人の信ずる神を云々しても仕方がない。彼は、僕が怒っていると思っているらしいが、最初から、僕の感情は怒りとは別のところにある。もちろん、『と学会』会員として、イッてしまった人間に興味はあるのだが。

ただ、今の僕には、今まで以上に、エヴァという作品の持つ病理が、病理を持つ者を引き付けるその魅力が、実にウス気味悪いものに映って見える。少なくとも、あの作品は、僕から有能なスタッフを一人、奪い去った。ウルトラQ『バルンガ』の奈良丸博士のセリフではないが、

「何にしても、私にとっては縁の深い怪物だ」

と、いうところか。

この原稿の発表はだいぶ迷った。たぶん、彼はこの原稿を読んで怒りを感じるだろう。そのことでの罪悪感は甘受したいと思っている。

最後に、エヴァに関し、あるパティオで知り合いの女性作家がポツンと発言した内容を引いて終わりにしたい。べつに彼女はIくんの知り合いでもなく、何かそこに意味を持たせたつもりもなくUPしたのではあるが。

「たとえば幼少期に親からものすごい介入を受けて、それでデータと擬似現実で再構成された自分だけの世界に逃げ込む、というケースがあると思います。〝他人は苦痛、でも独りもイヤ〟な人がハマるんでしょうね。エヴァンゲリオンには」

（発言引用に関しては、大意のみを伝え、言い回し等を変えたものになっています）

非本番系フーゾクの苦悩

日本一気の弱い「風俗嬢への口説き文句」

おとなしい客ほどアブナイ……。ある客が、日本刀を持ち込み、NG指定されるまでの一部始終！
やっぱフーゾクは神経内科だった⁉

深沢薫（フリーライター）

本番系以外のほとんどの風俗店では、ご案内直前に「当店では本番、指入れが禁止されております！」などと慇懃に脅されたうえ、個室でも注意事項の書かれた貼り紙を目にすることになる。口頭で注意された「本番の強要」「女性器への指の挿入」はもちろん、乱暴な振る舞い、同業者によるスカウト等の禁止が明記されたもので、〝以上のことを破った方は、身分証明書の提示と共に、罰金百万円を申しつけます〟といった文句がそれに続く。なかには、百万円という金額が書かれた借用書のコピーまで壁に貼って、〝必ずサインしてもらいます〟などという脅し文句まで並べている店もある。

……お前ら、そこまで言われてもヌキたいか？と言いたくもなるが、放っておいたら限度をわきまえない、それだけバカヤローな客がけっこういるということだ。反面、そんな張り紙を目にすると、女の子のオッパイを触るにも、いちいち「いいですか？」と断ってくるような気弱な客も出てきてしまうようで、プレイ内容を、いちいちイラストでマニュアル化する店だってあるくらいだ。

「でも、後々ストーカー的行為をするアブないお客さんっていうのは、一見気が弱そうで、初めのうちは扱いやすい人が多いんです」

と話すのは、池袋の性感ヘルス「N」の責任者S氏。この店はマスコミに登場する女の子の所属数が多く、不景気な今の時代に、平日の昼間からでも客が並ぶ人気店だ。そのせいだろうか、アブない客の来店率も高いようで、同店には、客にストーカーされた、しつこく手紙をもらった……という

女の子が、他店よりも多いらしい。今も週二、三人は、サイコ予備群の客が来店しているともいう。

「歳は二十五歳から三十五歳の間。スーツ系の人はいなくて、ジーンズにシャツといったラフな格好の人が多いですね。で、どういうわけか必ずリュックを背負ってるんですよ。でも、べつにオタク系といった感じでもなくて、ごく普通のフリーター青年って感じです」(S氏)

「N」に限らず、どこの店でも料金の高いコースに入ってもらいたいのが本音だ。もちろん、所持金ギリギリの客などは、スタッフに勧められたからといって、おいそれとは従わない。それが、気の弱い客になると、所持金がほとんど残らない結果になろうと、促されるままに払うことが多いうえ、何時間待たされようと、文句ひとつ言わずにもいるという。

しかし、こんな一見、美味しくて、扱いやすそうな彼らが常連となるにつれ、アブない客へと変貌していくらしいのだ。ちなみに、数え上げてもらったところ、「N」では、現在約十五名の客がその予備群ということで、それぞれが遊びと本気の境を彷徨い、思い込みだけの恋愛関係へと一直線に進んでいる。

なかでも、ある客の話は強烈だ。意中のゆかり嬢(仮名・19)にはもちろん、店そのものにもハマっているのではないかというう強烈な人物である。三カ月前から、対ゆかり嬢NG客と認定され、彼女には二度と入れてもらえなくなったのに、現在も毎日の電話と、週一回の来店を欠かさない。もちろん、お目当てはゆかり嬢である。そんなアブない客でありながら、店から存在を黙認されているのだが、「N」のスタッフたちは、妙な親しみを込めて、彼のことを〝オオタくん〟と呼ぶ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 虚実の入り交じった愚痴

オオタくんがゆかり嬢に出会ったのは、昨年十二月のこと。時間とお金が欲しいと業界入りしたゆかり嬢が、まだ入店間もない頃だ。オオタくんは、当時からすでに「N」の大常連で、ちょうど意中の女の子はいない状態だったが、それでも週一回は来店する律儀さだった。そんなオオタくんが、店の人に勧められるままに入ったのが、ゆかり嬢であり、ゆかり嬢にしてみれば、オオタくんとの出会いは、ただの偶然である。

「初対面の印象は、普通のお客さん。べつにアヤシイ雰囲気でもなかったし……。ただ、若いんだか老けてるんだか、年齢不詳って感じではありました。二十歳にも見えれば、二十五、六歳にも見えるし。何やってるかも分かんないような人なんです。背は高くなくて、一六〇センチくらい。中肉中背で特別毛深くもない。髪はスポーツ刈りみたいな短髪で、格好はいつもジーパンにTシャツ。急にビシッとキメてくる時もあったけど、たいがいは同じような格好でしたね。

お風呂にはちゃんと入ってるみたいだけど、着てる物から臭いが漂ってきそうな感じなんです。そういえば片方の耳にだけピアスをつけてて、シルバーのネックレスもしてました。お釈迦様かなんかが真ん中にあって、まわりに漢字が散らばってる仏教っぽいやつ。あと、真っ黒なサングラスを

かけてくることもあったし、オタクっぽいところはないから、俺は強いんだって感じですね、外見的には。〝オトコ〟を醸し出してるつもりらしいんですよ」（ゆかり嬢）

オオタくんは、その翌週からゆかり嬢を指名しはじめた。以降、週一回の来店ペースを固持しながら、マメな常連という程度の付き合いが続く。

「オオタくんが私を気に入ったのは、私が〝へぇー〟と話を聞くタイプだからだと思います。お客さんに自分の意見をはっきり言うコもいるけど、私は反対。何を言われても、〝そうなんだあ～〟と聞いているから、話しやすかったんじゃないかな。それで愚痴とか悩み事を話すようになっていったんだと思います。

それとあわせて、プレイしない日も増えてきて、〝シャワー浴びる？〟って言葉が、プレイをするかしないかの問いになってました。でもそう聞くと、二回に一回は〝ゆかりちゃんの言うとおりにする〟って言うんですよ。そう言われてもねぇ……。ほんとはヤリたいんです。ただ、ガツガツしてるようには見られたくなくて、やせ我慢してたんじゃないかな。ほら、〝オトコ〟を醸し出そうとしてましたから」

しかし、オオタくんの話のほとんどは虚構、妄想（？）の入り交じった愚痴だった。都内で家族と一緒に住んでいるらしいが、ゆかり嬢には実家が製本業を営み、その手伝いをしていると言うし、店のスタッフには大企業である○○○○重工の重役の息子だと語る。また、年齢も「こないだ免許取れる歳になったんだ」と言うこともあれば、二十七歳で「ＢＭＷの七シリーズで来た」と話したりもする。日によって事実関係が違うので、愚痴や悩み事にしても、どこまでが真実かが分からないのだ。

◆◆◆引き金となった風俗雑誌◆◆◆

「愚痴の多くは、家庭内に自分の居場所がないとか、誰も自分のことは分かってくれないとか、おじいちゃんが倒れちゃって会社が大変だとか……。仕事が上手くいかなくてヤケ酒ばかり飲んでるとか、具合が悪いなんてこともよく言ってました。こういうことをベラベラと言うより、肩を落として、落ち込んだ感じで話すんです」（ゆかり嬢）

オオタくんは七十分のコースを選んでいた。難行だ。ゆかり嬢は十九歳。立派なもんである。そんじょそこらのカウンセラーなぞ目じゃない、という感じである。

「普通の常連の人なら、会った時〝元気?!〟とか〝会いたかったよ〟という感じなのに、オオタくんは暗く入ってきて、〝どうしたの？〟って聞いても〝べつに……〟って。でも、しばらくするとぼそぼそ愚痴を言い出すんです。それでだんだんと、〝この人、ちょっと変わったお客さんだな〟って思い出しました」

気分のいい客でないことは確かだが、風俗店で、射精以外のことを求める人々は意外と多い。若い女の子たちに、愚痴を垂らして憂さを晴らすのも情けないが、日常の張り詰めた顔が緩むような場所である以上、仕方ないのかもしれない。だが、それも〝程度〟がある。程度を過ぎると、オオタくんのように「俺のことを分かってくれるのは、ゆかりちゃんだけだよ」という態度になり、女の子への精神的依存度がぐっと

photo▶小島義秀

高まっていく。実際、〝ちょっとヘンなオタくん〟が〝かなりヘンなオオタくん〟へと変貌していったのだ。

「今年の五月から、私が雑誌に出るようになったんです。それで、オオタくんが来た時に〝今度から雑誌に出るんだ〟と話しました。その時には〝えっ！……〟ってぐらいで、たいしたリアクションはなかったんですけど、それからなんです、特にヘンになってきたのは。

その頃になると、主に土曜か日曜の週一、二回の来店だったのが平日も来るようになったし、午前中に来ることもありました。そういう時は、仕事の合間にでも来るのか、三十五分のコースなんですけど。とにかく、ちょこちょこと週三、四回は来るようになったんです」

ゆかり嬢も、雑誌の取材を受けずにいれば、この後のような悪夢は経験しないで済んだのではないかと言う。雑誌に出る、イコール有名になり客が増える。そして自分だけのゆかりちゃんではなくなってしまう——オオタくんは、おそらくそう思ったのだろう。今の風俗業界には、〝プードル(風俗アイドル)〟なんて言葉もあるくらいで、マスコミに登場した風俗嬢たちが、一種の有名人状態になったりもする。

とは言っても、そもそも〝オオタくんのゆかりちゃん〟ではないわけで、この頃、すでにオオタくんの頭の中では、金銭が媒介になった〝客〟と〝風俗嬢〟の関係でしかないという意識が、崩れていたのだろう。

まるで悪い虫でもつくのではないかと心配する彼氏のように、オオタくんは通い出す。来店できない日には、店に何度も電話を入れ「ゆかりに、今日は行けないけど、頑張ってと言っといて」などというメッセージも残すようになった。スタッフの前では、ゆかり嬢の名前も呼び捨てである。そしてゆかり嬢や店のスタッフに対し、〝死〟について語るようになったのがこの頃からだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆「腕がなくなつた〜」

「そのうち、愚痴を通り越して、〝家にいるのが嫌だ〟から〝死にたい〟とか、〝俺なんて死んだ方がいいんだ〟みたいなこと

ばかり言うようになってきたんです。それで、ほんとに泣いたりしたこともあります。あと、その場限りの嘘とか妄想、忘れたふり……がひどくなってきました。

例えば、〝一昨日来たよね〟と言うと〝そうだっけ〟と答えるみたいな。私が喉が痛いと言うと、自分のかかりつけの大病院を紹介してやると言ったり。手紙やプレゼントをくれるようにもなりました。でも、プレゼントって普通は買ってきた物ですよね。ところが、オオタくんの場合は自分の身につけてる物、大切にしてる物をくれるんです。ネックレスとかサングラスとか、片方だけのピアスとか。もらっても困るし、持って帰るのも気持ち悪いんで、結局店の人に預かってもらってましたけど」

しかし、ゆかり嬢に対しては、まだいい方だったという。嫌われたくないという感情が理性を保っていたのか、それともオオタくんなりの神経で計算していたのか。責任者のS氏を始め、店のスタッフたちの前でのオオタくんは、ゆかり嬢の前でのオオタくんとはちょっと違う人格だった。店のスタッフが言う。

「オオタくんは、死ぬまでのストーリーができているんです。喉頭癌であと三カ月で死ぬってことらしくて、店の前のエレベータのところに倒れたこともありますよ。〝店長、具合わりぃよー〟と言ってたと思ったら、エレベータにもたれかかってずるずるずる……と。

〝オオタくん、救急車呼ぶ?!〟って言うと、〝いいよ、いいよ。どうせ無駄だからさ〟なんて、ニヒルなつもりで薄笑いしてましたけど。ところがその直後、元気出るかなと思って、ゆかりちゃんのことを話題にしたら、突然すくっと立ち上がってベラベラ話し出すんですよ。お前、具合悪いんじゃなかったのか?!でしょ。しかも、ゆかりちゃんの出勤日の話をしているだけなのに、勃起までさせて(笑)。エッチな話をしてる時なら仕方ないけど、出勤日の話でこれですよ。〝ゆかり〟と聞くだけで反応するからスゴイよ。でも、毎回こんな感じですから。

シャツの下、ズボンの中に片腕を入れて〝腕がなくなった〜〟って言いながら、店に入ってきたこともあります(笑)。そう言われても、シャツの下に腕のあるのが明らかに分かるんですよ。〝じゃあ、今日はゆかりちゃんに会えないね〟と言うと、元気になるんですけどね。とにかく、理解を超えた状態になってたのは確かです」

さらに、ゆかり嬢の前ではクールに装っていたオオタくんも、スタッフの前ではゆかり嬢への愛を臆面もなく語っていたという。

「ゆかりちゃんの前では言わないんですけど、早くこういう仕事を辞めさせたいとか、ゆかりちゃん本人も辞めたがってるとかね。オオタくんの頭の中では、彼氏と彼女の関係ですから。自分の親を店に連れて来て、紹介するとも言ってましたね。雑誌に出ているゆかりちゃんを見て、前とは目の輝きが変わったとか、ゆかりちゃんはこんなんじゃない!みたいなこともよく言ってましたね」

NG客に向かってひた走るかのようなオオタくん。だが常連客でもあり、ゆかりちゃん本人に対して直接的な禁止事項(本番の強要や乱暴等)を犯したわけではないので、店としても〝来るな〟とは言えなかっ

たという。

日本刀持参事件!

普通、風俗店では、禁止事項を明らかに犯せば、文句なくその客を叩き出す。店によっては暴力でつまみ出したりもするし、もっと極端なやり方をするところでは、事務所に連れて行って、罰金百万の借用書にサインせい!とコワイ人と一緒に脅すこともある。が、「N」ではそこまでする必要がないと言う。

「こういうことが続くようなら、〝この業界のやり方で、考えさせてもらいますよ〟と丁重に脅すと一発です。特に〝この業界のやり方〟っていうのが怖いらしいですね。何を想像するのか分かりませんけど。もともと気は弱い人たちですから、これだけで〝ハ、ハイ〟と萎縮しちゃうんですよ。

でも、女の子の後をつけるストーキングとか、明らかな行為をするなら注意のしようもあるんですけどねえ。オオタくんみたいなのは、なかなか。ただ、こういう人がいちばん困りもするんです。女の子を壊しちゃいますから。からだじゃなくて、精神的にですが」

当たり前のことだが、風俗嬢たちも生身の人間。ただでさえストレスの多い職場のなかで、さらにヘンな客に付き合わされれば、おかしくもなる。そういう客についた後、突然泣いたり、帰ると言い出す子も少なくないという。それをなだめるスタッフたちも大変だ。

しかし、そんななか、ゆかり嬢はずいぶん頑張ったと言える。なんかヘン……って程度の時からかなりヘン……になるまでの八カ月間、オオタくんの相手をし続けたのだから。

「NGにするまでの三カ月間くらいは、ほんとにかなりおかしくなってました。〝突然だけど、明日から仕事でニューヨークに行くことになった。だからもうゆかりちゃんとは会えないんだ〟と言った翌日には、何事もなかったかのように来るんです。それで〝あれ、海外出張どうなったの?〟と聞くと〝そんなこと言った?〟ですよ。

死ぬっていう話も強烈になってきていて、〝もう死ぬのが怖いとは思わないんだ〟って言い出すくらい、かなり怖い状態でした。〝ゆかりちゃんだって死ぬの怖くないだろ?〟と言われた時には、この人が死ぬ時は道連れにされる!と直感しましたから」(ゆかり嬢)

そして七月の終わり。店にかかってくる電話の回数も日に十回、二十回が当たり前になり、ゆかりちゃんもスタッフも、オオタくんには疲れ果てていた。

「いつもどおり、昼頃に来たんです。それでオオタくんが部屋に入ってきた時、すぐそれが目につきました。なんか一メートルくらいの、長細いものを持ってたんです。一カ月くらい前から身の危険は感じていたから、棒か竹刀に見えました。釣り竿かなとも思ったんだけど、そう思う前、瞬間的に身の危険を感じたのは確かです。これで殴られる!殺される!って。

ビビリながらも〝何それ? 釣り竿?〟って聞くと、〝ゆかりちゃんに見せようと思って持ってきた〟って言うんです。で、言うんです〝おじいちゃんの形見で日本刀なんだけど〟って。そう言われた時、私、絶対顔色が変わってたと思います。オオタ

くんが刀を鞘から抜こうとした時には、真剣にやめて！と叫びました。〝切れない刀なんだけど〟と言われても信じられなくて、これを出されたら終わりだと思ったんです。その後も、出そうとするのを止めるのの繰り返しでした。〝死にたい〟っていう話になると、必死で〝いいことあるよ！〟ってなだめたりして。もう、ハラハラの七十分でした」

この一件で、オオタくんはめでたくNG客に認定。〝もうオオタくんはダメ。怖い！〟というゆかりちゃんに、スタッフとてうなずくしかなかった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 双子の兄の登場

しかし、スタッフの苦難はまだまだ続いた。この日本刀持参事件から四カ月がたった今でも、オオタくんの「N」通いは続いているのだ。何回来ようとも、もうゆかりちゃんには会わせてもらえないというのに。スタッフが語る。

「今も週一、二回は来るし、日に十回は電話してきます。〝ゆかりはいるか〟に始まって、〝昨日、海外出張から帰って来た〟なんて話から、〝癌だからもうダメだ、死ぬ〟まで。暇な時ならまだいいですけどね。忙しい時にオオタくんの電話があると、〝もう分かった分かった、オオタくん！今忙しいから〟って切っちゃいますよ。

人格も十人分くらいあるんです。声や話し方が同じだから、本人だってことはすぐ分かるんですけどね。多いのは医師のオオバとか付き人のオオグサ、それから双子の兄。最初、オオタくんが電話をかけてきて、〝今病院にいる。俺の担当医が横にいるから代わるよ〟って言うわけです。それで、オオタくん扮する医師のオオバが電話口に出てくるんです。〝オオタくんは癌であと三カ月の命なんです〟なんてこと言います(笑)。

そう言えば、双子の兄として来たこともありますね。〝オオタの双子の兄です〟って来たんだけど、どう見ても本人。〝あいつはもう死ぬから、代わりに双子の兄である僕が来るように言われました〟って(笑)。本人はなりきってましたよ。笑うわけにもいかないし、そうですか、それはどうもって相手しますけどね。もちろん、ゆかりちゃんには入れられません。

もう、オオタくんのこういう話なら、本一冊書けるほどネタありますよ(笑)」

しかし、どんなに来ようと電話しようと、ゆかりちゃん本人にはもう会えないのに、オオタくんは、なぜここまで固執するのか。来店しても、他の女の子に入っていくわけでもない。

普通なら、いくら鈍感な人間でも、会わせてもらえないことが続けば諦める。少なくとも自分が、招かれざる客なのでは、と気づくはずだろう。まっ、だからこそヘンなんだが。

「彼は、私だけでなくて、うちの店そのものが自分の居場所だと思ってるんです。だから、私に会えなくなっても来るんですよ。他のことは分からないけど、自分の居場所がないとか、話する相手がいないというのは、ほんとだと思うんです。学生時代からクラスでひとり、誰にも相手にしてもらえなかったような雰囲気ありましたから。それで、ひとりでいるうちに、いろいろ思い込んで、妄想が始まっちゃったんだと思い

ます。
でも、オオタくん以外にも、こういう人っていっぱいいると思う。今までそういうこと、あまり気にしないでやってきたけど、リピーターの人とか、何回も来るうちに思い込まれてしまいそうで怖くなりました。ほんとの私と店での私を、他人が勝手に思い込んで、別の人格作られてしまうような感じなんです」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ カルトな生き霊たちの暴走

ちょっと前まで、風俗店でアブない客と言えば、〝ヘンタイ〟と称される客だった。SM、女装趣味、フェチ関係……と性的嗜好の偏った客たちにそういう目が向けられていたのである。ところが、細分化した風俗業界では、そのどれもが受け皿のある状態になった。顔射もアナルファックでさえも、ごく普通の性感ヘルス店で体験することができるし、オシッコを飲むことだってできる。それも特別高い料金を払わずとも。

しかし、そんなんでもアリ、の風俗業界であっても、売れないものはある。女の子たちの人格だ。デートOKという店もあるが、これも疑似恋愛を金に換算しただけのもので、あくまでも気分を味わうに過ぎない。だが、客は女の子との疑似恋愛を買いたがる。まるで女の子の人格をモノにできるかのように錯覚して。

それでも、ややこしいのが、常連となるうちに、二人だけの世界も確かにできてくるということだ。ただ、それはあくまでも、風俗嬢と客という関係上できる〝顔なじみ〟の延長であり、そこから愛情が発生するわけではない（そういうケースも稀にはあるが）。ゆかり嬢が言うように、どうしたって風俗嬢と客の関係は平行線で、超えることはないのだ。ところが客側は、風俗嬢の一挙一動を都合のいいように解釈して、新しい〝ゆかりちゃん〟という人格を作り上げ、愛する。現実に存在しているはずの自分が、他人の妄想の中で、極端に違う人格となって生きているという不気味さ。

「オオタくんグッズを持っていると、乗り移られそうな気がするんです」

とゆかり嬢は言う。なんでも売って、売るもののなくなった風俗業界。その隙間に入り込んできたのは、カルトな生き霊のごときオオタくんたちである。

暴走の火種は、ますます尽きないのだろう。

オカルト雑誌製作現場最前線

毎日がインデペンデンス・デイ!

宇宙人の死体を見た! 発信器を埋め込まれた! CIAに手を回された! 末端の記者が翻弄された、「選民」たちからの押し売り地獄!

高邑秋人(フリーライター)

我こそは、地球の救世主

私自身は、宇宙人やUFOに特別興味があったわけじゃないんです。あの雑誌に関わるまでは、地味な業界誌の編集を長い間やってたんですが、業界自体がずっと構造不況のどん底状態だったので、その末端にある業界誌の予算もシブイ。思うような取材もままならないし、そんな状態が長く続いていたから、きっとフラストレーションがたまっていたんでしょうね。

高橋純一さん(仮名・35)は、UFO・宇宙人をメインに超常現象を扱うオカルト雑誌の編集者。じつは、当の雑誌がつい最近休刊になってしまったので、正確にいえば元編集者だ。編集部にこれはと思えるネタが舞い込めば、どんな相手であれ取材に赴く、編集部内指折りの生真面目な記者でもあった。

ところでこのオカルト雑誌、創刊当初から超常現象を科学的に捉えることが、一応の編集方針になっていたから、上司がとにかく裏付けを取りたがる。「これはイケルかもしれない」とネタを持っていっても、「ウラ取れてんのか」とか「とにかく実証を試みなきゃ、話になんないじゃないか」というのがその人の口癖だったとか。

これから紹介する高橋さんの話は、実証性にこだわる取材過程で起きた、オカルトな人々との格闘の記録である。登場する人物の名前や地名は、できるかぎり特定できないように変えてあるが、これは高橋さんの身を気づかっての措置でもある。高橋さん、「また付きまとわれるのでは……」と、今でもかつての〝関係者〟に怯えているのだ。

が溜まってたんでしょう。
　そんなときに、たまたま新聞の人材募集欄で「科学雑誌、ギャンブル雑誌編集者募集」の広告を見つけたんです。科学雑誌とギャンブル雑誌の編集者をいっしょに募集するというのがなんか妙だなとは思ったけど、まあ履歴書ぐらい送ってみるかと。「科学」の二文字があったから、これはずっと続けられるまともな仕事かもしれないと思って。それで幸か不幸か採用されてしまったんです。
　雑誌はまだこれから創刊されるということで、内容のことはよく分かりませんでした。ところが、蓋を開けてみると、科学といっても「超」がつくほうで、超常現象を科学するっていう雑誌だったんです。創刊号がUFO特集で、第二号がコンタクティー（宇宙人と遭遇した人）の特集ですからね。しまった……と思いましたよ、ええ。
　もちろん、この手の雑誌には、老舗の『ムー』とか他にも何誌かあるんですけど、UFOや宇宙人を大々的に取り上げる雑誌が新しく創刊されたわけですから、オウム事件の影響で抑圧されてきたUFOウォッチャーや、どの雑誌の編集部からも相手にされなくなった読者が、編集部に有象無象のネタを持ち込んでくることになった。宇宙人からメッセージを受け取ったとか、神様とか天使とかが天井に見えるとか。
　彼らは、簡単には引き下がらないんです。ネタまで持ち込もうというくらいの人たちですから。「私は宇宙人からメッセージを受け取っているので、地球を救う使命があるんだ」とか言うわけです。それでも適当に受け流していたりすると、今度は雑誌そのものをけなしたり、「私の話を取り上げないと、あなたたちは人間的にダメだ」って、こっちの人間性まで否定してくるんですから。まるで脅迫なんですよ。

ヤバそうな神棚

　コレ、ちょっと複雑な話なんですけど、千葉県の海沿いの町に住む、三島由紀夫と霊界交信していて、三島がUFOに乗って霊界を支配してるって主張する六十過ぎの霊能師のオバサンがいたんです。このオバサン、あっちの世界ではけっこう有名なんですが、あまりにもしつこいからいろんな出版社から相手にされなくなって、それでこっちにお鉢が回ってきたんです。「私は以前から夢で見てて、この雑誌に書くことになっていたんだ」って。最初は相手にしませんでしたよ、明らかにヘンなんですから。でも、あまりに何度も名指しで電話がかかってくるので居留守を使っていたら、電話を受けた他の編集者を怖がらせたりするんです。声色を使った低い声で、地を這うようなっていうか、本当に薄気味の悪い声で「本当はそこにいるんだろ～う」って。
　それで仕方なく、毎回電話に出るようになったんですけど、このオバサン、たまにはこっちが関心を持つような具体的なネタを持ち込まないと結局は相手にされなくなると思ったのか、「静岡で医長代理をやっている脳神経外科の医者がいてね、その人がアメリカのNASAで宇宙人の死体を見てきたから紹介するよ」と言うんです。
　もちろん、オバサンとしては、医者も紹介するけど自分の話も載っけてもらうつもりなんだけど、医者のネタは宇宙人モノでしかもNASAがらみ。当然、話は科学的

illustration▶丹波鉄心

に展開させられるし、編集方針にもピッタリだから、上司に相談したら「まず、医者が本物かどうかウラ取れ」って言うわけです。もちろんウラ取ろうとしましたよ。管轄の保健所や医師会に電話したりして。

結局決定的な証拠はなかったんですが、本人が医者の証明書を持ってくるということで取材してみることにしたわけです。上司はどちらかというと止めにかかってたみたいですけど、乗りかかった船だし、ちょうどネタがなかったという条件も重なって、紹介してくれるというオバサンの家で会うことになった。

オバサンの意図は充分分かってましたから、オバサンはコメンテーターとしてちょっと出てもらうくらいにしようと思っていました。交渉しだいで、その医者の話だけ載せるってこともできるかなって。実証性が雑誌の方針だし、霊能師がUFOを語るのは胡散臭いじゃないですか。ネタの紹介者が胡散臭いと、記事までインチキ臭くなっちゃいますからね。だって、オバサンが医者に出会った経緯っていうのが、「夜、海岸でUFOに追いかけられているところ

を車で来たその医者に助けられた」って言うんですよ。
それでカメラマンと一緒にオバサンの家に行ったんです。「丘の上にあるけど駅の近くの米屋に聞けば教えてくれるから」って聞いてたので、米屋を見つけて尋ねたけど、「知らない」って言う。オバサンは米屋を知ってるから米屋も自分を知ってるって思い込んでるわけです。それでしょうがないから携帯でオバサンに電話したら、「あんた、ちゃんと米屋に聞かなきゃだめじゃない」って怒られた。そういう人なんです。
それで道順は分かったんだけど、丘の上までの坂道の途中に、子どもを抱いた女の人とか若い男がところどころに立っていて、どうもこっちを監視してるみたいなんです。近所の人という感じじゃまったくなくて、カメラマンも気味悪がって顔色変わってました。後から思ったんですが、雑誌の取材が本当に来るのかどうか疑っていたみたい。不安なんでオバサン、自分の信者を手配してたみたいで。
オバサンの家に行って分かったのは、どうも宗教団体みたいなことをしてるらしいということ。家に着くなり、「あなたが来るのは、初めから分かってました」なんて言われたから、「はぁ〜」って答えるしかなかったけど。アポとって来てるわけだし、さっきも電話してるんだから、当たり前じゃないかって。
家の中は、カーテンが引かれていて昼でも薄暗い感じでした。テーブルの上に小さな神棚のようなものがあって、そこに「お参りして」と言われたのでうやうやしく手を合わせて頭を下げようとしたら、神棚の中にウルトラマンの人形が置いてある。「これはヤバイな」って思いましたよ。オバサンに遠慮してもらう交渉なんてとんでもないなって……。

「宇宙人」の証拠

その後、オバサンの家に来ていた静岡の医者から、NASAで見たという宇宙人の死体の話を聞きました。証拠を持ってくるように頼んでおいたので、医者だという証拠も含めていくつか持ってきたんですが、どうも怪しい。NASAの入館証もタイプで打ったような手書きの感じで、医大からもらったという賞状にいたっては誤字があったりして、誌面に出したくないからという理由で、自分で墨塗りしてる箇所もあって、ちょっと病的な感じすらする。
まあ、いい方に解釈するとあまりの機密情報を持っているがために取材に対して慎重になっているというか、肝心なことをわざとごまかしているとも取れなくもなかったですが……。
宇宙人の死体写真も見せてもらったんですが、どう見ても、『エレファントマン』か何かのスチール写真のコピーなんです。雑誌の方針は実証性ですから、もっと証拠が欲しいって言ったら、本人渋ってましたが、それを後日送ってくれることになって、取材を切り上げました。
妙なのは宇宙船の部品です。NASAで死体を見たときにかすめてきたというんですが、届いたものを見ると、金魚すくいの枠にコイルを巻きつけたようなもので、非常に雑なものなんです、いかにも手で巻いたという感じの。だいいち、NASAがそ

んな杜撰な管理してるわけないじゃないですか。直に触れると生体エネルギーが乱れるからって、B5判のパウチッコに入ってましたけどね。

結局、ページが埋まらなかったんで、この記事は掲載しちゃったんですけど、医者とトラブルになるようなことはありませんでしたよ。でも、掲載後に女性の読者から電話がかかってきたんです。「以前この医者に妊娠させられて、あれは遊びだったと言われ捨てられた」とかで、「今どこにいるか教えてほしい」ってね。もちろん守秘義務がありますから教えませんでしたけど。その読者は普通の感じの人でしたから、あの医者、なんかやったんですね。

でも、問題はオバサン。紹介した医者の記事だけ載せて、オバサンのほうは載せないってことになると結果は目に見えてますからね。ヤバイなと思ってたんです。ところが絶妙のタイミングで、医者とオバサンがケンカしてくれた。オバサン、あちこちの出版社に電話して、「その医者と婚約して家まで買った」ってふれまわったらしい。嘘か妄想でしょうけど。それを聞いた医者が怒ってケンカになったんです。この医者、院長の娘と婚約してるとかで、急に俗っぽくなっちゃったみたいで。

まあ、医者もオバサンもUFO・宇宙人を信じてるのは同じだけど、どちらかというとオバサンは宇宙人が地球人を高次元に導いてくれる「宇宙人いい人派」で、医者は宇宙人が地球を乗っ取るっていう「宇宙人謀略派」ですから、いつかはケンカになったでしょうけど。とにかくそんなことでケンカ別れしてくれたんで、結果的に医者の記事だけ載せる理由ができた。でも、後は予想したとおり、電話攻撃の再開でした、薄気味悪い声の。

押し売り同然の「相談事」

電話だけじゃなくて、編集部にわざわざ乗り込んでくる人もいましたね。もちろんアポなしで。初老の夫婦でしたけど、ダンナのほうはクレージーキャッツの犬塚弘みたいな感じで、奥さんのほうは草笛光子をもうちょっと歳取らせたふう。ダンナのあとをうつむき加減でついてくる糟糠の妻という感じでした。「ご相談したい」って真面目な顔して入ってきて、二人とも憔悴しきった感じでしたから、とりあえず応接間に通して話を聞いたんですが、「最近頭の中でヘンな声が聞こえて、私を殺そうとするんです」って言う。横断歩道で信号待ちしてたりビルの屋上にいると「飛び込め」とか「飛び降りろ」という声が聞こえるって。

けっこうこの手のネタの持ち込みは多かったんですが、どう見ても科学的じゃないからおおむねボツなんです。そこで「雑誌の編集者に相談するよりは、しかるべき医療機関やカウンセラーにご相談されたほうが」って勧めたんですが、もちろんそんなことでは引き下がらない。「いや、じつはからだが一メートルも飛び上がるんです」って言い出したんです。しょうがないんで、隣で伏し目がちに座っている奥さんに「見たことあるんですか?」って聞いたら「はい、私も怖くって」って、口裏を合わせているならこれほど達者な役者はいないぐらい、心配そうに言うわけですよ。

じゃあ、いったいどういう状態なのかっ

て聞いてみると、急にダンナのほうが椅子の上でからだを上下運動させて飛び上がるんです。よく見ると、ちゃんと肘掛けに手をついて腰を浮かしてる。あきれて「なんだこりゃ〜」って顔で見ていたら、こっちの反応に気づいたらしく、それまで精神世界や宗教には関心がないって言ってたのに、急に口調を変えて、マホメットが乗り移ったりブッダが乗り移ったりで。挙げ句の果てには「汝は〜」って急に文語調になって、「これはウソではない！」って自分から言うんです（笑）。

もう、いい加減勘弁して帰ってもらおうと思っていたら、ダンナの口調が元に戻って、「いや、ほかにも私たちと同じ苦しみで悩んでいる人がいると思うんです。私はそんな人たちに、私の体験を伝えたいんです」って。結局は相談なんかじゃなくて、自分のことを雑誌に載せろっていう売り込みなんです。こういう人たちって、けっこう何人も来たけど、「証拠を見せろ」って言っても決してめげませんでしたね。形勢が不利となると、「あんた、そんな理屈言ってる場合じゃないでしょ。地球が滅ぶんですよ、地球が」ですから。この世界は自己申告の世界だから、言いたい放題なんです。

お巡りに通報されて

UFO・宇宙人モノには、宇宙人いい人派と謀略派の二種類があると言いましたが、宇宙人謀略話のなかに「インプラント」モノっていうのがあるんです。歯の根幹治療に関連したインプラントという用語とほぼ同義だと思うんですが、アメリカや中南米には、UFOや宇宙人にまつわるインプラント話ってけっこう多いんです。「自分のからだに宇宙人の手で発信器を埋め込まれた」って自己申告する人たちの話。そう言って、宇宙人による地球人家畜化計画を頑なに信じてる人たちが大勢いるんです。

インプラントされたっていう人が何人か編集部に来ましたが、神奈川県の平塚にUFOや宇宙人に関心のある医者がいて、宇宙人にインプラントされたという人が来たら、その医者に連れていったり紹介するようにしてたんです。こういう医者って、きちんと診て医学的に判断してくれますから貴重なんです。もちろん「なんでもない」と診断されても、「あれはヤブ医者だ」ってけなす人が多かったですけどね。

あるとき、愛知県に住む二十歳過ぎの女性が、「じつは私の口の中にも穴が二つあって、何かを埋め込まれたらしい」って編集部に写真を送ってきた。写真を見ると、たしかに歯茎の根本と喉チンコのあたりに小さな穴のようなものが見える。電話で本人に聞いてみると、「ある日突然できていて……」ってすごく怖がってるんです。そこで取材のために本人に会いに行ったわけです。いつもだったら平塚の医者に連れてくところですが、運悪く締め切りギリギリのときで、見切り発車でカメラマンも連れて、現地まで行っちゃったわけです。

見せてもらったら、たしかに口の中に二カ所穴があいてるんで、上司に電話して経過報告しました、「たしかにある」って。ところが実証性にうるさい上司ですから、「そんなんじゃ話にならん。とにかく、近くの医者でもいいから、連れていって診せろ」って言う。仕方ないんで、駅前にあっ

た開業医のところにその女性を連れていった。そこで、受付の看護婦さんに「どうもこの女性が宇宙人に何か埋め込まれたみたいなんですが、先生に診てもらいたい」って頼んだんです。それを聞いた看護婦さんは、「ちょっと院長に相談してきますから、待っててください」って奥に引っ込んじゃった。

ところが、待合い室で待ってたら、いきなり玄関からお巡りが二、三人駆け込んでくるじゃないですか。医者がいきなり警察呼んだんですよ、危なそうなヤツらがいるからって。医者と口論になりましたが、結局パトカーに乗せられて、彼女とカメラマンと一緒に警察署で事情聴取されました。

彼女は、まわりの人に穴の話をすると変な目で見られるからって、藁にもすがりたい気持で編集部に相談してきたのに、診察ぐらいしてくれたっていいと思うんですけどね。「何も埋め込まれてません」って言ってくれれば、こっちのネタにはならなくても、彼女は安心するんですから。まあ、普通の医者に診てもらおうとした私たちも、ちょっと無謀だったかもしれませんけど。

オウム逃走犯を追え！

UFOや宇宙人のネタを追ってると、アメリカで取材することもけっこうありました。アメリカには、日本では想像できないんですけど、超能力や超常現象を大まじめに研究している科学者がけっこういる。政府もかつて予算をつぎこんでいたくらい。

リモートビューイングを研究している機関があって、一度、取材に行ったことがあるんです。リモートビューイングっていうのは、失踪した人や逃亡中の犯人がどこにいるかを捜しあてる「遠隔透視」のことです。

その頃、CIAが過去二十五年間にわたって行なってきたリモートビューイングの予算が削られるという記事が『朝日新聞』

に出たり、『ニューズウィーク』にもリモートビューアーが登場したので、かたいネタに違いないということで。アポとって会いに行ったんです、現役のリモートビューアーに。

インタビューが中心の取材だったんですが、ちょうどその頃は、オウムの逃走犯が話題になっていたので、林泰男と菊池直子の手配写真を日本から持っていって、二人のリモートビューイングをダメモトで頼んでみたんです。そしたら、二日後にオーケーが出た。

それから、帰国して一カ月ぐらい経った頃にレポートが届いたんです。詳細な指示と地図四枚。さっそく翻訳したら、地図の地形がどうも近畿地方の地形によく似てる。よく見てみると、大阪の堺市あたりなんです。さっそく大阪のカメラマンを手配して、ライターと一緒に行きましたよ。

現地に行って、指示にあった「水」「市場」「緑色」「一日二回食事を出すところ」といった潜伏場所の条件に照らし合わせていろいろ地図を辿っていくと、港の近くにある大きな倉庫がどうも怪しい。

ええ、行きましたよ、その倉庫を所有する会社がすぐ近くにあったんです。総務担当者が面会に応じてくれることになって、通された応接室で、出てきた総務課長に真剣な顔でこう切り出したんです。「じつは、あなたの倉庫にオウムの犯人が隠れている可能性がある」って。そうしたら、課長さんみるみる顔が険しくなって。ええ、剣もホロロですよ。まあ、今考えれば、いきなりどこの馬の骨かも分からない人間に、お前のところにオウムの犯人がいるって言われれば、怒るのも無理ないですけどね。

でも、こっちだって優秀なリモートビューアーが出したデータの裏付けに大阪まで来たわけですから、このままおめおめ東京に帰るわけにはいかない。なら、とりあえず所轄の警察署にでも行ってみるか、ということで堺北署に行ったんです。だって、もし万が一、あの倉庫に林か菊池がいたら、とんでもないスクープですから。誌面構成まで考えちゃいましたよ。

受付で副署長を呼んでもらうと、最初は面倒臭そうな顔してましたけど、「じつはオウムが」と言ったとたん、「ちょっとこっちへ来て」って奥に通されました。そこで、「アメリカのちゃんとしたリモートビューアーが、かなりの高い確率でオウムの逃走犯の居所をつかんだんです」と説明したんだけど、よく理解できないらしい。「どういうことをする人なの」と聞かれたんで、「じつは遠隔透視を」って言ったら副署長いきなりのけぞってましたけど、地図を見せたらバカヤローって顔しながらも、わきでメモとってましたよ。

じつは余談ですが、大阪取材に行く当日の朝、とんでもないことがあったんです。電車に乗っていたら急激な腹痛に襲われて、意識も朦朧としてきたので改札の駅員に救急車を頼んだんです。腹痛に襲われた瞬間から頭の中をよぎったのがVXガス。超常系のライターから「そんな取材したらヤバイことになる」って脅かされてましたから、あのときは本当に「やられた！」って思いましたね。結局、立ち食いソバの玉子がいけなかったみたいで、担ぎ込まれた病院で大便したら、すっきりしちゃったんですけど（笑）。アメリカで会ったリモートビューアーがCIAにも関係してたから、ライ

ターのなかには、「最初からすべてCIAが仕組んだことなんですよ」なんて真顔で言うヤツもいましたけどね。

悲しき「選民意識」

オウムのVXガスに本気で怯えたことや、ライターがCIAの陰謀説を唱えていたことなんかを考えると、自分たちも超常現象の世界に、少しは染まってたのかなって思います。気持的には、実証主義と職業意識が前面に出ているから、超常現象の世界やヘンな人たちを冷静に見てたつもりなんだけど、よくよく考えてみると、やっぱり一員だったのかなって。仲のいい友達なんかも、マジで「お前、なんでそんな仕事してんの?」って訝しがってましたからね。

結局、普通の人たちから見たら、我々も仲間なんです。開業医だって、倉庫の総務課長だって、警察だって、こっちは裏付けを求めて取材してるんだっていくら説明しても、同類としか見ないんですから。オカルト雑誌編集者の運命なんですね、これは。雑誌をやって少しでも超常現象の世界を科学的に解明できたかと聞かれると、ちょっと困っちゃいます。でも、この仕事をやってみて、あの世界の住人たちのことが少しは分かった気がしますね。彼らは、多くの人が親子関係なんかの家庭の問題を抱えているんですよ、きっと。子どもの頃から、「自分は親に認められていない」「自分は愛されていない」という気持を持ち続けていて、それを大人になるまでずっと引きずっているうちに、ポ〜ンってこの世界に入ってしまう。そのキッカケというのが、要するに「選民意識」なんです。

UFOや宇宙人からメッセージを受け取ったって主張する人は、だいたい選民意識が強いですね。不思議と、霊を見たという人はあまり選民意識がないのに、その霊にUFOや宇宙人がくっついたりすると、たちどころに選民意識が芽生える。「人間を超えた科学を自分は知ってるんだ。自分を理解しない、認めないのは相手がバカで、自分がはるかに高いところにいるからだ」って。選民になることで、子どもの頃から引きずってきたもやもやから逃げられるんですね。

でも、あの世界の人たちって、本当は純粋で、みんないい人ばかりなんですよ。コンプレックスを引きずっているぐらいだから、根は内気でおとなしいんです。ところが、そんな善良な人たちが、選民意識を持つと豹変してしまう。おそらく、そういうことなんです。

『インデペンデンス・デイ』の中で、UFOが最初に地上攻撃をかけてくるとき、UFO・宇宙人ウォッチャーたちが「ウエルカム」なんていうプラカードを掲げて歓喜しながら歓迎するシーンがあるんです。ところがあれ、あっけなくUFOのビーム弾でやられちゃって、地球で最初の犠牲者になってしまう。あのシーンは、UFO・宇宙人ウォッチャーを喜劇的に取り上げて、観客も笑うわけですよ、「バカなヤツらだ」って。

あれを見たとき、笑えなかったんです。「悲しいなぁー」っていう気持です。「根は、いい人たちなのに」って。たしかに、いい人っていうのは、簡単に殺されちゃうくらい弱いんでしょうけど。

孤高のホームページ『愛の奇蹟』

中森明菜への求婚状

松田聖子との精神的つながり、中森明菜との運命的結婚……。
インターネットで情報発信する人物のコミュニケーション「受信」不全症！
ホームページは、やはり近未来の墓石か!?

語り手＝**菅谷明夫**（『愛の奇蹟』作者）◆聞き手＋コメント＝**山形浩生**（地域開発調査員）

『愛の奇蹟』の菅谷明夫氏と言っても、ほぼ知る者のない人物であろう。自らを弥勒（みろく）と名乗り、松田聖子と精神的に結ばれて中森明菜と結婚を果たした暁に、自らこの末法の世に降臨し、我ら迷える衆生を救ってくださるという、それはそれはありがたい方なのである……という本誌編集部の折伏に根負けして、平成九年の十月十八日にお目にかかることと相成ったのが、件（くだん）のホームページの作者、菅谷氏であった。

あらかじめその中身を拝見し、タレントへの手紙というか、その異様なまでの深読みに満ちたテクスト読解にかなりの畏怖を覚えつつ、インタビューの当日と相成った。びくびくしつつお目にかかった菅谷氏は、予想に反して典型的おたく風貌の実に温厚な方で、自販機のコーヒーと煎れたてのコーヒーの差についてにこやかに語る人物だった。が、話題が核心に入った途端にやおら目の色が変わり……というこちらの期待もなんのその、表情ひとつ変えぬまま、彼はいきなり本題に突入してくれたのである。

宇宙人との遭遇

──簡単な経歴をお話し願えませんか。

菅谷　小学校三、四年のときに、いじめっ子から逃げたい、自由になりたい、自由にあちこち行きたい、旅行したいなと思って、UFOの推進原理に興味がいったんですね。その後、アダムスキーの宇宙哲学などに触れて、精神的な道が並行して始まったんです。

で、あるとき瞑想で失敗して苦しい状態になっていたころ、スブド同胞会（ニューエイジ系の団体）に出会い、そこの霊的修練のラティハンをやってるうちに、救われてきたわけですね。そして一九八八年に、たまたまテレビを見ていて松田聖子さんと

の「魂との出遭い」が起こったんです。初めてレターを出したのが九〇年の末で、その後、九一年になって、五月六日に過去生の一千年前の記憶が一瞬、一部だけ甦りました。

実は、瞑想で失敗する以前に覚醒意識という状態を経験していまして、無限の宇宙の意識に吸い込まれる体験をしていたんです。でも失敗してからは、もう、その壁を超えられなくなっちゃったんですね。ですが、彼女への愛によって、その壁が超えられたんですよ。自分が死ぬことを受け入れたんですね。そうしたら、記憶が甦ったんです。

――もともと理工系の勉強をなさっていたんですか。

菅谷 そうですね。大学も理科系に進んで円盤の推進原理みたいなこと、いろいろ研究していたんですよね。〝コンタクト・ストーリー〟（宇宙人との遭遇話）とか読みますと、推進原理に関するヒントがあるんですよ。それに、いろんな人から極秘資料をもらうじゃないですか。たとえば、カリフォルニアでエブ・グレイという人がエマモーターという永久モーターを発明した、とか。

それで、エーテル化一元論というのがありまして、普通の横波が光速で、縦波はその二・一倍だというんです。磁力線のスピードは、光速の二・一三Cなんだということをアダムスキーが宇宙人から聞いてるわけですよ。磁力線が光速の二・一倍なら、エーテルの縦波が光速の二・一倍というのと同じじゃないかと。するとエーテルの縦波が実は磁力線なんじゃないかとか、共通事項からいろいろ浮かび上がってくる。

それを補足するように、アメリカ人女性が宇宙人とコンタクトしたという内容の夢を見て。彼女は、磁石の両側から磁力線が出て、もう片方の極に流れ込んで、その磁力線の中をエネルギーが往復振動しているというんですね。コンタクト・ストーリーで言ってることと同じだ、ということで、ピタッ、ピタッと何カ所も話がつながる。そんなふうな研究をしていたんですよね。

――話さえ一致していれば、実証されなくてもいいということですか。

菅谷 ええ、そこらへんは柔軟に考えたいということで。で、磁石だけで回転するモーターが原理的に可能だったので、作ろうと思って磁石の会社に買いに行く途中、宇宙人と電車の中で会ったんです。向こうからは話しかけてこないんですが、直接コンタクトしてきたんですね。

（ホームで）並んでいる私の前にですね、ガツッと割り込んできたんです。彼は私の方をじーっと直視してる。それで、あっ、ブラザーだと閃いたんですよね。今日、磁石を注文しに行くんですとか、心の中で言ってみたら「うんうん」って、私が思ったことに対して行動で反応を返してくる。でも、こっちに話しかけてはこない。だから私が彼の肩に手をやって、「やあ、ブラザー」と話しかけた。それが第一回目のコンタクトですね。

――彼らは何しに来てるんですか。

菅谷 たぶん地球に対して親戚感情を持ってると思うんですね。太古、彼らは地球に関わっていて、自分たちの子孫を地球人との交配で残したりしたらしいんです。で、その後、彼らの間でいろんな争い事が起こりまして、その争いに負けたプレアデスの勢力は、プレアデスの方向に行っちゃった。だから、彼らは地球人に対して一種の責任や愛情みたいなものを感じていて、いろい

ろと伝えたいんです。
――でも、磁石のモーターというのは失敗なさったそうですね。宇宙人は、成功法を教えてくれないわけですか。
菅谷 そういう具体的なことは教えてくれないというか、話すら、ちょっと……。こっちから話しかけないとしないですね。それが七九年だったのかな。

中森明菜と結婚する理由

――松田聖子や中森明菜にメッセージを送っていますが、その話を聞かせてください。
菅谷 私は、昭和三十五年の九月生まれなんです。これ、数字を並べると「３５９」、これは時間的な意味ですよね。で、私の住んでいる所沢市の郵便番号が「３５９」なんです。住んでいるから空間的な意味。で、平成三年五月九日は実は聖子さんの記憶を思い出した三日後なんですよ。実際に思い出したのは五月六日でした。
その年というのは、東京都内の市外局番に三が付加されましたよね。「３５６」に三を加えますと「３５９」になるんです。
次は明菜さんとの縁ですけれども、私の父が七月十三日生まれで、明菜さんと同じなんですよ。で、明菜さんの父親の名が、私と同じアキオなんですね。つまり、明菜さんから見て、父親は私なんです。で、私から見て、私の父親と同じ誕生日の明菜さんが父親なんですよ。お互いに父なる神を見る関係にあるんですね。

愛の奇蹟
§ 目次 §
(1997.10.18 MSさんへの第59通目と、WINKへの第1通目)
●生まれる想い(1997.11.17更新)
from 1996/08/02.Thursday.
BEKKOAMEのホームページ一覧へ戻る
E-mail:oriharu@ppp.bekkoame.or.jp
●THE CARPET OF QUEDLINBURG (PIETAS AND JUSTICIA)

ホームページ『愛の奇蹟』(http://www.bekkoame.or.jp/~oriharu/index.html)

――それって偶然の一致じゃないんですか。
菅谷 いや、そういう不思議な偶然の一致が、二重や三重じゃないんですよ。
ドイツ旅行をしたんです。九月四日に出発したんですが、着いた九月五日に、七月十三日、つまり明菜さんが生まれた日の聖人である聖ハインリッヒゆかりの地バンバーグに行ったんですね。これを数字的に表現しますと、「３９５」の人、平成三年九月五日の人は七月十三日の人であるとなりますよね。
この「３９５」というのは、実は私の本籍地の番地でもあるんです。これを文字的に変換しますと、本籍地の人は明菜さんである、つまり結婚相手は明菜さんである。
その意味が明らかになったのが、十一月二十三日、うちの両親の結婚記念日に、父親とファミリーレストランで一緒だったときなんです。この日に、今の「本籍地の人は明菜さんである」、つまり結婚相手が明菜さんであるという意味が、一つ明らかになったんですね。
で、実はですね、聖子さんと私と明菜さ

んの三人が揃うと弥勒となるということが、大本教の「一二三神示」に載ってるんです。聖子さんは、実は日の神様の型を担ってるんですよ。と言うのは、彼女はサンミュージックにいたんですね。NHKのサンデーズにもいた。決定打が、彼女のお母さんが一子さんなんですけど、一というのは、実は日なんですよね。それを英語読みすると、サン、数字の「3」なんです。

私の母親は二月二十二日生まれです。「一二三神示」は別名、「日月神示」とも言いますから、一二三、イコール日月。一、イコール日で、二三、イコール月なんですね。つまり、私の母親の誕生日は二が三つ。これは月の型示しなんです。

で、今度は地の神様。日月の神となって弥勒となって、さらに千、地のご先祖様と一体になって日月が大日月になるんですけれども、この地の神様が、実は明菜さんです。彼女の母親が「千」の字を使って千恵子さんというんです。つまり、聖子さんも私も明菜さんも、三人とも母親がその立場を証しているんですよ。それが「3」と「6」と「9」。聖子さんが「3」、私が「6」、明菜さんが「9」。これで縦軸。

「6」というのは、私の誕生日、昭和三十五年九月二十五日をたしますと二十四になるんです。二十四は二たす四で「6」になる。明菜さんの場合は、母親が千恵子さんですから「9」の位置。これで日月地が揃った。「一二三神示」と合致するんですね。

その後、実は、WINKの出現というのがありました。まず、アルファベットに一から二十六まで、数字を振ります。これで日月地の月＝MOONを計算すると、十三たす十五たす十五たす十四で、「57」になる。で、WINKというのを計算すると、Wは二十三、Iが九、Nが十四、Kが十一、全部たしますと、やっぱり「57」。

先ほどの「369」というのが縦軸で、WINKが私を中心に「567」の横軸を作って、十字になってるんです。

WINKは、鈴木早智子さんと相田翔子さんの二人ですけれど、鈴木早智子さんは、昭和四十四年二月二十二日生まれなんですね。そうすると、四たす四は八で、二が三つ。八と六ですね。で、たすと十四（14）。一と四で五。それが鈴木早智子さんの「5」の数なんです。相田翔子さんは、昭和四十五年二月二十三日生まれで、これも同様に「7」の人なんです。

それでWINKが横軸を満たすんですけれども、やはり「567」というのも、昔から弥勒と読ませていたんです。お釈迦様は、五十六億七千万年後に弥勒が来ると言ってるんですよ。それで、昔から「567」は弥勒と言われていたんです。

小室哲哉の妨害

——それが思い込みではないという確信は、揺るがないんですか。

菅谷　ほぼ確実にそうですよ。関口宏の『ワンダーゾーン』という番組のなかに、私が聖子さんについて言ったようなことがですね、どっから漏れるんだか知らないんですけれども、かなり盛り込まれていた印象は持ちましたね。

——しかし、自分が弥勒だなんて大それた話だとは思わないんですか。

菅谷　そうですね。これはたぶん、大本教の出口王仁三郎と同じ道筋を行ってると思うんです。王仁三郎も彼自身が弥勒であると言っていたんですけれども。同じようなパターンを、私も繰り返しているんですよ

ね。でも、この先の話はいろいろ妨害が起こる可能性もあるんでちょっと。小室哲哉さんが、なんだか知らないけど妨害してるんですよ。

たとえば、私は「567」だとか弥勒だとか「369」だとか言ってますでしょ。そうすると、小室哲哉さんは自分がゴムロ、「566」であるとか言ったりしてですね、で、実際、五の六の六という番地に自宅を建てているんです。

それは『進め！電波少年』でやってたんですよね。あの番組は、どうも私のあとをトレースしてるような感じがあるんです。電波系の典型だって言われることもあるし。

たとえば私が、中山美穂さんにレターを出しますよね。そうすると、華原朋美さんの番組のゲストとして中山美穂さんが呼ばれて、なんか急に注目を浴びちゃったりなんかして。その裏に小室哲哉さんがいるということは明らかに感じ取れるんですね。

その後、森高千里さんにもレターを出しました。チサトは「千」ですから、地の神様の可能性があるんで。すると小室哲哉が森高千里に振られたとかいう記事が出たりするんですよ。

——小室哲哉は、中森明菜に曲を書いたりもしてましたよね。

菅谷 明菜に車を買い与えたりね、ずいぶん特別扱いして、どうも追いかけられてる気がするんですね、私としては。私がメジャーな存在になると都合が悪いんでしょうね。弥勒とか、それに近いようなことを彼が名乗ってるんですね。そういう妨害の一

始めまして、中森明菜様　　　　（第1通目）　199110271147

始めてお便り差し上げます。僭越ながら、テレビを見てると、明菜さんは私の事をもうすでに
充分御存知であると思っています。その前提の上で文章をタイプしておりますので。不思議
なことに、私はSさんだけではなく、明菜さんとも縁があります。私の名前は「明夫」で、「夫」
の文字を使っています。一方、私の父は7月13日生まれで、明菜さんの誕生日と同じなの
です。いきなりですが、お互いに父なる神を見るような関係を築くことが出来るかも知れませ
ん。私の、明菜さんとの出会いは、Sさんとの出会いのように、普通の事では済まされない
ものがあります。なぜなら、私は確実にSさんとの過去世を思いだしましたが、そのSさん
（神聖ローマ帝国の聖マチルダ皇后）と深いカルマ（縁）を持つ明菜さんと、私がこれまた不
思議な不思議な、とてつもなく不思議なつながりを「生まれながらに」持っているのです。何
度考えても驚嘆してしまいます。明かな神の御意志を示されており、疑う余地がありませ
ん。私は明菜さんとの関係という点において、神を信じます。つまり、明菜さんと私は「合う」
と信じることが出来ます。お互いに多くを学ぶことが出来ると思っています。余計な時間を
掛けずにプロポーズします。神の御意志によって私と結婚しましょう。

[中略]

11月4日（月）03：00頃、明菜さんに瞑想していたら、「水辺（海辺？ 湖のほとり？）での
感動」を感じました。半月程前にも、これを感じましたが、更に詳細な事が分かるように複数
の体験を期待していたのでした。そしたら、それを確証するように、再び同じ光景を感じまし
た。まずこれは確実です。明菜さんと私は水辺で深い感動を共有したことがあります。この
印象の確実度は、Sさんとの関係で、私が「人々の幸せを願いながら、中世の町並みを（多
分SCHLO・の上から）見ていた」体験と同程度です。まだ私は、はっきりとは明菜さんとの
過去世を思い出せていませんが、きっと何かの深いつながりがあると思います。これに似た
話があるので、そのコピーを同封致しました（マリア・ワルトルタの奇跡の著書「イエズスに
出会った人々」の第39話（285頁→2＋8＋5＝15→1＋5＝6故に、369かもね）の「コ
ロザインの美女の治癒」の話です）。
[中略]また、誰の事もだましていません。私の住民票のコピーをお送りします。明菜さんは
私を好きになってくれるでしょうか？ 不安です。ドイツ旅行をSさんに報告しました後になっ
て、私の名前に「夫」の文字が使われていることに気づいたのです。明菜さんの立場から私
をどのように見ているかも知れないかと言うことに気づきました。一挙に私は明菜さんとの
「結婚」を考えるようになりました。今日、11月23日（土）に、私の7月13日生まれの父がワ
インの「マドンナ」を買いに行こうと言うので、私が車を運転して、一緒に酒屋まで行って買っ
た後、帰りに、レストランCASA（所沢中央店）の、席B3（「兄さん」という解釈と「ブラザーサ
ン・シスタームーン」という解釈が出来ます）で、私が「きのこ風スパゲティ」を、父が「ネギト
ロ御飯」を食べているときに、12：10頃ものすごいことに気づきました（この時のレシートの
コピーもお送りします）。私は昭和35年9月生まれで、私の住む所沢市の郵便番号は359
で、どちらも「359」です。しかし、私の本籍地の番地だけが「395」なのですが、その理由
が分かったのです。私は平成3年9月5日を含めたドイツ旅行の日程を組みました。そして、
図らずも、電車のつながりの関係で、395の日には、聖ハインリヒ（7
月13日）が永眠されているBAMBERGへ行くことになったのです。Sさ
んにもそのビデオテープをお送りしました。「395」は、明菜さんと関係
してたのです。「395の人は7月13日の人」＝「本籍地の人は7月13
日の人」です。もうお分かりでしょう！「夫」の文字と、「395」の数字の
両面によって、明菜さんと私は、結婚するべく神が定めていたのです。
とてつもない祝福です。明菜ちゃん！ 私の395の本籍地に一緒に入
りましょう！お返事を下さい。私は明菜さんの住所を知りません。そして、私が決して嘘など
ついてないことを、私と会ってオーラを感じることで（極めてハッキリと感じるはずですから）
理解してほしい。もし何か不安ならば、第3者を複数連れて来て下さい。会うための日時と
場所を指定して下さい。そうすればその日その場所に行きます。そして私の両親にも紹介し
てあげます。でも、明菜さんも私に返事は下さらないのでしょうか。それでもいいです。私の
意向をお伝え致します。

『愛の奇蹟』（ホームページ）より。中森明菜に宛てた手紙の、これはごくごく一部

例というんですかね、それは、女性誌とか読んでたりしても、結構情報を得られるもんですよね。

——テレビからは、みなさんテレパシーとかで合図を送ってよこすそうですね。

萱谷　ええ、私としては、得られる情報は、そういうものしかないんですよね（笑）。他に具体的な手紙なり、電話なり、そういうものがないんです。みんな直接の関わりは決して持たない。

——しかし、そんな個人的な話をホームページで読ませてどうしようというんですか。

萱谷　私も、自分で作り上げてるんじゃなくて、まさにそうなってたものが展開しているだけなんです。たとえば、誕生日は自分でコントロールするものではないんですよね。聖子さんがサンミュージックにいたのも、私がそうさせたわけではない。もともとあったものが、まとまって来ているんです。それに従うことで、昔から言われてた「岩戸開き」が世に示されるんだと思うんですよね。

今、平成ですけど、「平」という字は一、八、十、つまり「イワト」と分解できますよね。だから今は、「岩戸が成る」「岩戸開きが成る」という時代なんです。

それと、ひとつ、ふたつ、みっつという、あの数の数え方に、岩戸開きの秘密が隠されているんですね。全部「つ」を取りますと「ひと、ふた、み、よ」、つまり人々に向かって「ふた」、ようするに「岩戸」を「見よ」なんですね。

そして、「いつ、む、なな、や」とクエスチョンがつくわけです。神が問いかけているわけですね。「いつ、む、なな、や、ここの、とを」。神が人々に向かって、「人蓋見よ。いつ無ななや？ここの戸を」、「人々よ、ここの蓋を見てみなさい。いつ、この蓋を無にするのでしょうか。ここにある戸を」と言ってる。

それが、今の「平成」なんです。それは、出口王仁三郎が霊的に仕掛けた神一連の仕組みが弥勒出現ということでなされるんですね。

たぶん、神はそう伝えたいと思うんですよ。私は、その駒としてね……位置としては中心的なものがありますが。

実はですね、この太陽系全体がオリオン座の光のベルトに近づいているんだそうで、もうすぐ、フォトンベルトに太陽系が突入するんですって。それは、いろいろなチャネリング情報とかから出てきているんですけれども。

そこで波動に乗っていけない人たち、つまり悪の方向に向かってる人たちは、自己破滅的な方向、分断されていく方向に落ち込むわけですね。でも調和した存在に向かっている善なる人たちは、このフォトンベルトの周波数に乗って、肉体、霊の境を、岩戸を超えてですね、次の時代に入っていけるらしいんですよ。神として、もっと善なる方向へ向かいましょうよ、というメッセージがあると思うんですよね。

——「情報は所有できないから流通させるべきだ」とおっしゃってますね。

萱谷　それは昔から思ってます。なぜなら、なんか友達に聞いても、みんな秘密にして、いろんなことを教えてくれないじゃないですか。なんか自分だけ言ってるばっかで、相手が何も教えてくれないんですよね。で、私の知らないところで、私の結婚を妨害とかしてね、そういった情報をいっさい隠蔽してるんですね。そんなふうなことから、なんか、もっと情報をね、という気持があったんですけど。

芸能事務所に所属して

――ホームページに載せている手紙は、所属事務所に郵送してるんですか。

菅谷　そうです、郵送してます。で、いろいろ彼女（松田聖子）も、歌としてね、反応してくれてております。「めぐりあえたね～」とかね、そういう歌とか……。いろんなCDに盛り込まれていると思うんですけれども。でも、芸能活動で反映してほしくないというのかな、もっと直接会って、直接、その彼女と話をしたいということで手紙を出していたんですけど、やっぱ駄目ですね（笑）。

実は、『愛の奇蹟』はホームページに先立って自費出版していて、芸能人にも配ったんです。工藤静香さんに与えた三冊は、一冊を中山美穂さん、一冊は誰か他の人。荻野目洋子さんは、また別の二人に、明菜さんは小泉今日子さんとアン・ルイスさんに渡してるんですね。その当時の、いろんな動き、たとえば、その三人で一緒になってテレビに出て、三人揃って、明らかに私の本をこの二人に渡したんだよ、みたいな……。本人と一緒に、その二人が出ていたりするんです。

で、聖子さんに渡した十一冊は、西田ひかるさんと堺正章さんとタモリさんと生島ヒロシさんにと、名前を列記してお願いしたんですよね。そしたら渡してくれたみたいで。いろいろ内容的に反応してくれるんですね。

――普通の女性とは、情報がないからつきあえないとおっしゃってますね。

菅谷　ええ、やっぱり地の神様、それを担っている人、母親の名前が千恵子だの、千都子だの、そういう名前でないといけないわけです。そういったデータがはっきりしてないと。神示には「三千年の神仕組み」とか言ってますからね。その責任を感じますんで。そういうデータが合えば、もちろん結婚相手として見るんですけど、そういうのが、ちょっと分かりませんからね。

――これまで、近くにいる生身の人を好きになったことはなかったんでしょうか。

菅谷　もちろんありましたけれども。恋愛関係とかにはならなかったですね。一年に何回話をしたみたいな、そういう感じです。

スブドの方では、二人いてどちらも数字的なつながりがあって、結婚相手として、接近もあったんですが、妨害とかがひどかったんで私が嫌になっちゃいましてね。

でも結婚というか、女性に接近すると、他の人が必ず妨害しますよね。なんででしょうね。かなり辛辣な妨害。裏でなにやら言いふらして、その内容を教えてくれないんです。無慈悲ですよ。どうして、そういうことを妨害するのかなあ。

――菅谷さんにとってホームページを作ることの意味は？

菅谷　神示にもありますが、とにかく表に出るということが課題なんですよね。今の、表に出られない状況が、岩戸で塞がれている状況と対応してるんですね。それを開けて、外に出るということだと思うんです。そのために、ホームページを作ったりしてるんですね。つまり社会的にメジャーな存在になるという方向だと思います。スブドなんかでも、私に関係することはすべて隠蔽されてましたから。形はともかく、課題が自分には与えられているので、それを果たそうというのが、まずあるんですね。

芸能事務所に属しているんですよ、私。いちおうタレントなんです（笑）。テレビ

とかにも、二回ばかし出たんですよね。オーディションを受けに行って、で、登録したんですよ。三十八万円取られましたが。
――それは、タレントさんの世界に、少しでも近づきたいということなんですか。
菅谷　そうそう、やっぱり表に出なくちゃということで。今回も、表に出る貴重なご縁をいただきまして、ありがたい限りでございます（笑）。

インタビューを終えて

拝啓菅谷さま
やはり、まず書いておくべきでしょう。ぼくはあなたの理屈がさっぱり分からない。いや、分かんないというわけではない。逆に分かりすぎるくらい分かる、というのが正確だな。ぼくだけじゃない。世間一般から見ても同じでしょう。あなたの展開なさっているような議論を、通常は「我田引水」と申します。
でも菅谷さん、あなたご自身も、そろそろそれを薄々感じ始めているのではないでしょうか。名前をローマ字にしてそれを数字にしてみたり、あるいは誕生日を西暦や元号で書いてみたり、そしてその数字をたしてって、たまたま一致した――それがどうしたんですか。
だって数字は十個しかないんです。たしたりかけたり割ったりしていれば、そのうち同じような数字に到達します。必ず。小中学生のときに、やりませんでしたか？　切符についている通し番号を四則演算だけで十にするゲームを。しかも菅谷さんのように、番地から誕生日から名前から、手当たり次第に動員していれば、たいがいの人とたいがいの関係は結べるでしょう。ついでにご両親まで動員すれば、もう何でもあり。さらに、東京の電話番号が八桁になって頭に三がついた、なんてのまで駆り出せば（でも菅谷さんは埼玉の人ではないですか）、どんな話だってできる。
気持は分かんないでもない。みんなそれなりにラッキーナンバーとか姓名判断とかやりますから。ぼくは昭和三十九年三月十三日生まれなので、なんか十三という数が出てくるとなんとなく親近感を覚えて嬉しかったりします。好きな女の子と相性診断をやって、バッチリだと、もう「やったぁ！」という感じになるのは、こりゃしょうがない。
でもそれは、ぼくがその相手に特別な感情を抱いているからこそ、意味ありげに思えるだけなんです。それを根拠に相手に迫ったところで、相手は「こいつはアホか」という顔をするだけです。
なぜかと言えば、そんなのは無意味だからなのです。同姓同名の人はたくさんいる。誕生日が同じ人もいる。たぶん菅谷さんの要求する「三重のシンクロニシティ」（三十だっていいんですが）なんて、ほとんど誰を相手にしてもでっちあげられるからです。
そういうラッキーナンバーだの姓名判断だの相性診断だのが何のためにあるかといえば、一つには暇つぶし。一つにはちょっとした話題。そして一つには、具体的な行動（告白するとか）のためのきっかけや心の支えみたいなもんです。「思い切っていけ！　絶対大丈夫だから」と言ってくれる友達の声援みたいなもので、あまり根拠はないのは分かってるんだけど、まあ空元気がつくからありがたい――そんなものです。
それを自分の世界の中心にできてしまえるというのが、ぼくには分からん。そして

この何十年にわたり、まったく何の成果ももたらさなかったその信念を、疑問にも思わずに未だに持ち続けられるというのも分からん。

自分ばかりではないか!

だいたい、なんのかの言いつつ、あなたのおっしゃってることは何もかも「私が私が」で、自分のことばっかではないですか。そりゃみんな、自分はかわいい。自分が特別だと思いたい。人の評価ってのは、その人が何をするかで決まるんです。出口王仁三郎が、弥勒が出現する云々と言うとき、それはべつに誕生日だの名前だのをいじくったら「567」の数字になるとかいうことを言ってるのではなくて、実際に何か事を起こして世界を救う力の持ち主が現れる、ということを主張したいわけです。

菅谷さんはご自分が弥勒だとおっしゃる。はあはあ。それは結構。しかし、弥勒ってなんだか分かってるんですか。弥勒として、あなたはいったいこの世で何をなそうというのでしょうか。迷える衆生にどのような救いをもたらそうというのでしょうか。そして、そのためのどんな力をあなたはお持ちなのでしょうか。どんなビジョンをお持ちなのでしょうか?

なんとか十字とかいうのが本当なのか、どっかの宗教でどんな扱いを受けているのかは興味のないことです(が、どんな宗教でも菅谷さんの考えてらっしゃるほど能天気な代物ではないでしょう)。でも本来、それは結果としてそうなっていただけの話。他人に対して影響力を持つような行動をとった人について、あとから考えてみたら、そう言えばいろいろ思い当たるふしがあったなあ、という話でございます。行動と影響力の方が先にくるのです。悟りを開くと耳たぶが長くなるというような言い伝えがありますが、だからと言って、ピアスマニアがやるみたいに耳たぶをのばせば悟りが得られるか? そんなこたぁないのです。

『愛の奇蹟』を拝見する限り、菅谷さんは特にこれといった力もビジョンもお持ちではないようですね。過去生を思い出したとか宇宙意識に吸い込まれたとか、ご大層なことをおっしゃるわりには、小心でチマチマした共産党のおばちゃんみたいなお手軽道徳がかすかに見受けられるだけ。そして弥勒だなんだというスゲー話をして、それで何をするかというと、それがひたすらご自分がテレビで見かけたアイドルタレントにすり寄りたいという、己の卑しい性欲の正当化に注がれる。しかもその手段が星占い相性診断に毛もはえないような代物。情けない。

他人が弥勒だというのであれば、証拠を

ホームページの母体になったという
自費出版本

見せるべきだ、と菅谷さんはおっしゃってますが、隗より始めよ。誕生日だの名前だのがどうしたとかいう段階を超えて、末法の世を救うに足る資質を世に証明なさってはいかがでしょうか。その方が松田聖子も工藤静香もかえってなびきやすいと思いますよ。芸能人どもが新興宗教に弱いのは、女性誌の熱心な読者たる菅谷さんなら百もご承知でしょう。連中は水商売なので、何かにすがりたくてたまらないのですから。

でも、そろそろそこらへんにはお気づきなのではないかと思うのです。さもなければ、まあ言うだけ無駄かな、という気はしないでもありません。あなたは基本的に、聞く耳持たない人なのですから。そして、それがおもしろいところなのです（悪い意味で）。

情報発信の虚妄

だいたい、ぼくは別に菅谷さんなんかどうでもいいのです。世の中にはいろいろな人がいます。菅谷さんみたいな人、というのはつまり、自分が弥勒だと思ってる人とか、中森明菜はオレのもんだと思ってる人とかですが（それを結合させた人というのは、世界広しといえども菅谷さんくらいかもしれませんが）、そういう人だってたくさんいます。

で、そういう人々が、これまた菅谷さんと同じように、ホームページなんかをこしらえたりして、しきりと「情報発信」したりしています。やれやれ。

そのほとんどすべてが、誰にも省みられていません。当然でしょう。だってそんなような話を、何が悲しくて見なきゃなんないのでしょう。それがぼくに何を与えてくれるとゆーのでしょうか。

にもかかわらず、みんなシコシコ、ホームページ作りに励むわけです。誰かが見てくれるのではないか、誰かが賛同してくれるのではないか、という淡い期待、またはこれだけは伝えなくてはという、誰にも共有されない義務感をもって。

でもある意味で、これは大きな進歩なのです。それはまた、「民主主義」の問題に通じるものでもあるのです。

多くの人は、ボスニアやルワンダやカンボジアで殺し合いが起きているのは民主主義が貫徹していないせいで、普通選挙を実現すれば平和になると思っているのだけれど、そんなのはウソです。民主主義ってのは、投票しましょうとかいう手続きの話だけではないのですもん。民主主義とは基本的に、ある決まった権威やプロセスを認めないで、いったんみんなが同じ立場だというところから合意を作っていきましょうという話。だから、今まで発言の機会がなかった派閥が、これからは民主主義です、みんな対等です、言いたいことを言っていいのですと言われて、みんな一斉に情報発信を始めるわけです。

ところが、それが一向に受け入れられない。発信しさえすればいいと思っていたのに、やってみたら全然勝手が違う。自分の発信する情報は見向きもされないのに、あっちの方ではバカな（と自分には思える）連中がトンチンカンな（と自分には思える）ことばっか言って、それが許し難いことに人気を博してしまっている。

ある人はそれを、「敵」のせいにするでしょう。誰かが悪質な妨害をしているから、自分の発信した情報が受け入れられないのだ、と。ちょうど菅谷さんが、小室哲哉が

ご自分の邪魔をしていると思ってるように。そしてもちろん力があれば、その「敵」を是が非でも殲滅しようと思うでしょう。今世界で内戦の起こっているところの、ほとんどすべてが新興「民主主義」国なのは、そういうことなのです。

インターネットの、特にホームページの素晴らしさは、原理的に「悪質な妨害」が難しいところにあります。これまで、メディアは少数の人々に押さえられていました。その業界にいる奴、すでにそことコネのある奴が自分を妨害していると考えるのは簡単です。

しかしホームページではそういう主張は通りません。実際に、これまではメディアに載らなかったようなものが、ホームページとして莫大な人気を博している例は無数にあります。逆に言えば、発信したものが受け入れられないのは自分のせいなのです。

実はそれは、これまでのメディアでも同じだったのです。「中身さえ持ってれば、メディアの方から頭下げてやってくる」とはよく言われます。そうならないのは、自分が発信したがってる情報が、あまり価値のないものだったか、あっても浸透するのに時間がかかるものだったからなのです。

墓石としてのホームページ

つまりインターネットが（学ぶつもりのある人には）教えてくれることは、コミュニケーションの双方向性という、本当は当たり前であるべきことなのです。情報「発信」は、簡単なことです。難しいのは、それを受信してもらうことなのです。そしてそのためには、発信する価値のある情報生産力を持つと同時に、自分もまた受信する能力を持っていなくてはならないのです。

ここで言う情報の受信というのは、「メールください」というボタンをこしらえとくことじゃない。自分の発信した情報が、受け手にとってどういう価値を持っていたか（いるか）というのを評価し、考えることなんです。そこでは、「情報がない」「反応がない」というのも情報なのです。そしてそれに合わせて自分（の発信する情報）を変えていかなくてはならない。それがコミュニケーションとゆーもんなのです。

菅谷さん。あなたは、非常に臆病な形とはいえ、これまでも現実の世界に対して、ジャリタレどもにレターを書いてみたり、変な本を自費出版してみたり、そしてパソ通やホームページ作りに手を染めてみたり、と情報発信を試みてきました。そして、それに対する反応がない、と悩んでおいでです。残念ながら、そうしたタレントたちからは、これからも決して手紙や反応が返ってくることはないでしょう。だって彼女たちは菅谷さんに応答すると、何かいいことあるんですか？　全然ないじゃないですか。

そして反応がなくても、菅谷さんは方向性を変えようとはしていませんでしたね。同じ方向をひたすらつき進めて、しばらくしたら相手を変える。でも、それが今、そろそろ行き詰まりを迎えているのではないか。お話を聞いていて、そのような気がいたしました。何か新しい展開を考えておいでとのこと、そして今までとは少し違う行動をとりだしていること、そこらへんにその兆候が見えています。

ただ、菅谷さんのような方が公開しているホームページには、別の意義（そう呼んでいいものなら）がないわけではない。ぼくが中学の頃に流行った、ポリスの「孤独のメッセージ」だっけな、そういう曲があ

ります。無人島にいる男が、救いを求めて毎日毎日、ビンにメッセージを入れて海に流します。来る日も、来る日も。誰かがそれを拾って読んでくれることを祈って。いつか、救いがやってくるというかすかな希望にすがって生きています。

　でも一年たったある日、その島の浜辺に、同じようなビンに入ったメッセージが幾百億も流れついているのです。みんな（おそらく）自分と同じように救いを求めて。

　相手のいない、無数のメッセージが漂っている浜辺――今のインターネットは、だんだんそういう状況になりつつあります。これは別に目新しいことじゃない。菅谷さんがやっていたような、お手紙だの自費出版だのビラまきだのはこれまでにもあった。でも、今のインターネットの持つ一つの意義は、そうした相手のいないメッセージ群を我々第三者が目撃できてしまう、ということです。そして「孤独のメッセージ」の主人公がその無数のメッセージが詰まった瓶を見て、「孤独なのはぼくだけじゃない」と思い、少し救われる（あるいは絶望し切る）ように、お互いに孤独であること、救いがないことを知りつつ、それが自分だけでないことを確認することで、ちょっとだけ気がまぎれるわけです。が、一方でそれは不毛でもあり、悲しいものでもあります。お墓参りのように。以前にこの『別冊宝島』で、インターネットはお墓のようなものになるかもしれない、と書いたことがあります。情報をいっさい受信することなく、ひたすら発信してばかりいる無数のページ群。それは本当に、墓石にいちばん近い存在なのです。

　十年以上におよぶコミュニケーション不全の時期を経て、菅谷さんはやっとその情報発信しかしない墓石（お望みなら天の岩戸でもいいでしょう）の背後から出てこようとしている。少なくとも出てこなきゃいけないなという認識はお持ちになっている。それがインターネットの効用なのか、いい加減もういい歳だからなのかは分かりませんが、ご健闘をお祈りいたしております。

　が、恐いのは、その「表に出る」のが非常に屈折した、はた迷惑な形で出てくることなんです（その可能性は大いにあるのです）。十年にわたり、墓石の後ろにいた菅谷さんは、いわばゾンビのような存在です。そのゾンビがこの世に戻ろうとして、何か極端な手に出るのではないか、もっと派手な情報発信をしようと試みるんじゃないか、それだけが心配です。菅谷さんがとらなくてはならない大きなステップとは、さらに大きなメッセージを送ることではなく、それを他人から受けとることなのです。そのメッセージとは、宇宙人の合図や曖昧なほのめかしではなく（彼は宇宙人なんかではないのです）、アイドルがテレビから送ってくる身振りやテレパシーでもなく（それもあなたの想像にすぎないんです）、宗教書の深読みでもなく、まして誕生日占いなんぞではございません。それはあなたに直接触れている生身の人間が、具体的にあなたに対して告げてくれる、要領を得ない、でも本当の意味でのメッセージなのです。

敬具

溢れ出た自我の行方

吉外につける薬・序章

独創性、個性という強迫観念によって刺戟された自我が、
肥大し溢れ出している。
吉外との遭遇体験を通して説く、極めつけの正論！

呉智英（評論家）

一九八一年、三十五歳の時、私は初めての単行本を出した。文筆業者としてまがりなりにも一人前、商人で言えば自分の店を持ったようなものである。刷り上がった本を手にし、誇らしさと面映ゆさの中で、私は読者には誠実に対応してゆこうと心に誓った。これも、店を構えたばかりの若き商人がお客を大切にしてゆこうと決意するようなものである。

読者からはよく手紙が来た。これには必ず返事を出した。それもおざなりなものではなく、激励にも質問にも議論にも相談にも丁寧に応えた。高校時代にある著者に手紙を出し、返事をもらったことがある。その感激が強く記憶に残っていたからだ。

しかし、ほどなくして、この誠実は論語に言う「諒」（馬鹿正直）ではないかと気づいた。手紙の中には吉外からのものが時折まじっていたのである。吉外に馬鹿正直に対応してもしかたがない。吉外と馬鹿とでは、似ているようで力に差がありすぎる。勝負にならぬ。馬鹿正直では負けである。私は、吉外だけは例外として黙殺することにした。

思想ストーカーからの贈り物

ここに言う吉外とは、必ずしも医学的意味における精神異常ではない。精神病を治療中の読者からも悩みを訴える手紙をもらったことがある。私は、自分の任ではないので、担当医師とよく相談し、根気よく治療するよう返事を書いた。はっきり病気だと診断がつけば、治療することができる。著効のある薬もできている。問題なのは、診断もできず治療もできない社会現象とし

ての吉外である。『バカにつける薬』は何年か前に私が発明、いや、上梓した。しかし、吉外につける薬までは手がまわらない。私は「諒」をやめて「権」(リアリズム)を採ることにした。

もっとも、「諒」から「権」への転換は一気に生じたわけではなかった。何度か不愉快な目にあって、吉外だけは相手にしないリアリズムに転じたのだ。

軽度の吉外は、大意、こんな手紙をよこした。

自分は先生の著作を愛読している。大変に面白いと思う。ところで、自分は画家であって、同封した写真にあるような絵を描いている。先生の御批評を賜りたい。

手紙には油絵を写したシロート写真が数枚同封されていた。その油絵も写真同様、シロート油絵であった。私はそれでも、この絵にはあなたの雰囲気がよく表現されていると思う、というような意見を書いて返事を出した。「あなたの雰囲気」が「よく表現されている」のは嘘ではない。誠実な商人は嘘をつかない。御試着のこのブラウス、お客様の雰囲気がよく出ていますよ、と言うのは嘘ではない。女優のようにお美しいですね、と言って初めて嘘になる。私も嘘をつかず、誠実に返事を書いたのである。

ところが、軽度の吉外は折返しまた手紙をくれた。

先生、嬉しい御返事をありがとう。さすがお目が高い。前便の写真のあの絵は、私の十年の画歴の中でも最高の自信作なのです。ぜひ先生の次回作の表紙に使ってください。

私はまた誠実に返事を書いた。

あなたと私では、残念なことに雰囲気がちがっています。どなたか雰囲気を同じくする作家と組まれてはいかがでしょうか。私はこの世界では新参者ですので、どんな作家があなたと雰囲気が同じであるかよく知らず、御紹介できないのが、これまた残念です。

軽度の吉外は、これで終りだった。重度の吉外は、こんなものではない。

ある時、私の部屋の郵便受けに西尾幹二の本が投げ込まれていた。仕事柄いろんな本が送られてくるのには慣れているが、郵便物としてではなく、ジカに本が投げ込まれていたのは初めてである。それでも私は、郵便配達中に封筒が破損したのでジカ本が入っていたのだ、と理解した。いや、そう理解しようとした。

それから数日して、差出人不明の手紙が来た。あの本を読んだか、良いことが書いてあるだろう、というのである。

西尾幹二にはテレビの討論番組で会って面識もあるし、著作も何冊か読んでいる。意見を同じくしないとしても学ぶべき点の多い学者である。それにしても、何者が何のつもりでジカ本投げ込みをし、偽名の手紙までよこしたのだろう。そもそも私がこの部屋に住んでいることをどうして知ったのだろう。

と不審がる間もなく、またしても西尾幹二の別のジカ本が投げ込まれ、数日後には同様の手紙が来る。

こんなことが何回も続いた。どうも私は監視されているらしい。いよいよ夏目漱石なみになったか。私の文運もますます隆盛だな。と喜んでいる場合ではない。戸締りに気をつけるようになった。

photo▶小島義秀

この重度の吉外は、どうやら思想オタクあるいは思想ストーカーらしい。論壇の細かな事情に奇妙に詳しいのである。手紙にある差出人の偽住所が、某や某々や某々々といった評論家の自宅の住所なのである。文筆家名鑑のたぐいを〝愛読〟しているのだろう。とにかく無視するに限ると、以後この重度の吉外の手紙は中も見ないで捨てることにした。

「中島みゆき論」と告発状

もっと重度の吉外もいる。こ奴はすごかった。先の二人の吉外は、とにもかくにも私の本の読者である。私に関わりがあると言えば言えよう。しかし、この最重度の吉外は私の読者ですらなかった。

関西の某県に住むこの最重度の吉外は、何度か私に手紙をくれた。中島みゆきについての感想のようなものが書いてあった。私が中島みゆき論をあちこちに書いたり、彼女と対談したりしたことを知って、手紙をよこしたのである。私の中島みゆき論に触発されたとすれば、彼もまた私の読者なのだろうか。そう思って、彼の中島みゆき論、というより感想文のようなものを批評して返事を書いてやった。教師が夏休みの宿題の小論文を採点して、よくできました、九十点、と書いてやるようなものだ。よくできましたといったって、エリオットの詩論に匹敵する出来栄(できばえ)だという意味ではないし、九十点というのも、ティボーデの小説論に肉薄しているという意味ではない。青少年に対する教育的配慮というやつである。

しかし、最重度の吉外は、批評家のベリンスキーが若きドストエフスキーを発見して感嘆したのだと思ったらしい。ベリンスキーはドストエフスキーに、すぐに家(うち)へ来たまえ、物事の本質をつかむ君の才能について語り合いたい、と伝えた。二人はともにペテルブルグに住んでいたのである。私はこの吉外に、家へ来たまえ、君のさしてあるとも思えない才能について語り合いたい、とは一度も言っていない。しかし、ある夜、突然、彼は来た。彼と私は同じペテルブルグに住んでいるわけではない。私はトーキョーのイケブクロ、彼は関西の某県である。新幹線に乗ってわざわざ来たのである。

夜でもあった。年末で原稿の締切りに追われている時でもあった。とにかくお引き取りを願った。

少しして、彼から手紙が来た。中島みゆきに会いたいので紹介してくれ、というのである。紹介も何も、私は彼女と別段懇意なわけではない。連絡だってマネージャーを介している。当然、断りの手紙を書いて

やった。異常な行動は慎しむよう、教育的配慮に満ちた文章も添えて。

数日後、彼から告発状が来た。お前の書いている中島みゆき論は、これまで自分が送ってやった中島みゆき論の剽窃である。しかるべき謝罪か弁明がないならば、このことをマスコミに訴え出る、というのだ。

さすがに、もう返事は出さなかった。これ以上、この最重度の吉外の相手をしていれば、本物の「諒」である。

その後、彼から連絡はなかった。しかし、最近、ある書評新聞の広告で、関西の零細出版社から彼が自費出版に等しい中島みゆき論を出しているのを知った。中身がエリオットなみかティボーデなみか、ベリンスキーではない私には、というより、そもそも読んでいない私には、何とも言えない。

民主派・人権派のオカルト好き

私は「狂」の意味を認める。論語を愛読している以上、当然だろう。論語子路篇にこうある。

「狂なるは進取」

早稲田大学の校歌の一節に「進取の精神」とある。吉外の精神という意味ではない。理想に衝き動かされるようにひたむきに進むという意味である。それはいわば理想に取り憑かれているが故に「狂」なのである。孔子の思想的正嫡を自任する孟子も、その言行録たる孟子の尽心下篇で、人物の練れた常識人より「狂」の方が理想主義者に近いことを強調している。

碩学白川静は「狂字論」（『文字遊心』所収）で、「聖」と「狂」が一つの円環の上にあることを指摘し、書経の次の句を引用している。

「これ聖なるも念うことなくんばすなわち狂となり、これ狂なるもよく念うときはすなわち聖となる」

「聖」の足元に「狂」はあり、「狂」はまた「聖」への可能性を秘めている。とは言うものの、孔子は手放しで「狂」をほめているのではない。次の言葉には苦いものが感じられる。

「古えの狂や肆、今の狂や蕩」（昔の狂は型にとらわれないことだったが、今の狂はただのでたらめである）　陽貨篇

「狂にして直ならず」（狂なのに真直でない。これではどうしようもない）　泰伯篇

孔子の仮想した典雅なる古えの世では、「聖」のすぐ隣に「狂」は席を得ていた。しかし、時代が下り道の失われて久しい今の世では、「聖」を見出せぬだけではない。「狂」さえも堕落し、でたらめやひねくれになっている。孔子のそんな嘆きが聞こえてきそうだ。

しかし、孔子の嘆きは、さらに時代の下った現代にこそふさわしい。現代では「聖」は「俗」に侵食され、「狂」もまた「俗」の中に溶解してゆく。

「俗」に侵食された「聖」は、オカルトブームとなって骸をさらしている。誰もが、どんな凡庸であっても、さしたる努力も覚悟も要せず、容易に「聖」の領域に入れる。これがオカルトブームの本質である。

古典的科学啓蒙家たちは、オカルトブームに民主主義の危機を、また未成熟を指摘するのが常である。しかし、これは全くの逆だ。自由・平等の理念が聖俗の境界を崩し、個性尊重によって肥大した自我が神秘

主義に安住の地を見出している。これが現代のオカルティズムなのだ。

民主派・人権派の中にオカルト好きが散見できるのは、意外なようで意外ではない。ニューヨーク州立大学で女性学を専攻するフェミニズムのT・カネハコも超能力の信奉者である。誰もが持っている超能力、という観念が彼女を魅了したのだ。ハイスクール時代に天文少女であり、しかしその後天文学について特に何も学ばなかった彼女は、星占いも愛好するようになった。天文学とはちがって、誰もが宇宙の秘密に触れることができるからである。

霊感美大生たちの「肥大症」

近藤雅樹『霊感少女論』は、オカルト好きの少女たちがここ二十年ほどふえている現象を都市民俗学的に、あるいは社会心理学的に分析して興味深い。この中で近藤は、こんなことを述べている。

一九七〇年代以前の学生運動家や労働運動家に代わるものとして霊感少女が出現した。両者は、集団行動を採るか個人行動を採るかというちがいはあるが、ともに、変革の機運をたかめる自己主張をし、反体制的な自由を求め、自分の存在価値に優越意識を抱く、という一致点がある。

また、こうも言う。

霊感少女たちは、説明体系らしきものも世界像めいたものも持っている。しかし、その構築に、真理をきわめようとする強固な意志も、行動力も、洞察力も、感じ取ることはできない。

近藤が「霊感少女」という着想を得たのは、学生時代のことだったという。美術系の大学に進んだ彼は、占星術や霊視に走る女子学生が大学一年を終える頃からふえることに気づく。彼女らは一様に、凡庸な才能しかない美術学生であった。しかし、彼女らも美術大学に進学するぐらいだから、高校までは〝天才的な〟美術の才能を発揮していたはずである。だが、美術大学に進学してみると、高校のマリー・ローランサンは美大の東郷タマミでさえなかったのである。彼女たちはほどなく霊が見えるように、いや、霊が見えると主張するようになる。肥大し溢れ出した自我は霊が回収しているのだ。

近藤が体験的に語る霊感美大生たちを、一般的な挫折感や劣等感で説明したのでは不十分である。

田舎町一番の秀才が首尾よく東大法学部に入学し、そこで自分をはるかに超える秀才たちに会って挫折感や劣等感を味わうことは珍しくない。だが、彼らの一パーセントも霊感東大生にはなるまい。彼らは挫折感や劣等感をも体験した秀才としてやがては社会に出てゆく。たとえ挫折感や劣等感があったとしても、法律学の社会的有用性が彼らを支えてくれるのだ。さほど学業成績がよくない学生にも、社会は所を得さしめる。東大に及ばない大学でも、また、法学部以外に経済学部でも工学部でも、それは同じである。

しかし、美術はちがう。社会的有用性はそもそも期待されていない。ただミューズの女神が微笑んでくれた時のみ、それは意義を持つ。しかし、彼女を微笑ませる才能なんて本当に希有(けう)のものだ。社会的有用性を意識せず、ただミューズの女神を微笑ませることだけに心を砕いてきた青年が、ミ

ユーズの女神からもソッポ向かれた時、霊に走るのである。

ミューズの女神は気難しい。めったに微笑んでくれない。だが、「聖」が「俗」に侵食された現代では、女神は誰にでもすぐにでも微笑んでくれそうだ。学校でもマスコミでもそう教えるからだ。しかし、学校やマスコミが何と教えようと、ミューズの女神はめったに微笑まない。

「俗」に溶解してゆく「狂」も事情は同じだ。

狂なるは進取。しかし、今や進取は、ただ目立ちたいだけの自己顕示であり自己主張である。練れた常識人の顰蹙を買えば、それが「狂」だと厚顔にも思っている。それは「狂」ではなくただの吉外である。狂にして直ならず。直ならぬ歪んだ病理も、個性尊重・自己実現という強迫観念の産物なのだ。そして、かかる強迫観念を広めているのが学校でありマスコミなのである。

非凡に急き立てられた平凡の末路

教育について、まず、根本的な誤解を解いておかなければならない。教育の目的は、個性の尊重でもなければ自己実現でもないということだ。

教育とは平凡への強制である。私が言い出したことではない。柳田国男や宮本常一が言っていることだ。教育の本質は平凡への強制なのである。反論があるかもしれない。それなら非凡な才能が潰されてしまうではないか、と。だが、心配は無用。平凡への強制で潰されてしまう程度の非凡は非凡ではないのだ。平凡へ強制されたとしても平凡ではありえないからこそ、非凡は非凡なのである。大多数の人はどうせ平凡にしか生きられないのだから、早目に平凡教育をした方がいいのだ。

何年か前話題になった、運動会で一等、二等を決めず、全員仲良く入賞とするというようなことは、平凡への強制ではない。二十年ほど前、全共闘運動を体験した若い教師たちが試験の採点を拒否し、クラスの児童全員に百点をつけたのも、平凡への強制ではない。全く逆の個性尊重主義、自己実現主義である。そして、成績優秀な秀才が東大法学部を目指すのは、実は平凡への強制の極致である。その他、社会的有用性を身につけさせるべく、個性に合った教育をし、自己実現の後押しをすることは、もちろんどれも平凡への強制なのである。

音楽や美術の教育もしかりである。

音楽は個人と社会をつなぐ。論語に言う。「詩は以て群すべし」(歌は社会性を養うことができる)と。合唱曲も、交響曲も、行進曲も、すべてそうだ。そのために型がある。

他でも書いたことがある。一九七九年、型にとらわれない自由で個性的な音楽教育が惹起した事件があった。童謡の『おサルのかご屋』の中に、かご屋の掛け声が出てくる。「えっさえっさえっさほいさっさ」である。なぜ「えっさえっさ」と問うなかれ、これが型なのだ。しかし、型にとらわれない自由で個性的な音楽教育を目指す教育関係者たちは、型にとらわれず、子どもたちにこれを「えったえったえったほいさっさ」と歌わせたのだ。目的に悪意も差別意識もない。自由で個性的で独創的な、型にはまらぬ音楽を目指した結果がこれであった。

"個性的"自殺へと至るマンガ家

美術の場合、個性や独創性の強調の結果現れたのが、霊感少女たちであった。

広義の美術であるマンガの世界に関しては、私の評論活動が対象とする分野であり、生々しい話をいくつも知っている。マンガは教育と無縁の場所から生まれただけに、個性や独創性の強迫観念がより強まるということもあるだろう。とりわけ女性作家に霊感や超能力に走る人が多い。

しかし、霊感や超能力に走れる人はまだしも幸せかもしれない。霊の取り憑く余地のないほど個性や独創性の強迫観念に強く取り憑かれたマンガ家は、個性と独創性を墨守して吉外になってゆく。

マンガ史を具(つぶさ)にふり返ってみればわかる。死屍累々、独創性の墓場である。使いものにならなかった個性で埋め立てた夢の島である。

羽鳥ヨシュアというマンガ家がいた。十五年ほど前に二十九歳で自殺している。よほどマンガに詳しい人でないと、その名に思い当たることもないだろう。『夜行』以外では事実上作品発表をしていないからだ。そもそもその『夜行』という不定期刊誌を知っている人が少ない。『夜行』を「やこう」ではなく「やぎょう」と読むことだって、どれだけの人が知っているだろう。草創期の『ガロ』編集部にいた高野慎一(筆名、権藤晋)が、そこを辞めて一九七二年に創刊した。『ガロ』に輪をかけて『ガロ』的と評される雑誌である。

羽鳥ヨシュアについて、その権藤晋が「マンガ30年史」と副題された『ガロを築いた人々』のなかで、一章を割いて扱っている。これを読んだのは、同書の出た一九九三年のことだが、その時、九割の怒りと一割の自省の念の混じった名状しがたい不快感がこみ上げてくるのを覚えた。

羽鳥ヨシュアは一九七七年に初めて『夜行』編集部に現れた。『ガロ』に何度か投稿していたが、『ガロ』の編集者から、こんな暗い作品は『夜行』にでも持っていったら、と言われて持ち込んだのである。

やがて、『夜行』に作品が載るようになる。しかし、小さな出版社では原稿料は安く、しかも不定期刊誌である。作品が載っても生計への寄与は期待できない。羽鳥ヨシュアは『夜行』編集者の助言と世話で小さな古本屋を開いた。だが、それもすぐに行きづまった。

ある時、羽鳥ヨシュアは自殺をほのめかすことを言った。「そのときすでにただの冗談ではないと気付いていた」と、権藤晋は書いている。それからしばらくして、本

当に自殺した。その日のことを、権藤はこう書く。

「三時頃、羽島さんが編集室のガラス窓をたたいていた。妙に真剣な顔をしていた。入るように合図すると、入ってくるなり、明日死にます、と憤怒の形相で言った」。権藤晋たちが他の来客に気を取られていると、「じゃあ、とだけ言って出ていってしまった。私は追いかけようかと迷ったが、やめた。もう手遅れなのだと悟った。それから二時間後に、渋谷警察署から電話があった」。渋谷のビルから投身自殺をしたのである。

ある精神医学者の名言

　これを読んで私が九割の怒りを感じたのは、権藤晋たちが羽島ヨシュアを殺したようなものだからである。それも、羽島に冷たくし、つき放したから、自殺したのでない。むしろ逆である。その暗い陰鬱なマンガを掲載し、喫茶店で夜遅くまで議論につき合い、小さな古本屋開業の世話までし、その結果、羽島はもう「平凡な世界」に戻れなくなって死んだのである。

　私が一割の自省の念を感じたのは、この種の罪深さに私も無縁ではないからである。評論家は最も残酷な鑑賞者かもしれない。一顆のダイアモンドの輝きのために削り取られたクズを顧みることはない。私はこの罪深さを覚悟している。しかし、権藤晋にはこの覚悟がない。羽島ヨシュアをダイアモンドに仕立てようとしている。いくら削っても磨いても、石は石である。なまじ削らなければ漬けもの石になったろうが、削りに削って小指の先ほどになった。それは十カラットもあるけれど、十カラットあるただの石ころである。

　精神医学者とこんな話をしたことがある。個性的な絵を描く吉外の青年がいたとしよう。というより、吉外はえてして個性的で独創的で衝撃的な絵を描くものだが、そんな時、私が彼の中学か高校の教師だとしたら、どんな指導をしたらいいだろうか。精神医学者は答えた。古典作品の模写をさせるといい。

　私は感動を覚えた。自然科学系の、それも医学という実用学の業績に、敬意を払うことはあるものの、感動を覚えることはそうない。その希な感動を覚えた。古典の模写、すなわち、平凡への強制である。

　精神医学者は言う。その少年に本当に独創的な才能があるのなら、模写によって身につけた技術ですばらしい傑作をやがて生むだろう。もし、独創的な才能がなかったとしても、模写で身につけた技術は、彼の生活の基盤を作る。看板屋になるもよし、文化財復元の学芸員になるもよし、その他いくつもの職業選択が可能になる。それに、模写は社会性・歴史性を獲得させる。自分と他者との関係の取り方がわかるようになる。

　その通りである。ひるがえって精神医学以外に目を移すと、「模写」も模写さるべき「古典作品」も見えない。独創性、個性、という強迫観念によって刺戟された自我は肥大し溢れ出し、本来、それを回収していた「古典の模写」はその機能が眠り込んでいる。溢れ出た自我は、手紙となり、投稿となり、持ち込みとなり、自費出版となり、日本全土を夢の島に化そうとしているように思える。

PART 3
電波来襲!!

自費出版の叫び！

電波の迷宮を歩く

それは、ある出版広告がきっかけだった。
「電波障害」と勇猛果敢に戦う人々との出会い。
果たして誰が、何の目的で電波を飛ばしているのか？

田中聡（フリーライター）

きっかけは、『朝日新聞』に出ていた『武器としての電波の悪用を糾弾する！』という本の出版広告だった。その宣伝文はこうだ。

「21世紀は電波による支配の時代か？／電波の悪用にさらされている、著者の、実体験からの証言！　著者の警告に、クリントン大統領は、エリツィン大統領は、金大中氏は、ローマ法王は、アナン国連事務総長は、そして各国の首脳は、いかに答えるであろうか」

発行は、千葉県八街（やちまた）市にある石橋輝勝事務所。フリーダイヤルで注文を受けつけていたので、さっそく送ってもらって読んでみたら、やはり驚くべき内容が満載されていた。苦痛に満ちた自らの体験にもとづく訴えを記した、世界百九十一カ国の首脳および国連事務総長に宛てた手紙や、クリントンをはじめ広告に名のあった人たちに出した手紙を中心として構成されており、その解説、また石橋輝勝さんがこの十年間に体験してきたことを世界史上の出来事とあわせて並べた年表も付されている。世界各国に訴えねばならぬほど、事態は壮大な規模で進行中なのだ。

一度お会いして、話を聞いてみなくてはなるまい。そう思ったときから、僕は電波とレーザー光とが交錯する、目も眩むような迷宮へと踏みこんでゆくことになったのだった。

映像地獄

八街市は、落花生の産地として有名な土地である。冬には、厳しいカラッ風が吹きつけるという。石橋輝勝さんは、ここで文

房具屋を営む両親の元に生まれた。現在、四十四歳。きわめて真面目そうな風貌や態度が印象的で、その印象にたがわず、話し方もハキハキとして明晰だ。

一九八六年、石橋さんは、十年間勤めた会社を、高校時代からの志であった政治家となるために退社。まずは英語、そして政治学の勉強をするためアメリカへ、続いてイギリスへ留学した。明らかに異常な事態が始まったのは、イギリスでだった。一カ月の語学研修を受けたエセックス大学で書いた小論文を、さる高名な物理学者が読んでヒントを得、それで初めてアインシュタインのある論文の一節が理解できた、というイメージが挿入されてきたのだ。

「イメージの挿入」とは、電波による攻撃の一典型であるらしいが、このときはまだ映像的ではなく、石橋さんはそれが電波によるものとは気づいていなかったという。

続いてノッティンガム大学で学ぶようになってからは、最初のうちは「むちゃくちゃ好意的に、私を特別だと、天才を見るような目で見て」いた周囲の人々の態度がだんだんヘンになっていった。自分を追いつめようとしているように感じられてきたのだ。

とくに冬の休暇から戻ってきてからは、自分を睨みつけてくるほどに教授の態度が悪化した。あえて原因を求めるなら、それは休暇前に提出した論文で、スターリンは政治力学で動き、その政治力学によってはじき出されたユダヤ人が、結果として迫害されたのではないかと書いたことが、ユダヤ人には不快であったろうということが思

いあたるぐらいだったという。
　そして次に論文を提出した夜、ほっとひと息ついていると、下宿先の大家が「青筋立てて、恐怖におののいているような顔で」、部屋へやってきた。そして、帰りぎわに「オール・ユア・ベスト！」と言ったのである。

電波攻撃の驚異を語る石橋輝勝さん。いったい誰が、何の目的でこんなことを……

「映画だったか、どこかで聞いたことあるなあと思ったんです。たしか、殺されるときに誰かが言われる言葉じゃないかなあ、というイメージがありましてね。その少し前にも、大家の奥さんが同じように、やっぱり〃オール・ユア・ベスト〃って、それも語気強く言って帰ったんですよ。それで、これは危険だと思って、すぐにそこを出たんです。スコットランド方面を回ってから、一度は（下宿先へ）戻って、学部長に連絡とったりしたんだけど、安心できないんです。今にも殺されるかと眠れもしない。これでは論文も書けないし、帰国するしかなかった」
　こうして日本に戻った石橋さんだが、本格的な電波の攻撃はそれからだった。イメージの挿入は、テレビを見るように、はっきりと映像化されるようになった。それは脳に直接送りこまれるので、目の前の景色とは別のもう一つの映像として、同時に見えるのだという。
　尾行、拉致のイメージに、裏道に隠れて、それらしき車を撒いたこともある。ホモのしわざとおぼしき金縛りにあったときは、腰や尻をなでまわされた。
「節々に意思を入れてくるんですよ。たとえばトイレに入ったときに、ニタニタと笑う男の映像を入れてきたり、ちょうど拭いたところに〃汚ねえな〃という意思を入れてきたりね。食べてるときや歯を磨いてるとき、つまり顎が動いてるときは、脳を回転させやすいらしいんですね。そういうときによく入ってきます。映像は、車を運転してるときにも入ってきますし。胸のあたりを振動させるのは、これを継続されたら発狂するにちがいないっていうほど凄い電波です。あれを続けられたら間違いなく発狂しますね。耐えられないですから」

電波支援部隊

　このように苦痛に満ちた日々のなかで、もっとも厳しい状況になったのは、水道水が「グリスでも混入したように」ベタつきだしたときだった。
「九五年の五月十七日に始まりまして、この時点では電波だと分からなかったんです。

水道水に薬物が混入されてるんじゃないかと思って、水質検査もしたんだけど、はっきりと出ないんですね。しかし、とても飲めるもんじゃないんですよ。

水を汲みに、近くの学校へ行ったり、別の町へ行ったり、とうとう富士山の近くの清水が湧いてるところまで行きました。それでも駄目なんですよ。もちろんミネラル・ウォーター買っても、同じです。仕方がないので、その後は、雨水を集めて、それを濾過して沸騰させて飲んでたんです。

そうして水を確保するために、ポリバケツを持って走り回っている間に、警察が私を守ってくれてるというイメージが挿入されてきたんですが、その警察が二つに分かれたんですね。一つは、発信機をもって電波を発している連中のイメージ。もう一方は、それをなんとか解決しようとしているイメージ。このとき初めて、電波による攻撃だと分かったんです。だから、どこへ行っても、電波によって水を変えられる」

こうして、これまでの数々の異常が、すべて電波による攻撃であったと、石橋さんは理解した。

映像に現れた電波発信機はハンディなものだったが、それだけではなく、おそらくは人工衛星などを利用して、特定の個人の特定の部位を、どこにいても「ピン・ポイント攻撃」できるようになっているという。

イメージ挿入や、寝ているうちにアイデアを盗んだり送りこんだりする「脳の共有化」、思考力、食欲、性欲などの操作が自在にできるばかりでなく、人に便意を催させたり、下痢をさせたり、腋臭や屁を始めとする体臭を漂わせたり、作られた夢を見させたり、記憶を操作したり、恋情やさまざまな感情を操ったり、歩いているところをつまずかせたり、ほとんどあらゆることができるのである。

もちろん人間だけでなく、機械や自然環境のコントロールもできる。三原山噴火や阪神大震災なども、電波によるものではなかったかと、石橋さんは考えている。

また、さまざまな異常は、「電波支援部隊」の活動によっても強化されているという。「電波支援部隊」とは、電波を悪用している者たちに利用されている人々のことである。監視したり、交通渋滞を仕組んだり、四や九のついたナンバーの車で来て目につくようにしむけたり、さまざまな嫌がらせをする。能の鑑賞に行けば「舞台の上から、囃方、謡の連中が睨みつけてくる」こともあった。

「鼓の連中なんか凄いですよ。よくやるなと思うくらい、ジーッと睨みつけてきますよ。彼らがいることで、電波がひときわ効いてくるんです。

私が家を出ると、すぐに車を走らせてきたりもする。これを毎日やられると、凄いですよ。心理的に追いこまれると、もうどうでもいいと、飛びこんでしまいたい気持になるものなんですよ。

店に出てたら、客が札を裏返して出してくるんです。一人ならいいですよ。次から次にです。おかしいと思いますよ。それで、なんで裏返しにするんだって言ったら、客に向かって何言うんだってことになる。それで怒って帰った客もいますから。そこにまた電波を発してくるんです。落ちこむような電波があって、両方で相乗作用になるんです。精神的ダメージを与えるんです。実にうまくやりますよ、うまいもんです。

石橋輝勝©氏作成「経験に基づく電波悪用表」

人に対する悪用

脳への介入
1 意思を覗く
2 映像・意思を送る
3 イメージの挿入
4 狂人化
5 思惟への介入
6 脳の共有化
（嘘発見機の完成と就寝中の覗きの重要性）
7 思惟の抑圧および活発化
8 決断の抑制および翻し
9 夢操作
10 忘却・想起（記憶力操作）

本能操作
1 食欲操作
2 性欲操作（同性愛化）
3 睡眠欲操作

感情操作
1 躁鬱の操作
2 憎しみの増幅および緩和
3 神経質化
4 恋心
5 衝動操作

身体諸機能の操作
1 排泄操作
2 体臭操作
3 ガスの発生
4 疲労操作（視力操作と脳の動きとの関係）
5 金縛り（体全体と局部的な金縛り）
6 運動機能の操作
7 体調不良
8 アレルギー化
9 乗物酔い
10 かゆみ、しびれの操作
11 癖を著しくする
12 筆跡操作
13 涙腺を緩める

機器への悪用

信号操作
電話の操作
ワープロの操作
コピーの操作
テレビ・ビデオの操作
車のエンジンの調子の操作
（携帯電話の発する電磁波の医療機器への影響等）

自然環境への悪用

気象操作
水の異常化
植物成長の異常化
風の発生（竜巻の発生）
波の操作（地震・火山の噴火）

だから、電波支援部隊と電波というのは密接なんです。電波だけでも、狂わすことも殺すこともできますけど、徐々にやるとしたら支援部隊が大切なんですね」

ある「畜生組織」の陰謀

そんな数々の攻撃のなかでも、やはり水の問題は大きかった。それで旅行に出ようと考えた。家族にも迷惑がかかるからだ。

「すると今度は、飲食物に何か入れられてるというイメージが入ってきたんです。食べ物の味がおかしいんですよ。下痢したりとかね。

スーパーマーケットに買い物に行ったとき、あれにもこれにも薬物が混入されてるというイメージがあった。五月五日に日本全国の柏餅に薬物が入っているというイメージもありました。そのときは、私がそれを買って、置いて帰ると、そこに警察関係の人が来て薬物検査をするというイメージがあったんです。だから、私はそこらじゅうのスーパーマーケットを回ってですね、買い物かごの中に入れて置いてくわけです

よ。盗みやしないですよ。ただ置いとくだけ。スーパーにすりゃ、たまんないでしょうけど。

それが私の町だけじゃないということを証明しなくちゃならないということもあったんで、各地を回り始めたんです。すると今度は病院で殺人計画が進められているというイメージが来た。私が行かないと警察は調べられないというイメージでしたので、私は正義感から、ほとんど日本全国を回るような目にあってしまったんですね。北海道、沖縄以外は回りました。

各地のメインの県立病院や大学病院に行って、じっとしてるだけでいいんです。警察が、ハッカーみたいにインプットされてるのを盗みとるようなかたちでやってましたから。私は、待合室にいたり、駐車場に立っているだけでいい。今考えるとバカみたいですけど。いい警察がいると思ってましたから」

結局、警察のイメージは「ヤラセ」であったと、石橋さんは後に気づいた。ここには紹介しきれない数々のイメージによる「ヤラセ」「演出」に、石橋さんは振り回され、神経をすり減らされてきた。

「ヤラセ」というのは、送られる映像が本当のことではないことが多いからだ。政治家、宗教団体、学者などのさまざまな登場人物、ときには宮沢りえ母娘までが登場するリアルなヤラセ映像を撮影し、人工衛星などを使って、特定の個人の脳に送りこむには、高度な技術力と莫大な資金とが必要だが、となれば「悪用主体」は超国家級の組織でなくてはならない。「民族や国家意志を超えた、もっと大きな畜生組織ですよ。古代ギリシア以来の科学の発達の主体になった連中だと思います」と、石橋さんは言う。その目的は「科学による世界支配」である。

「科学による世界支配は、精神破壊を必然的に伴います。精神を生かしたら、科学技術文明は生きないです。私は、文明と精神とは共存できないと思ってます。私は精神文化を生かしたい。文化国家を築きたいんです。これは、科学技術によるコントロールとはまるっきり対立するんです。精神は各自が生みださなくてはならない。コントロールというのは各自の精神を殺してこそできるんですね。だから両立できない、鋭く対立すると思います。

まともな代表的人物だったら、こんな科学の発達のさせ方は絶対にしないですよ。まともな人たちがかたっぱしからやられてるような気がするんです。連中は非常に頭がいいですから、危険な存在になる者というのはすぐに見破るんですね。おそらく私のような考えをもつ人間が出てくるということは、分かってたと思います」

反「電波悪用」ネットワーク

じつは石橋さんの著書は、電波糾弾の本が最初ではない。九六年に、『太古の諸先祖の遺産に基づく文化国家創設のために』、および英文の『Four Essays Leading to the Age of All Mankind』という本を自費出版し、これに電波糾弾の手紙を添えて、各国首脳に送っているのである。

それは、日本の「代表的人物」である道元、二宮尊徳、勝海舟、西郷隆盛、北条泰時らの思想に一貫しているものがあること、それは日本語の力に由来するものであるこ

武器としての電波の悪用を糾弾する！
石橋輝勝 著
21世紀は電波による支配の時代か？
電波の悪用にさらされた著者の
実体験からの証言！

とを説いて、その日本語を作りあげた、有史以前の太古の人々の遺産にもとづく文化国家を創設したいということを訴えた本であった。

「本当に読んで欲しいのは、こちらの本なんです。続編も、八割方できてるんです。ところが電波のせいで、もう手がつけられなくなりましてね。まず電波を解決しなくてはなりませんから、『武器としての電波の悪用を糾弾する』を先に発行したんです。足元すくわれたようなもんですよ。いくらこんな理想を追っかけても、現代兵器を使ってこんなことやられたんじゃ……」

むろん本の執筆中も電波はやってきた。

「たえずやってきたのは『眠気電波』です。もう耐えられないですね。凄いんですよ。しつこくやってきてます。これは前からですから、慢性になってるんです。もう四六時中です。今は電磁波関係の勉強をしようと思って本を読んでますけど、やはり来ますね。とにかく私を勉強させたくないんです。英語の勉強しても、同じです。知的発達を阻止しようという感じですね」

それでも半年ほどで、糾弾の書は書きあがった。新聞社や出版社に原稿を送ったが、どこも引き受けなかったので、やむをえず自費出版した。部数は三千部。編集、装丁などはすべて自分でやり、経費は百五十万円。

世間に訴えるには広告も必要だが、大手新聞社ではほとんど広告掲載が拒否された。しかし石橋さんは、広告部の責任者を訪ねて直談判することで解決してきた。これまでに使った広告費は、出版費用の二倍、今のところ三百冊余がさばけただけという。訴えは、まだ広く世間の耳に届いているとは言いがたい。

ただ幸い、同じ悩みをもつ人々からの反響は得られた。自分を理解してもらうのに、この本を周囲の人に読ませている人もいるという。連絡をくれた人が、十四、五名いる。自分ばかりでなく、この人たちのためにも、これまで以上に電波の悪用を糾弾してゆくつもりだ。

「横の連絡をとりながら、共同して訴えていく方法を取りたいですね。問題は裏づけなんです。訴えるにも、誰を訴えればいいか。見えないですから。電波工学者にも手紙出してるんですけど、あんまりいい返事が来ないです。返事も来ないのがほとんどですけど。もう、八方ふさがりで、今のところ足踏み状態です。いちばんいいのは、やってる連中が内部暴露してくれることなんです。

今考えますと、これまでのことは電波の悪用を私に伝えようとしていたんじゃないかとも思うんです。いまだに私、発狂もしてないし、生きてるわけですから。こんなことしてたら大変なことになるって分かった者が連中のなかにいて、私を追いつめて、こんなことを書かせようとしたんじゃないか。まだ無事でいられるということは、そ

うとも考えられると思うんです」

ところで、電波を悪用している「畜生」とは、いったい何者なのか。石橋さんは、断定はできないと語ろうとはしなかったが、最後になって、〇〇ではないかとの「勘繰り」を明かしてくれた。約束だから、ここには書けない。陰謀史観は数々あれど、僕には初めて耳にする正体だった。

「これから、全人類社会へ向けての闘いになります。相手も必死だと思いますよ」

石橋さんの本には、こんな反響の手紙も届いた

「光」ドロボー

石橋さんは今、電波に悩む人たちと連絡をとりあい、ともに真相をより正しく把握しようと努力している。その話をうかがっていたとき、すでに自分より前にこのような事態について本にしている人がいるといって教えてくれたのが、辛島佐代子さんの本だった。

さっそく、その『今、世界と日本で何が起っているか　その恐るべき実態』と、同書の続編を読んだ。ここにはまたさらに驚嘆すべき世界があった。リクルート事件とは、贈収賄の問題などは表面にすぎず、じつはその著者、辛島さんの「光」を盗むための陰謀であったというのである。

辛島さんは、日本赤十字社医療センターの副看護部長を務めた後、世界初のレーザーのセントラルサプライシステムを備え、「二十一世紀のための病院」との触れこみで建設された、ナトメック七里病院の看護部長となった。しかし、その七里病院こそが、辛島さんの「光」を奪うために建設された施設だったという。今では、変哲もない老人病院となっているそうだが、かつてそこでは毎日のように辛島さんの「光」が奪われ、辛島さんの母親も「光」を奪われたばかりか、エイズに感染させられるなど、残虐の限りを尽くされたという。

その背景には、アメリカでの宇宙人グレイ捕獲事件、フィラデルフィア実験、宇佐

八幡宮の忘れられた伝承、リクルート事件の背景にある、まだ隠れたままの政財官学の人脈、サタニズムとして理解されるフリーメーソンやニューエイジ運動、そして昨今の環境問題などなどが複雑に絡みあっている。辛島さんのあまりにも悲惨な状態を思えばまことに失礼な感想になるが、もしこの本をフィクションにアレンジすれば、ものすごく面白い読み物になるんじゃないかと思った。映画にしてもいいのではないかと思うくらい、ドラマティックなのである。

もっとも、それほどに複雑な経緯をここで詳しく紹介することは、とてもじゃないができない。細部こそ興味深いのだが、残念ながら概略のみを簡単に紹介してみよう。

今、世界と日本で何が起っているか
その恐るべき実態
辛島 佐代子 著
調和を目指す連絡会

この本の中には恐るべき陰謀話の数々が——

辛島さんは、一九三五年に大分県の宇佐八幡宮の近くに生まれた。室町時代以前には女性が宇佐八幡宮の宮司を代々務めており、辛島家はその家系だったのだそうだ。正しい古神道の教えは、宇佐八幡の宮司、辛島家、皇室の三系にのみ伝えられ、辛島さんは父親が亡くなる前にただ一人その口伝を受け継いだ。今では、宇佐八幡も皇室もその伝承が断絶してしまい、辛島さんはただ一人のその伝承者となったという。

辛島さんは、子どもの頃から透視や読心などの特殊な力があり、宇佐八幡宮の宮司と巫女になる約束をしていたが、戦争が始まると平和主義者の父親が神社と喧嘩してしまったため、看護婦になったという。

日赤の副看護部長だった時代には、若い看護婦たちの憧れの的になるようなキレ者で、次代の看護部長候補だった。この頃、部屋でUFOや聖母マリアの輝く姿を見、患者の手を握るだけで病気が癒えるようにもなった。ところが、筑波大学で開催された精神世界のシンポジウムを見に行ったところ、それが統一教会関連の団体が催したものだったために、権力闘争のなかで辛島さんが同教会員だというデマが流され、ついには病院を追放されてしまったのである。

特殊ビーム光線とリクルート事件

その後、七里病院の看護部長として迎えられた辛島さんは、新病院の看護体制を整えるために努力するが、理事らはまったく病院経営をする気がないかのようで、そのすれ違いのなかで、じつは理事長も院長も選挙を目的とした政治的野心のために病院を建設したらしいことが分かってくる。

と同時に、宇宙人が看護部長室の壁に足跡をつけていったり、看護記録が盗難にあったり、統一教会が病院にかかわっているという噂が出たりと、さまざまな事件が起き、やがて看護部長室の壁の向こうからレーザー装置で特殊ビームを辛島さんにあてて「光」を盗むことが重なるにいたって、ついにこの病院の真の目的が判明したのである。

それは、小山博史理事長（後に岡光の事

件で有名になった）、渥美和彦院長（人工心臓の研究で有名な医療工学の権威）らが、辛島さんの「光」を奪うための施設だったのだそうだ。彼らはリクルート事件に関連しており、江副などは下っ端であったという。そもそもは超心理学者の本山博氏が、辛島さんの「光」の情報をアメリカに売り、渥美氏はアメリカが世界を支配するときに日本の支配者となるべく、ＣＩＡの手先となって動いたという。このあたりの日々の苦闘と謎解きの克明な記述は、なにしろ多くが実名でもあり、じつにスリリングで、またさまざまな興味をそそられる部分でもある。

「光」を盗られると、辛島さんは極度の疲労や激痛に見舞われ、やがてかつての超能力は失われてしまった。辛島さんの「光」は、日本の全人口の「光」に匹敵する量があったという。それは日本を正しい方向に導くためのものだったが、悪魔の手先に奪われてしまったのである。

「光」は、力や健康を望む人たちの脳幹に入れられたが、「光」を盗むような行為は悪なので、かえって癌になったり、悪魔につけ入られて人格がより悪化したりした。

「光」の使い道は、人間ばかりではない。核融合や光産業などにも必要不可欠なもので、光産業の隆盛も辛島さんの「光」が使われてのものであるらしい。またひと頃、水ブームのなかで注目された「πウォーター」にも、その「光」が入っているという。このように辛島さんの「光」を奪って研究や産業に利用し、世界を支配しようという陰謀こそが、リクルート事件の本質だったのだ、と辛島さんは断言している。

辛島さんの「光」を盗むことは、七里病院を辞めてからも、マンションの部屋で行なわれた。監視も厳しくなった。幽体離脱して監視や「光」泥棒に来る連中もいる。日々、からだをボロボロにされながら、辛島さんはさらなる真相を求めて、今なおその部屋に留まり、闘っているのである。

「調和を目指す連絡会」の会報。日本人の"痴呆化"を憂えている

電波論争

今、辛島さんは自らの理解者とともに「調和を目指す連絡会」を作り、例会を月に一度、自宅で開いている。そこで、その折りに例会の会場へお邪魔することにした。

訪ねた日、辛島さんを含めて七人の人が集まっていた。日赤時代から辛島さんの部下の看護婦だったという人が二人、その一人の弟さん、以前に精神世界系の出版社、たま出版に勤めていたという青年。京都で辛島さんの講演を聞き、相談があって来たという女性。そして初参加した、前述の石橋輝勝さんである。

部屋に入って、テーブルを囲む椅子に座ると、天井に気をつけるようにとの注意があった。天井裏にゴキブリ型ロボットが監視のために這い出てくるのだ。昔はネズミくらいの大きさだったが、この十五年間で、

どんどん小さくなっていったという。ロボットだけでなく、電話機や部屋のあちこちに仕掛けられた盗聴器、耳の奥にインプラントされる装置も、どんどん小型化され、今ではインプラント装置は細胞に一体化してしまって、分からないほどだという。

昔、耳から出た装置を排水口にポイと捨てたら、研究者が外の汚水溝で一日中何かを捜していたこともあったそうだ。「五十万円もするんだから。最近は高いのは私には入れないのよ」と辛島さんは言う。

辛島さんは、両耳に何かを入れてガーゼで覆い、ヘアバンドをし、首の後ろにはパナコラン（高周波治療器）を張っていた。耳に入れているのは、聞けば攻撃を防ぐための銀とのこと。パナコランは辛島さん自身が高周波をもっているので、つけているといいのだそうだ。前歯が何本か折れている。最近、何者かに折られたという。

天井や壁はいたるところ、布などで修理されていて、天井灯もなかった。そう言えば著書の中に、天井裏で、コード束をひきずる音や、幽体離脱した存在が這い回る音、監視ロボットが歩く音がすると言っては、ノコギリで天井を開いて確認するシーンが何度もあった。

毎月１回開かれている会の風景

この例会では、一人が司会者となり、あるテーマについて話しあう。以前に精神分裂病の未治療患者Nが青物横丁駅で医師を射殺した事件があったときには、その犯行声明文をみんなで検討し、Nが手術を受けた際に体内に埋めこまれたという「回転体」の記述は、辛島さんの耳から出た物体とも一致すること、看護婦としての経験からみて、手術時間が異様に長過ぎるなどの理由から、声明文の内容は真実であり、分裂病ではないだろうとの結論が出たという。

この日は、炭酸ガス規制の問題について話しあうことになっていた。資料として、新聞記事のコピーが配られた。しかし、僕と担当編集者がいたため、訴えたい思いが次々と溢れでて、辛島さんの話が止まらな

くなってしまった。話の途中、参加者がときどき首の後ろをパンパンと叩く。グレイ（宇宙人と考えられている「平行異次元人」だという）その他の幽体離脱した存在が入りこむと眠くなるが、そうすると出てゆくそうだ。

辛島さんの話は、しばしば教祖めいてくる一方、そうなるまいとの配慮もときに感じられた。しかし今回初めて参加した石橋さんには、「光」やUFO、幽体離脱といった話は納得がいかない様子だった。

カルトな知の流通現場

「さんざん嫌がらせを受けて疑い深くなってますので、今後も参加させていただくとしたら、懐疑的な立場からになると思います」

そう自己紹介した石橋さんは、辛島さんの「光」という発想は電波の「ヤラセ」で、そう思うように追いこまれていった可能性があるのではないかと、率直に指摘した。

それに対して辛島さんはこう答える。

「光を取られたというときに、パッと視力が落ちるんですよ。それからね、機械で光を取られたときに、自分のからだから光がキラキラと輝きながら天井の方へ吸いとられていくのを、この目で見ました。

電波の障害っていうのは限度があるんですよ。人を殺すことまではできない。死ぬまで電波のそばにいるほうがおかしいですから。私は、光の事件をなかったことにしようとしている人たちが、事件を電波のレベルまでで抑えようとして、石橋さんを私に引き合わせることにしたのではないか、と思ったんですよ」

石橋さんもすかさず切り返す。

「でも逆に、私は、辛島さんに会うことで光について知ることになりますよね」

こんな議論が起きたりもした。いずれも実感のみを根拠として紡がれた世界だから、こうした議論は決裂するしかなさそうだが、どちらも被害者として、世にまだ知られぬ科学技術による悪が行なわれていることを広く知らせ、真相を究明しなくては、人類は大変な危機を迎える、という大筋で一致し、ことなきを得たようだった。

二人に共通するのは、人道を踏み外して使われる現代科学技術への恐怖心と、そのことを警告せねばという切実な使命感である。辛島さんの場合、医療現場で、医師が最新技術をもって患者にいかに対するかを見てきたことも、その世界観の基盤になっているのだろう。辛島さんの目の前で、ある人に憑依して現れたルシファーが、「今どきの医者や科学者は自分より悪くなった」と語ったそうである。

例会に参加していた、たま出版にいたという青年が、表の世界では知られていない超科学の技術やニューエイジ組織などの裏情報を口にすると、皆、なんたることかという調子で驚き、いっそう未知の科学への恐怖やその推進者たちへの反感を募らせる、象徴的な場面もあった。僕らが帰った後、残った人たちはユダヤ謀略論で有名な宇野正美氏の講演テープを聴くとのことだった。

僕は、この二人の世界を通じて、人間の知覚世界について、またカルトな知の流通や構築について、ずいぶんあれこれと考えさせられた。でも、なにより感じさせられたのは、人間が生きてゆくのは、大変なんだなあということだった。

※石橋輝勝氏、「調和を目指す連絡会」の活動・著作物にご興味のある方は、別冊宝島編集部気付けで小社までお手紙をお送りください。

驚異の告訴状

皇位継承権は我にあり！

「母・良子皇太后様」を懐かしむ、ナニワの〝天皇陛下〟がブチ上げた告訴状の数々。「被疑者　天皇明仁」の根拠やいかに!?

佐山順平（ルポライター）

「身分確認訴訟」は、企業の代表権を争ったり、遺産相続の権利を主張する際に起こすのが一般的なケースである。

しかし、平成七年八月に東京地裁民事部で起こされたのは、そういった類の訴訟ではない。原告が確認したいと主張した「身分」とは……なんと「自分は天皇である」。

酔っぱらいの戯言ならいざ知らず、訴訟を起こした人物は、立命館大学大学院（法学研究）を卒業し、社会的にも立場のある司法書士の信原義也氏（59）である。

信原氏は、この身分確認訴訟をはじめとする民事・刑事の一連の訴訟について、昨年十二月に『公判記録　失われし魂を求めて』なる著作を自費出版している。発行部数は三千部。宮内庁はもちろん、各国大使館、国立大学、国会図書館等に送ったが、大半は受け取り拒否の扱いを受け、返送されているという。

以下に、著作に記載された訴訟内容と公判結果をもとに説明するが、この訴訟は、戦後まもなくGHQの後押しで登場した熊沢天皇が、「裕仁（昭和天皇）」に退位を迫った一九五一年の「現天皇不適格訴訟」以来、久々の皇位を巡る訴訟なのである。しかも、今上天皇に退位を迫るように見えながら、一方では「自らを確認するのが目的」であると言っている点がユニークこのうえない。

「訴状」には、原告が国を相手取り身分確認を請求したものであることと並び、趣旨として「原告は昭和天皇の皇位継承権第一位であり、天皇であることを確認する」と明記されている。

これが夢でも幻でもない現実であることに驚くのは、筆者だけではあるまい。

公判記録
失われし魂を求めて
司法書士　法学修士
信原義也　著

信原義也著

「被疑者　天皇明仁」

　信原氏の主張はこうだ。「今の明仁天皇は良子皇太后の子供ではなく、昭和天皇と女官との間に生まれた皇庶子であり戦前の旧『皇室典範』により皇位継承権は原告のほうが上」である、そして、信原氏自身が実は昭和天皇と良子皇太后との間にできた皇嫡出子なのであり、それを確認するための手段として、なんと良子皇太后と信原氏自身のDNA鑑定まで要求しているのだ。

　確かに、黒龍江省などの中国残留日本人孤児の親探しでDNA鑑定が行なわれたりすることはあるが、天皇家の人間と自分のDNAを鑑定しろという要求は、あまりにも突飛すぎる。

　しかも訴状には、鑑定もその結果も待たずに、主張が正しいという大前提に立った抗議まで書かれている。自分が皇嫡出子であるがゆえに、「明仁親王は、天皇の印鑑、日本国の印鑑を、原告（編集部注・信原氏自身のこと）の許可なく、使用しており（以下略）」と不服を申し立てているのだ。

　訴訟はまず「天皇である」という身分確認の要求に始まり、次いで「精神病院に入院させられた」ことに対する五千万円の損害賠償請求に発展した。そして、これら一連の訴訟の敗訴と棄却を経て、信原氏の告訴は戦略を変化させる。証人を偽証罪に問い、裁判官を告発し、平成九年の六月の告訴状では、ついに「明仁」を「詔書偽造、及び国書偽造罪、同行使罪」の刑法違反で東京地検に問うというスカッドミサイル発射にも匹敵する告発をブチ上げたのである。

　告訴状には「被疑者　天皇明仁」とある。ちょっとクラクラするが、シャレでも悪ふざけでもない。れっきとした現実の法的告発なのである。

　この法廷闘争は、元日本弁護士連合会会長・北尻得五郎氏に相談のうえで行なわれたと信原氏は著作に書いている。「相談を受けたのは事実」と北尻氏も認めるが、詳細は語らない。弁護人は信原氏自身が務め、最終的には、平成九年に最高裁判所で却下の判決が下され、訴訟はいったん落着した。しかし、信原氏の検察への告発は今も続けられている。

「お前は天皇の子や」

　さて、信原氏は「自分は天皇である」という身分確認の訴訟を起こしたのだが、実は著作を読んでも、その根拠がさっぱり分からない。そこで実際に、大阪府豊中市に住む氏を訪ねて話を聞くことにした。

　大阪の繁華街、十三（じゅうそう）の駅前の喫茶店で記者を待っていた信原義也氏は、初老の紳士で、顔立ちはどことなく昭和天皇の面影を感じさせる……と言えば言えなくもない。

　時刻は夕闇迫る午後七時。開口一番、信原氏はこう言った。

「僕はいつも朝は、トースト半分だけ。晩

御飯は食べないが、晩酌をするんです。ちょっと居酒屋へ行って飲んでくるから、その間に書類に目を通しておいてください。一時間後に戻ってくるから」

会ったばかりだというのに、喫茶店の二階に記者を残したまま、十三駅前の居酒屋街に消えていった。朝食メニューがトーストというのは昭和天皇と同じだが、行動はのっけから、ずいぶん〝飛ばしている〟印象だ。

一時間ほど待つと、ホロ酔い加減になった信原氏が戻ってきた。

——さっそくですが、あなたが昭和天皇と良子皇太后の皇嫡出子であるという具体的な証拠や証人はいるのでしょうか？

「そんなもん、何もないですわ！　昔は僕の母親が臍の緒がどうとか言ってましたが、そんなもん、今どき何もありませんわ！」(信原氏)

信原氏は、大仰な手振りで物的証拠や証人はないと言う。ここで唐突に臍の緒の話が出たのは、誕生の記念に取っておく臍の緒から親と子の遺伝子情報が取り出せるので、DNA鑑定に利用できるという意味から話題に上ったのである。だが、臍の緒は紛失したらしい。ならば、信原氏の母親は、自分が産みの母なのか育ての母なのかを、息子にどう説明してきたのだろうか。

「自分では、そんな大それたこと言いますかいな。まあ、五〇％だと思っているようですわ。うちの母親はべつに、義也あんた間違っているからやめときなさいとか言いません。訴訟の過程でいろいろ言ったことあるけれども、現在時点では何も言いません」

よく分からないが、どうも母親から「実はお前は天皇の子で……」と事情を聞いたのが主張の根拠になっているということでもなさそうだ。

質問の趣向を少し変えてみた。

——ご自分が昭和天皇と良子皇太后の子どもであると分かったのは、そもそもいつ頃からなのですか？

「私は昭和五十一年に京都大学病院精神科に入院したんだが、入院直前に〝電波みたいなもの〟がかかってきて、〝お前は天皇の子や〟という言葉が頭の中に入ってきたのが最初だった。その後、最初の精神病院への監禁に対して訴訟を起こしたんだが、平成五年に裁判の第五回準備書面を作成しているとき、朝四時頃にバーッと飛び起きたんだ。そして二階の階段で足を挫いて物凄い痛みに堪えながら、原動機付自転車でファミリーレストラン行って食事した。昼近くになって今朝の起き方はおかしいな、と思いながら足の痛みを思い出していたら、昼頃に突然、〝あんたは昭和天皇の皇嫡出子や〟という声が頭に入ってきた」

えっっ、電波？……。そう、電波が飛んできて、天皇の子だと告げた。自分は天皇の皇嫡出子であると主張し、身分確認訴訟に及んだ信原氏の根拠は、なんと「電波」だったのである。

皇居の確率三分の一

どんな電波ですか？と聞くと「男の声でも女の声でもない中間子波のようなもの」と言う。しかし中間子波がどのようなものか、信原氏も実際にはよくは知らないらしい。

では「電波」のお告げだけで、良子皇太

后と自分のDNAを鑑定しろという主張に発展したというのだろうか。まるで鳩が豆鉄砲を喰らったような気分だったが、その電波についてもう少し聞いてみることにした。

――「電波」が最初に来たとき、それはどこから来たんですか?

「う～ん、いやあ、それはね、京都大学に第一回目に入院したときはね、皇居から来たと思ったんですわ。それが〝天皇の子や〟と言いだしてね。とにかく大便は出ないし小便は出ないし舌はしびれるわで、どうしようもない状況でね。どこから来たのかよう分からんけれども、皇居から来たというのが三分の一の確率でね。そう考えてもらったらいい。専門家ではないからよく分からないけど、とにかく東京理科研究所で仁科博士が研究していた（湯川）中間子波はあるんでね」

電波は皇居から飛んできたという。お互いにテーブルを挟んで見合ったまま唸ってしまった。なぜか「天皇の子」だという電波が飛んできて、そしてなぜか大便や小便が出ない。この困った状況を信原氏は伝えようとし、記者もなんとか窮状を察し辛さを共感しようとはするものの、理由についてはさっぱり分からない。なぜ電波が皇居から来たのか、確率三分の一という数字がどこから割り出されたものなのか……。大便が出ないことにいたってはさらに難解であるが、あえてそれを聞く勇気も出てこない。

しかし、ただ一つ明らかなのは、まぎれもなく「電波」がこれまでの氏の全ての行動原理を支配しており、唯一の根拠になっているということである。

電波が湯川中間子波だという信原説は、京都大学理学部理論物理学の助教授に「中間子波は人体に感応しないと言われている。これを発見すればノーベル賞もの」と言われ、だいぶ勉強はしたらしい。ご自身は「ドイツの研究家は（中間子波について）よく研究している」と評価している。会話にも「ダンケシェンク」などのドイツ語を頻繁に交えるので、ドイツには行かれたことがあるんですか?と聞くと、

「ドイツはありません。海外は東南アジアの観光旅行だけです。精神病院を退院してから小さな会社に勤めていたんですが、給料が安く七～八万円で、女性並みの給料では結婚したくてもできないので、女遊びに台湾とかタイとかへ行っていたんです」

東南アジアではなかなかの「遊び人」だったらしいのだが、恐れ多くて「買春ツアーですか?」とは聞けない。ドイツ語も趣味で使っているだけらしい。

絶世の美男子

このあと信原氏はトイレに立ったのだが、なかなか帰ってこない。喫茶店は、一階と二階の吹き抜け空間になっていて、一階の様子が二階から見える。トイレの前に数人が並んでいるようだ。気になって降りていったところ、案の定、行列は信原氏を待っているものだった。「排尿困難でね」と言いながら、十五分は経っているのだが、一滴も出ないためか「うっ」と唸っている。

二十分後に帰ってきた信原氏は、「いや、お待たせ。ダンケシェンク」と言いながら、席についた。なんともユニークな人である。

それにしても、身分確認訴訟のきっかけ

は「電波」である。出生の秘密や信原家に至るまでの貴種流離譚的な物語を期待していたのだが……。仕方なく、日常的な周辺データを押さえておくために、職歴や家族のことなどを聞くことにした。信原氏が語る。

「O建設からサラ金に転職して梅田店の店長になったんですが、そこの社長から、〝四十歳過ぎて独身だったら社会的に信用がないだろう、結婚相談所に行きなさい〟と言われた。それで大阪駅の北側のサラ金街にある相談所に行ったんです。競馬の場外馬券売り場の近くにあるいかがわしい相談所です。そこに、戸籍謄本持ってきてくれというから戸籍謄本を持って行った。そして大阪大学卒業で学校の先生をやっている女性がいるがどうかという話があった」

――立命館大学大学院卒業と大阪大学卒業なら、高学歴同士の結婚ですね。

「女房は学歴がいいのと人相を見て話に乗ったんでしょう。僕は騙してでもうまく乗せるしかないと思って、知り合いやら親戚の大学の先生を紹介しまくった。奈良大学のO先生や、叔父に神戸大学の工学部の名誉教授がおるのでそこへ連れていった。それで女房は僕にぞっこん惚れよったんですわ」

昭和天皇と良子皇太后の顔を足して二で割ると僕の顔になる、という信原氏は、顔にはかなりの自信があるらしい。

「それでハワイに新婚旅行に連れていって、帰ってきたら子どもはどこに隠しているのかと聞くんです。僕みたいな美男子が四十歳で独身という状況を不思議に思ったんだろう。子どもがおると思ったらしい。そこで僕は、実は精神病院にいたんだと初めて明かしたわけです」

嗚呼、写真鑑定

ここで、信原氏の著作の内容について、彼自身の解説で踏み込んでみよう。もう少し氏の本質に触れることができるかもしれない。

――皇太后と昭和天皇の「皇嫡出子」があなたであると仮定して、それでは明仁天皇の本当の母親は誰なんですか？　この本には女官との間に生まれた「皇庶子」と明記していますが。

「そんなこと知りますかいな。だいたい記者やってたら、そんなこと知っているのが当たり前と違いますか？

顔、人相からして今の天皇さんとか、常陸宮なんか、良子皇太后と似てないでしょ。僕はそう思うよ。だから科学的な根拠としては、DNA鑑定やるしかないでしょうね。DNA鑑定やって（明仁天皇が）良子皇太后の子どもでないと分かったら、今の皇室典範では皇位継承権なんてあらへんのだから、これは犯罪以外の何物でもないわけです」

――軍部の陰謀で明仁親王が皇太子になったと書かれていますが、軍部の誰の陰謀なんですか？

「そんなもん、あんた分かるかいな。張作霖爆殺事件が起こったのが昭和七年でしょ。そのころ昭和天皇は女の子ばかり、五～六人生まれるわけですわね。男の子がほしいので女官に手を付けたらどうやと、明治天皇も大正天皇も女官の子やないかと、軍部から圧力かかるでしょう。それで昭和八年に明仁が生まれて国民は皇太子誕生で万歳

したでしょ。そうなると、母親は女官だなんて言えませんよ。
だって昭和天皇はイギリスから帰ったときに、感激して〝私は皇室改革をやる〟、女官は廃止すると言明しているんだから。

そこが矛盾なんだ。明仁が生まれて〝皇太子万歳〟は間違いではない。戦前の皇室典範では皇嫡出子がいなかったら、皇庶子が皇位継承権をもつのだからね。昭和天皇自身は女官を置かんと言っていたが、法律上は皇庶子というのはちゃんとあるんだから」

どうやら中間子波だけでなく、歴史的時代背景も勉強されたらしい。本も読んでいるためか「発見」もあるという。

信原氏が“敏腕”司法書士の職能をいかして作成した告訴状の数々

「最近、昔の僕の写真ね、良子皇太后が僕を抱いている写真があったんですわ。皇室ジャーナリスト・河原敏明さんの本『良子皇太后』に載っている写真に、皇太后が赤ん坊を抱いている写真があるんです。あの写真の赤ん坊が僕と一致するかどうか、大きな焦点になるわけですよ」

その写真が信原氏をさらに衝き動かした。公権力に対して、写真に関する鑑定を要求したのである。

大阪地検特捜部検事の涙

「大阪地検に行ったら特捜部へ行ってくださいと言われて、特捜部行ったら特捜部の検事が、名前は聞いていないが、本当に涙ぐんだんです。〝我々は天皇に仕えていまして、これは東京に行き、明仁天皇とか内閣総理大臣と一対一で対決しなければ解決しないですよ〟と言った。僕は〝僕のこれ、顔見てください、それから良子皇太后が抱いている写真の赤ん坊の顔が似ていたらね、この二つ事実一致していたらどうしますか〟と言った。すると〝同一人物に見える〟と言うわけです。でも、僕が明仁と直談判できるとは思わなかったので、身分確認訴訟を起こしたんです」

結局、信原氏は良子皇太后と自分とのDNA鑑定にこだわっているのだが、鑑定結果が一致しませんでしたと言われたらどうするのか。

「僕もね、天皇になりたいなんて思っているわけではないわけで、結果が出て違うということになったら、それで終わり。せやけどDNA鑑定して一致しとったら、これ大変なことになりますやんか。熊沢天皇などはアメリカの新聞が騒いだから、昭和天皇は不適格という訴訟をやっただけの話でね。証拠なんか何もなかった。僕の場合はそうではなくて、検察庁という公の公権力でDNA鑑定するわけだからね」

訴状では「自分は天皇である」と言いながら、実は天皇になりたいわけではないという不可思議さ。しかも根拠は電波、動かぬ証拠はDNAで、告発相手は今上天皇。なんとダイナミックな訴訟であろうか。

――では、訴訟の本音の部分は「私はいったい誰なんだ、誰なんだろう？」というところにあって、要するに自分が誰かを知りたいということですね？

「そうなんです。だから僕は、天皇だと言って名乗っているわけではないんだ」

訴状の「天皇である」と言っている内容とは一見、矛盾するようだが、なんとなく分かってきた。程度の差はあるだろうが、誰でも自分自身が何者であるかを知りたいという欲求はあるだろう。電波から、我々には決して聞こえないメッセージを受け取っていれば、なおさらかもしれない。

自分が何者なのかを確認したいだけだという目的の崇高さには、ただただ呆然と驚くばかりである。

明仁天皇への手紙

しかし、信原氏の発言には、やはり明仁天皇に対する不満があるように思える。

――今の明仁天皇に言いたいことがありますか？

「明仁には、終戦五十年の頃に〝周知であろうような争いはしたくない〟という手紙を書いたことがある。八月十五日に明仁と

美智子が長崎・広島に行っているんですが、僕はそのときのお辞儀の仕方が、はっきり言って気にくわなかったんです。慰霊碑に対してチョコンとお辞儀するだけ。性根が入ってないんです。そのことに対して、ヨハネ黙示録に〝私はあなたが生ぬるいのであなたを口から吐き出す〟という言葉があるんですが、そういう文面の書簡を送った。明仁天皇に対しては他にも手紙を書いた。地球の四十億年前の歴史から始まって、さしあたっての問題は国連をジュネーブに移したい、それについて協力してほしいと書いたこともある」

地球の歴史やヨハネ黙示録、そして国連との関係はよく分からないが、戦争の慰霊碑などには心を込め、もう少し気合いを入れてお辞儀をすべきだと手紙で天皇をたしなめたらしい。

「それに明仁への詩を書いたこともあるんです。『昔はともに遊びし仲なれど』という詩です。それは僕の記憶とつながる。僕は昔、神戸の垂水というところに住んでいたんだが、僕の記憶にくっきりとあるのは公園に段差を設けた滑り台。そこで遊んどったんです。地面がコンクリートで、鮮明に記憶にあるんですわ。

あんな滑り台どこにあるのかと思っていたら、家内と行った今の須磨浦公園の中にあった。それで思い出したんだが、あそこは公園になる前、昔は須磨離宮で、戦前は一般の人間は入れない。戦後払い下げで公園になったわけで、戦前あんなところに入れる人間といったら特別の地位がなければ入れない。それにお兄さんみたいな人が二人いた。今から考えると明仁と常陸宮しかいない。で、まあ『昔はともに遊びし仲なれど』という詩になるんですわ。妄想と言われると困るので、それ以上は言わないけれど、鮮明に記憶にあります。年上の人が二人いた」

記者と二人で喫茶店で話しているうちに、隣の席にはオバさんが二人座り、最初は世間話をしていたが、信原氏の連発する「明仁」とか「天皇」という名称に反応して何事だろうとこちらを好奇の目で窺いはじめ、しばらくしてクスクス笑っている。だが、信原氏はアクセル全開で周囲の目など一向におかまいなし、収まる気配さえない。

「必ず帰ってくるんですよ」

――良子皇太后の記憶はないのですか?

「良子皇太后の記憶は、天皇の子やという電波がかかってきたときに見た、皇居のもの凄い森でね。母親に抱かれて〝必ず帰ってくるんですよ〟と言われて何回も見せられていたんだろう、それが絶えず心象風景にあったんですね。それで精神病院の閉鎖病棟から開放病棟に移って喜んで歩いていたら、百姓さんが二百人くらい地べたにはいつくばって草を刈っているんです。元気かと声をかけた。

妄想が起こってきたときには、昔、そういう膨大な庭園を見た記憶があるような気がするんですわ。でも退院するたびに違うと否定してきたんです。あれは東京駅で見た山本五十六の葬儀だと自分に言い聞かせてきた。そこには、軍服の元帥なんかが敬礼しているイメージがあった。

良子皇太后が僕の母であるという僕の仮説が正しかったとしたら、良子皇太后自身の身になって考えてみれば、里子に出す前

にいろいろなところを見せているでしょうね。〝ここ覚えときなさいよ〟〝ここも覚えときなさいよ〟〝必ず帰ってくるんですよ〟というふうにね」

――良子皇太后にコンタクトしようとしたことはなかったんですか？

「僕は最初、この本を出版した際に、宮中には明仁天皇と良子皇太后に宛てて二冊発送したんですよ。天皇の分は受取り拒否で一週間くらいで返ってきた。天皇が受取り拒否なら良子皇太后も受取り拒否じゃないかと思っていたんだが、良子皇太后からの受取り拒否はなかったんですよ。受け取っているんですね。

それに僕はしょっちゅう宮中に電話しておってね。電話したら、皇太后御用職というのがあるらしく、〝司法書士の信原義也というんですが〟と言ったら〝おつなぎしましょうか？〟と言うんです。良子皇太后につなぐという意味だと思ったんで、当時は、それはちょっと恐れ多いと思い、僕のほうから〝失礼します〟ということで切った。今から思えば、つないでもらえばよかったかもしれない」

宮内庁の御用職に、いきなり電話を掛けてみるというゲリラ的な行動は、信原氏にしてみれば結構、当たりの作戦だったようだ。

「その後は宮中に電話して〝皇太后御用職たのんます〟と言うと、〝どういうご用件でしょうか〟と言うんです。で、〝司法書士の信原と申しますが、良子皇太后はお元気でしょうか？〟と言うと、〝たいへん、お元気でございます〟と言うんだ。そこで、〝ウソ言え！　僕は大阪の酒場で酒飲んでるけれども、巷の噂では良子皇太后はアルツハイマー症だというではないか！〟と怒った。

来年九十五歳ですから心配ですよ。実母である可能性は、僕は五〇％と思っているんだがね。だから僕はもう、検察庁を信じるしかないんですよ。今の検事総長は岡山大学出身だというんで安心している。検事いうたら東大出ばかりだから。まあ、酒場で聞いた話だから、信用できるかどうか分からんがね」

行き行きて「自分探し」

酒場で情報を得たり、酒を飲んで宮内庁に電話することには感心しないが、司法書士だからだろうか、とにかく法的解決がお望みらしい。

「最終的には、検察庁が決断することになると思う。検事が天皇に認証されるいうても、法的に認証は意味ないでしょう。そうはいうても、最高裁判所自体が皇居の近くにあることで権威をもっているわけですから、天皇が間違とったら権威失墜ですわな」

――今の天皇を替えるんですか？

「それが僕の使命であればそれを遂行する。検察庁が明仁を検挙してくれるか、下のほうからそういう世論が沸き起こるかということが問題なんです。問題は良子皇太后の抱いている子どもの写真と僕の小さいときの写真が同一人物かどうか、ということなんです。その点について僕は事実を確かめたいんです」

本人はいたって真剣にDNA鑑定に賭け

ているのである。訴訟もそうだが、真剣である証拠に信原氏は著作『公判記録・失われし魂を求めて』三千部を作るのに、八百万円ほど投資したとか。しかも四百部ほどを全国の関係機関に送り、書類上は届いているはずだという。
「本の反響はないし、右翼団体からも何も言ってこない。本代を協力してくださいという一筆を入れておいたのですが、外国大使館に本を送っても、カナダやスイスなんかは本代を送金するどころか返本してきた。ところが、アフリカのある国の大使館は、〝貴殿のますますのご発展を祈念いたします〟と書いてきた。アフリカの国でも、最近はたいしたものだと思った。アメリカ大使館も本代は送ってこなかったけれども、返本せず本は受け取ったんだと思う。黙殺されたわけではないんです。
僕はプロテスタントなんですが、酔っぱらうと賛美歌を歌うんです。それで出入り禁止になった酒場もある。吹田の聖書研究会も僕に出てくるなという。無教会派の研究会も僕の本を配るなというので殴ったら、もう出てくるなということになった。僕は今、宗教とは何か、人間の魂とは何かとか、それらが地上の平和と結びつくのかを考えている」

信原氏が毎日晩酌をするという十三の町。
氏の主張は、こんな町並みから生まれたのだろうか？

信原氏は居酒屋で賛美歌を歌い、人を殴りながら、世界平和を考え、良子皇太后と明仁天皇にDNA鑑定を要求することで、やはり「天皇である自分」を探しているのではないか。
誰でも自分が何者なのか、確認したい欲求はある。しかし、例えば「私は平均的日本人である」という身分確認訴訟を起こしたとしても答えは出まい。信原氏にとっては、「失われた自分」をいつまでも追い求める行為こそが、唯一の疑いようのない事実なのではないか、と思うのだが。

（文中敬称一部略）

※信原義也氏への激励のお手紙は、別冊宝島編集部気付けで小社までお送りください。

妄想体現漫画

人生解毒メッセージの山

宝島社に送られてきた数々の手紙をベースに、鬼才根本画伯が、送り主たちの心の世界をひもとく！

根本敬（特殊漫画家）

その① ポルノグラフィーの謎
愛知県・西城弘実さんの場合

この2年半程、名古屋のある女から、真夜中に電話がかかってくるようになり

アタシ、
もしもし
もしもし
おきてた
えぁ

思わせぶりなことばかりしゃべるため色々考えていたのですが

アレ！なんか今晩はシーツがしっとりとぬれているにゃあ……
……

現在の自分をとりまくシチュエーションの、すべての原因は

私、今裸だぁ
サイフがない
俺の悪口だな…
本当にアレタの自転車か？
そう
お大事に
ヘイ
三振
あっ

私が18才の時に坂上純代のマスタベ用のオカズとして描いたポルノグラフィーに原因があるのではないかと思い当りました

なアホール
使えや
アハ〜ン

あの当時の彼女の性欲の凄まじさを他人に伝えるのは今のところ難しいのですが

ねぇ〜
もう一回して〜ん
もう7回目だぞ今日
HOTEL

私は恐怖心から、いまだに彼女以外の女性に手が出ません。

以下の英語の詩を書いてみました。

A Trick of the Tail

There was a pair of rabit tail.
There were two figs fruits.
why?
This is true democracy, isn't it?
Jimmy Page shouted
"Hey girl, I wanna be your backdoor man"
She said, "I want you to do so."
I like Daisy.
I tried, but I could not break flower.
I sometimes, have a imagination to eat golden slumber
But I had not ever eaten it.

思うのですが、その後も4年間つきあったわけですしわろ者に見せたのなら、何故言ってくれなかったのか？

あるいは、渡した時点で合意を装ったのだったら何故、私とつきあおうとしたのか

そのポルノに複製(コピー)があるのか？どの程度広がっているのか、もしわかったら教えてほしい。

うわァ凄えや

私としてはプライベートで渡したものを第三者に見せることこそ言語道断だと

ナゾは深まるばかりです

原文のママ（但、一部仮名）

その②
の悩み
室田吾郎さん(11才)の場合

とくしまに実家がある
11才の小学生です

父ちゃん
おふくろ元気かい
ナルトのわかめ
実家からの小包

さいきん色のどすぐろい男につけねらわれます

う……
肛門科
31-6219
ニコマート

55〜60才ぐらいなのですが、こちらの動きをよく知っていて、きけんな目にあわされます

顔をかくすようにしたり、パトカーにのったり、トラックにのったり、いろいろしています

どこや
セブンイレブンまで
スミマセン
殺されるので駅迄
恋しぐれ夢街道
警視庁

又、いたづら電話もよくかかり
電話口にでるとホーホーしか
いいません

ホーホー

特にウイルというビデオやに
行くとよくあらわれます

レンタルビデオ
ウイル

二泊三日
420円

イヒヒヒヒヒヒヒ

あっ

ストーカはふせげないのでしょうか

いやだなア…

毎日こわいので、土、日はしんせきの
巡査のところに泊まっています

コワイよー

友人によく手紙を出すのですが封を
あけたようなあとがあるとよくいわれます

アレ

原文のママ

その③
デマを流す元同僚達

住所不明A氏の場合

田中（宣晴？）という四十代の変質的おやじがいたんですが大田区に住んでるらしくどこかで見たことある気がしてたんですが

川俣軍司ってこれまた変態がいたでしょう。白いブリーフがトレードマークの。あの川俣にソックリです

あの短身、薄い頭髪、平目（眼が細く腫れぼったい瞼で、眉毛も唇も薄い気持ち悪い面をしています）白パンツ、変質性といい共通点も多く、川俣がさるぐつわしてたように田中（宣晴？）も夏の暑い日タオルを口に加える癖があります

もしかして川俣が田中に改名して出所し社会復帰したか、親戚では、と不気味です。

あの田中って変態おやじ、本社の知り合いの紹介で入ってきたんですが全く仕事出来ない奴なんです

しかも異常な言動も多い変質者でした。

四十越して結婚したこと無く（独身主義ではなく、ただ単にもてなかっただけなんですが。あんな奴、ある程度まともな感覚の人だったら誰だって避けちゃいますよ）

大田区の自宅に、母親、祖母と三人で暮らしているそうです。

田中（宣晴？）本人からきいたんですが寝るのも9時5で、早めに出て日比谷界隈をぶらついたりコーヒーショップで時間を潰してるらしいのです。帰りは又どこかでうろうろしているそうです。

あいつのこったから、その辺の暇人でも捕まえて変な話するはずです
てなワケでさァ ガーンときてよオ ほんでさァ
少し相手にしてやればすぐ友達になったつもりでいます。誰彼構わず友達になりたがります。
本社の知り合いの紹介で入って来ただけあって実際に働いても他人にべったりと甘えます。いい年して
ねぇ～ん 市役所行くの つきあえ～ん
他人に依頼心が強いんです。普通一人で出来る事でも、誰かとやってもらいたがるので、田中と組んだ日は
無能力をカバーする事になり非常に疲れます。駄目なのはわかりますが少しでも面倒なのがあればすぐ別の場所に逃げたり困難があればトイレに隠れたりします
田中さ～ん
あの田中(宣晴?)って変質者はたちが悪い作り話したり嘘ついて噂を流す習癖もあります。それが田中(宣晴?)が変態であることを知ってる人達ならまだしも
N資金っていって
M資金の
ホォー
実はオレのオジさんがさ
全然知らない人相手に田中が話したら真に受けたりしますよ。
妄想癖もあり異常に現実離れした田中はプロボクシングのチャンピオンに対しても
喧嘩のやり方を教えよう
と、言いかねない虚言家です
それが現場での実態なんですが
どこ行ってたんだ今まで
それが大変だったんですよ 実はね～
経営者の前では取り繕ってる姑息な野郎です
普段意気がってるのに限って弱いといった類いで体験学習させてやっても良かったんですが私はもう既に同僚を何人か殴っていて幹部にマークされてましたから
パカーン
幾ら田中の変質者を殴りたくても我慢
していたんです。それに田中というのは、少し殴られた程度で経営者に「○○にこんな事言われましたよ」なんてチクるんです。
(宣)の背中に竜の刺青が‥
何!?
田中(宣晴?)は小男で考える事も小さいから狂言じみたことばかり吹かします
橋龍って北のスパイらしいよ、田中さんいってたけど
まァ
あんな奴の虚言を本気にするのも単純なんですが、なかには本気にしちゃう噂が広がる危険性も充分にあります

特に、そうしたのが好きな奴相手にでしたら、尚更です。しかも、馬鹿な女相手にでしたら誰彼構わずしゃべりまくりますので危ないですよ。

雅子さんってこんなでっかい黒人の子おろしてっから子供うめないの

子宮の中もうグチャグチャらしいよ

あーそうだったんだァ～たいへんだァ～

竹智友紀子といって竹ノ塚に住んでるといった、スーパーうるさいオシャベリがいたんですがそいつが又、田中（宮晴？）同様、噂、変な話が異常に好きな奴でした

ウロコのあるあかちゃん生みたってハナシよ、アソコのメロ

へ～そうなんだ～！

とにかくうるさいんです。ゲラゲラ笑いながら近付いて来り、余りうるさいので相手してやれば、ナンパされた、声掛けられた、と陰でしゃべりまくってたらしく

スミにおけないわねー

カレー

ていん

んかつ

いいじゃん ケッコー似合いのカップルじゃねえの、いけよ

ぎゃっ

ザケンナヨ

私があんなイモを好きだというデマが広がり大メイワクしました

その竹智というのは、高校も終わってなく（だから、会社の女で一番噂が大好きな程度が底い奴なんでしょう。そういえば男にも高校終わってないのがいた…金田聖といって名前からして朝鮮人って感じの奴なんですが、あいつも俺達日本人と感覚が違います。僕は差別しませんが、金田は、だから朝鮮人は…といった奴です。朝鮮人全員がそうではないと思いますが、そうした一部の者の言動が「隠されたことば」を生むんでしょう）アメリカの高校に三年逃げていたそうで、

トイレ→

だから××人はさァ～なのよ

英会話馴れてますが、当然の事が全くわからず、頭の中はクエスチョンマークが入ってるみたいです。

My breasts they will always be open - you can rest your weary head on me And there will always be a space in my parking lot When you need a little coke and sympathy

富士銀行？国際？

奇妙な体形（プロポーションが三等身というか四等身というか、本当にヘンテコなスタイルです）で、まるでフリークです。

ー以下同じ様な悪口続く。原文ママ。結局これら元同僚がデマをとばし世を混乱させてるという話（らしい）
（但、名前は仮名）

『畸人研究』Xファイル!

無意識の「鉄人」たち、その熱き電波メッセージ!!

路上に咲いた、これぞ「魂の叫び」の一級品!
畸人研究学会が集めた、脱高度情報化社会のための、御託宣の数々!?

報告＝畸人研究学会（今柊二・海老名ベテルギウス則雄・黒崎犀彦）

そもそも「畸人」とは何か。田へんに奇と書く「畸」は、形のおかしい田のことを意味するのだが、そこから転じて、はみ出し者の人間を「畸人」と呼ぶ。古来より「畸人」たちは、社会が閉塞状態に陥ったときに本領を発揮してきた。いわく巫女、いわくシャーマン、いわく芸術家……。

つまらん世俗の概念にしばられることのない主張は、往々にしてなんらかのかたちで世の道しるべとなってきたのだ。

どうしようもない閉塞感と、高度情報化社会の煽りで誰もが似たような顔付きになっている現在こそ、畸人たちの「魂の叫び」に注目すべきではないか。我が畸人研究学会は、そうした考えにより、畸人たちを日々追い求めて研究を行なっているのだが、以下で、彼らの素晴らしすぎる濃厚なメッセージの一部を紹介したい。いずれも、そこにあるのは究極の「俺」である。

なお掲載したものも含めて、さらに詳しい研究結果は、『定本畸人研究』（アスペクト・十二月二十五日発売）、『春夏秋冬是畸人』（青弓社・九八年二月発売予定）などをご参照いただければ幸いである。

File No. 1 世界は俺のためにある

Code Name▶ブラアン・リヨシノリ
Address▶西新宿

スターリン、チャーチル、東条英機……きら星のごとく並ぶ将星たちの中心に、ブラアン・リヨシノリ！この自家製写真集は、とにかく『世界はブラアン・リヨシノリ中心に廻っている』という究極の天動説思想に貫かれた逸品！

青島都知事のお膝元、新宿新都庁近辺に住むブラアン・リヨシノリ氏、宣伝活動の全貌。

ブラアン・リヨシノリ

ブラアン・リヨシノリ家の表札。住所・氏名はいいとして、とにかく『RSとは世界国王記号』という、究極の自己中心的発想が光る。

ブラアン・リヨシノリ氏の“脳内法務省”の指令に最も忠実に書かれた傑作。世界どこの国の文字でもない、『リヨシノリ文字』を完成させた！

File No. 1 世界は俺のためにある

新宿新都庁脇で出会った路上生活者ブラアン・リヨシノリ氏は、自らの活動について「法務省の委託を受け、宣伝活動に従事している」のだと主張した。どうやら彼は、脳内に存在する〝法務省〟の指令に基づいた独自の〝公務執行〟に明け暮れているようである。

あれは、忘れもしない、日本列島に台風が接近していた某日、場所は西新宿の高層ビル街。嵐の中で「ウオーッッ！」と野獣のごとき叫び声を上げつつ、氏はビラ製作に没頭していた。その姿は、まさに現代の野人と呼ぶにふさわしい、素晴らしさだった。

ブラアン・リヨシノリ氏のさらに素晴らしいところは、その究極の自己中心的発想にある。自分中心の自家製写真集、世界国王を名乗る表札、そしてなんといっても「リヨシノリ文字」である。この文字を使った、誰が読もうとしても読めるはずがないビラを手に、氏は「読めますわ！」と胸を張る。〝リヨシノリの、リヨシノリによ

る、リヨシノリのための文字〃まで作り出してしまったブラアン・リヨシノリ氏。彼こそは、己の内なる声に最も忠実な、無意識の「鉄人」と言えよう！（海）

File No. 2 幻のナンバーズ

「道路に巨大な数列が描かれている」との連絡を受けて駆けつけた横浜・寿町で、最初にそれを見たときは何がなんだか分からなかった。ナスカの地上絵同様、少し距離をおかないと読み取れないほど大きかったのだ。

情報提供者によると、どこかのオヤジが道路に正座し、チョークで描いていたらしい。

数列は寿町界隈の路上にいくつも描かれていて、数列中央がすべて九のもの、全長七メートルの巨大なものなど、さまざまな種類のものが発見された。当然我々は、そのオヤジを必死に探索したが、当人にはいっこうに会えなかった。

それから約半年後、突如僥倖は沸き起こった。寿町近くのJR関内駅近辺で、一心不乱に数字を記しているオヤジに出会ったのだ！　オヤジは六十歳くらいで、薄汚れた白いチューリップ帽をかぶり、裸身の上に直接薄汚れたグレーの背広上下を着用していた。オヤジは寡黙系畸人のようで、言葉数が非常に少なかったが、「作品」にはそれぞれタイトルがあるということを語ってくれた。

そのとき描いていたのは、中央部分がほぼ0で占められた数列。作品名は『イヤリング』だという（0がイヤリングに見えなくもない）。

オヤジが残した「私はノーベル」「世界一でなければ駄目なんですよ」という奇妙な言葉が、彼のメッセージを読み解く重要なキーワードなのかもしれない（今）。

最初6桁ほどで始まり、1行で1桁ずつ増え、しまいには何十桁にもなる。離れると、巨大な三角形のように見える。長さは通常5メートル前後。

数字の大きさは数センチ角。ところどころで上の行と下の行をたしているが、全体的には、四則演算の範囲で気まぐれに計算しているようである。

File No. 2
幻のナンバーズ
Code Name▶数列畸人
Address▶寿町

File No. 3
太陽系開拓団員募集

Code Name▶木星オヤジ
Address▶町田

94年に発行された『UFO新聞』創刊号。創刊号の文字の下に小さく「油断もスキもないくらい面白い新聞にスル……」と書かれていて、青木さんの意気込みが感じられる。スペースコロニー情報など記事も充実。

こちらが最新の『太陽系新聞』(96年12月)。今年(97年)はまだ発行されていない。左下に書かれた「『生活に密着して』木星に行って太陽系文明開拓を行なおう」というあたりに、青木さんの素晴らしさがある。

File No. 3 太陽系開拓団員募集

「木星オヤジ」こと青木さんは、東京郊外のターミナル駅の連絡通路で、毎夜十時前後から「木星にいこう」という手製の派手な看板を並べているナイスな御仁だ。

青木さんは一九八六年に、木星のすぐそばで輝いていた発光体を見つけた。それ以来、この発光体目撃体験の意味について思い悩むのだが、八年後、木星に千年に一度という巨大な彗星が落下したことで、発光体目撃体験が、彗星落下事件の予言であったと確信する。そして、自分にそのメッセージを送った発光体が存在している木星を目指すために、青木宇宙船科学研究所を設立し、駅連絡通路での啓蒙活動やUFOコンタクト集会の実施などに日夜奮闘しているのだ。

その活動ツールのひとつが、ここに紹介しているUFO新聞（いわゆる機関紙）である。はるか木星を目指しているのに、ワープロすら使用せず、すべて手書きで思いをぶちまけているところに、青木さんのメッセージの「凄み」がある。なお、最近

『UFO新聞』から『太陽系新聞』に紙名が変更になった。青木さんいわく、「より大きいスケールの内容にしたかったので」「家庭に落ち着く新聞名にしたかったので」ということらしい……。さあ、太陽系開拓団に参加して、青木さんとともに木星を目指そうではないか！（今）

File No. 4『天皇』の耐えられない軽さ

Y農園主は、畸人研究学会が約四年前より追跡・調査・研究を続けている超大物〝電波の鉄人〟である。彼はこの四年間、自分の農園にある温室のガラスなどをキャンバスにし、さまざまな主張を書き続けている。彼に、どれひとつとってみてもマトモではない主張の意味について尋ねてみると、「見てのとおりです、読めば分かるでしょう！」。脳内電波に限りなく忠実なY農園主は、とにかく自らの活動に自信満々なのだ。

温室の主張は、これまで何度か書き換えられてきたが、Y農園主の主要テーマはあくまで『天皇』。ご本人いわく、「とにかく天皇が現在も生きていることが耐えられない！」とのことで、温室に『八月十五日は負け天皇日です！』などと書いたり、「エノラ・ゲイは原爆を落としたことにより、天皇制に鉄槌を下した！」と、過激な主張を展開している。

最近のY農園主は、自家用車に『天皇制反対』の主張を書いてみたり、『反共』を唱え出してみたり、さらには独自の世界観を表現した〝曼陀羅〟を製作してみたりと、活動をさらにエスカレートさせている。

巷では、東西冷戦構造は終結したと言われているが、Y農園主の頭の中のベルリンの壁は、いまだに崩れていないようだ。

これからもY農園からは目が離せそうにない（海）。

メロン、スイトピーなどを栽培しているガラス温室いっぱいに、Y農園主自らの主張を書き連ねた〝妄想の温室〟。天気の良い日など、赤や黄色や青のペンキで書かれた狂気の主張がキラキラと輝き、とにかく壮観の一語に尽きる。

とにかく書けるものならどこにでも自己主張をしてしまうのがY農園流。Y農園の石垣もご覧のようなていたらく。これ以外にも「小沢政治は政治家でもコンダクターでもない！」などというトホホな主張を石垣に書き込んでいる。

Y農園主の作品のなかでも最高傑作にあたるもの。Y農園主の頭の中に花開いた、一種の曼陀羅である。もう、内容の説明はいらないだろう。あまりの独創的かつ常識外れな内容に、道行く人は皆、目を背けながら足早に通り過ぎていく。

File No. 4
『天皇』の耐えられない軽さ
Code Name▶Y農園主
Address▶極秘

File No. 5 進め！電波カー!!
Code Name▶軽四のさすらい人
Address▶住所不定

このような定住していない「さすらい畸人」は珍しい。オヤジはかなり臭かった。

これが電波カー。車の中もスゴい状態で、運転席以外はゴミのようなもので埋め尽くされていた。

車の背面ガラスに貼られた太陽系のポスター。この車を構成するすべてが、オヤジのメッセージであり、また「脳みその一部」であることは間違いないはず。

File No. 5 進め！電波カー!!

そのオヤジはのっけからスゴかった。あるコンビニの駐車場で、「ベスビオ火山！」と叫びつつ、コピーを手に自分の車の周りを練り歩いていたのだ。車は軽自動車なのだが、廃車寸前のひどいオンボロ。塗装が剥げかかっているうえに、車体はところどころ欠落していた。

さらに、欠落部分を塞ぐかのごとく、「阪神大震災に学べ」「ガソリン1リットル＝61円」「太陽系のポスター」など、支離滅裂な貼紙が多数貼られていた。オヤジに近寄ると、車の横の窓ガラスに貼ったイタリアの地図とポンペイの遺跡の写真をバンバン叩いて、「これはイタリアだ！　イタリアも地震や火山があって、大きな被害を受けたのだ。日本も学ぶべきだ！」と絶叫し、手にしたコピーの一枚を私に手渡した。

それは地震の年表だった。オヤジはさらに地震の怖さについてひとくさり講釈をたれた後、私に健康ランドの場所を尋ねてきた。オヤジの車のナンバーは新潟だった。地震の怖さをアピールするために全国行脚

しているのか？　私が考え込んでいるうちに、オヤジはさっさと車に乗り込み、私から聞き出した町外れの健康ランドに向けて車を発進させた。

あっけにとられた私は、ヨタヨタ走っていく「電波カー」が小さくなって見えなくなるまで、コンビニの駐車場に立ちすくんでいたのだった（今）。

File No.❻ 反物ビラの饒舌

日本橋のたもとで偶然出会ったビラ男。とにかくいったん話し出すと止まらない、ビラも饒舌だが、本人自身も饒舌な人間だった。

ビラの内容や本人の話の特徴は、まずとにかく『会話』の重要性を強調するところにある。たとえば、「会話の技術さえ習得すれば話す言葉が即、詩になり哲学になる……」などと主張するのだ。「世の中の人は皆、会話の重要性を分かっちゃいない！　ある人は俺に『心がいちばん大切だ』と言ってきた。だが、心は会話を通して理解されるものだ！　やっぱり会話がいちばん大切なのだ！」。

どうやらこのオヤジ、こうやって道行く人たちに議論をふっかけているらしい。オヤジの話はいつのまにか脱線する。「勝新太郎はけしからん！　あいつはガンのくせに記者会見のときに酒を飲んでいた！　ガンは何年もの時間をかけて治していくものだ。それなのに勝新太郎は酒を飲んでいた！　だからやつは死んだのだ！」

会話ばかりでなくガンの治療にも一家言あるようである。

それにしてもこのオヤジ、『会話』を何よりも重要視するわりに、終始一方的に喋り続けるので私との間にはまったく『会話』が成立しなかったのだが……。（海）

日本橋に突如出現した、3メートルは優にある反物のような長い長いビラ。ちなみにこれはアイドルの水着写真カレンダーを繋げて作ったもの。

ビラの作者は、どこか哲学者のような風貌だが、生活道具一式を持ち、靴はテープで修繕してある。どうやら、気ままな路上生活者らしい。

File No. 6 反物ビラの饒舌
Code Name ▶ 不明
Address ▶ 日本橋

File No. 7 正義の味方見参！

Code Name ▶十手オヤジ
Address ▶川崎

十手オヤジの新聞の一部。論理学や法学に傾倒している彼は、独自の理論によって国家のあり方を説いているらしいが極めて難解。徳と法をもって国家を治めるべきだという主張らしい。

これも新聞の一部。歴史にも造詣の深い彼だが、これまた単語の羅列にしか見えず難解。頭の中に充満する膨大な知識が表出したものと推測される。達筆な英語が随所にちりばめられていて、難解度を増している。

File No. 7 正義の味方見参！

正義の味方十手オヤジは、川崎駅周辺において独自の啓蒙活動を行なっている。十手を手に自転車に乗って現れたかと思うと、いきなり交通整理を始めたり、私財九十万円を投じて作った「新聞」を配布したりしている。

彼いわく、「新聞」の内容はとても難解なものなので、三千人に一人しか理解できる者はいないのだそうだ。彼の持つ十手には、短冊型の単語帳が何十個も付いていて、博学なその口からは、それらの単語帳に記された世界中の金言、格言が次から次へとあふれ出てくる。英語、ドイツ語、フランス語の格言もペラペラだ。

日本国旗に「上」の文字が入ったプレート付きの帽子をかぶり、首から十字架をぶらさげ、胸にフランスの三色旗をつけたこのオヤジは、昭和二十六年から活動しているのだという。人間には上中下の三種類がある、と語る彼は、「人間が学問を怠ったことから『下』の人間ばかりになってしまったので、今の世界の危機的状況が起こっ

た。それをなんとかするのが自分の使命だ」と考えているようだ。

活動の原点たる事務所は、さる理論右翼大物からの手紙あり、「見ザル言わザル聞かザル」の置き物ありで、壁に貼られた酒井法子のポスターが、それらを見守っていた。

それにしてもなぜ「十手」を持ち歩くのか。聞いてみたところ「十手にはね、世をからめとるという意味があるんですよ」という、実に味わい深い答えが返ってきた(黒)。

File No. 8 白旗壁新聞

これらのビラは、ある日突然横浜・寿町界隈に貼り出されたものである。ビラにはいくつかの種類があるが、すべてA病院で行なわれた治療を徹底的に糾弾する内容となっている。憎しみにあふれた糾弾内容もさることながら、あまりにも素晴らしすぎる『ミハイル・アレクサンドル・ペトロビッチ・馬喰人』という自称が、ビラ作者への興味をさらにかき立てる。

ビラの作者K氏は、氏を知る人によれば身長一八〇センチを超える陽気な大男で、寿町を拠点として日雇労働をするかたわら、株式投資も行なっていた異色の人物だったという。K氏はバブルが弾けた後、ある日突然寿町から姿を消し、その後まったく行方が分からなくなってしまった。しかし、K氏がいなくなった後も、つい最近までK氏の姿を追い求める謎の男が寿町に出没していたという話もある。

素晴らしい糾弾ビラを製作し、株に手を染めた日雇労働者K氏の真の正体は、寿町にK氏の姿を追い求める男たちが現れたということもあいまって、実に深い謎となっている。

K氏は今、どこで何をしているのだろう?(海)

とにかく横浜市内のA病院で行なわれた治療に対しての〝怨念〟で固められたビラ。共産党に対する敵意も交ざり、〝怪作〟と呼ぶにふさわしいものとなった。

さらにA病院で行なわれた治療に対する憎しみを書き連ねたビラ。それにしても『聖テレーム修道院馬喰人』……って、いったい何のことなのだろうか?

File No. 8 白旗壁新聞
Code Name▶ミハイル・アレクサンドル・馬喰人
Address▶寿町

俺の読者に贈るコトバ

電波ファンレターの練習問題

元祖・電波系ライターのもとにあまた届く奇妙な手紙。
思い上がるな、お前が死んでも地球は回る！

村崎百郎（電波系鬼畜ライター・工員）

数にすればそれほど多くもないのだが、俺に来るファンレターの半分以上は（書いている内容を信用するならば）精神病院に入院歴のあるという少々個性的な連中である。そして残りの半分近くも、そのほとんどが俺の見たところ、近い将来に輝かしい入院生活が約束されているような素晴らしい個性の持ち主である。そんなふうにキチガイどもになつかれるのは、同じキチガイとして嬉しくもなんともないが、これも電波系の鬼畜ライターをやっている以上、当然と言えば当然のことなんだろう。

しかし、筆不精のうえに「義理人情指数ゼロ」の鬼畜な俺は、ファンレターにいちいち親切な返事を書いたことなど一度もなく、たまに気が向いても実際に書くのではなく、アタマの中から直接〝電波〟で送っているだけなので、相手がそれを受信できたかどうかはほとんど分からない。そういう意味で、今回の編集部からの執筆依頼は良い機会でもあり、心あたりのあるキチガイどもはファンレターの返事代わりにこの原稿を読んでほしい。それ以外の読者の皆さんは、「キチガイの発想をより深く理解する参考資料」として、この原稿を深く読み味わってほしい。もっとも理解したところで、どーなるわけでもないけどな。

見当違いの抗議

俺は自覚のあるキチガイとして、生まれつき俺を苦しめ続けた幻聴&幻視の症状を細密に告白した『電波系』（太田出版刊／根本敬と共著）や『別冊宝島281号　隣のサイコさん』（小社刊）が刊行された後、俺よりも症状の軽い奴らから無責任な抗議

が来た場合、絶対に出かけて行ってそいつの奥歯が全部折れるまで一方的にブン殴ろうと心に強く決めていた。その後にも、十年単位のブランクを置いて相手を完全に油断させておいてから、そいつの子どもや孫まで襲って、最終的には本人にとどめを刺してやろうと計画を立てていた。

もちろん、こんな発想がマトモなことだとは俺自身も微塵も思っちゃいないが、三十年以上の長きにわたって電波受信による精神的苦痛を経験すると、人は心が荒みきって、とびきりネガティヴな発想や、明確な対象を欠いた莫大な憎悪が自然に育ってくることもあるんだということを〝正常な〟皆さんにも（っても、何が正常なんだか俺にゃあさっぱり分からねえが）知っておいて欲しく、ここに書いてみた。

俺のように暴力的で執念深くて粘着性の強いキチガイと不用意に関わることの危険性というのを、少しでも感じていただければ幸いである。これは冗談でもなんでもない。パラノイアとはそうしたものである。

しかし、そういう希望に反して現在に至るまで、俺のもとに見当違いの抗議の手紙が届くことはなかった（ひょっとして、編集者が気を遣って、俺に犯罪を起こさせないように握りつぶしてくれていたのかもしれないが）。そればかりか、この鬼畜な俺に賛同や励ましや病院の紹介のお便りが届くのだから、世の中もずいぶんと慈悲深いものだと思った。これでは、まだまだ日本を下品のどん底に墜とすには腐敗が足りない。もっと努力しなければいけないようである。

「手紙」の傾向と対策

俺に届くファンレター（現存する物質として届いたもの&電波で届いた無形のもの）を大別すると、次の五つのタイプに分けられる。

（1）これからもがんばってください
（2）私も入院していました
（3）いい病院ありますよ
（4）私の悩みを聞いてください
（5）言語以前（全く意味不明）

参考までに、俺がもらってホントに嬉しいファンレターは「私のおまんこを見てください（写真付き）／ニオイつきパンティ&下着のプレゼント（女物に限る）／エロビデオの差し入れ／おめこ券同封の〝私と一発やりませんか〟の手紙／現金」などである。理想と現実のギャップがいかに大きいものかお分かりいただけると思う（まあ、俺のように意識の低い最低の人でなし鬼畜に真面目にファンレターを出そうなどと考えた時点で、そいつはすでにアウトなのだが……）。

さて、俺の見たところ（1）から（3）までのタイプの手紙の出し主は、入院歴がどうのと書いている奴も多いが、それを客観視して手紙を書いているという点を考えると、それほど問題のない健全な精神を有した人間だと言えるだろう。

この手の連中に問題があるとすれば、「俺のような鬼畜の心配までするお人好しな性格」という点である。心配してくれて恐縮だが、「お前ら、そんなに簡単に他人に共感したり同情したりするんじゃねえ！」とだけは言っておこう。こんなに腐

った時代と国で、下手に他者への思いやりなんて持って生きていたら、善意を逆手に取った詐欺に遭うだけだから気をつけろ。ハナクソ以下の価値もない「優しい心」なんかさっさと下水にでも流しちまえ。頼むから俺なんかに騙されるなよ！　俺はお前らが一日も早く改心して、俺に「お前電波系なんだってェ？　いいざまだな、俺ァとうに治ったぜ。もっと苦しめ！　苦しめ！できるだけ苦しんでさっさと死んじまえ、このクソ野郎！」という強靱な憎悪と悪意に満ちた呪詛の手紙を出してくれることを心から望んでいる。病院から〝卒業〟したお前らがこの世で強く生きるにあたって必要なのは、神をも欺く狡猾さと一片の曇りもない徹底的な悪意である。

　また、正常な人間から見ると、（5）のタイプの手紙を出す人間がいちばん深刻で悲惨そうに見えるだろうが、はっきり言ってここまでいくと何をやっても手遅れだろうし、本人もそれなりの境地に達しているので（おそらく自分の中では釈迦やキリストよりも偉くなっている）、社会生活を送るうえでも大きな支障はあろうが、本人はそもそも周囲の反応なんか気にならないだろうから、これも問題なしということにしておこう。

　死ぬまで自分の妄想の迷宮で踊っていれば、それなりに幸福でいられるのだから、ある意味でこいつらは幸福な連中とも言える。何も治療によって無理矢理〝正常〟に戻すことだけが、その人間にとっての最高の幸福とは限らない。お前らはヘタに正気に戻ったら悲しくなるかもしれないから、そのまま死ぬまで狂い続けて王様のままで死ねるといいな。

　そして、今回俺が問題にするのは（4）のタイプの「悩み相談」の手紙を書いてくる連中である。俺にしてみれば、こういう中途半端な「半キチガイ」がいちばんやっかいなのだ。

　いちいち書くまでもないが、こいつらの最大の過ちは、よりにもよって相談相手に俺のような最悪のキチガイ鬼畜を選んだことである。俺は相談の手紙をもらうたびに、相談者の馬鹿ぶりに眩暈（めまい）がする思いだ。だいたい、人を人とも思わないこの俺が、マトモに他人の相談を聞いて心配するとでも思ってんのか？　優しい言葉でもかけてくれると思ってんのかァ？　寝ぼけンなよ、このバ〜〜カ！　俺は絶対にお前らに同情なんかしねえぞ。ウダウダ悩むなら死ね。鬱陶しいから死ね。どいつもこいつも死にたい奴はさっさと死んじまえ！　キチガイにキチガイ話を相談するんじゃねえ！

　……などと怒ってみても仕方がない。俺もこいつらも、同様のキチガイなのである。こいつらが過度の他者依存を止めて、不器用でもいいから開き直って、根拠なんかなくてもいいから自信を持って、自分のやりたいように生きはじめたら、俺にこんな手紙など出さないだろう。徹底的に人でなしの鬼畜になれば悩まなくて済むのにな。もっとも、それができねえから相談の手紙を書くんだろうが……。

観賞と分析

　それでは、次に例をあげて（4）のタイプの電波手紙を徹底分析してみよう。

　読者との信頼関係上（鬼畜の俺にそんなもんねえけどよ）モノホンの手紙をそのま

ま掲載するわけにはいかないので、ここでは類例として、俺のアタマに直接やってきた電波をいくつかリミックスして、多少の固有名詞をずらしたものをモデルタイプとして掲載する。細部はそれぞれ人によって違うが、電波系の連中はどいつもこいつも似たり寄ったりの内容を書いてくるものである。

電波ファンレターの一例

（制作／村崎百郎）

謹啓　村崎百郎先生　文久三年の冬以来のおひさしぶりにございます。

私は現在人生の指針について大いに悩んでいるところです。ことは私だけの問題ではありませんので今回村崎先生に手紙を書くことに決めました。このようなことを相談するのは常識に照らし合わせて明らかに狂気の域に入っている人間のようにも思われますが、全ては地球と人類の未来にかかわる重大な事実なので、どうか最後までお読みください。

さて、世の中には他人の心を読んだりできる「リモート・ビューイング能力者」と、できない種類の「普通の人間」がいます。私はリモート・ビューイング能力者なのですが、まだ覚醒度が低くてそれほど強く能力が開花していません。『電波系』を読んで村崎先生も同様の種類の人間だと思いました。

私はこれまで私のまわりの多くのリモート・ビューイング能力者たちから「あなたこそこの世の危機を救うスーパー・リモート・ビューイング能力者＝最終世界救世主である」と何度も言われ続けてきました。

しかし、私は自分の人生の指針さえも明確に自覚できない弱い人間なのです。どうしてそのように救世主扱いされるのか分かりません。私は一体どうすればいいのでしょうか？

もしかすると、高次元の主護霊と精神を持った高次エネルギーにあふれた優秀な人間と会って話し合えれば、私は私の使命を理解できると思うのですがいかがでしょうか？

そこで、村崎先生にお願いなのですが私の覚醒を指導していただけないでしょう

photo▶小島義秀

か？
　そうすることが人類の未来のためになると考えられます。でなければ、どなたか優れた高次エネルギー人間を紹介してはいただけないでしょうか？　私のリモート・ビューイング能力はまだまだ不完全で自分の未来さえはっきり分からないのです。多くの能力者たちが私を待ち望む声は日増しに強くなるばかりで、最近はいつも気ばかりあせって何も手につかない状態が続いています。
　賢明なる村崎先生ならばすでにご承知のことと思いますが、この世紀末には大銀河系を代表する最高次の善霊が転生した五人の人間が、五大陸にそれぞれ一人ずつ現れます。
　私はそのなかでも最高位の黄色で、アジアを統一し、星でいえばシリウスを象徴する黄帝＝バラモン＝ゾロアスター＝ケツアルコアトルの生まれ変わりらしいのですが、惜しいかな転生のさなかに暗黒波動にもまれて記憶の一部と経験の四五％をなくしてしまいました。そのせいかリモート・ビューイング能力者以外の周囲の人間は親さえも私が大きな使命を背負って生まれたことに気がつかないようなのです。私の出現については世界中に現存する全ての予言書に全て記載されており、聖書はもちろんコーランや法華経などにも予言されており、フランチェスコや明恵やノストラダムスや出口王仁三郎など、多くの覚者によっても予言されています。庭のハイビスカスの花も秋だというのに咲きました。この地上に転生した他の四人の仲間が誰であるのかも分かりません。今すぐ村崎先生に教えていただきたいのは私を導く「導師」はどこにいるかということです。破壊と浄化の予言された世紀末の審判の日は近いので、どうぞよろしくお願いいたします。本当に悩んでいるのです。

敬具

因業寺大輔（仮名／十八歳）

　二度読むと頭痛がしてきそうな悪性の電波文書だが、これは八〇年代後期に発病者の多かった「戦士症候群」の一種であろう。全く罪深い妄想である。返事を考えるよりも、呼びつけて殴り殺した方が早い気もするが、『電波系』のどこをどう読んで俺にこんな手紙を書いてきたのか聞いてみたい気もする。なぜなら『電波系』は、こうした妄想をいかに妄想と認識して、それに取り込まれないように強く生きるかを考える本であったからだ。
　しかし、まあ、本をどう読むかなんて読者の勝手だし、自分に都合の良い部分しか読まないのが我々キチガイの特徴でもある。こんな手紙が何通も来るところを見ると、俺の企画意図はあまり有効に伝わらなかったようである。やれやれ……。
　それでは、気をとりなおして、一行ずつ俺なりに分析して読み味わってみよう。

偉くなったような錯覚

「謹啓　村崎百郎先生　文久三年の冬以来のおひさしぶりにございます。」
　こいつは謹啓という挨拶を入れているだけマシな方。多くは冒頭から突然相談事を書きはじめるから始末に困る。まあ、礼儀

正しければ良いというわけじゃないが……。それにしても勝手に「先生」って書くのはムカつくよなあ。たかが鬼畜に敬称なんか付けるんじゃねえ！　いつ俺がお前の先生になったんだよ！

　そして、こいつはその後の一文が完全にアウトだ。こいつは〝前世〟とか〝転生〟とかを信じてるタイプなんだろう。俺も電波でそういう記憶が突然流入してきたりもするが、前世妄想はいっさい相手にしないことにしている。なぜなら、前世妄想は霊界妄想と一緒で、心霊詐欺の基礎中の基礎アイテムであるからだ。今後も、俺の目の前で俺の前世がどうのこうのと言い出す奴がいたら、俺は言い終わらないうちに、絶対にそいつの奥歯が全部折れるまでモノも言わずに一心不乱に殴り続けるだろう。

　俺は霊を自称する奴らの声は聞こえるし、たまに姿も見えるが、低能オカルティスト（詐欺師）どもの語る霊だの霊界だのはいっさい信じない。つまらん妄想が見えたり聞こえたりするぐらいでギャアギャア騒ぐなよ馬鹿。人間の感覚ほどあてにならないものはないんだからな。

「私は現在人生の指針について大いに悩んでいるところです。」

　はあ、〝青春〟というやつですかァ？　よくあることですよねえ……

「ことは私だけの問題ではありませんので今回村崎先生に手紙を書くことに決めました。」

「お前だけの問題だよ！　簡単に決めンじゃねえ！　そんな理由で俺に気軽に手紙書くなァ！　俺は深夜放送のパーソナリティじゃねえぞ〜！」と叫びたくなるね。

「このようなことを相談するのは常識に照らし合わせて明らかに狂気の域に入っている人間のようにも思われますが、全ては地球と人類の未来にかかわる重大な事実なので、どうか最後までお読みください。」

　このあたりも、なんか妙に脅迫に近い言説だなあ。「地球と人類の未来」などとハナシが大きくなるあたりが充分イッちゃってるぜ。誰がそんなこと考えてくれってお前に頼んだよ？　お前は人類がどうだとか自分から関係の遠い大きな事柄を考える前に、「シロウト童貞を捨てたい」とか「アナルセックスがやりてえ」とか、もうちっと若者らしい即物的で矮小なコト考えて悩めよ。

　自慢じゃねえが、俺がお前ぐらいのトシのときは年間の射精回数は一千回を軽く超えてたぞ。「地球」とか「人類」とか「未来」とか、スケールの大きな語句を並べて、一人で大局的にモノを考え過ぎるとキチガイの妄想が増幅しやすい環境が揃ってしまうから気をつけな。絶えず目線を高いところに置いて下界を見下ろす気分でモノを考えると、自分が偉くなったような錯覚を起こすから要注意だ。

「救世主」への成長過程

「さて、世の中には他人の心を読んだりできる『リモート・ビューイング能力者』と、できない種類の『普通の人間』がいます。」

　世の中には他人のパンティを盗んでせんずりのオカズにする「下着泥棒」と、盗ま

ない「普通の人間」がいるようなものですかね。そうやって人をばっさりと選別して、この世界を「分かったつもりになる趣味」は、放っておくと「他人が馬鹿に見えて仕方がない妄想」につながるのであんまりお薦めできねえな。このあたりの記述から、差出人のエリート意識がムクムクと頭をもたげてきているのが興味深いね。超能力モノ雑誌の『ムー』の読み過ぎか、オカルトの漫画やアニメの見過ぎとしか思えないね。ここまでオリジナリティのない妄想っての は傍から見ても魅力がないぜ。

「私はリモート・ビューイング能力者なのですが、まだ覚醒度が低くてそれほど強く能力が開花していません。」

「ああ、やっぱりそうでしたか、私も実はあなたがそうではないかと思ってたんですよ！」って思って欲しいのかねえ？　「自分は人より優れた超能力を持った人間である妄想」ってのがこいつのエリート意識（妄想）の中核になっているらしいねえ。全くつまらねえ妄想だな。エリート意識を持たなければ生きていけないのかねえ？

『電波系』を読んで村崎先生も同様の種類の人間だと思いました。」

　キチガイ特有の淋しさからか、この手の連中は、こうやって自分の妄想の中に他人を引きずり込もうとするものだ。同じキチガイでも、こいつと俺との明白な違いは、「自分の妄想を妄想だと自覚しているか／していないか」だけなのだが、そこが重要なポイントだ。こいつのようにどっぷりと妄想にひたりきっていると、なかなか自分の姿は客観的には見えてこない。もっと自分のことを「どーでもいい存在」と思いながら冷めた目でいいかげんに見ることができたら、こんなに悩まなくても済むだろう。こいつは「現実」が見えないのではない、見ようとしていないだけなのだ。

「私はこれまで私のまわりの多くのリモート・ビューイング能力者たちから『あなたこそこの世の危機を救うスーパー・リモート・ビューイング能力者＝最終世界救世主である』と何度も言われ続けてきました。」

　ここはこいつの妄想の成長過程がよく分かる一文。「まわりの多くのリモート・ビューイング能力者たち」ってのはおそらく実在する人間ではなく「電波」だろう。でなければ、他人の言葉がそのまま聞こえないほど症状が進んでいて、他人が何を言っても「救世主である自分に対する賛美の言葉」に聞こえてしまうのだろう。自分が聞きたいと思っている言葉以外、何一つ聞こえないという状態は自分ではなかなか認識できないものだ。

　こいつは、「この世には特殊な才能のある人間とない人間がいる」→「自分は超能力者（エリート）」→「自分はこの世界を救う使命を持つ最終世界救世主」の順番に妄想が膨れたようだ。これも「こいつ自身の世界では」というカッコ付きでくるならば、妄想ではなく現実とも言える。「自分の世界」を救うのはやっぱり自分自身であるからだ。

「しかし、私は自分の人生の指針さえも明確に自覚できない弱い人間なのです。どうしてそのように救世主扱いされるのか分か

りません。私は一体どうすればいいのでしょうか？」

「そうだよ、よく分かってるじゃないか」、などと納得してはいけない。これはこいつ自身が冷静であることを装っている文だ。「それでも私は救世主」という鼻持ちならないエリート意識が全体にプンプンと漂っている。俺には、こう書きながらも「私はあんたらみんなを救う救世主。だけどこんなにも謙虚。どうです、偉くて凄いでしょう？」と得意満面な笑みを浮かべるこいつの面が見えてくる。もしも俺が「死ね！」と答えたら、お前ホントに死ぬのか？ その気もないくせに、人に教えを乞うようなペテンをするんじゃねえ！

こいつは自分の望んだ回答が返ってくるまで、別な人間に同じことを聞き続けるだろう。

「迫害」は力なり

「もしかすると、高次元の主護霊と精神を持った高次エネルギーにあふれた優秀な人間と会って話し合えれば、私は私の使命を理解できると思うのですがいかがでしょうか？」

何べん言ったら分かるんだ、このド阿呆！ この世に特別な人間なんて一人もいねえんだよ。いいかげんに目ェ覚せよ。何でそうやって自分が「特別な人間」であることを欲するんだ？「特別」じゃなければ生きてる価値がないのか？ 今はまだいいけど、そういう「自意識過剰」は二十代前半ぐらいまでで卒業しろよな。「自分にとって自分は特別」ぐらいの意識で満足しとけよ。人は超能力者や救世主じゃなくても、充分この世で楽しく生きられる。俺のような鬼畜でさえもだ。

「そこで、村崎先生にお願いなのですが私の覚醒を指導していただけないでしょうか？

そうすることが人類の未来のためになると考えられます。でなければ、どなたか優れた高次エネルギー人間を紹介してはいただけないでしょうか？ 私のリモート・ビューイング能力はまだまだ不完全で自分の未来さえはっきり分からないのです。」

なんでゲス鬼畜の俺がクソ人類どもの未来のために協力しなけりゃならねえんだ？

俺は「救世主相談所」の看板を出した覚えはねえぞ。参考までに言っておくけど、自分は高次元の人間だなんて自称する奴がいたら、そいつは間違いなく詐欺師かキチガイなんだから不用意に近づくなよ、尻の毛までムシられるぞ。

それと、未来が分からねえのはお前だけじゃないんだから悩むなよな。予知妄想を持った奴らのタチの悪さは、その妄想を自分のまわりにばらまいて自分の妄想を現実化しようとするところにある。破滅の予言を頻繁に語るキチガイの根底にあるのは、「自分が特別視もされず支配もできない世の中なら、いっそ滅びてしまえ！」というとびきり矮小でワガママな思いがあって、そんな奴の妄想につきあう義理も義務も我々には全くないんだから「もうすぐ世界が終わる妄想」は、完全無視しとけよ。確かに世界はやがて終わるだろう——ただし、それは自分がこの世から死ぬときに「自分の世界」が、だ。

「多くの能力者たちが私を待ち望む声は日増しに強くなるばかりで、最近はいつも気ばかりあせって何も手につかない状態が続いています。」

〝電波〟ってやつは、確かにこのようにくり返し囁きかけて人をそそのかすものだ。俺の経験では、そういう時は、スポーツで汗を流すか、猿なみの連続センズリにチャレンジして思いきり疲れるとよく眠れるぞ。何も手につかないんなら徹底的に黙って何もするなよ。

「賢明なる村崎先生ならばすでにご承知のことと思いますが、この世紀末には大銀河系を代表する最高次の善霊が転生した五人の人間が、五大陸にそれぞれ一人ずつ現れます。」

知らねぇよ。俺みたいな中卒のパープリンつかまえて「賢明」とか言うなよな。しまいにゃ怒るぞ。

「私はそのなかでも最高位の黄色で、アジアを統一し、星でいえばシリウスを象徴する黄帝＝バラモン＝ゾロアスター＝ケツアルコアトルの生まれ変わりらしいのですが、惜しいかな転生のさなかに暗黒波動にもまれて記憶の一部と経験の四五％をなくしてしまいました。」

偉いねえ。なんだか知らないけど盆と正月が一緒になったような、もの凄く豪華な偉さだねえ。さすがにこの部分は、何度読んでも怒りがこみ上げて手が震えてくるぜ。かける言葉も見当たらないくらい完璧な電波だよ。よくもよくも、こんな陳腐な妄想を人に与えられたもんだ。お前も、こんな典型的な電波を受け取って舞い上がってンじゃねぇ！

「そのせいかリモート・ビューイング能力者以外の周囲の人間は親さえも私が大きな使命を背負って生まれたことに気がつかないようなのです。」

誰も死ぬまで気がつかないと思う。ここは軽い「迫害妄想&被害妄想」が入っているので分かりやすいねえ。「この世は悪がはびこっているので正しい教えは必ず悪の勢力に迫害を受ける／真の救世主は必ず悪の勢力に迫害される／自分は救世主なのに誰も自分に注目

しない↓世界は自分に悪意を持っているのだろう↓それでも自分は衆生を救済しなくてはならない↓救世主であることの恍惚と不安が大きくのしかかって孤独を感じる」という定番の図式が見えてくる。

他人に「自分が救世主である」ことを語れば語るほど、周囲は引いてこいつの孤独は一層つのり、救世主妄想の症状は進むというわけだ。まあ、どっちに転んでも自分に都合の良い方向にしか考えがいかないのが我々キチガイの特徴なのだ。自覚する以外に解放の道はないが、なかなかそれは難しいんだよなあ……電波の言うことを真に受けて聞いていると、それなりに気分ハッピーになれるからな。「あんたはエライ」って誉められてりゃ悪い気はしないだろうしな。その代わりなんの進歩もないぜ。

ホントは友達が欲しい

「私の出現については世界中に現存する全ての予言書に全て記載されており、聖書はもちろんコーランや法華経などにも予言されており、フランチェスコや明恵やノストラダムスや出口王仁三郎など、多くの覚者によっても予言されています。」

もう見渡す限り、電波、電波、電波、電波、電波の嵐です。まさしく「電波じかけの明け暮れです」ね。文書に限らず、どのようなものを見ても「これは自分へのメッセージである」と思い込んでしまうのは、正常な人間にはきわめて困難な作業ですが、一度キチガイになってしまえば、比較的楽なのでこうした妄想も珍しくありません。むしろ、このような精神状態のもとでは、自分以外のことを書いている文章を探す方が困難なぐらいです。

「ああ、そうか！　俺ってこんなにも重要な人間だったんだ！」と思い込むことで、こいつは社会にとって取るに足らない自分の存在を許すことができるんだろうな。そんなに役目が欲しいのか？　黙ってダラダラできないなんて、とことん勤勉な野郎だぜ。

「庭のハイビスカスの花も秋だというのに咲きました。」

ここだけ意味不明。こいつの中の別の人

格が何かを言いかけたのかもしれないな。ときどきはフッと正常に戻ったりして、何事にも断片的で首尾一貫していないのが我々キチガイの特徴でもある。「ハイビスカスの狂い咲きが何かの奇跡を予感したり象徴しているのだろうか?」なんて真面目に考えたら、その時点でこいつの妄想に取り込まれるので、ここはそのまま無視してパスだ。

「この地上に転生した他の四人の仲間が誰であるのかも分かりません。」

よしよし、お前、ホントは友達が欲しいんだな? 正直になれよ、真面目に生きているとそのうちきっと見つかるぞ(ウソ)。その退屈な救世主妄想を捨てれば話だけどな。

「今すぐ村崎先生に教えていただきたいのは私を導く『導師』はどこにいるかということです。破壊と浄化の予言された世紀末の審判の日は近いので、どうぞよろしくお願いいたします。本当に悩んでいるのです。」

んな奴はどこにもいねえよ。だいだいお前、そんなに気が遠くなるぐらい偉いんだったら、何で俺みたいなゲス鬼畜に相談するんだよ。そういう矛盾にも気がつかねえのか? 同じキチガイとして俺はもの凄~く情けないぞ!

言葉なんて真に受けるな!

以上が電波相談ファンレターについての分析である。

何がこいつの不幸なのか、お分かりいただけたと思う。こいつの発想の根底にあるものは「優秀なもの=善=存在が許される/優秀でないもの=悪=存在が許されない」という単純で陳腐で醜悪な善悪二元論構造である。要は絶対正義の側に立って自己の存在を肯定しつつ、「世界の王様」になりたいんだろう。皆さんも、こいつの中に自意識過剰からくる思い上がりや支配欲やエリート意識の醜さが感じられたら、自分の中にも同じものがないか検証してみるがいい。持ってしまった妄想は仕方がないかもしれないが、それを捨てるのも、全て妄想と分かっていながらもそれを持ち続けて適当な夢を思い描くのも、一応は個人の自由なのだ。

人の心の不安や淋しさにつけ込んで囁きかけてくる〝電波〟の声には耳を貸すな。

最後に、俺にファンレターを書くおめでたい連中に言っておく。

「簡単に人を信じるなよ。易々と他人に影響されるな。文字なんか活字に組まれて本になってるとそれなりにご立派なコト書いてるように見えるけど、言葉なんて大したことないんだからな。書かれた文字を疑え、語られた言葉を疑え、いちばん悪いのは、何か自分以外の者に過度に期待して、判断を全面的に他者依存することだ。むやみやたらと他人を尊敬なんかするんじゃねえぞ。全ての文字には嘘があると思って間違いない。俺がお前らを騙そうと悪意を持って文を書いていることを忘れるな」

パラレルワールドへようこそ！

精神科医が妄想に組み込まれる時

妄想の住人に取り込まれることは、意外と楽しい。
妄想にはどこかキッチュなところがあり、私はそれに好奇心をそそられてしまうのだ。

春日武彦（精神科医）

S県の精神病院に勤めていた頃、ある将棋好きの中年男性患者を受け持っていた。母子家庭の子どもとして育ち、発病してからは一人で自室へ閉じこもったまま、ぶつぶつ独り言をつぶやきながら一日中詰め将棋をしていた。けれども本当は詰め将棋ではなく、本人の言によれば将棋の駒の動きがいわば「こっくりさん」ふうのメッセージ伝達手段になっているという。ただし「こっくりさん」は狐が予言をしてくれるけれど、彼の将棋占いでは「ゴカクショウ」が指示を与えてくるらしい。

いったいゴカクショウとは何かと尋ねても、彼との会話は成立しないのである。

「ねえ、ゴカクショウって何？」

「ああ、その問題ですね。つまり私が将棋盤を日課でいちばん大切なものと考えている問題でして、やはりゴカクショウが核心部分である、と。先生は将棋はなさるんですか」

「いや、駒を並べる程度ならできるんですけどね。ゴカクショウで上達するのかな」

「そうした問題は、どうしても地道な練習から始めませんとね。坂田三吉、ご存じですか。ああした閃き型の人は別でしょうけど、そうした問題も併せて考えなければ難しいでしょうね、やはり」

「となると、ゴカクショウが肝心なんですか」

「そうですね、ええ。吹けば飛ぶようなものと見くびってはいけません」

坂田三吉が出てくるところが、妙に縁台将棋っぽく素人じみた雰囲気である。

「ゴカクショウ」の死

それにしてもゴカクショウの意味が分からない。飛車角の角のことか、それとも駒が五角形をしていることなのか、盤面で互角に張り合うということなのか、確証としてのメッセージを指しているのか。暗号を解読する探偵さながらに推理をして「御角将」「五角将」「互角将」「互角勝」「御確証」などと紙に書いて見せてみたが、「その問題はですね」といった調子でさっぱり埒があかない。

彼の母親はもう七十を過ぎていたが、家で内職をしている。しょっちゅう面会に来て、弁当を差し入れたり、生活について細々と指示を与えたりして帰っていく。干渉はするが、自宅へ外泊をさせようと協力を仰ぐと、「いえ、息子はきちんと治ってからでないと敷居をまたがせません」と拒否する。入院している当人は、老母の言いなりである。

低値安定といったレベルで落ちついていた彼が、ある朝、散歩へ行ってきますと外出したまま行方不明になってしまった。夜になっても病院へ戻らず、母親へ照会してみたが実家へも顔を出していない。翌日の夜まで待って、それでも行方がつかめないようだったら警察へ届けようということで待機していた。

結局彼は、遺体となって見つかった。貯水池に、うつ伏せになってひっそりと浮かんでいるのが発見されたのである。遺書はなく、自殺か事故かもはっきりしなかった。死亡していたことを取り急ぎ電話で母親へ伝えると、いきなり低い声で、担当医としてはどんな気持ですかと問い返してきた。予想外の反応に面喰らいつつも、とても残念ですと正直に伝えると、「残念ねえ……」と試すような言い方をしながら、あとは事務的な話をてきぱきと進めていった。

葬式は二十年以上前に亡くなった夫の実家で行なうとのことで、あえて場所や日取りは知らせてこなかった。私は葬式へ参列すべきか迷っていたのだけれど、やんわりと拒絶されるかたちとなった。ゴカクショウの意味も分からずじまいに終わってしまった。そしてそのまま一カ月以上が過ぎた。

老婆の復讐、呪い……

ある日、老母がいきなり病院を訪ねてきた。挨拶に来たという。応接室へ通し、どことなく気まずい心持ちで面会した。あの母親のことだから、恨みつらみを延々と語りそうな気がしていたのである。しかし案外と穏やかな様子で、

「息子のことではいろいろご迷惑をおかけしました」

と述べ、それから持っていた手提げ袋から意外なものを取り出した。カメラである、しかもニコンの一眼レフ。こんなごついカメラは、いわばプロ・カメラマンの愛機であろう。当時はまだ「写ルンです」なんて使い捨てのカメラはなかったものの、素人でも使える自動式の小さなカメラはいくらでも売られていた。それなのに、小柄な老母にはあまりにも大きく、重く、不釣り合いなニコンを持ち出したので、私は困惑した。はっきり言って、異様である。

「息子がお世話になった人たちの写真を撮って、アルバムでも作ろうと考えています。

photo▶小島義秀

先生の写真を撮りたいんですけど、よろしいですか」と尋ねるので、私は二つ返事で応じた。カメラを扱う老母の手つきは覚束ない。おそらく彼女の持ち物ではなく、また息子の物でもなかったはずである（亡くなった彼は、器械類はまるで苦手と話していたことがある）。亡夫のものなら、もっと古めかしいカメラだろう。一応使い方は習ってきたらしく、露出やピント合わせはなんとかこなせるようであった。光線状態の良いほうがよろしいでしょうと、私はわざわざ外へ案内して、松の木の下でカメラに収まることにしたのであった。

撮影を終えて応接室に戻り、話を再開した。すると老母は最初の穏やかなトーンからしだいに離れていく。息子の遺体を焼いたら、灰が青かった。これは病院で出されたクスリに毒が混ざっていた証拠であるなどと言いはじめたのである。つまり病院で処方したクスリに入っていた毒のせいで息子は朦朧状態となり、さまよい歩いて溺死するに至った、というのである。しかしそんなおかしなクスリは出していないし、気になるのなら処方箋やカルテもお見せしますよと説明しても、いや息子は毒にやられたにちがいないんですと決めつける。そして、自分は今、青い灰をしかるべきところで分析してもらっているし、弁護士にも相談しているのだと語り、「こうしてあなたと話している会話もすべて録音してあるのです」と、カメラを入れていた手提げから、作動中のテープレコーダーを芝居じみた仕種で取り出してみせた。

老母としては、それで私をうろたえさせるつもりだったのだろう。私はやましいことなど何もないからその点については平気

だったが、むしろ彼女の精神状態に驚かされたのである。彼女は、性格的に偏りはあるがまあ「正気」の範疇に入る人物であると私は思っていた。ところが息子の死をきっかけに、老母は病院の陰謀で息子が殺されたという荒唐無稽な話を語りだしたのである、しかもニコンの一眼レフとテープレコーダーを持って。

伝染する「妄想」

これは息子の死のショックによって老母が発狂したという話ではない。たしかに彼女の語る内容は病気の域へ達しているけれども、むしろ反応性の妄想状態と見ておいたほうがよいだろう。彼女の人生にとっては、こうした奇想天外なストーリーで私を悪者にしなければ辻褄の合わない気分であったのだろう。それは了解がいく。もともと攻撃的で支配的な性向があったから、このようなかたちの妄想を考えつくことには、無理からぬところがあるのかもしれない。彼女が私を深く恨むことも当然と言えるかもしれなかった。

だがそれにしても、騙すかたちで私の姿をしっかりとカメラへ収め、また声を録音したという事実がなんとも不吉なのである。

普通だったら、時間の経過とともに恨みは薄れ、現実を受け入れるようになっていくものである。しかし老母の年齢を考えると、元来の性格および脳の老化に伴う頑なさの増強によって、一生私を恨みつづけたまま他界する可能性が少なくない。寿命が尽きるまでずっと、私の声をテープで何度も何度も再生したり、写真を眺めては新たな憎悪を募らせていくことだろう。これは実に気色の悪いことである。

弁護士に相談したというのは眉唾ものだが、彼女にわざわざニコンなんかを貸し与えて操作法も教えた人物がいるにちがいない。その人物も、どこかエキセントリックな人物なのではという予感がして気が重くなる。遺体を焼いたら青い灰になっていたというのは真実だったのだろうか。しかるべきところへ分析に持っていっていると言っていたが、遺灰を持参して毒の有無を調べてくれと言われても、持ち込まれた側はさぞや困惑したことだろう。

そして私の写真は、どんな目的に使われるのだろう。声と姿を彼女が手に入れているということは、呪いの材料にそれが使われかねないということである。私の顔の、眼の部分を木綿針で突いている老母の姿がありありと想像されたりして、被害妄想的な気分に陥ってしまう。今でも頭痛がしたり、胸がチクリとしたりすると、あの老母のことが思い浮かぶ。生理的に怖い。そういった意味で、まさに彼女の復讐はしっかりと実を結んでいるのである。

事件からはもうかなりの年月が経っているが、あれ以来音沙汰はまったくない。もはや彼女の生死も定かではない。が、それにしてもニコンの一眼レフと老母の組み合わせは、違和感に満ちていると同時にリアリティそのものとして私の記憶に焼きついている。

パラレルワールドの住人にされる気分

私はあの老母が狂人であるとは思っていなかった。だからこそ、彼女の思い込みというか妄想（むしろ『妄想もどき』と言う

べきかもしれない）というか、そういったものの標的に自分がされたことが、実に不気味で後味の悪いものとなっているのである。彼女のロジックは現実離れをしているけれども、ゴカクショウがどうしたといったサイコさんたちの世界に比べれば、はるかに生々しいものである。

彼らサイコさんの妄想はパラレルワールドだから、その中へ私が組み込まれることはいっこうに構わない。病院勤めをしていれば、自分が妄想の中の登場人物にされることは珍しくないのである。それは不快でもなければ不気味でもない。ときには面倒なこともあるけれど、むしろ患者さんの示す親愛の情であるくらいに思っている。

妊娠妄想（Schwangerschaftswahn）というのがあって、『精神医学事典』（弘文堂）を引くと、「『院長の子どもを宿している』など妊娠していると思い込む妄想を指し、被愛・結婚妄想の一部としてみられる。（中略）精神分裂病者の1〜5％程度にみられるが、とくに慢性期の患者で『子どもが数十人おなかにいて、昨日産まれた』など荒唐無稽で奇異な内容を持つ場合もある」と記されている。

実際、こうしたケースはときおり目にする。先生の子どもを今妊娠している、名前はどうしましょうなどと回診時に言ってきた患者さんもいる。しかも、もはや更年期を過ぎた女性である。この人は、私が病院を辞めたあとで今度は別の担当医へ同じことを言っていたそうで、つまり彼女にとっては挨拶のようなものである。およそ不倫とか失楽園といった生臭い雰囲気は伴っていない。

替え玉妄想（Capgras-Zeichen）というのもあって、これは家族とか周囲の人物が贋者（替え玉）にすり替わっているという妄想で、いくら本物だと説明しても、いや整形手術を受けたのだとか、「そっくりさん」を見つけてきたのだなどと平然と主張する。娘の面会に来た両親が「あんたたちは替え玉だ！」と言われ、泣きだしてしまった場面を見たことがある。血縁という絆を娘に否定されてしまったわけで、泣きたくなるのも無理はない。

私へ向かって「先生は別の人と入れ替わっていますね。本当の先生は、こんなきつい言い方はしませんから」と語った患者さんがいた。「じゃあ、本当の先生は今どうしているの」と問い返してみたら、「シカゴのグレート・キャノン大学へ留学されていますよ」などと答える。そんな大学は耳にしたことがないが、自分が太平洋の向こうのシカゴに留学している姿を想像して、思わず遠くを見るような目つきになってしまったものである。

自分自身が患者さんの妄想で役を与えられているというのは、慣れてしまえばどうということはない。むしろそんなことがなかったら寂しいくらいのものである。

「回転体」から殺人へ

とはいうものの、ときには当方が極悪人として妄想に組み込まれていることがあり、この場合には困ったことが起きかねない。たとえば通称「青物横丁医師射殺事件」などはそうした例のひとつであろう。台東病院泌尿器科の岡崎武三郎医師が、精神分裂病の未治療患者N（36）から幻覚妄想に基づく逆恨みをされ、一九九四年十月三十日

に京浜急行・青物横丁駅で待ち伏せをされ、トカレフで射殺されたという事件である。

　かつてNは岡崎医師に鼠径ヘルニアの手術を受けた。しかし彼には体感幻覚があり、その奇妙な身体的違和感を手術に関連づけて妄想を構築したのである。すなわち、自分は鼠径ヘルニア手術の際に人体実験をされた。体内へ「回転体」と称する物体を埋め込まれ、それがために身体の調子が悪くなったのだ、と。医師を射殺し逃走した後、Nは各テレビ局へ殺人について長文のメッセージを送りつけている。その一部を引用してみると――。

右ソケイヘルニアの手術時にそのヘルニア手術以外に工作、操作、埋め込みを行い、いわゆる生体実験的なことをした、そのことにより人体は徐々に犯されていくという仕組みである
手術が成こうしたとか失敗したと言う次元のものではない。その様な単純な物でなく岡崎医師が独自で考え、開発、設計、製作した物を体の中に埋め込んだのである
手術時、工作、操作後、その人間が何年後に死亡するかを計る人体実験である
（中略）
このままでは死んでも死ねきれないと思い行った
自分の大事な人生を捨ててでもやらなければと思った
医者の選び方を違えて、私の一生は全て終わってしまった。残念でならない
岡崎と言う人間にめぐり合わなければ普通の人間であったのである。岡崎を１００回殺してもそのいかりはおさまらない。

　Nは何度も台東病院を訪れ、岡崎医師や副院長と押し問答となったらしい。いくら丁寧に説明しても、決して納得しようとしなかったのだろうから、岡崎医師としてもうんざりした気持だったにちがいない。メッセージの中でNは書いている。

手術後の私の体の中で起きている事を簡単に記したがこれは医学というよりも
・流体学
・筋肉学
・骨学
・化学
・物理
の分野で病院で調べて解るものであろうか
人体のすべて（筋肉、骨の性質）を解っていないと解明出来ない物か
この事が解明出来ない限り
・私は精神分裂病扱いされるのである
一人の優秀な医師が工作した事によりその患者は苦しみ、そのあげく精神異常者にされてしまうのである
・この様な状態では私の命も長いものとは思わない　今、寿命は約80才位と思うが選ぶ医師を違えた為私は今36才だがこの年で命が終わろうとしているのである約45年もの命がうばわれたのである

　どうも飛躍だらけの論旨であるけれど、とにかく「回転体」を埋め込まれて人体実験を受けたことによって、Nは苦しみ寿命を縮められたと確信し、岡崎医師を非常に恨んでいた。恨んだからといって、実際に浅草の暴力団からトカレフを買い込んで射撃練習までしてから駅で待ち伏せるとなると、これはむしろ精神病にかかる以前から

人格的に問題があって、そうした問題が病気によって心の余裕が失われたことから尖鋭化し、犯罪に結びついたと考えたほうがよさそうである。レア・ケースに近いものであろう。

彼らの発想はなぜキッチュか?

トカレフはともかく、被害妄想に組み込まれると、さかんに糾弾の手紙を送りつけられたり、嫌がらせを受けることがある。しかし相手が精神病患者の場合には、あのニコン一眼レフの老母のような生々しい現実性を欠いているから、私などはむしろ楽しんでしまったり非難の手紙をコレクションしたりすることになる。

そんなふうに呑気に構えていられるのには理由があって、先に引用したメッセージからも分かるように、妄想やそれを文章化したものにはどこかキッチュなものが感じられ、私はそこに好奇心をそそられてしまうからなのである。そういったものと出会えて精神科医冥利に尽きると思ってしまう。では、どういったところを以ってキッチュと感じるのか?

たとえばNのメッセージでは、妙に言葉づかいが大仰であったり疑似科学的なイメージが横溢している。時代遅れの通俗小説のような、つまりステレオタイプな想像力が幅を利かせ、どこかアナクロニズムな気配がある。そういった要素がキッチュ「らしさ」を作り上げていることは確かだろう。だがそれだけではない。

メッセージの他の箇所では、「回転体」のみならず「病質状態老化」といった造語や「この様な問題が2人のみ内密化して」「筋肉が空洞化しその中に液体が大量に流れる様になり腹部の水圧が高くなる」といった風変わりな言い回しが目につく。か数年前まで中目黒にあった「電波喫茶」に貼られていたメッセージの中に「とりこじかけ」という言葉があったのを根本敬が雑誌に紹介して、あちこちにインパクトを与えたという話があるが(『オルタカルチャー日本版』の項目で『電波系』を参照)、これもまた〈ねじれ具合〉では同列であろう。最初に書いた将棋好きの患者の「ゴカクショウ」も同じジャンルである。

私が過去に見聞きしたケースでも、「背聴(はいちょう)」「因縁貼り」「テッテイ盗聴」「コンピュータ体験」「二度に渡る記憶解除」「脳ずい内有害化現象」「生物は普通の性器が基準ですから」「電磁波の影響を逃れることによって、いよいよ人並みになっていくのです」「いきなり振り返って瞬見(しゅんけん)してみるのですが」などと漢文のようでもあり、稚拙でたどたどしくもあり、奇形な文章のようでもあり、特有の違和に満ちた印象を与えてくる言葉や語句が目白押しである。

「規格外」の面白さ

おそらくサイコさんたちが感じたり体験している病的な世界は、通常の単語や言い回しではそれを表現するには不充分なのである。そもそも普段使われている言葉は、我々が当たり前の日常を送っていくのに必要充分な道具として流通している。「正常な」世界の事象を言い表すために用意された言葉なのである。もし正常な世界が整数によって構成されているというふうに比喩をしてみるなら、たぶんサイコさんたちに

とって、彼らの世界には分数や小数や平方根や、場合によっては虚数までが混ざり込んでいるのだろう。そうした世界を、正常な人々の間尺に合わせたレディーメイドの言葉や文法で表現しようとしても巧くいかない。

かくしてサイコさんたちは、突飛な物語（つまり妄想）に事寄せられた病的不安を言語化するために、珍奇な造語や言い回しを発明せざるを得ない。もどかしさのあまり、まったく新しい「文字」すらが発明されることもある。それが精神症状としての思考障害や連合弛緩と相まって、なおさら奇異の度合いを高めていく。

キッチュであることの条件のひとつは、それが世の中の規格に適合しないことである。規格は良識とか常識と言い換えてもよいかもしれない。もっと別の規格で構成された世界でならまったく違和感のない存在となるだろうに、場違いな世界へ迷い込んでしまったような感触を覚えさせる。

たとえば般若の面のキーホルダー。それはたしかにキーホルダーとして実用に耐えるだろう。だがなぜ般若でなければならないのか。美的観点からも、象徴的な意味合いからも合点がいかない。おそらくキーホルダーにくっつけるようなサイズで、イメージが明瞭で、しかも適度に手のこんだなんらかのオブジェということで般若を思い浮かべた人物がいるのだろう。それはその人の思考の文脈に沿えば必然性に満ちているはずである。だが般若の面のミニチュアが日常で価値を主張し得るような世界は、おそらく今我々が住んでいる世界とは微妙に異なるパラレルワールドであるだろう。

浮世絵柄はどうか。日本風を主張するならば、優れた文化遺産としての浮世絵をネクタイのデザインへ取り入れることはよいアイディアであるかもしれない。しかしそのとき、浮世絵には春画の伝統を引くいかがわしいイメージも同時に喚起されかねないとか、ウタマロというのが外国では陽根を意味するとか、ネクタイの意匠とすることでチョンマゲに背広のようなちぐはぐさが生じかねないとか、そういったマイナス面も出てくる。だから普通の人は浮世絵柄のネクタイをたとえ貰ったとしても、おそらく実用に供したりはしないであろう。もしかすると浮世絵のネクタイがオシャレと映るパラレルワールドがあってもおかしくはないと考えるが、それはあくまで想像の域でしかない。

キッチュには、どうしても我々には理解の及ばない突飛な感覚が作用している。キッチュが暗示するパラレルワールドは、やはり分数や小数や平方根の混ざった世界であるだろう。だからこそ私はサイコさんたちの妄想や、不可思議な言葉づかい、造語、さらには彼らの文章の過剰さや歪みに、キッチュと通底したものを感じるのである。

私が妄想へ組み込まれるとき、私はキッチュの世界の住人となる。それはなかなかマゾヒスティックな楽しみなのである。東京タワーや通天閣で売られている土産品や、秘宝館の展示物や、金ぴかのインテリアみたいなものと自分の分身が同居していることを想像するのは、屈折した楽しみなのである。

しかし、恨みのみで成り立ったあの老母の「妄想もどき」は、造語を必要としていないからこそ恐ろしい。

PART 4
もの言う人びと

藤岡信勝インタビュー

癒しとしての「歴史教科書問題」

今、言論・思想領域で最もトピカルな話題といえば、歴史教科書問題。熱い場所には「怪文書」がつきもの——ってことで、"お宝"拝見するため、時の人、藤岡先生の研究室へとお邪魔することと相成った。

聞き手+コメント=大月隆寛（民俗学者）

photo▶平山法行

いわゆる「教科書問題」の導火線であり、いわゆる「従軍慰安婦」問題の発火点であり、「自由主義史観」を標榜することによる「自虐史観」批判の急先鋒であり、だからこそ、いわゆる「市民主義」「リベラル」「良識的マスコミ」「教条左翼」……ええい、めんどくせえ、とにかく〝そういう方面〟からは蛇蝎の如く、はたまた極悪非道の大悪人の如く思われて、ここ一年あまりは表舞台でも裏舞台でも集中砲火の真っ只中にいる東京大学教授、藤岡信勝氏でありますが、そういう方面の中には絵に描いたようなアブない方々が交じっているのがすでに世の常識ってもんで、さぞや、そういう手合いの手紙や電話や、その他もろもろの欲望のはけ口となっている証拠物件が豊富に手元にあるだろう、というわけで、東大本郷の研究室にお邪魔した。

東大の教育学部というのは赤門を入ったすぐ先の左側の建物。器が古びているのは東大のこと、べつに不思議ではないが、三階にある研究室はうなぎの寝床みたいな形で、こりゃ僕が以前いた外語大の研究室（もと女子便所だったところを急遽改装したものらしくて、部屋自体がコの字形で窓にはデカい換気扇がついてたりしたのだが）よりも条件が良くないかもしれない。でも、同じ東大でも、以前やはり取材で訪れて、そこにのったりと放牧されていた草食動物ヅラした学生どもと一緒になってさんざっぱら頭の悪い珍獣扱いされた（クソッ）文学部の上野千鶴子センセイの研究室などは、この藤岡研究室の三倍の面積はラクにあったように思う。なんなんだろ、こういう〝格差〟って。

とてもじゃないが話を聞ける環境じゃないということなのか、カメラマン、編集者ともども別室に案内されて、そこで藤岡さんは「ちょっと待っててくださいね」と言って出ていったかと思ったら、山のようなハガキやビラ、手紙の類を抱えて戻ってきた。

ざっと拝見したところ、こりゃまさに〝お宝〟級の代物。いやはや、こういう言い方は藤岡さんには迷惑だろうけど、やっぱりこりゃ、こういう方面の欲望のはけ口として当代一流の存在になっちまってるってことなんだろうなあ。汚いもの言いで恐縮だけど、こんなの、僕の眼からはセンズリこいた後のティッシュの山にしか見えんぞ。

その男「破廉恥漢」につき

――いやあ、なんと言うか……いつ頃からこういう実にわかりやすい（笑）、ハガキやお手紙を頂戴するようになったんですか？

藤岡　えーと、二年ぐらい前からですかね。でも、やっぱり激しくなったのは今年に入ってからですよ。

――ということは、「自由主義史観研究会」の方だけじゃなくて、「新しい歴史教科書をつくる会」を立ち上げるようになってから、こういう反応が出てきた、と。

藤岡　でしょうね。やはり「つくる会」が世間に知られるようになってからだと思いますね。大学だけならまだしも、自宅の方にもたくさん送られてくるんですから、家族の者も最初はやっぱり気持悪がってましたけど、でも、最近じゃ慣れてしまって、あ、またこの人ね、最近絵がうまくなった

んじゃない？　とか言ってます（笑）。

——ああ、これですか。

ハガキの裏一面に、なんと言えばいいのか、藤岡氏を「ヒトラー」に見立てたりした、今どきどういうセンスしてやがんのか、という風刺マンガともイラストともつかないものが、赤黒二色のマジック描きで描かれていて、それがなんと、驚くなかれ無慮数十枚も山をなしてあるのだ。絵柄としては、藤子不二雄Ⓐを思い切り崩したというか、かつての日野日出志というか、七〇年代前半くらいまではまだあった「こわい話」系のテイストなのだが、とにかく描かれている中身があまりにも陳腐、かつあまりにも図式的で、「つくる会」の片棒を担いでいる不肖大月でなくても、こりゃ即座に脱力しちまう。

ただ、眺めていると、妙な描き慣れ方をしている絵であることはなんとなくわかってくる。消印は首都圏さまざまだが、宛先の筆跡などからするとどうも若い衆らしい。

——これはどれくらいの頻度で送られてくるんですか。

藤岡　多い時は一日おき、とかね。まあ、こういうエネルギーというか情熱というか、もっと他の方面に平和利用できないものかなあ、と思いますねえ（笑）。

——こんなもの一日おきに描いてよこすヒマがあるならバイトでもしろってーの。あの、東大構内でもいろいろとビラなどまかれているとうかがいましたが。

藤岡　ああ、学校の中のビラは去年の秋ぐらいからありましたけどね。いちばんひどいのはたとえばこういうやつですけどね。

藤岡氏が示したのは「破廉恥漢を粉砕せよ！」と題されたビラ。シリーズになっているらしく、それぞれに番号が振られている。発行主体は「東大駒場寮北寮2S　東大総研」。B４の横使いで、タテ二段組みできれいにレイアウトされている。まあ、見てくれとしてはよくある今どきの「自治会」「市民主義」「サヨク」系のビラだ。

〈前回出した「破廉恥漢を粉砕せよ！」には、吉見義明氏の文章を掲載した。そして

先週の藤岡の授業で、本人前に、東大総研のメンバーはそのビラを見せ、「従軍慰安婦」問題について言及するなら、吉見氏らの批判に対して反論してからにしろ、と迫ったが、藤岡は「反論できますよ」と言ったきり実際には何の反論もしなかった（出来なかった）。
　はっきり言ってとても残念である。ため息ばかりが出てくる。あれだけメディアで激しく主張されているのに、学生に問われても何も答えられないというのは、情けないね。歴史事実ではおそらく争えないと悟っているのだろう。しかし、歴史事実をここまで軽視しているのに、なぜここまで強硬に主張できるのか、正直不思議でもあった。自分自身恥ずかしくないのだろうか。〉

「スカ」の「カス」の浮かばれぬ話

　ほお、来たよ、この文体、この調子。七〇年代以来の「左翼」系論難文体の退廃形態の典型だわ。でもって、主体を規定する看板が「総研」だとよ。

　この「東大総研」というもの言いには、おいら即座にムカッときてアドレナリン全開、ちみっと表情が変わったはずだ。なんでかと言うと、この「総研」という部分に込められた自意識のありようや、うっかり肥大しててめえで始末に負えなくなっちまってる「東大クン」のプライドなどが、ビンビン伝わってくるからだ。にわかオヤジの昔話にはなりたくないが、でも、かつての「〇〇党」だの「××派」だの「△△主義者同盟」だのの方がよっぽどまだ身体張って事態を引き受けるぜ、てなアホな心意気があったものだと思う。
　それに比べてこの「総研」ってのは、てめえは安全地帯の高見で「観察」して「認識」して「分析」して「解釈」するだけ、それ以上のしちめんどくさい事態にはボクって知らん顔しますからね、ってことをハナっから宣言しちまってるようなもの。こういう主体なき「政策的世界観」「マーケティング的知性」ってのが、なんの恥じらいもうしろめたさも感じなくてすむようになっちまったのが、あの急激に膨張し倒した八〇年代の消費社会のスカをくぐった後

の、この九〇年代の情報環境だったりするから、なんともはや、浮かばれない話であります。

で、なんのことはない、ちみっと調べてみたらこいつらインターネットにHP（ホームページ）持ってやんの。「文理研」って名前なんだけどね。

〈文理研とは、東京大学駒場寮北寮2Sを活動拠点とするサークルである。正式名称は『文芸理論研究会』のはずだが『文芸理論』を研究している様子はない。

東京大学教養学部の学生自治団体である学友会には『東大総研（東京大学総合政策研究所）』名で加盟していたが、97年度からは正式に『文理研』として加盟することに決定した。また文理研の活動は東大総研がになってきただけでなく、北寮2Sのサークル部屋を利用する他のサークルとも共同して活動をおこなっており、『2S』という形で総称されることも多い。

活動内容は、『障害者』問題から『自由主義史観』、安保・沖縄問題まで幅広く扱っている。しかし単なる勉強会サークルではなく、現実に対してどのように関わっていけるか、つまり実践が問われる。そしてその際の基本的姿勢は無党派・反権力である。〉

はあ、さよか。

「無党派」ったって、目次だのこれまでの活動内容だのリンク先だのをつらつら眺めたけど、そりゃとてもじゃないけどムリムリ、聞こえませんってーの。もしもこれでも本気でてめえらのことを「無党派」だと思ってんだとしたら、悪いがこちらとは住む世間のまるで異なる〝彼岸〟の方々だとしか言いようがない。

たとえば、今年の五月祭では「『自由主義史観』を考える――なぜこんなものを許してしまったのか」てなイベントを主催していて、ちなみに講師は以下のお三方。

井上澄夫（ジャーナリスト）「教科書攻撃と右派勢力」

小山俊士（反天皇制運動連絡会）「藤岡信勝の『転向』と『非転向』」

徐京植（作家・法政大学講師）「民族差別と『自由主義史観』」

どうもこの小山某という御仁（「講師紹介」によれば、六七年埼玉県生まれ、東大教養学部を出て、今は千葉大の博士課程の院生とのことだが、「学生時代から反天皇制運動連絡会で活動」していて、『週刊金曜日』に「藤岡信勝の非論理性を暴く」てな論文も書いているそうです、はい）、およびその周辺というのが、この藤岡信勝個人攻撃ビラの生産元なんじゃないかいな、と不肖大月、勝手に推測させていただきましたが、例によっての「事実誤認がある」だのなんだのというしゃらくさい文句をつけてきやがっても、サシのタイマン勝負以外はいっさい受けつけねえので、念のため。

わざわざ「総研」と名乗り、しかもそれが「総合政策研究所」の略称であるというこの自意識には、言うよ、「研究」というもの言いに何か無条件で発情してしまうてめえのありように対する健全な〝ツッコミ〟はかけらも感じられない。こいつら、「研究者」なんて呼ばれたくて呼ばれたくて仕方ないんだろうなあ、きっと。で、そ

の場合のてめえらの身振りや、それこそ「研究室」の中のさまざまな小物の取り散らかし具合や、なんだかんだのそういう「自分」がもう理想として想定されていてさ。やだやだ、こんなのが「左翼」の末裔だってんなら、そしてそのことを「党」であれなんであれ、そういう「大人」の世間にいるはずの「左翼」が内側から疑問に思わなくなっちまってるんなら、俺、やっぱり「右翼」扱いされてもいいや。

あらかじめ約束された「結論」

――これは、本郷（本部キャンパス）ではなく駒場（教養学部キャンパス）でまかれていたものなんですか。

藤岡　ええ、こちら（本郷）持ち出しの授業がありましてね。その私の授業が始まる前に教室の机の上に全部こういうものを置いてゆくわけですよ。わざと誇示するためなんでしょうねえ、私に「配らせていただきます」と言って、それから配るんですよ。明らかに学生ですけどね。よっぽど駒場の教務委員会に言ってやろうかと思いましたけれども、まあ、大したこともないだろう、と。

――かつての、それこそ学生運動華やかなりし時なんかでも、こういうあからさまに個人の名前を出してってこと、あったんですか。

藤岡　それはまあ、あったでしょうね。でも、そのやり方というか、やる側の意識が昔と違ってきているような気もします。たとえば今、医学部に関係した問題があってそこの某教授がやられてますけど、あれも不愉快ですねえ。たとえどんな理由があったにしてもですね、顔写真を入れた立て看板が置かれていて、それを当局も撤去しないんですから。

――それはまた、どういう理由なんですか。

藤岡　いや、詳しい事情は私もうろ覚えなんですが、なんでもそれが職員組合の名前で出されたものだから取り締まれない、学内の規定には学生を対象とした規則しかないから、とこういうことらしいんですけどね。

――はあ、そりゃまた絵に描いたような「官僚的」答弁で（笑）。そんなこと言ってる間に、そのやられたセンセイでも誰でも叩き壊しちまえばいいのに。でも、その立て看を出してる方はそういう事情も計算したうえでの確信犯ということですよね。

藤岡　そういうことなんでしょうね。

こっちは教組で出している機関紙なんですが、笑っちゃいますよ。ビラなどと違って普通の人の眼に触れにくいものだと思いますが、彼らは組合員のカネを使ってこういう個人攻撃をやってくる（苦笑）。

『浜教組教文ニュース』と題されたB5サイズ五〇ページの冊子。発行所は「横浜市教職員組合」で、発行人は「横浜教育会館内　福寿弘明」とある。「横浜の平和教育をどうすすめるか（その20）」とタイトルが打たれているが、それよりも、右肩に小さくだが「要保存」とあるのが、あ、そういう〝組織〟の文書なのね、という印象で、微妙にいかめしい。

中身は、要は現場の教員に向けての「平和教育」の重要性を改めてアピールしたもので、冒頭、横浜大空襲の詳細を写真資料などとともに紹介した後に、「平和教育」

をテーマに活動してきた研究会の活動記録などが入り、その次に、「平和教育の今日的課題」という章が出てくる。この中には「自由主義史観研究会」と「新しい歴史教科書をつくる会」の活動の経緯や、主張の主な要点などがまとめられていて、それはそれでまあ、実直によく拾ってると思うのだけれども、でも、そういう「事実」は結局のところあらかじめ約束された「結論」に向けてしかたばねられていかない。

〈『従軍慰安婦』の記述を教科書から削除せよ」「南京大虐殺などなかった」などという主張が一部のマスコミの宣伝にも助けられて、今運動としても全国各地で展開されています。しかもこうした動きがほかならぬ私たち教育現場の一部からもでてきています。

一体「従軍慰安婦」問題とは何なのか？なぜこうした歴史的事実さえもみ消そうとする動きが、今でてきているのでしょうか？ 誰が、何のために？

「5・29横浜の平和を考える日」を前にして、今一度この問題について私たち一人一人がそして職場で考えてみませんか。〉

正義の側にいる「ワタシ」

──はあ（脱力）……「私たち」ったって、それが果たしてどれくらいの「私たち」なのか、とか、そういう〝ツッコミ〟ってこういう文章を書く人の意識には介在しないんでしょうかねえ。だって、日教組の組織率が三〇％を切った、とか最近、言われてるじゃないですか。それに「誰が？ 何のために？」ってあたりも、何かそういう「悪者」がどこかにいるんだ、ってことを初手から信じたい、って素直に言ってるようなものなわけで。これじゃあ、そういう「悪者」探しにひっかかる人間や組織を探して歩く発想にもなりますよ。

どういう年代のどういう顔した人がこういう文章をおそらくマジで書いているんだろう、と僕なんか思ってしまうんですよ。あんがい三十代ぐらいの、それも女性だったりして、そんなこと考えてくとほんとに何に対してかわからないけど「いやもう、とにかくスイマセン」ってあやまっちまいたくなるんですが（笑）。こういうほとんど伝統芸能のような文体や内容のパンフが出ているんだから、やっぱり思想の質なんかとは全く別に、世間に流布されてすでに蓄積されてある風俗やサブカルチャーとしての「左翼」モードこそ、恐るべし。

藤岡 日教組本部とそれぞれの下部組織って全然違うみたいですね。本部はある程度柔軟路線をとろうとしているようですし、全体としてはかつてのような過激な文部省反対運動ってのはやってない。むしろ癒着してたりするんですけど、下部は未だにこういう行動パターンなんでしょう。基本的には「左翼」の既得権を守ろう、と。それで、私の主張の内容には立ち入れないから、ただ「戦争肯定」とか「右翼」とか「反動」とかという既成のレッテル貼りを繰り返すだけですね。組合員はそれでもう思考停止になるんでしょうねえ。

私などから言わせると、『朝日新聞』も基本的に同じようなものなんですよ。こういうビラを薄めたようなトーンの記事を書いてますからね。結論が決まっていて、あ

るイメージを印象づけるために事実を文脈を無視してでも並べてみせる、というね。

——報道的な「正しさ」のもの言い、ですよね。言葉やもの言いがどのような関係、どのような文脈でどのように伝わり、どのように解釈され得るのか、てな、いわば情報の〝流通〟の部分をまるで考えないで、もの言いの生産点と消費の現場とをそのまま重ねようとする。そして、そうやって重なることが理想だと思ってる。「ワタシの正義」は「社会の正義」のはずだし、そうあるべきだ、というね。そんな薄っぺらな「社会」観を疑わないままだと、こういう書き方さえしておけば「とにかく間違っていないワタシ」「正義の側にいるワタシ」は保証されるんだろうし。

ちなみに、あの、藤岡さん自身は、かつて「左翼」運動の側におられた時でも、ビラとか書かれた経験とかあるんですか。

藤岡信勝教授

藤岡　うーん、ビラじゃなくてもそれに近いものは書いたことはありますよ。ただ、昔もそうだったんですが、こういうビラのパターンというのは「政府自民党」とか「文部省」とか「財界」とか、常にそういう「悪玉」が決まっていて、あらゆる現象をそれに結びつけて書くというものなんですね。ただ、今は社会主義が崩壊して資本主義を「悪玉」にはしにくくなった。だから「国家」や「権力」や「昔の日本軍」というのが、冷戦崩壊後の「悪玉」としていちばんわかりやすかったんでしょうし、それが、日本の過去を糾弾して嫌悪感をあおるという形になって出てくる。戦争や軍事については、かつての左翼の中でさえも理論的な違いはいろいろあったんですが、今はそれがなくなってしまって、みんな同じことを言ってるんですね。

——でも、どうなんですか、こういうわ

ゆる「左翼」系、「自虐史観」信奉者系のものでなく、むしろ逆のいわゆる「保守」系というか、そちらの側からの手紙なんかにも、同じような意味で、あれ、これはちょっとどうかな、と思われるような代物は混じったりしていませんか（笑）。

藤岡　ありますあります。「左翼」系だけでなく、そういうものにも私は反応しないようにしているんですけどね。まあ、ひとつはいわゆる街宣右翼と呼ばれるグループなんでしょうが、そういうものもある意味でこういう「左翼」系のビラとトーンはよく似てますね。だから、思考法としては「悪玉」作ってそれを叩くことで「善玉」である自分たちを正当化し、肯定する。きっとどこかで同じような心性になってくんじゃないですかね。

右側の「センズリ・ティッシュ」

——それがひとつ転ぶと陰謀史観にもなってゆく、と。「自虐史観」的な発想と根深くからんでいる単純な「善玉／悪玉」図式でものを見る見方というのは、右でも左でも変わらないですからね。封書なんかの場合は、いちいち全部開封して眼を通すんですか？

藤岡　一応読むようにはしているのですが、返事を書く時間が全くとれません。

——若い連中や「市民主義」「左翼」系だけでなく、年輩の方々からの手紙などにも、何か独特の調子がありませんか？

藤岡　お年寄りで私のところにお便りくださる方は、あの戦争に対するデマや誇張の類がとんでもなくはびこってる中で苦々しく思ってきた方々が多いわけですから、そういう世間の風潮に対してよくぞ正論を言ってくれた、というトーンがほとんどですね。ちょっと過剰だったり、思い込みが強かったりする人はもちろんいらっしゃいますが、それでも、「自虐史観」に対する違和感という意味では私と共通しているわけですから。

　また、逆宣伝というのもあるんですよ。たとえば、私になんの断わりもなしに私の名前を街宣車でがなったり、あるいは日教組の大会に私の名前を横断幕にデカデカと書いた街宣車で乗りつける、とか。大会に来ている日教組系の教師たちはそれを見て、なんだ、藤岡ってのはこんな連中と組んでこんなことまでやるようなひどい奴なのか、と思うわけでね。文部省に押しかけて私の名前をがなってたこともあるみたいですし。私は全く何の関係もありません。これが「ほめ殺し」ってやつなんですかね。私はこういう勢力はウラで外国や反日運動とつながっていると思っています。

——学生のレポートとかで、こういうビラに近いようなトーンのものは出てきませんか。

藤岡　（きっぱり）出ません。

　ただし、去年だったか、授業でインドネシアの独立と日本の関わりを描いたビデオを見せたんですね。その中で、インドネシアの婦人会の人たちがインドネシアの独立記念日にお揃いのスーツを着て日本の軍歌を歌うというシーンがあるんですが、それを見たひとりの女子学生が「くやしい」と言って泣き出したことがあります。こんな昔の日本を美化するビデオを見たことがくやしい、と。反日信仰にこり固まった完全

な思考停止で、まわりの学生もびっくりしてましたけどね。

——月並みですけど、やっぱりこりゃ大変ですねえ（笑）。

藤岡　最近はそれでも下火になりましたよ。「従軍慰安婦」の問題で深夜の討論番組などでも二、三回やったし、教科書問題で私たちの運動が一般的に知られるようになっていった今年の始めから春にかけての時期が激しかったですね。講演会などで殴りかかられたりとかは今のところないですが、去年の暮れだったか、早稲田大学での集会に出た時に、帰りに若いセクト系の学生みたいなのにつきまとわれましたね。手を出してきたらこっちもガンとやろうと思ってましたが、幸いそんなことはなかったんで。

貧困なる想像力の「カウンセラー」

——でも、どうしてまた藤岡さんだけがとりたててこういう標的になってるのか、その理由というのはご自身ではどう思ってますか？

藤岡　うーん……いろいろあるんでしょうけど、まずやっぱり妥協しないからじゃないですかねえ。たとえば、「慰安婦」問題をめぐる経緯ってのは普通に考えれば絶対にとんでもないことですけど、それを言い出す人間がいなかった。でも、これをちゃんと言い出せば、常識的な人は「ああ、それはあまりにひどいじゃないか」と思うはずですから、「自虐史観」を信奉する連中

にとっちゃ、そんなことを言い出されたら困るわけですよ。しかも、今は文部省がむしろそちらと癒着してるわけですからね。私がやっているディベートの運動についても、彼らは同じように攻撃してきますよ。問題を考えること自体が困るわけですよ。「これっておかしい」と気づくきっかけになってしまいますから。

でも、こういう雰囲気はいずれ変わりますよ。「いいかげんにしてくれ」という気分が国民の間に蔓延してますし、早晩、政治的なイシューの前面にも出てくると思いますね。また、そうならなくちゃいけないと思います。

——そういう方向に状況が変わっていった場合、今度はその「自虐史観」信奉者たちの側にこういうとんでもないビラやハガキなどの「攻撃」が加えられるということは考えられませんか？

藤岡　それはないと思います。というのはね、右であれ左であれ、一割程度の極端な例外を除いた部分、つまり世間の大部分を占める常識的な人たちの行動パターンはそんなに突出したものじゃないわけですから。「自虐史観」を信じてこういうわけのわからないハガキや手紙を送ってきたり、あるいはあからさまな個人攻撃のビラをまいたりする人たちというのは、世間の大部分を占める常識的な人たちの感覚を認めたくない、それは極端な右なんだというところに何とかして押し込めたい、そういうものなんじゃないですかねえ。

言葉やもの言いの現れとしては「右」であれ「左」であれ、はたまた「保守」であれ「リベラル」であれ、それらの背後にある主体とその自意識のありようがある一定の閉じ方、腐り方、膿み方をあからさまにしていたりする、そのことこそが今、この高度情報化社会における「言論」なり「思想」なりをめぐる最も本質的な問題だと、不肖大月、前々から言い倒してきているけれども、未だにそのことが理解できず、そのような主体なき言葉やもの言いの表層だけをとらえて、まるで七並べか神経衰弱のような「言論ごっこ」「思想ゲーム」に血道をあげる手合いがメディアの舞台でもっともらしいツラして能書きをさえずり、さらにまたそれを雛型に自家製のゴミを再生産してバラまく「観客」だって出る。立場や主張の中身なんて、実は何だっていいんだよね。それ以前、まずてめえの輪郭がグズグズで言葉を手元で制御するまっとうさも持ち合わせなくなっているようなこの種の下級物件どもと、誰も馬鹿正直に「対話」なんかしたくないっての。

期せずしてそういう主体変容バカ、自意識肥大野郎たちがセンズリこいた後のティッシュを送りつけられるところに今、たまたま立ち位置を持ってしまったのが、藤岡センセイだったりするのだろう。まあ、「政策的」(笑)に見れば、そのことでこいつらが他に欲望のはけ口を向けない抑止力にはなっているんだろうけど、でもなあ、うっかり何かある立場を世間に向かって主張しようものならたちどころにそんなのまで引き受けなきゃいけなくなる「民主主義」なんてなあ。こういう役回りに立っちまった人には「社会福祉」の予算から少しは手当てしたっていいんじゃないの、とか思っちまった大月でありました。

平成「消費者問題」考現学

クレームばばあ、血気ざかり！

ＰＬ法施行以降の消費者トラブルに見る、
これが「神様」たちの素顔だ！

浅野恭平（ルポライター）

消費者は神様だ。神様の要求は絶対だ。神様がこうだと言ったら、どんな無理な注文でも受け入れなければならない。嫌な時代になったもんだ――。

ＰＬ法（製造物責任法）の議論が盛んに行なわれていた頃、ビジネスマンの間で、こんな会話がやりとりされた。ＰＬ法の施行に伴って、アメリカ並みの訴訟社会が日本にも到来すると予想されたためだ。企業のなかには、アメリカの判例を取り寄せて、製品の規格や表示方法を検討するところまで出始めたくらいだ。

買い物袋が当たっても鍵がかからないように、鍵の位置や構造を変えた自転車メーカー。電子レンジで濡れた猫を乾かさないように、といった警告表示を入れるべきかどうか真剣に討議した家電メーカー。堅焼き煎餅で歯が欠けた場合の顧客対応マニュアルを作成した菓子メーカー……etc。当事者たちからすれば、笑い話ではすまされないようなエピソードが、当時はごろごろ転がっていた。

あれから二年あまり。ＰＬ法の施行で、消費者の意識は、どう変わったのか。クレームは、どれくらい増えたのか。どんなケースが裁判沙汰になったのか。ＰＬ法の施行と相前後して設けられた業界別の消費者相談窓口を訪ねると、権利意識に目覚めた神様たちの跳梁ぶりと冷静に対応する相談員たちの奮闘ぶりとが、二重写しになって浮かび上がってくる。

たとえば、生活用品ＰＬセンター。事業報告書によると、九六年度の相談件数が八百三十八件。内訳は、製品事故二十六件、製品苦情六十八件、一般相談三百三十件、問い合わせ四百十四件といった具合だ。事

故・苦情の業種別ベストスリーをあげると、第一位が家具(十一件)、次いで金属ハウスウェア（七件）、ペット用品、鞄・袋物（ともに六件）と続く。

相談内容は、こんな具合だ。輸入ものの座卓の足が折れて、コーヒーがこぼれ、足や腕を火傷した。テレビショッピングで購入した電動調理器が勝手に動き出し、指の先端を切断した。ペットフードの骨が犬の食道に刺さった——にもかかわらず、その注意書きが製品に記載されていない。問題ではないか。ハンドバッグの留め具がコートに引っかかり、糸が飛び出した状態になった。補償してもらえるか。

いずれも、保険による損害賠償を行なったり医療費や見舞金を支払ったりした製品事故のケースだが、苦情となると、神様たちの要求はとめどもなくエスカレートしてくる。主な訴えを箇条書きで抜き出してみよう。

・銅製の鍋を使い始めたところ、緑色の物質が付着した。有害物質ではないのか。
・街頭で購入した包丁と同じものをテレビコマーシャルで見たが、あまりにも切れ味が違うので、メーカーを調べてほしい。
・鍋のつまみが熱くなり、火傷しそうになった。区の消費者センターに相談したが、商品に欠陥はないと言われた。納得できない。
・洋服箪笥の鏡が割れ、販売店にクレームをつけたが、対応が悪いので、婚礼セットとして購入した家具一式を返品したい。
・ヘアマニキュアを使ったら、原液の色が頭皮にまでついて外出できなくなった。慰謝料と休業補償を請求したい。

事業報告書には、プライバシー保護の観点から相談内容しか記載されていない。そのため、解決に至るプロセスは不明だ。だが、メーカーに対して、従来の菓子折り方式から客観的なデータにもとづく対話方式へと、発想の転換を促しているところを見ると、生活用品ＰＬセンターでも、神様の言いなりにならず、是々非々主義で臨んだものと思われる。

ハンパなエコロジカル消費者

「末端の消費者にまで、ＰＬ法の考え方が行き渡った証拠なんじゃないでしょうか。初年度に比べると、消費者や行政からの問い合わせが確実に増えている。一件あたりの相談時間も長くなってきた。センターが本来の機能に近づきつつあるわけで、我々とすれば、むしろ歓迎すべき出来事と受け止めています」

と語るのは、家電製品ＰＬセンターの大石橋徹センター長。今年四月に就任したばかりだが、消費者の誤解や認識のズレを最小限に食い止めるために、さまざまな手を打ってきたアイディアマンだ。

たとえば、『インフォメーション』の紙面刷新。全国の消費生活センターを中心に、マスコミやメーカー、各種工業会などに配布される月例報告書だが、今年八月から従来の相談内容に加えて、センターの回答や一次対応の骨子まで掲載し、ＰＬ法の適用範囲を明確に打ち出すようにした。

と同時に、消費者の啓蒙活動にも着手し

ている。たとえば用語解説。故障と欠陥、事故の違いを、PL法に照らし合わせながら説明して、なんでも損害賠償の対象になるわけではないと釘をさしている。言い替えれば、難癖をつけても無駄だと、暗にクレームマニアの出鼻をくじいているのだ。

「我々のような組織は、裁判外の紛争処理機関と呼ばれているんです。メーカーとの相対交渉は難しいが、かといって、裁判で長い年月をかけて争うつもりもない。どこに非があったのか、それを知りたい。そういった消費者の不満を解消してやるのが、我々の役目なんです」（大石橋センター長）

家電製品PLセンターには、九六年度一千二百二十二件の相談が持ち込まれた。内訳は、事故クレーム三件、品質クレーム三十三件、一般相談四百四十五件、問い合わせ七百四十一件。前年度と比べると、総数で五百七十四件少なくなっている。PL法に関する事業者からの問い合わせが減ったためだが、その反面、消費者の関心は確実に高まりつつある。総数に占める消費者の割合を見ると、それがひと目で分かる。九五年度三五・一パーセント。九六年度四〇・一パーセント、九七年度上期四五・三パーセントと、毎年五ポイントずつ増えている。九七年度も、前年並みの相談件数になると見られている。今でも、一日四、五件の電話がフリーダイヤルにかかってくるが、二年前と比べて明らかに違うのは、消費者の頻度が高まり、思い込み型のクレームが多くなったことだ。

象徴的なのが、中途ハンパなエコロジカル消費者からのクレーム。海や川の水を汚したくないと、合成洗剤ではなく粉石鹸で洗濯をしている。するとどういうわけか、洗濯ネットにカビが発生する。メーカーの相談窓口に電話をかけたが、粉石鹸を使わないでほしいと言われたりカビの取り方を教えてくれるばかりで、いっこうにラチがあかない。最新式だがこんな手間のかかる洗濯機はいらない。引き取ってもらいたい。

なんとも虫のいい話だが、応対に出た相談員の回答が奮っている。粉石鹸を使うのは、肌に優しく、環境の汚染防止にも役立つから、たいへんにけっこうなことだ。しかし、粉石鹸は、合成石鹸と比べると、石鹸かすが残り、それがカビの発生源になりやすい。手間がかかっても、環境を守るために粉石鹸を使うか。それとも、簡便な合成洗剤に切り替えるか。あなたが自分で判断してもらいたい。こういった事情での返品要求は、おそらく難しいだろう。大石橋センター長が苦笑しながらこう述べる。

「公平・中立、迅速、廉価というのが、当センターのモットーでしてね。我々の助言で納得いかなければ、斡旋や専門家による裁定といった解決手段も利用することができるんです。裁定のみ有料で、手数料が一万円。どんなに長くとも、六十日以内に結論を導き出すことにしています。だけど、まだ、そこまでいったケースはありません。我々の助言で、ほとんどの相談者が納得したり、怒りを鎮めたりしているようです」

ゴネ得根性を断ち切るPL法

PLセンターは、頭に血が上った神様たちの精神安定剤なのではなかろうか。メーカーや製品に対する不満をぶつけさせることによって、持って行き場のない怒りを解消してやる。ある意味では、消費者トラブ

ルが裁判に発展するのを未然に防ぐ、いわばガス抜き装置として機能しているのだ。

医薬品PLセンターにも、一カ月に七〜八十件の相談が持ち込まれる。半数近くが、消費者の苦情や消費者団体などからの問い合わせだ。相談の中身は、まさに千差万別。大半がクスリの副作用に関するものだが、ときには、動物薬や健康食品、医療器具、医療行為に対する疑問や不満をぶつけてくることもある。菊地敏郎事務局長が呆れ返る。

「うちは、あくまで人が用いる医薬品だけを対象にしているんです。コンタクトレンズのクレームを持ち込まれてもね、ちょっと困るんですよ。先方の話を聴いて、関連するPLセンターがあれば、そちらを紹介するようにしています」

菊地事務局長によると、医薬品PLセンターの機能は、問題点の整理と振り分け、さらに解決のための水先案内役を買って出ることだという。消費者から電話がかかってくると、相手の言い分を聴いて、別のPLセンターを紹介したり、医薬品メーカーとの相対交渉の橋渡し役を買って出る。相対交渉に至るのは、全体の一割ぐらい。そのうちの半分ぐらいが途中で話し合いを打ち切ってしまう。そのため、メーカーとの話し合いで円満に解決するのは、全体の〇・五パーセントと微々たる数字になっている。

「多いのが発疹などの症状です。医者が診断しても、クスリが原因かどうかはっきりしない場合が多い。当然、診断書も出してもらえない。それでも、自分で決めつけちゃうんですよ。このクスリのせいだってね。こういった人たちを相手にするのが、一番たいへんです」(菊地事務局長)

相対交渉で解決の糸口が見出せないと、PL審査会の判断を仰ぐことになる。今までに四件がPL審査会で決着した。待機中が現在、四件。医療事故や薬害など、クスリにまつわる怖い話をさんざん聴かされてきただけに、医薬品のトラブルとなると、消費者が過敏に反応するようだ。

「うちの相談員は、みんな薬剤師の資格を持っています。専門用語をできるだけ噛み砕いて、相手にも分かるように平易な言葉で説明するんですが、先方がカリカリしていると、何を言っても相手の耳に入らない。そして、揚句の果てに『お前はメーカーの回し者か』とか『お前なんか死んじまえ』などと言って電話を切ってしまう。そういう人に限って、メーカー側に落度が見当たらない場合が多いんです」(菊地事務局長)

日本化粧品工業連合会のPL相談室にも、思い込み型のクレームがけっこう舞い込んでくる。シャンプーで毛が抜けたとかボディローションで肌荒れが起きたといった訴えであれば、両者の言い分を聴いて、適切な解決法を助言することができる。だが、毛が生えると書いてあったとかナチュラル化粧品なのに肌がかぶれたと申し出られると、消費者の思い込みや錯覚によるクレームだけに、手の打ちようがない。へたすれば、水かけ論になって、ますます泥沼化していくばかりだ。

「毛が生えるなんて、表示するはずがないんですよ。そう書いたら、薬事法違反で処罰されちゃいますから。ナチュラル化粧品も、事情は同じです。自然の原料だから、きっと肌に優しいんだろうと勝手に思い込んでいる。彼らには口で言うよりも、現物

photo▶小島義秀

常務理事）

を見せ、病院に連れていって、自分の目で確かめてもらうしかありません」（藤井素司常務理事）

思い込み型のクレームに対して、日本化粧品工業連合会の対応が手慣れているのは、PL相談室の前身として、六九年に苦情処理窓口が設けられ、四半世紀にわたって、消費者トラブルの解決に当たってきた経験を積み重ねているためだ。PL法の施行に伴って、紛争処理のガイドラインを作成。メーカーの相対交渉も、このガイドラインに則って行なってもらうようにしている。

「PL法が施行されて、かえってよかったと思います。メーカーと消費者、それぞれの責任が明確になりましたのでね。皮膚トラブルにしても、パッチテストを受けてもらって、化粧品が原因じゃないと分かれば、それまでのように治療費や見舞金を出す必要はない。メーカーにすれば、ずいぶん助かっていると思いますよ」（藤井常務理事）

とは言っても、消費者も負けてはいない。かつての相対交渉で、甘い汁を吸った常連のクレームオタクになると、PL相談室に、最近の見舞金の相場を平然と尋ねてくる。かと思うと、なぜ、昔のように、最後まで面倒見てくれないのかと、血相を変えて怒鳴り込んでくる者もいる。一度でも味をしめると、ゴネ得根性が、終生、骨絡みでついて回るようだ。

ハイテク社会のブラックホール

企業にも責任がある。企業にとって、消費者は本当に神様なのか。神様と崇め奉りながら、内心、無知な神、不遜な神と思っているのではないか。そうでなければ、富士重工のリコール隠しをはじめ、ココ山岡の自己倒産や和牛商法など、消費者をないがしろにした事件がこんなに相次いで起こるはずがない。

いい例が、日本弁護士連合会で七年前から実施している「欠陥商品一一〇番」だ。

ＰＬ法が施行されるまで、自動車、家電製品、建物・設備・建具といった商品が相談件数の上位を占めていた。ところが、ＰＬ法の施行を機に、建物・設備・建具の相談が急激に増えてきた。そのため、昨年から新たに「欠陥住宅一一〇番」を開設して、消費者の苦情を受け付けるようになった。

今年六月に実施された「欠陥住宅・欠陥商品一一〇番」の集計結果を見ると、住宅関連の相談が九百六十六件、商品関連の相談が百二十一件といった具合だ。三年前の数字と比較すると、後者が五分の一に減少したのに対して、前者は九倍以上にも増大している。

なぜか。理由は簡単だ。不動産がＰＬ法の対象になっていないため、悪徳業者が後を絶たないのだ。一一〇番の事務局を務めた中村雅人弁護士が呆れ返る。

「現場に行くと、長時間、この家にいるのが怖いって、建築士が言います。それくらい、ひどい。床下が腐っていたり柱が傾いていたりする家が数限りなくある。大手メーカーの注文住宅だって、目に見えないところで、けっこう手抜き工事を行なっているんです」

「欠陥住宅一一〇番」を実施するようになって、女性の相談件数が増えてきた。当然のことながら、主婦からの相談だ。外壁に亀裂が入った。雨漏りがする。床が傾いている。これらが相談のベストスリーだが、四六時中、家の中にいる主婦にすれば、住宅ローンの返済が気がかりなうえに、業者に騙されたという思いが重なって、気が狂わんばかりの状態で電話をかけてくるものと思われる。

苦情が殺到した背景には、もう一つの理由がある。住宅メーカーの対応のまずさだ。購入者が欠陥に気づいて、住宅メーカーに電話をかけても、それくらいだったらたいしたことはないと取り合ってくれない。あるいは、その場凌ぎの補修でお茶を濁される。住宅を購入するまで、甘い言葉でちやほやされてきただけに、購入後の手の平を返したようなメーカーの態度に接して、裏切られた思いが募り、無性に腹が立ってくるのだ。

「住宅に限ったことではありません。高額商品になればなるほど、消費者の不満が増幅されるんです。メーカーとの相対交渉では、まず解決が望めない。消費生活センターの仲介でも難しい。最後の弁護士頼みといった気持で駆け込んでくるんじゃないでしょうか。一一〇番にかかってくるような相談は、欠陥商品でも難物・多額のものが多いんです」（中村弁護士）

たとえ企業に悪意がなくとも、結果として、消費者に被害を及ぼしているケースもある。最近、目につくのは、ハイテク社会のブラックホールとでも言うべきトラブルだ。代表的なのがオートマチック車の急発進事故。電波説や電磁波説など、さまざまな原因が語られているが、コンピュータ制御を狂わせる真犯人となると、メーカーですら確たる証拠を摑んでいない。

「原因を調べるといっても調べようがないんですよ。ハイテク化されすぎてますのでね。現象面で注意を呼びかけるしか、トラブルの再発を防ぐ方法はありません」（中村弁護士）

新幹線が通るたびに作動する浄水器やトラックの無線に反応してスイッチが入る電気ストーブなど、まるでお化けのようなハ

イテク機器が世の中に出回っているのだ。それを買い求めたばかりに、予期せぬトラブルに巻き込まれ、持って行き場のない怒りに消費者がさいなまれることになる。

◎ココ山岡にハマってしまい

消費者トラブルを巻き起こす企業には、むろん確信犯に近いところもある。マルチまがい商法やキャッチセールス、アポイントメントセールスなどがそれだ。

東京都消費生活総合センターによると、七〇年代後半に、訪問販売やマルチ商法を取り締まる法律ができたが、その後も、法の網の目をかいくぐる形で、さまざまな悪徳商法が横行し、泣きを見る消費者が後を絶たないという。しかも、時代を反映して、資産形成や各種のサービス取引に関するトラブルが増加傾向にあると指摘する。

昨年まで苦情のなかで多かったのが、宝石や健康食品、資格取得などの電話勧誘販売だ。夜中に電話をかけてきて、ああでもない、こうでもないと執拗に話し続け、曖昧な返事をしていると、後日、商品が届いて、代金の支払いを請求される。寝ぼけていたり酔っていたりすれば、ひとたまりもない。相談課の市川隆久係長がこう述べる。

「昨年の訪問販売法改正で、電話勧誘販売も規制の対象になりました。そのおかげで、苦情もだいぶ減っています。だいたい問題のある勧誘行為は、一パターンではなく、何パターンにも分かれて、相談者のもとに寄せられるんです。それらを踏まえて、被害が拡大しそうだなと思ったら、業者名を公表することにしています。毎月一、二社ぐらいですね。KKCやココ山岡も、その対象になりました。和牛の預託商法は、情報提供の形で、注意を促しました。しかし、言わばイタチごっこでしてね。悪徳商法は、いっこうに少なくなりません」

今年六月、東京の三弁護士会で、「和牛預託商法一一〇番」を実施したところ、被害者から四百十三件の相談が持ち込まれた。どうやって預託金を取り戻したらいいかといった相談が大半で、三、四十代の主婦が家計を少しでも良くしようと、なけなしの金を預け入れているのが浮き彫りになった。

相談者の平均年齢が三十八・一歳。平均被害額が約二百八十万円。相談者の八割近くが、折り込みチラシや新聞、雑誌の広告で和牛の預託商法を知ったと答えている。東京第二弁護士会消費者問題対策委員会の紀藤正樹弁護士が、和牛商法の犯罪性をこう指摘する。

「豊田商事となんら変わりません。完全なペーパー商法で、なかには預託金と牛の数が合わない業者までいる。訪問ではなく、広告による勧誘だったから、平均被害額が少なかっただけで、事件の本質は豊田商事と同じです。被害に遭ったのは都市部の住民。牛を見る目がありませんからね。元本保証などと言われれば、コロリと騙されてしまいますよ」

出資法違反で、警察が捜査に動いているが、今のところ摘発されたのは七社だけだ。残りの十一社は、いまだに野放し状態。捜査が遅れれば遅れるほど、被害者たちの財産が雲散霧消してしまう恐れがある。

「利殖雑誌も責任が重いと思います。リスクが少ないとか、高利回りが期待できるといった情報で、主婦たちの投資意欲を煽ってきたんですからね。いったい、どう責任

を取るつもりなのか、一度、ぜひ訊いてみたいもんです」(紀藤弁護士)

今年一月、突然、破産を申し出たココ山岡の被害者は、中年女性ではない。若者が圧倒的に多い。本社が置かれている横浜では、倒産の翌月に、神奈川県と横浜弁護士会が中心になって、被害者にどんな権利が残されているのかといった説明会を開催。併せて、被害者救済の弁護団を結成した。

ココ山岡被害者救済全国弁護団連絡会議の資料によると、権利救済の申し立てを裁判所に行なったのは、十月十六日の時点で三十三地区。原告の数が五千五百四十六人。被害総額八十八億円あまり。豊田商事事件の若者版といった様相を呈している。

連絡会議の代表で、神奈川弁護団の団長を務める山本安志弁護士が、この事件の特異性を次のように述べる。

「一番の問題は、買い戻し特約付きといったインチキ商法を手がけてきたことです。五年後に購入価格で買い取るというのが謳い文句なんですが、まともな商売をしていたら、絶対にそんなことあり得ない。破綻するに決まっています。にもかかわらず、店数を増やし、被害を拡大させてきた。加盟店契約を結んだ信販会社にも責任の一端があると思います」

ココ山岡の販売形態は、一種のキャッチセールスに近い。店にやってくる客には見向きもせず、地下街やアーケードを歩いている若者に声をかけて、店の中に引きずり込み、二、三人がかりで買うまで説得を続ける。ときには、別室に連れ込まれることもある。

狙われるのは、他力本願で、背中をポンと押されないと、自分では動き出せないような若者たちだ。ダイヤのネックレスを若者に見せて、将来の結婚のために買っておいたらどうかと、言葉巧みに勧誘する。そのときの決め手が、五年後、この価格で引き取るから、ちょっとした貯金になるという謳い文句だ。

被害者は、約六割が二十代前半の若者で、男性が六五パーセントを占める。被害額が百五十万円前後。大半の被害者が、信販会社のクレジットを組み、倒産の時点で、三～四割ぐらい払い終えた状況だ。言わば、欲しくもないダイヤを押しつけられ、買い取ってももらえず、ローンの返済だけが残ったといった最悪の状況に置かれている。

「五年経てば、百万円とか二百万円といった資金が自然に貯まる。こんないいことはないじゃない。そう言われると、ついグラッときて、甘い言葉に騙されてしまう。最近の若者心理を巧みに突いた悪徳商法としか言いようがありません」(山本弁護士)

主観的理由による解約

PLセンターが開設されるまで、消費者の駆け込み寺の役割を担ってきたのが、各地の消費生活センターだ。九六年度の相談件数が五十八万件(前年比一三・二パーセント増)と、過去最高の数字を記録している。相談で最も多いのが、信販会社のクレジット被害やサラ金の多重債務問題。次いで、電話勧誘による資格講座。三番目がアクセサリー。ここにも、ココ山岡の悪徳商法が影を落としている。というのも、それまでベストテンに顔を出していなかったからだ。

「私たちのところに持ち込まれるのは、かなり切羽詰まった相談が多いんです。整理

屋に食い物にされたとか、アポイントメントセールスで多機能掃除機を売りつけられたといった相談です。気持が動転している場合が多いので、とにかく最初は、相手の言い分をすべて聴くようにしています」

と語るのは、国民生活センター相談部の吉松恵子さん。愛媛県生活センターで二年間、消費者の相談相手を務め、八九年からここで働いているベテラン相談員だ。

「いちばん大切なのは、受容と共感だと思います。まず相手の言い分をすべて聴き取り、手許のメモをもとに問題点を整理する。そして、事実関係を確認しながら、どこに解決の糸口があるかを探る。どうしたって、自己中心的な話しか、最初は出てきませんからね。あなたになり代わって、業者と交渉するんだから、もっと具体的かつ客観的に話してみて、ということにしています。ときには、事実関係を手紙に書いてもらったり関連資料を送ってもらったりすることもあります」（吉松相談員）

国民生活センターには八人の相談員がいる。が、毎日出てくるわけではないので、だいたい四人前後で電話相談を受け付けている。受付時間が午前十時から午後四時まで。一日平均三十件前後。一人あたり七、八件の相談をこなす。こちらから電話を切るわけにはいかないから、相談に乗っていると、かなりストレスが溜まるのではなかろうか。

「それどころじゃありません。相手はパニック状態に陥っているんです。」（吉松相談員）

電話に出ると、まず、相手が何を言いたいのか、じっくりと聴く。先方の言いたいことをメモに取り、相手が落ち着いたところで、問題点を整理して、こんなふうに話し合ってみたらどうかとアドバイスする。だいたい、これで、九割近くの相談者が納得する。継続扱いになるのは、いわゆる悪

徳商法の類だ。

たとえば、クロレラの訪問販売。クロレラを飲んで病気が治ったといった折り込みチラシを目にして、関心を持った読者が電話で申し込むと、営業マンが半年分とか一年分の商品を届けにくる。そして後日、総額百万円といった請求書が送りつけられる。金額にびっくりして、国民生活センターに電話をかけてくるというわけだ。

「一本四万円もするような商品ですからね。消費者だって驚きますよ。しかも、クロレラというのは一般の商品名で、製品名ではない。だから、折り込みチラシ自体は、薬事法や景品表示法にも引っかからない。そういった場合には、販売方法や契約書の記載事項を丹念に調べ、関係省庁にも意見を求めて、先方の業者と粘り強く交渉するしかありません」

エステサロンや英会話教室の相談もけっこう多い。通産省の指導で、業界別の自主ルールができたが、業界団体に加盟していない業者が掟破りの営業を行なっているためだ。二、三年分のチケットをまとめて買わされた。近くのサロンが閉鎖になり、別のサロンに通うように言われた。中途解約に応じてくれない。サロンや教室が倒産した。

「こういった相談なら、今までの行政指導や業界の自主ルールに則って、消費者救済が行なえます。倒産などで、利用者がやめざるを得なくなったときには、クレジット会社が残債を放棄するようにといった通達も出されているんです。ただ、困るのは、自分の都合による解約の相談。お金が続かないとか、痛いから脱毛コースを途中でやめたいと言われても、それはちょっと無理な注文だと思います」(吉松相談員)

とは言っても、すぐに門戸を閉ざしてしまうわけではない。消費者の我がままな申し出であっても、親身になって話を聴き、なんとか相手の要望に近い形で、解決の糸口を見つけ出そうとする。たとえば、電気針を使った永久脱毛。皮膚に針を刺して毛根を焼くのは医師法に抵触する恐れがある。その旨を相手に告げ、痛いという主観的な理由ではなく、処置のしかたに問題があるといった客観的な理由で解約を申し出るように勧める。どこまでも親切なのだ。

◎ お宅のチラシは女性蔑視!

しかし、消費者にとって、究極の駆け込み寺は、企業のお客様相談室なのではなかろうか。いつ電話をしても、丁重な受け応えで接してもらえる。何を言っても、絶対に言い返されない。淋しさを紛らわそうと思ったら、何時間でも話相手になってくれる。消費生活センターが、神様の姿を映す鏡の間だとすれば、お客様相談室は、神様の欲望を満たす大聖堂のようなものだ。

とにかく、さまざまな話が持ち込まれる。商品や接客に関するクレームだけではない。身内の愚痴から仲間の悪口、はては老人の茶飲み話まで、ありとあらゆる相談に対応しなければならない。

ある大手デパートのお客様相談室には、毎週一回、妙齢の婦人から定期コールが掛かってくる。地下の食品売場で試食した漬物は、塩辛くて老人には向かない。いつも挨拶をしてくれる店員が見当たらなかったが、体調を崩したのか。新しく入ってきた娘は、化粧が濃すぎる。別段、文句を言う

わけでもなく、渋茶を啜り、菓子を食べながら、小一時間近く話し続ける。名指しで電話口に呼び出される田中一夫係長（仮名）が苦笑いする。

「きっと淋しいんでしょうね。モニター調査だと思って、毎回、おつき合いさせていただいてます。でも、こんなのは、まだかわいいほうなんですよ」

田中係長がいちばん困ったのは、言いがかりに近い中年女性の難クレームだ。お宅で買った弁当を食べたところ、気分が悪くなったと言われて、相手の家に出向くと、弁当箱の中には卵焼きの切れ端しか残っていなかった。しかも手回しよく、急性胃炎などと書かれた医者の診断書まで用意されていた。

「治療費と慰謝料、休業補償を支払えというわけですよ。こういうトラブルには、警察も介入してきませんのでね。長引くと、半年ぐらい話し合わなければなりません。総会屋やヤーさんと違って、引き際や落しどころを知らない。そういった怖いもの知らずの消費者がいちばん始末に負えません」（田中係長）

大手スーパーのフリーダイヤルには、一日五十回、無言電話がかかってきた。市外局番から宮城県の消費者と判明しているが、何が不満なのか、皆目、見当もつかない。かと思うと、女子社員が出るのをいいことに、エッチ電話をかけてくる不埒な者もいる。

「セクハラまがいの電話は切れと言ってるんですけどね。なかなかタイミングが難しい。切るタイミングを見計らっているうちに、向こうで勝手にイッてしまうこともあるそうです」

と語るのは、消費生活アドバイザーの資格を持つ鈴木誠課長（仮名）。一般的な相談や苦情は、原則として店舗で処理することになっている。そのため、フリーダイヤルの四～五割が難クレームの対応にならざるを得ない。

「つい先日、こんなことがありました。お宅のチラシは女性蔑視だと言うんですよ。よくよく聴いてみると、キャッチコピーが気に喰わないらしい。ボーナス一括払いと

か御家族で楽しい団欒を、といった言葉は、ボーナスのもらえない自分のような独身女性に対する差別だというわけです。さらに、電話番号で四と七が続いていると、四十七歳という自分の年齢を思い出させて、非常に気分が悪い。早急に改善しろと言われましてね。返事のしようがないので、二回とも黙って承っておきました」(鈴木課長)

◎二重人格の自称「万引き犯」

商品交換が縁で、苦情マニアの中年女性と長期間つき合わされたこともある。彼女の言い分はこうだ。学生時代に購入した万年筆の使い勝手が悪い。十五年前からメーカーに文句を言っているが、いっこうに誠意のある態度を見せてくれない。最近では電話口にすら出てこない。あんたのほうからメーカーに連絡を取って、自分のところに電話をかけるように言ってもらいたい。そんな訴えが、断続的に何十回となく繰り返された。

「初めのうちは、一応、先方に伝えましただけど、先方の担当者に話を聞くと、製品そのものには問題がなく、最初の対応のまずさが尾を引いているらしいんです。フリーダイヤルに表示される電話番号を見て、その女性だと分かったら電話を取らないようにしていると言ってました」(鈴木課長)

もっと不気味なのが、二重人格と思われる女性からの電話だ。まず、女性の声で、お宅の店で買い物をしていたら、警備員に呼び止められて万引き扱いを受けた。どうしてくれるんだ、と怒鳴り込んでくる。次いで、男性の声で、俺の友だちが万引き扱いされ、精神的に落ち込んでいる。誠意ある態度を見せろとすごむ。どう考えても、同一人物としか思えない。だが、声色や態度が別の人物のようにガラリと変わる。

「一種の被害妄想なんですよ。おそらく、従業員に相手にしてもらえなかったか、あるいは邪険にされたか、なんらかの不手際があったんだと思います。それを根に持って、しつこく電話をかけてくるんです。こういうクレームも聞き置くしかありません」

小売りだけではない。メーカーにも、異様な神様がたびたび押しかけてくる。たとえばOA機器メーカー。パソコンが動かないといって電話がかかってきて、症状などを尋ねると、ソフトウェアに問題がありそうだということが分かった。ソフトウェアのメーカーに申し出てもらいたいと伝えると、お前のところは大企業なんだから、ソフトウェアのメーカーをきちんと指導したらどうなんだと、逆に説教し始める。そんなときは、ひたすら神様の怒りが鎮まるのを待つしかない。高橋孝一室長(仮名)が嘆く。

「確かに消費者は神様だと思います。だけど、分をわきまえない神様が多くてね。いちばん困るのが、ハッカーまがいのパソコンオタク。自分の力を誇示したいのか、新機種の弱点をあげつらって、侵入防止の解答を寄こせと言ってくるんです。このような危ない神様は、記録に残して、なんらかの対応策を講じなければと思っています」

現代の消費社会が〝神様の幻想〟で成り立っているとすれば、お客様相談室のスタッフたちは、神々の深き欲望につき合わされる巫女のような存在である。ただ、ひたすら聴くしかない。だが、心の中で呟いているのではないだろうか。消費者は、気まぐれで、不遜で、無知蒙昧な神だと。

『朝日新聞』の内部資料公開！

泡沫候補撃退マニュアル!!

拝啓、『朝日新聞』さま。弱者の味方である御紙ですが、
選挙活動の弱者、いやサイコ野郎だけは、しっかりと差別してらっしゃる。
お気持、痛く身にしみますが、これって公職選挙法に抵触しませんか〜あ？

森岡健作（フリーライター）

選挙報道で、〝サイコさん〟と呼びたくなるような立候補者を見るたび、彼らと他の候補者との扱いの違いに常々疑問を感じていた。

つとめて公正でなければならない選挙報道において、〝サイコさん〟が記事で取り上げられることは少なく、公職選挙法に定められた「新聞広告」すら、掲載されていない新聞があるからだ。ひょっとして、マス・メディアは〝サイコさん〟を意図的に排除しようとしているのではないだろうか。

しかし、この疑念もつい最近まで、単なる疑念にすぎないものと思っていた。メディア側が、勝手な判断で立候補者を選別するなど許されないことだし、そんな愚行に走るほどメディアも思い上がってはいないだろうと考えていたからだ。いわば、メディアの良識を信じていたのである。

ところが、現実は、そうではなかった。朝日新聞社の内部資料によると、巨大メディアのうち、少なくとも朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の三社は協議のうえ、自分たちの判断で候補者を選別し、意図的に「紙面上、差をつけた扱いにしてい」たのだ。

この「三社協議」による候補者の選別は、「67年総選挙から始ま」り、一九七七年以降立ち消えになっているが、各紙とも、独自の基準で選別を続けて「程度の差こそあれ定着している」という。

なかでも朝日新聞社は、「紙面からの締め出し」の波及効果によって、候補者の『選挙からの締め出し』につながっても」、それは「ニュース価値に見合った報道をする『合理的な選択』による結果である」とうそぶくのだ。

もし、朝日新聞社が候補者を泡沫扱いし

ていたことが明らかになれば、「特定候補を『当選させない目的』で排除」したとして、「選挙無効の訴訟」を起こされないとも限らないのだが……。もっとも、その自覚があるからこそ、このような強がりをいうのかもしれない。

　果たして、朝日新聞社では、候補者を差別するにあたって、どのような「具体的な判断基準」を設け、どのようなマニュアルに従って、どう扱ってきたのか。また、差別された候補者からクレームがつけられた際、どのように対応してきたのか。その信じられない手口を見てみることにしよう。

　しかしその前に、まず、このような報道姿勢が、いかに公正を欠くものであり、国民を小バカにするものであるか。そして、メディアの驕り高ぶりが現れたものであるかを、今少し考えてみることにする。

「だれを特殊扱いするか」の基準

　読者にとっては、釈迦に説法かもしれないが、選挙報道が公正に行なわれるのは、いわば議会制民主主義の大前提である。それだけに、言論報道機関として絶大な影響力を有する新聞、テレビは、その報道の公正さに必要以上に注意を払う義務が求められている。

　仮に立候補者のなかに、当選の見込みのない〝泡沫候補〟がいたとしても、公職選挙法の精神から言えば、公正に扱い、間違っても意図的に排除すべきではないはずだ。

　もちろん、候補者のニュース価値についての判断や、候補者への論評は自由になされるべきだろうが、「ニュース価値に応じた紙面扱いを決めるのは新聞社の判断」との口実によって、〝泡沫候補〟の排除を正当化させていいはずがない。泡沫か泡沫でないかで、その候補者を選別する法的権限などメディアには与えられていないからである。

　選挙に立候補した以上は、すべての立候補者は、国民の審判を仰ぐ権利を保障されている。そしてメディアは、国民の判断の一助となる報道を求められているにすぎないのは自明のことである。

　もっとも、読者の側にも、真面目な政策を持たない立候補者の記事など読みたくないとの思いはあるのかもしれない。しかし、そういう候補者であっても立候補を許されているのが、現行の法制度である。かりに、「選挙を売名や営利などに利用したり……他の候補に対する妨害や支援を主目的にする」ような不真面目な候補者がいたとするなら、それこそ紙面において堂々と批判すべきだろう。それこそがジャーナリズムに期待されている役目ではないだろうか。

　繰り返しになるが、新聞が、独自の基準を作って、密かに候補者を排除するのは、どう考えてもおかしい。

　まして、その基準は、一般に公開され、批判にさらされ、国民的合意の下に作られたものではない。新聞社内で、こっそり作られ、外部に漏れないよう細心の注意が払われてきたものだ。そのような基準が、選挙時の紙面作りで実際に運用されるのは、非常に危険なことであろう。乱用されたとしても、チェックできなければ、ブレーキもかけられないからだ。

　しかし、当の朝日新聞社では、そうは考えていないらしい。むしろ積極的に、新聞社間で基準の統一をはかり、運用を徹底す

photo▶小島義秀

べきと内部文書で呼びかけている。

泡沫候補や特殊候補への、「朝日の態度が最も厳しく、三社の歩調が必ずしも一致しなくなった。今後とも各紙の足並みが(わが社の基準で)そろった方が望ましいので、だれを特殊扱いにするか、支局長間で非公式に情報交換することは差し支えない」と、いった具合だ。

「虚偽の報道」逃れ

一九八九年以降、朝日新聞社では立候補者を、「一般候補」「特殊候補」「準一般候補」に三分類している。朝日新聞の定義によると、「一般候補」とは、政党などに属している候補者をいい、「準一般候補」とは「当選の可能性は別にして、まじめなミニ政党」の候補者などをいうようだ。

そして、この「準一般候補」に対しても、「できるだけ一般候補並みの扱いを原則とするが、紙面のスペースなどの制約で、候補者紹介や、政見アンケート類の扱いが小ぶりになるのもやむを得ない」

としている。

悪平等を説くつもりはないが、このように、真面目な候補者に対しても、あらかじめ枠を決めてしまうのはどうだろう。このこと自体、「ニュース価値に応じた紙面作り」をしていないことのあらわれであり、公平な選挙報道を求める法の精神を、踏みにじることになるのではないだろうか。

まして、「特殊候補(泡沫候補)」の扱いとなると、常軌を逸しているとしか言いようがない。朝日の内部文書には、「特殊候補」の定義とその「具体的な判断基準」が、こう明記されているからだ。

「**◇特殊候補とは**

選挙を売名や営利などに利用したり、自己のマニア的欲求を満足させるために数々の選挙に立候補、あるいは自己の政見を述べるよりも、他の候補に対する妨害や支援を主目的にするなど、候補者としての客観的な評価が認められない候補。

◇具体的な判断基準

①態度がふまじめで、選挙を売名や営利に利用するもの。

②他人の選挙妨害、援助などを目的とし、自己の建設的な政見、主張がなく、露骨な

他候補の中傷、攻撃などに終始するもの。
③本人の居所、住所、所在地などが分からないもの。あるいは選挙事務所をつくらず、選挙運動を行わないもの。」

一見、もっともらしい理屈だが、「態度がふまじめ」といった基準や、「自己の建設的な意見、主張がな」いといった基準の、どこが具体的なのだろう。このような主観的な判断基準で、国民の審判を仰ぐ前に、立候補者が一新聞社によって密かに選別されていたのだから恐ろしいことだ。

しかも、この内部文書では、「特殊候補」を紙面でどう扱い、どう締め出すかを具体的に指示している。それは、「特殊候補」を記事で公平に取り扱わなかったことで、公職選挙法違反（虚偽の報道）に問われないための注意事項でもある。

内部文書には、こう書かれている。

「（前文には）『主要六政党の候補者に聞いた』『立候補した六人のうち有力四候補の意見を紹介』『主な候補の一日を追うと――』などの表現を入れ、ある特定候補があたかも立候補していないかのように扱ったわけではないことを断る」

「（タイトルやカットは）『主要四政党の候補に聞く』『激戦三候補の顔』『有力候補に聞く』などと工夫し、これが全員でないことの逃げをつくっておく」

「（例として）本文のそばに『立候補している人たち』などとした特殊候補を含む候補者一覧を入れる」

「一見したとき候補者全員と誤解される恐れがある企画、アンケート特集などでは特殊候補も含めた方がよい場合があろう。特殊候補は決まりもの以外は絶対に除外すべきもの、扱ってはいけないもの――というわけではない」

知らぬが仏とは言うが、過去、「特殊候補」として「紙面から締め出し」を食っていた人たちが、このことを知ったらどうだろう。

多くの読者にしても、「正義人道」に基づく「公正」な報道を掲げる朝日新聞の看板が、偽りであったことを知ることになるはずだ。

しかし、〝天下の朝日〟は、そんな読者の目など恐れてはいない。いずれ、看板の偽りが発覚することもちゃんと計算に入れているかのように、対応策を準備している。

朝日新聞社では、

「社外への説明は『毎日の紙面はニュース価値によって新聞社が扱いを決めている。紙面スペースなどとの兼ね合いで決まる』『届け出一覧などの公報的役割の記事では平等な扱いだ』『インタビューなどの企画ものは、だれにインタビューするかなどは新聞編集権の範囲だ』『これらの扱いは、公選法一四八条の報道・評論の自由として裁判上も定着している』と説明する」

としている。

一般読者の批判など蹴散らせといわんばかりの指示である。

そして、さらに細かな対応マニュアルまでが定められている。

以下、その嘘と欺瞞に満ちた不誠実な「抗議への応対要領」の全文を紹介しておくことにする。このような少数者の恣意的な排除は、理由のいかんにかかわらず、社会的プラスにはならないと考えるからだ。

しかし幸いにして、朝日新聞社の「特殊候補の定義や認定基準」の存在が明らかになったことで、マスメディアの選挙報道を

めぐっての「論争のタネ」は尽きなくなったと言えよう。

泡沫候補との仮想問答

朝日新聞内部資料＝抗議への応対要領

以下は77年参院選のときに作った「特殊候補応対要領」の要点である。

応対に当たっては、わが社が特殊候補の締め出しの方針を決め、具体的な判定基準に従い特殊候補に指定しているなど、社内の対応を口にすることは絶対に避けるべきであり、相手に事後の争いの言質を与えないよう、特に注意する。また、この応対要領が外部の者の手に渡ることのないよう、十分に気を付けていただきたい。

応対の一般的方針　相手と議論して論破するのでなく、傾聴したうえでお引き取りを願うことを、まず基本線とする。「報道の自由、ニュース価値の判断に立って対処している」という不動の考えに立ち、「柔らかく応対するが、最終的には突っぱねる」という〝外柔内剛〟の応対態度を貫く。

応対の具体的な方法　①通信局に抗議してきた場合は「紙面企画は支局で行っている。支局に伝えるから、支局長に会ってもらいたい」と支局長にゲタを預けてよい。

②支局長は、誠意をもって相手の言い分を聞く、という態度で応対し、相手に〝納得〟して帰ってもらうよう努める。できるだけ、その場で解決し、「本社に問い合わせ（文書で）回答する」というような約束はしない。しかし、相手が納得しなければ「私の説明で納得がいかなければ、本社へ直接行っていただくほかない」といって引き取ってもらう。通信、社会部デスクに直ちにその旨の連絡をしておくこと。

具体的な問答の例　相手の抗議、質問に対しては、慎重に受け答えするが、自分の方から議論することは絶対に避ける。相手のペースに巻き込まれず、冷静に、必要最小限の答弁にとどめる。

×　×

問　朝日の紙面を見ていると、オレを泡末（ママ）としてみているようだが、どうなのか、はっきり聞きたい。

答　そんなことはない。

問　紙面で差別しているではないか。

答　わが社は、読者に選挙戦の実態を客観的に報道するように努めており、ニュース価値で、紙面の扱いに差が出てきても、おかしくはない。

問　候補者が五人いるのに、オレだけ、候補者紹介がない。あとの連中は写真を載せたりこんなにスペースを割いているが、これは不公平だ。朝日は不偏不党を売りものにしているのに、政党候補や有名なヤツの肩だけを持つ。組織や力がないものを抹殺しても、公平だと言えるのか。選挙の自由妨害だ。

答　あなたを抹殺するなんて、そんな考えは全くない。立候補届け出や締め切り後の候補者一覧など決まりものは、全員を公平に載せている。選挙の公正な報道は十分考えてやっている。

候補者紹介（あるいは政見など）は、選挙公報のようなものとは違って、報道・評論だからニュース価値の判断から新聞独自でやるものだ。だれかがその企画の取材対象にならなかったといっても、選挙の公正

を害しているとは思わないし、選挙の自由妨害でもない。それを差別だというのは、見解の相違だ。

問　知事選の時（あるいは前回、他の選挙区で立った時）にはオレの候補者紹介も載った。こんどはなぜ差別するのか。

答　それぞれ選挙実態が違うし、紙面企画の内容やニュース価値の判断は、その時その時に行われるものだ。そういうこともある。

問　ニュース価値とはなにか。スペースはあるじゃないか。例えば（紙面を引き合いに出して）こんな交通事故の記事より、候補者全員の紹介の方がニュースとして大切じゃないか。

答　それは判断の問題だ。自分も含め、社としてニュース価値の大小を総合判断した。新聞としては森羅万象すべてを載せたいが、そうはいかない。すべてを画一的に報道することは、新聞の機能としてあり得ない。

問　（企画ものについて）朝日新聞はオレのところへ取材にも来なかった。取材もしないで、外すという価値判断ができるのか。

答　社として、ニュース価値の判断によって取材からは外した。

問　そういう判断の最高責任者はだれだ。

答　最終的には編集局長だ。しかし、本県内のことに関しては、私が社の代表である。

問　泡沫締め出しの方針と、具体的な取り扱い要領はどんな内容か。

答　そんなものはない。

問　毎日も読売も差別しているが、三社で共謀してやっているんだろう。

答　そんなことはない。協定はない。各紙それぞれの判断で扱いが違う場合は当然ある。

問　お前と話し合っていてもラチがあかない。ここから本社に電話したい。

答　私の回答は、社の回答だ。納得してもらえないのなら、直接本社へ行ってもらってもよいが、結果は同じだ。ここから電話するのは、十分に意が通じ合えないと思うので、お断りする。

問　これは新聞の暴力だ。選挙の公正を害しているから、告訴する。

答　告訴するというなら仕方ないが、最高裁の判例でも、ニュース価値の判断による合理的な選択は、公選法一四八条の「選挙に関する報道・評論の自由」として認められている。

×　×

これまでにも、〝常連〞が、選挙のたびに、紙面の差別扱いの抗議に本社へ押しかけてきた。支局や通信局にこうしたことが起きたら、今後のこともあるので、本社デスクにも連絡してほしい。

選挙広告から「泡沫」を締め出す方法
法務、自治両省の参考意見

以下は67年総選挙で特殊候補扱いを決めた時に、朝日、毎日、読売三社の実務者打ち合わせ会で、法務、自治両省の担当者から聞いた意見である。

法務、自治両省の担当者（法務省・I検事、自治省・T選挙局管理課長補佐）は、泡沫候補を紙面上差別することと法律面の関連について、

質疑を通じて次のような見解を示した。

もちろん、両省の正式な見解でも、新聞社側に対する行政指導でもなく、非公式に参考意見を述べたものである。わが社としてどう選挙記事を書くか、どの辺まで書くかは別の問題だが、参考までに掲載する。

問 まじめな候補者をも泡末として無視した場合「オレを泡末として扱ったのはけしからん」と苦情を持ち込まれたときはどうなるか。

法務省（Ｉ検事）「泡末締め出し」を新聞社が天下に公表した場合は問題だが、泡末の基準が外部に知られていないなら、苦情を持ち込んだ者が争う方法はあるまい。

問 候補者の実名を挙げて批判したときは、どうか。

Ｉ 記事の内容がウソでなければ問題ない。ただ「この候補は女道楽以外に楽しみがない」といったような私行上のことに触れた場合は、名誉棄損の材料になる。

問 キャンペーン記事で注意すべきことは。

Ｉ 「この人に投票するな」と書けば、報道でも評論でもないから違法。「この人は選良にふさわしくない」と書くのは、評論だからよい。

問 その場合、民事上の損害賠償訴訟を起こされないか。

Ｉ 当選できなかったことによる損害は評価できないから、損害賠償要件にはならない。

問 実名を挙げてキャンペーンする場合の限度について。

Ｉ 「田中彰治は代議士にふさわしくない」というのは、問題ない。その理由として「これこれの刑罰を受けた男だ」という公的な性質のものを根拠にするのはよいが、「彼はメカケが何人いる」といった私行上のことに触れると問題を残す。

問 「政見を取り上げる価値なし」と判

断すれば、どんな候補でも無視してよいのか。

ー　構わない。ただ、その候補がうるさいかどうかで後々の問題になろうから、各社が足並みをそろえた方がよい。

問　候補者の前科を取り上げ、他の候補の前科に触れない場合はどうか。

ー　他の候補にも前科があるのを知っていたかどうかが問題で、知っていたとなれば違法になる。とにかく、前科を取り上げるのは、何らかの意図があるという、痛くないハラを探られることになりはしないか。(やめた方がよい、というニュアンス)

問　特定候補が不利になるような記事でも差し支えないわけか。

ー　公選法一四八条にいう新聞とは、新聞社がそれぞれ識見を持ったものであることを前提にしたものだ。従ってその社の方針によって特定の政党、特定の候補を支持しても差し支えなく、批判記事によって、ある政党や候補者が不利になっても構わない。

問　泡沫候補の苦情に対する有効な応対方法は？

ー　泡沫判定基準を、そのまま言わない方がよい。法的に、きちんとした泡沫の定義はないのだから……。それを言えば、泡沫が「共産党の候補だって同じではないか」というような言い掛かりをつけるもとになる。「あなたを紹介する必要がないと思った」で押すだけでよい。

自治省（T課長補佐に同行してきた課員）　泡沫と断定すれば面倒になる。泡沫扱いしたのを選管がチェックしなかったのはけしからん、というので選挙無効の訴訟を起こすことがあるだろう。過去の判決では「泡沫と断じたわけではないから、選挙は無効ではない」としたのがある。この判例からも泡沫と断じない方がよい。

問　広告の面で泡沫を締め出すことはどうか。

T　広告は、法によって候補者が五回掲載することを保障されている。だから、それを広告から締め出すとなれば、「泡沫として締め出すのではない」という表向きの理由が必要だ。「広告掲載のスペースがない」と言うのならばよいが、現実問題として広告で締め出すと選管に文句を言ってくることになろう。

ー　広告は五回までは国が料金を支払うのだが、「契約自由」の原則は生きている。新聞社が基準を作り「これに該当する広告は載せない」とすれば問題にはならない。その場合の基準に、泡沫締め出しを持ち出すと文句を付けられる口実を与えるから「広告掲載基準」の方がよい。ただ、広告に関する限りは、載らないために著しい損害を受ける人が出るのだから、各社の共謀は好ましくない。この件は各社がハラに納め、各社それぞれの方針だと理解することだろう。広告を断るのに「紙面が狭い」は理由として通る。

問　他候補へは広告の勧誘に行き、一方で「紙面が狭い」という理由は成り立つか。

ー　「これこれの党派に属する人の広告を載せるのだから、あなたのような人の広告は困る」というような形で断るのが一番よい。泡沫締め出しで最もやってもらいたいのは、広告で扱わないことだ。広告で締め出されれば「立っても意味がない」として、将来、泡沫が立たなくなっていくだろう。

座談会：福祉行政の先端岬から

人権サイコパスに捧げる〝ウンコ〟

腹を割ったコミュニケーションから、いちばん遠い場所＝福祉行政。
「ああ、倫理コードがうざったい！」。三人の専門職が語る、人権野郎たちが知らない現場のリアリズム！

進行＋構成＝田原一樹（フリーライター）・編集部

――以前、この別冊宝島で『隣のサイコさん』（281号）という企画があったんですが、そこで精神障害者を一生院内につけておくことも可能だと豪語している精神病院の記事を載せたんです。本が出てすぐ、ある読者の方から問い合わせの電話や手紙をいただいた。どうやら、身内に入退院を繰り返している精神病の患者さんがいる様子で、読者の方の弁によれば、かかっている病院はマトモなところらしく、長期入院を許してくれない。

身内の患者さんは、薬が効いているうちは安定しているようですが、飲むのを拒むようなときもあって、その影響で薬がきれてくると家族に暴力を振るうらしい。突然、角材のようなもので後ろから頭を殴られると。それで、なんとか記事で扱っていた病院を紹介してくれと、何度も懇願されたわけです。もちろん、紹介なんてできない。

ただ、この読者とのやりとりから感じたことがあります。障害者本人の人権を優先すべし、というのが今のマトモと言われる論調ですが、その論調の陰には、一つの方向性だけでは解決できない、どうしようも

座談会出席者

A■福祉事務所勤務のケースワーカー。暮らしに困った人たちの生活保護を扱う。以前は住所不定者や日雇い労働者の相談にあたっていたこともある。管轄にいわゆるドヤ（簡易宿泊所）を抱えているため、対象者に日雇い労働者もいる。

B●保健所勤務。職種は正式には「医療ソーシャルワーカー」といい、住民からの医療全般にわたる相談を受けている。ただし、大半が精神障害にまつわるものであるのが現状。福祉事務所勤務の経験あり。

C▼児童相談所勤務。事情があって子どもを育てられない、預けたいといった養護相談や、知的障害を含む児童の発達的な問題についての相談、広い意味での健全育成といった関係の相談を受ける。

ない現実というものがあるんじゃないかと。
テレビや新聞を見ていても、伝わってくるのは美談や糾弾ばかりで、生々しい話は避けられている感じです。ならば、日常的にそうした現場に接している人々は、どのように感じているのか。今日は、福祉行政機関に勤める三人の方にお集まりいただいたわけですが、福祉全般の現場について、それぞれの立場から、日頃感じていることなどをお話しいただければと思っています。

ザ・転落人生

A（福祉事務所）■本当にどうしようもなくて、「もう精神病院に入れちゃえ！」ってことは、実際にあります。私の場合、ドヤがあって日雇い労働者もいる地域なので、ちょっと特殊かもしれませんが、ハンパじゃないんです。お酒飲む人が多いし、アルコール中毒の人も多いから、酔って戸外で転がってて、服はボロボロ、下手したら糞尿まみれだったりする。
救急車が呼ばれても、結局「なんとかしてくれ」って、病院じゃなくてこっちに運んでくる。病院に行く前にまずからだをきれいにしなくちゃいけない状態だから。でも、本人は中毒になっていたりして、現実的には相当困ってるわけです。
そういう人は住所不定だから、受け入れてくれる病院が限られていて、だから親切な、というか、あまり人権的じゃない病院に頼むことはあるんです。
確かに、そこしかないってときがありますす。ちょっと遠隔地の山中にあって、簡単には出てこられないような。でも、中毒症状が好転して退院してきた後で、「いやあ、ヒデエ病院だった」なんて文句言われたことがある（笑）。

B（保健所）●多くはないけれど、どうにもならない人はやっぱりいて、家族などから「一生入れとく病院はないか」って相談は私も受けます。たとえば、暴れるような患者の家族が保健所に相談に来た場合、だいたい言うことは決まってて、「暴れたら警察呼べ」ですね。大雑把に言えば、警察から保健所を通じて、措置入院というルートがありますから。ちなみに、保健所はまず教えないんですが、法律上（精神保健福祉法）は誰でも、精神障害の疑いのある者を保健所に通報できる。もちろん、明らかに「自傷他害の恐れ」がなければ保健所は動きません。外で踊ってるくらいじゃ入れられない。何か具体的な「被害」が出るまでは、なんともできないんです。
この制度を悪用しようとして、財産問題で揉めていたある親子が、お互いのことをキ印呼ばわりして、電話してくるようなこともあったそうです（笑）。

――冒頭で紹介した読者の方の話に通じるかもしれませんが、本人が、結局は家族からドロップアウトするようなケースっていろいろあるみたいですね。

A■日雇い労働者や野宿者の相談をしているところでは、怒鳴り合いや暴力沙汰が日常的で、毎日いろんなことが起きるんです。ある意味で、転落してここまでたどり着いた人たちが集まる。お酒を飲む人が多くて、実際、昼日中に路上で酒盛りしている。「酒のためなら盗みもするし、人も裏切った」なんて言ってた人もいた。だからと言って、根っからの悪人じゃない。そういう〝病気〟の人たちなんです。家族や周囲から見離さ

photo▶小島義秀

れて、何もかもなくしてしまっているのに、それでも飲む。

B●古典的な意味での転落人生だよね。

A■ええ。普通に会社勤めを続けられない、性格的に問題があってうまく人間関係を結べない、そういう人が多いんだけど、彼らが一人で生きていくには、やっぱり日雇いしかない。それで五十歳くらいになって、腰を痛めて働けなくなる。貯金も年金もなくて、もうこうなったら生活保護しかない。そんなパターンが多いです。

さっきの読者の場合でも、もしも家族が「こんな人、もう面倒見てらんない」って家から追い出しちゃったら、いろんなところをウロウロして、そのうち住んでる地域の役所に行くかもしれない。それでもダメだと結局どうするか。たぶん、ドヤのある地域の福祉事務所に来たりするんでしょうね。

独居老人の作られ方

B●最近、ある程度高齢の人には部屋を貸さない傾向があって、それでドヤに来ざるを得ないようなお年寄りもいるようです。でも、家や家族がある老人にも、もっとひどい話がありますよ。街中で老人が一人でうろついていて、名前も住所も分からない。警察に保護されたんだけど、どうやらボケたっていうんで、家族が捨てたらしい。最近じゃ、ボケ老人捨てる人がいるんです。本物の「姥捨て」ですよ（笑）。結局は、捨てられていた地域の福祉事務所や保健所が責任を持つわけですが。老人医療は今すごくお金がかかるから、捨てた家族は、経済的に大変だったのかもしれないけど。

――とんでもない話ですね。

A■ただ、捨てる家族を非情とばかりは思えないようなところもあるんです。たとえば経済的にはギリギリだけど、保護を受けずにすむ収入はあって、かつ家のローンを抱える家族があるとします。不景気の煽りで、お年寄り一人だけ面倒見られなくなった。それで福祉事務所に相談に来たとすると、こちらも困ってるのはよく分かるし、なんとかしたい気持にはなるけれど、家族全員の収入で頑張ってください、としか言えない。家のローンを払っていたら、生活保護は原則として認められないから。

街中に捨てるというのは極端な話なんだろうけど、「アパート探して、お年寄りが一人暮らしになったら、保護受けられるじゃない」という話はありえます。独居老人にする、ということですが。

B●生活保護には「世帯単位の原則」があるからね。家族のうち一人だけが家に寄りつかず勝手に濫費して、残りが食うや食わず。そんな場合でも、もちろんダメです。常識ある職員なら実情に合わせて対応するけど、そうでない人も多い。

A■その人が完全に出てったきりならそうすればいいけど、実はまだ家族とつながりがあって、お金のやりとりがあってもそのことを隠してたり。隠すつもりはなくても、やっぱり家族だから別れられないとか。そのへんを見極めるのは厄介ですけどね。

戸籍のない家族

C（児童相談所）▼転落しちゃって、何もかもなくして、それでも子どもだけは残るってケースもたくさんあります。そういう人に限って、子だくさんだったりするし。

薬物依存の親が子どもをほったらかしにしといて、「子ども、なんとかしてくれ」って相談に来る。もう完全に子育てできない状態で、その子は歪んできちゃってて。

法律上は、親が完全にブッ飛んでたら児童福祉施設へ入れられるんです。だから、こちらもなんとかしようとするんですが、親は判断能力なくしてるから、いざとなると措置に同意せず、「私のどこが悪い、ちゃんと育ててる！」なんて言われることもある。しまいには「それならば私が施設を作る。それでいいじゃないか！」なんて、無茶言い始めて（笑）。

A■足の踏み場もない雑然とした公営住宅の一室で、毎日カップラーメンだけ食べていて、学校に行ってないって子もいた。その子はもう成人したんだけれど、そんな育てられ方だから生活力もつかず、仕事もできない。若いのにホームレスになって福祉事務所に相談に来るんです。そんな境遇の人に「若いから働け」と言っても難しい。

C▼そういったことが繰り返されちゃうんですよね。親子何代にもわたって、養護施設を活用し続けてて有名になった家族とか

いましたもんね。

A■子どもは学齢を過ぎてるんだけど、一回も学校へ行かずに、ずっと部屋の中だった。就学させようと思ったら、家族の誰も戸籍を作ってない。出生届けも出してなかった、なんて話も聞きます。

C▼これは、人間、お金が絡むと人間らしい部分を見せちゃうというか、そんな話なんですが、知的障害者の施設では、各自の年金は施設預かりにしてるんです。年度の繰越して、余った分は家族に渡すんですが、その渡す当日だけしか施設に来ない親がいます。お金を受け取ったら子どもの顔も見ずに帰る親とか、「去年と比べて額が少ない」って文句言うような人もね。

なかには、療育手帳は子どもの障害を認めるようなものだから欲しくない、でも手当は欲しいと言う親もいる。それは可能ではあるし、親の気持も分かるんですけど。

――親の問題って大きいんですね。

ドヤに通じる「道」

C▼もっと普通の家庭になると、登校拒否の相談なども受けることがあるわけです。ところが親は、登校拒否になったのは勉強ができないからだと思い込んで、「家庭教師つけた方がいいでしょうか?」なんて聞いてくる。子どものこと、全然分かってない。「引きこもり」もそうだけど、そこまで追い詰めたのは、もともとは親だったりするんですから。体裁ばっかりつくろってるから。現象として、子どもが部屋から出なくなったりして初めて気づいて「どうしたらいいですか」って相談に来る。一日中寝ててトイレさえ行かず、クソまみれの部屋に籠城してた子もいたし。

その子も、結局は入院したんだけど、当初は感情が死んでるようだったのが、そのうち話もしてくれるようになった。

怖いと思うのは、イイトコの家の「なぜウチの子がこんなことに?」って言ってるような親に限って、社会病理を持ってるのが、実は自分たち自身かもしれないとは考えもせず、子どもをなんとかしなくてはという発想しか思いつかないところなんです。なかには、「こういう子どもをなんとかするのが児童相談所でしょ!」なんて言う親が本当にいる。

要するに、自分のことを棚に上げて、自分の子どもの問題を役所に押しつけるわけ。「ここじゃ、全然だめだ」とかって、あちこち相談機関を変えてみたり。感覚がまるで学習塾(笑)。仕事としても後味が悪いですよ、こういうケースは。

A■私の方の地域だと、公園で寝てるホームレスのおじさんが結構いて、あるとき、「これじゃあ子どもが公園で遊べない」って訴えてきた母親たちがいた。はっきり言って、確かにその近くでは遊べないと思う。おじさんお酒飲んでるし(笑)。でも、私は思うんですよ、「遊ぶところがないって言うけど、おじさんは寝るところがないんだぞ」って(笑)。

B●だから、今そうやって公園で野宿する人が出る社会状況があるわけでしょ。たとえば、大規模開発プロジェクトでたくさんの日雇いを呼び入れて使っておいて、その完成後の彼らの行き場がない。不景気だしね。そういったことを、親は何一つ子どもに説明しないでしょう。それどころか、親自身、考えも及ばないんじゃないかな。で

本文と写真は関係ありません。

なければ、「なんとかしろ」なんて、福祉事務所に訴えてくるわけがないんだから。

A■本当に、今は日雇い仕事自体がないことが大きいですね。それで最近増えてるのは、他の地域からの流入です。住所不定だと、ふつう面倒見てくれないから。これは本当は問題なんですが、生活保護は、自治体単位の機関委任事務で、転々としてる人が、そのへんの福祉事務所に行ったとしても認められないんですね。

　いちばんひどいと思ったのは、住所不定の人が困ってて、役所に生活保護のことで相談に行ったら、他の福祉事務所までの電車の切符と地図を渡されて、「ここへ行きなさい」って言われたとかいう話（笑）。語義どおり人間をタライ回しにしてる。これ、完全な法律違反なんですから。

B●私がびっくりしたのは、役所がアル中のケースを寝台列車に乗せてよそへ追いやったという話ですね。

――泥酔したツレを、とにかくタクシーに放り込んじゃう、みたいな感覚ですか。

B●ええ（笑）。他にも、刑務所に入ろうとしてパンを盗んだ男がいて、警察が捕まえたら、えらくからだの具合が悪いことが分かった。そしたらたちまち警察が釈放して、そのままドヤのある地区の福祉事務所に行かせたという話もあった。その人、実は重い結核で死にそうだったというんです。あの話を聞いたときは、私もさすがに怒りましたね。

達成感ゼロの福祉最前線

A■今みたいに仕事がない状況だと、病気や障害が若干ある人にも健康な人にも、平等に仕事がないんです。たとえば、ただの肝炎でも病院では「療養必要」とされるじゃないですか。そうすると保護にせざるを得ない。我々の基準で考えれば、肝炎で仕事辞める人なんていないでしょ。他の軽微な病気でもそういうことがある。

　なのに、病気のない人は健康管理が良かったために、仕事がなくても保護受けられないのって、ちょっと不公平だと、最近は思いますね。あと、アル中に関して言えば、お酒をやめれば肝炎も治っちゃうし、ときどき飲んでときどき倒れてれば、言葉は悪いけど〝一生安泰〟みたいな（笑）。そういう人もいる。

B●でも、それって、一つの処世術でもあるよね。私はそういった生きてゆく知恵みたいなものは、持っていてくれた方が安心するけど。

A■ただ、病気は諸刃の剣で、お酒をやめられないと、当然からだがどんどん悪くなって早死にしてしまう。でも、からだが良くなると保護は受けられない。ところが、保護は受けたものの、お金はお酒に消えていくからやっぱりからだは悪くなる一方で、結局早死にする。

　そんなこともあって、最近、なんだかとっても疲れます。「私はいいことをやってる！」と思えればいいんだろうけど。

――仕事って、達成感がないとからだが動かないようなところがあると思いますが、そういう達成感みたいなもの、あるんですか？

A■私は何もないですね。自分が何の役にも立ってないって感じる。

　でも、お酒を飲んで結果的に死んでも、意味はあったかなあとも思う。お酒をやめ

られた人なんて、私の知る限りほんのわずかだし。元気になって仕事に戻るとか、家族の元に帰れたとか、そういうことを「達成」と考えたらだめですね。そんなの目指したら、こっちが潰れちゃう。その人と話ができて、少しでも心を和ませることができてよかったなあくらいの、すごい低いところに基準を持ってってるかも。

C▼こういう職場では、ちょっとした「いい話」みたいなところにやりがいを求めるくらいしかないんじゃない? 知的障害者の施設なんかだと、ある程度歳がいってる人もいて、家族はやっぱり年一回とかしか顔を見にこない。ほとんど天涯孤独で、そんな生活が死ぬまで続くわけです。そうするとやっぱり、職員の達成感なんてどこにあるんだ、って思います。日頃顔をつき合わせてやってるなかで、笑えるようなって言ったら悪いけど、ちょっといい話みたいなエピソードがあるとね……。

「紙ねえから手で拭いたよ」

――「いい話」というと?

C▼たとえば、ヘッドギアをかぶった精薄の人で、外出して一緒に食事をしたことがあったんです。彼は自分の分を真っ先に平らげちゃって、隣にいる僕のが欲しい。でも、手を出したら怒られるのは知っているから、「ご飯ください、ご飯ください」って僕に言うんです。「もう食べたでしょ」って諭すと、ちょっと工夫しようと思ったのか、「ご飯、くださいよオッ」に変わって、次に「ご飯、ちイッとください!」になるんです(笑)。まわりは笑うし、僕もなんだか「あ、そんなに欲しかったのか」って。今でも、そのときの光景が心に残ってたりする。

A■なんだか、ほのぼのしてますね。

B●でも、そういうことって、表立って書いたり話したりできないんですよ。そういうことが、相手との関係を結んでいるような気がするんだけど。新聞なんかだったら、「障害者差別だ」って方向に持っていきがちでしょ? 人権意識がどうのって前提に立って、「障害者を犬みたいに扱った」とか。

――障害者と障害者じゃない人の違いは確かにあって、明らかに違っているところをどう受け止めるか、ということですよね。

A■私たち当の職員も、そういうことを楽しんでいるところがあるかもしれない、悪い意味じゃなくて。そうでないとやってられないこともありますから。さもなければうんとクールになって、笑いも怒りもしないで淡々と仕事こなしていくか。

でも、どんなことがあっても笑っちゃいけないんだって、一般の社会の人は本当に思ってるのかな? 馬鹿にしてるわけじゃないでしょ? 私たちにとってみたら、日々関わってる相手だし、一般のつき合いの場と変わらないのに。

C▼施設で、お昼前にウンコ漏らしてる人がいて、きれいにして着替えさせて、さあやっと昼飯だと思ったらカレーだったり(笑)。そんな話でも、そういう取り方をする人は、そう取るんだよ。

A■ドヤ街の相談窓口だと、一歩中に入っただけで臭いが違う。受付のまわりでは寝転がってる人や踊ってる人がいて、カルカッタの路上みたいだし(笑)。裸でお酒飲んでたり。

それを見て、「役所の廊下で寝てはいけない」と思ったり、「公道と同じだからやっぱ

りいいか」とか、注意したもんかどうか迷ってる私も変なのかもしれない。でも、「好きで寝てんだから、いいか」って（笑）。きっと市民から見たら、苦情の対象でしかないんでしょうけど。

C▼やっぱり知的障害者の施設でよくあるんだけど、冬場に行くと、青洟たらした子が「先生来たの～」って洟でテカテカになった腕のまま抱きついてくる。「あっ、あっ」って、身を引いた表情になっちゃうんだけど、やめろなんて言えない。本人は喜んでるしね。

それから、施設でいちばん困ったのは、突然真顔で「ねえねえ、俺、バカだからこんなとこ入ってんのかなあ？」って聞かれたとき。そんなこと聞かれるなんて思ってないから答えられなくて、「いやあ、それはまた後で話しよう」って誤魔化した（笑）。

A■トイレで頭とか足とか洗ってるおじさんが結構いるんだけど、パンツ洗ってたりもするんです（笑）。この手の話には事欠かない。でも、この前はさすがにびっくりしました。

あるアル中の人と面接した時なんですけど、ずいぶん遅れてきて、どうしたのか聞いたら「だめだよあんなの！」って怒ってる。「トイレに紙がねえんだよ！」って両手を出すんですよ。「紙ねえから手で拭いたよ」って（笑）。洗ってこないで、私の机のティッシュ何枚も取ってゴシゴシ拭いて、それを机の上に転がしとくんですよ（笑）。

C▼子どもの相談で、言葉の遅れがあった。いろいろ検査したうえで出した結果を、言いづらいけど親に伝えなきゃならなくて、「いろいろやったんですけど……お宅のお子さん……今のところちょっと……」なんて遠回りしながら話したのに、そばでその子が、こう壁にむかって指さしながら「ビビビービビー」なんてやってくれてる。深刻な場面でね。

A■私もこの職場に入った当初は、「偏見は持たないように」って意識していたけど、中にいると、むしろ持っちゃうかもしれない。実態を見てるから。外の人は知らないだけで、入ってみると笑っちゃうしかないようなことはいっぱいあるんですから。

B●公園に寝てる人なんかもね、私たちがちゃんと部屋を探して入れても、やっぱり路上に戻る人は戻っちゃうのが現実なんです。新聞なんかの人はそれを見て、ただ「行政は寝る場所もない人たちを放置している」っていうふうに取る。世間は迷惑がるか、無責任な立場から可哀相がるか、そのどちらかの極端な反応が本当に多い。

私たちの口からは「あの人たちは、どうやっても野宿になってしまう」とは説明できないじゃないですか。確かに、そう言ってしまうと、好きでやってるわけじゃない人から、当然文句は出るだろうけど。

「人権意識」の腹立たしさ

C▼これは「好きでやってる」って言ってもいいかなと思う話ですけど、足の踏み場もないくらいの部屋に大家族で住んでるのに、鳥やら猫やら、やたらペットを飼っちゃう人とかいますね。生活保護受けてるんだけど、「いやあ餌代足んなくて」って。「どっかあげちゃえば？」「いやあ可哀相で」。それで可哀相になるのはあんたじゃないかって（笑）。家族がコンビニのお握りを奪い合ってるその傍らで、ペットフードはいいも

のやってたりするんですよ。

A■こんな人もいました。狭い一間でウサギを二匹飼っていて、部屋もなんだか臭い。数カ月してまた訪問したら、七匹になってる。「どうしたの?」って聞いたら「生まれたんだよ」だって(笑)。自分の居場所もないのに何のためにって思うけど、好きなんでしょうね、やっぱり。

B●福祉事務所はペットの指導もしなくちゃいけない。でも、私はなかなかできなかったですね。子ども同然に可愛がっている犬を連れた、野宿の老夫婦がいたんです。そのせいで部屋を借りられずにいたんだけど、何のためらいもなく「そんなの捨てろ」なんて言う職員もいるんです。こいつ何考えてんだ、よくそんなこと言えるな、って思う。人間だから、考え方に差があるのはしょうがないですけどね。

——その人にとっては、人の気持を汲むより、「住居の確保」という福祉行政を実行することの方が大切なんでしょうね。職場では、そういったことで職員同士の間に議論が起こったりするんですか?

B●ないです。

この業界というのは、やはり一筋縄ではいかない人間を相手にすることが多くて、当然「いいこと」も「悪いこと」もしなきゃいけないんです。傍から見たら悪いことだけど、しょうがなくすることもある。無理矢理病院へ入れる、自分のところじゃどうしようもないからよそへ行ってもらう。確かにそれはよくないことです。

でも、やらなきゃならないことはある。そして、ある一つの処置を取ったら、それにはプラスとマイナスの両面が必ずついてまわります。暴れてる人を家族と我々で病院に連れていくとすると、まず治療については病状の好転が予想されるけど、間違い

なく本人に我々と家族への不信感を植えつけるでしょう。その両面を考えなければいけないんです。

だけど、そういった感覚でものを捉えない職員が、少なからずいる。

C▼しきたりに則って仕事をこなすような人たちですね。

B●それでいて、自分がやっていることは正しいんだって発想なんです。そういう職員は、いつのまにか建前が中毒化して、身についた流儀、作法で仕事をしてるだけ。そうすると、議論のしようもなくなります。いろんな考えがあって、自分が採ったのはその一つでしかないんだとふうには考えていないんです。

——最初の方で話に出た、福祉事務所に行き倒れのアル中患者を運んでしまった救急車の救急隊員だって、その人の見かけだけで、とにかく福祉へ持っていけば一件落着、という発想でしょうね。

B●そういう発想の人が、一方では人権だなんだと言っていると、腹が立つんです。人権、人権って言ってるようでいて、実は面倒臭いからやるべきことをやらずにすませているだけだったりする。面倒な仕事が多いのは間違いないですけど、やはりすごく矛盾を感じます。そういうのが最近、職員の間に増えたような気がする。

もちろん、きちっとやってる人もちゃんといるわけですけど。

A■こうした現場には、一般事務をするようないわゆる〝公務員〟になるつもりで入ってきた人もいますから、考え方はそれぞれ違います。配転で一度は経験するようにしている自治体もあるようですが、嫌なのに配転されて自殺しちゃった人もいるって聞きます。

——「普通」と言われる生活の中から、こういった話がどんどん消されてきてるからじゃないですか。どうしようもない現実というものがあるんだということを知らずに育ってくると、嫌だっていう生理現象だけが先走って、自殺しちゃうんでしょうね。

「救急車自分で呼べよ馬鹿野郎」の教訓

A■以前、「福祉川柳」(注)が問題になったことがありましたけど、あの頃私はまだ今の職場にはいなくて、実際の現場の単純にはいかない部分を知らなかったから、「なんてひどいことを!」って怒っていたんです。確かに、あそこまでは言っちゃいけない、説明もないから誤解も招くし。でも、最近見直してみると気持は分かります。こういう気持になる部分もあるなあって感じます。

たとえば、あの川柳のなかに、「いつまでも入院しててねアル中精神」っていうのがあって、当時は「作った人は病人をいつまでも閉じ込めておきたい、って思ってるんだ」と感じたんですけれど、今考えれば、せっかく一生懸命入院させてアル中の治療させようと思ってるのに、三日もたたずに出てきて大騒ぎする人だって、現実にはいるんです。そうなると、「お願いだから病院で治してよ」って思うし、出てきたら本人だってまた辛くなる。入院していた方がいい場合はいくらでもあるんです。

ただ、それをああいう形で出しちゃったのは間違いです。実際、他の職員にとばっちりがくるわけで。私もこんな気持でやってるなんて思われたら嫌ですから。

B●ああいう気持になることがまったくな

いという福祉関係者がいたら、その方が問題じゃないですか？　当然腹が立つときもあるんですから。「救急車自分で呼べよ馬鹿野郎」なんていうのもありましたけど、そんなふうに言いたくなるときもあると思う。

それでも、そこで一瞬浮かぶ気持の、どこを抑えてどこを表に出して、そのうえで毎日の仕事をどう続けていくかってところに意味がある。そういう冷静な議論こそ必要だと思うんですけど、なんだかそうしたことを考えること自体が規制されているようで。

――あれは、文脈がまったくないですからね。川柳だし(笑)。プレゼンテーションの仕方は、もっと他にあるはずなんだけど。

A■結局、受給者から見て面白くないんだと思います。自分から「私は保護を受けています」って名乗り出る人はいないだろうし、だから一般の人は身近に受給者がいてもあまり知らない。それで、こうした川柳や、話題になりやすい極端な部分だけを見たら、「ああ、受給者ってこんな人なのか」ってネガティブなイメージで考えてしまう。そういう視線を感じれば、大半の普通の受給者は、やっぱりひっかかってしまうでしょうね。

B●職員の側にしろ住民の側にしろ、いろんな人間がいて、ひどいことをやってるのもいれば、立派に生きている人もいる。社会はどこでもそうだし、それは福祉行政だって同じなんだということも、分かっていてほしいと思いますね。

――「福祉川柳」にしても、ああした露骨な形で内情が吐露されてしまうというところに、福祉現場の抱える「ネジレ」が出ているように感じますね。現実を共有したうえでの、まともなコミュニケーションの回路が塞がれているんじゃないですか。

B●不自然な形の抑圧があるんですよ。おかしいことがあったら笑う、腹が立ったら怒る、という感情が極端に押し殺されているんじゃないですか。一般社会でも同じですけどね。

A■私たちの職場でも、少しは今回みたいな話ができないとつまらないですよね。

B●というか、そのせいで本当に問題にしなくちゃいけないこと、話さなければならないことまで押さえられていると感じます。それで、変えるべきことも変えられないんです。

C▼よく言われることですが、結局、行政は民間からいろいろ言われるのが嫌なんです。だから、何か言われないように上っ面だけであらかじめ対処しようと手を打って、これでよしとして終わり。これでよし、と思ってるのは役所の上層部と、傍からしか見ることのできない市民団体ばかりなんですが。

――我々メディアもそれに荷担しているはずです。福祉の現場というのは、コミュニケーション不全の、一つのいびつな縮図になってしまってるんですね。

(注)「福祉川柳」事件　一九九三年六月、福祉事務所のケースワーカーの自主的研究団体「公的扶助研究全国連絡会」の機関誌『公的扶助研究』に掲載された七十五句の川柳が、生活保護受給者を侮蔑するものとして受給者らの支援団体から告発され、全国紙社会面をにぎわした「事件」。各方面に批判が広がり、機関誌は回収・休刊となった。

アダルト・チルドレンと手記ブーム

羊たちの饒舌

アダルト・チルドレンという言葉は、なぜここまで流行したのか？
不幸話の告白で、本当に人は救われるのか？
「記憶」へとレイドバックする、平成の「私」事情を探索する！

与那原恵（フリーライター）

本のタイトルに「アダルト・チルドレン」とつければ五万部は見込めると、ある単行本の編集者が言うのを聞いたことがある。出版点数は伸びる一方なのに、本はさっぱり売れない現状のなかで、たしかにアダルト・チルドレン（AC）関連の本は書店を賑わしている。ここ数年の出版界では突出したブームと言うべき現象である。数十冊に及ぶであろうそれらの本は、精神科医、セラピストが専門家の立場から解説したもの、ジャーナリストが取材したもの、そして何よりも目をひくのは、自らもアダルト・チルドレンだと告白する当事者の体験記である。

それらの本を読んでみて、この出版ブームの理由は何だろうかと考えてみた。専門家によるものも当事者によるものも、数多くのアダルト・チルドレンの具体的な事例で溢れている。薬物中毒や自傷を繰り返す人たち、親からの虐待など深刻な事態も少なくない。さらには、それほどシビアな局面にいなくても、この社会に身の置きどころがなく、「生きにくい」「人との関係がうまく結べない」と感じている人たち。本には、その原因を探っていく過程が記されているが、書き手たちは一様に、子ども時代のトラウマや問題の多い家族関係にその理由を見出していく。

記憶の底にしまっていた体験や出来事が浮かぶ。そう言えば、決して幸福な家族ではなかった、と現在の自分の苦しみのもとを掘り当てていくのである。傷ついた「人生の物語」、抑圧されていた過去、不当な苦しみを味わった自分。「私はなぜ、こんなにひどい体験をしてきたのだろう」と考える。

しかし、やがてそれは自分ひとりではなく、同じような苦しみや悩みを抱える人が少なくないのだと気づく。そうした体験を分かち合うことによって、「癒し」に向かうというのが、おおむね共通したストーリーである。

これらの本には、そうした「無名の人々の物語」が詰まっているのである。

「ありのままでいられる家族」とは?

無名と言えば、数年前「手紙」本の一大ブームがあった。母への手紙など、中高年を対象に「ちょっといい話」で埋め尽くされた本である。手紙という手軽なスタイルのせいもあってか、つぎつぎと似た本が出るほどに書き手には困らなかったようだ。

現在のアダルト・チルドレン本は、「手紙」本のような心暖まる本とは対称的と言えるかもしれない。「傷ついた物語」が若者層を中心にブームになっているのは興味深い現象だが、内容がポジティブであれネガティブであれ、無名の人々が語り手の側に立つという点では、「ちょっといい話」も「傷ついた物語」も、じつは大差がないものなのかもしれない。テーマも同じように「家族」である。

ところで「自分を物語る」ことの出版ブームと言えば、昭和三十年代から四十年代にかけて、女性の書き手による「手記」のブームがあった。『愛と死をみつめて』『二十歳の原点』などである。こうした手記のブームについては、藤井淑禎氏が著書『純愛の精神史』に詳しく述べているが、そのなかで藤井氏は、書き手たちの「父親」に対する眼差しに着目している。

『愛と死をみつめて』では、難病の死の床にある著者、大島みち子が（その状況によるものでもあるが）、家を思い、父親の慈愛に満ちた像を語っている。しかし、その一方で彼女は、社会福祉の夢を語ることで、社会制度に目を向けていたと藤井氏は指摘する。

そして約十年後に出た『二十歳の原点』の著者、高野悦子になると、「常に指導優位的な父親」を打ち砕き、「家すらも私の魂の拠りどころではなくなった」と藤井氏は看破している。高野悦子の問題意識は社会批判にたどりついていた。

家や社会制度、状況を見渡す主体が、ひとりの無名の若い女性であり、彼女たちの苦悩を共有することができたからこそ、手記は爆発的ブームとなったのだろう。つまり、かつての手記ブームとは自我の苦悩であり、自我と社会との葛藤であったのだ。

現代の無名の人々による「手記」とも言えるアダルト・チルドレン本だが、それは自我との葛藤とは言いがたい。彼らの苦悩の原因は、自分の家族のあり方だったり、子ども時代のトラウマだったりとすぐに回答を得られてしまうからである。さらに、これらの本の多くは社会にも目が向かない。学歴重視の現状や、企業社会の現実、男女の不平等の話題も顔を覗かせるのだが、それらの問題点は家族という小さな器に回収されてしまう。

ここには、かつての「手記」本に見られるような長い苦悩の旅はない。アダルト・チルドレンという、フレームストーリーに沿った物語が綴られているのである。

帯に「生きるのが下手な人へ」とある『アダルト・チルドレン「癒しと再生」』で

photo▶小島義秀

は、著者の秋月菜央が、多くの事例を出しながら自らもアダルト・チャイルドだったと告白する。二十代、薬とアルコールに依存していたという著者は、幼いころ母親の姿が見えないと泣く「分離不安」を抱えて成長したらしい。嘔吐を繰り返し登校拒否になる。そして六歳のころ、御用聞きの米屋がスカートの中に手を入れてきたという「性的虐待」に遭い、その後トラウマとなった。母親の過保護に反発しつつ、アルコールに弱い父親の脆さも嫌だった。

「家族という形のなかで、私は孤立していた。家族は形だけ整っていればいいというものではない。(略)ありのままの自分を受け入れてもらえなければ、そこは自分のいる場所にはならないのだ」

著者は、やがて親から自立しようと一人暮しを始めるが、神経症的症状に悩まされるようになる。心の安定を失い、精神病理学の本を読み漁り、過食の日々を送ったこともある。やがて「自分がありのままでいられる場所」を見つけた著者は回復していく。多くのことを乗り越えた今、「アダルト・チャイルドであったことを誇りに思う」と締め括る。

誰だって「AC」になれる?!

これは典型的とも言えるアダルト・チルドレンの物語であろう。いくつもの事例に共通する状況や症状があり、「ありのままの自分」を受け入れない家族の中で生きる苦しみが綴られている。では、他の家族にとって、家庭は「ありのままの自分」でいられる場所だったのか、という疑問が私には残る。それぞれが「ありのまま」だったら、そもそも家庭という器は成り立ちにくいのではないか。しかし、「私」を語るこ

とに、他者への想像力は必要ないことなのかもしれない。

そもそもアダルト・チルドレンに明確な定義はない。この概念の発祥となったのは、「アルコール依存症の親のもとで育った子ども」である。それが、「問題ある家族の一員だった子ども」という定義に広がり、さらに現在では「自分の生きにくさを理解しようとするための自己認識・自覚」のツールになっているくらいだ。いかようにも拡大解釈できるものなのである。アダルト・チルドレンと名乗ろうと思えば、誰だって可能な程度の定義なのだ。

人が生きていくうえで何のトラウマも抱えず、家族にまったく問題がないことなどあり得ない、誰でもアダルト・チルドレンになってしまうではないか、との批判が生まれるのも当然であろう。もちろんその事態の深刻さはあるにせよ、この概念の幅は、魅力的なほどに広いのだ。

では、アダルト・チルドレンと名乗ることによって、彼らは何を得られるのだろうか。

それは「場」である。苦悩する自らの居場所を得ることができるのだ。「私ひとりではない」と、思うことができる。ただ、その「場」は、明確な形として存在しないのが特徴的かもしれない。自らをアダルト・チルドレンと「気づく」ことが彼らのアイデンティティであり、それだけでこの「場」の一員となることができるのだ。それは形あるグループにはなり得ない。アダルト・チルドレンを名乗る人々や関係者の間では、「魂」や「癒し」といったふんわりとした曖昧・中庸な用語が頻繁に使われることからも、それは理解できる。

たとえば、オタク、極論すればオウム信者たちも、この消費社会での身の置き所のなさを感じていた。そのような出自の面ではアダルト・チルドレンとも共通するのだが、少なくともその後にモノや行為として、目に見える形をつくろうとした。そうすることで自分以外の他者との差異をはかり、自己をより鮮明にしていくことができたのである。「場」とは他者との区別なくしては存在しないのである。

しかし、アダルト・チルドレンの場合、「他者」という存在そのものが希薄である。それは先に述べたように、アダルト・チルドレンという定義の曖昧さに起因するものかもしれない。つまり、アダルト・チルドレンと非アダルト・チルドレンとの区別はなく、それゆえに「自己」と「他者」の境界もまた曖昧なのだろう。

だが、形は見えなくともアダルト・チルドレンという「場」はあるようだ。そのひとつは冒頭に述べた出版による「私語り」である。また、実際に彼らが顔を合わせ語る場も少なくない。アダルト・チルドレンの数々のワークショップであり、集団療法による自助グループでの語りである。そして、もうひとつ興味深い「場」が、パソコン通信のなかにある。子ども時代や家族関係という人間の「生」な問題を仮想的な場で語り合っている逆説的な構図の「場」である。

「孤独」も「集団」もイヤ

ニフティの精神保健フォーラムに、「アダルト・チルドレンの部屋」がある。このフォーラムには以前から「依存症の部屋」

があり、ここから九六年四月に、アダルト・チルドレンの部屋が生まれたという。なかなか活況のようで、それぞれの発言への反応も素早い。

　発言の内容は、現在の自分の苦しさ、その原因を切々と語るものがほとんどである。それは「呟き」に近いものだ。共通するのは、自分の「居場所」のなさへの嘆きだ。たとえば、次のような趣旨のものが多い。

「私は今住んでいる所が自分に合いません」

「子どものころ、一人で気楽と思っていたけどずいぶん淋しかったのかもしれない」

「帰っていける『居場所』があってこそと思います」

「家は本来安全な場所でなければならないのに、どうしてこんなに居づらいものなのでしょうね」

　自らの寄る辺のなさを痛感する言葉が続く。周囲は人で溢れているのに、だからこそ自分のテリトリーは失われ、居場所がない。しかし一方では、個であることも強烈に願っている。つまり、他者との距離を適当に保つ「場所」がないという嘆き、しかしまったく孤立していたくもないという願い。

　思えば、今ほど他者との「距離」に悩む時代はないのかもしれない。私は以前、高校のスクールカウンセラーに話を聞いたことがある。そこは、公立高校では珍しい単位制の自由な校風のようだったが、生徒たちの悩みの多くは「友人とどのような距離をもってつきあったらよいのか」というものだった。仲良くしていたいのだが、その「ほどほど」の距離が分からないというのである。ひと昔前なら、ぶつかり合うことで習得していく「距離」を最初から保っておかねば友人関係が結べないのだ。

　索漠とした個を繋げるものが「人間関係」ではあるのだが、その関係の取り方が難しい現代に生きる者たちが手に入れたのが、「メディア」である。それを通して、かりそめの関係を構築しようとする。

　現代のように豊かになることは、ある意味で、個を尊重し、互いの接近を回避しようとすることでもあった。豊かさの実感はまちまちだろうが、少なくとも過不足なく個が充実感を感じていられることが追求されてきた。それは必然的に他者との軋轢を避けることになる。必然、個の孤立化を招く。そのなかで、パソコン通信というメディアは、孤立した個を集め繋げる「広場」のような役割を果たす。

「メディアとは、意味を求めることによって、他者の思考と遭遇する《場》であり、《通路》なのである。したがって、メディアとは人間にとって他者との共有性、同一性、共同性を求める《場》なのである」（成田康昭『日本のテレビ文化』）という一文は、アダルト・チルドレンが集うパソコン通信上の部屋にもあてはまるだろう。その道具は、生々しい関係を回避したうえで「繋がる」ことができる。

　発言の多くは、たとえば自分をこのように紹介する。

「ACの○○です」

「AC本人で今は摂食障害が酷い○○です」

「（私の）父はACで母は共依存です」

　なかには次のようなものもある。

「精神科にもカウンセリングにも通っていませんが、あまりにもこちらに共感してし

まうため、ACかなと思っています」
「ACという概念を知り、もしかして、自分もという気がしてきています」
まさしく彼らのための「部屋」なのだから、このような自己紹介は当然なのだろう。アダルト・チルドレン関係の本を多く読み、カウンセリングに通う者も少なくない様子から想像すれば、このような「符牒」に違和感はない。精神医学用語、たとえば、嗜癖、共依存、問題行動といった言葉がログ（文章）のなかには頻繁に見られる。こうした用語が彼らの言語であろう。しかし、ここからは、語彙の貧困という側面を感じないわけでもない。

ACは「自分」隠しのツール?!

そして参加者同士の発言が交わされる。家族のこと、職場の悩み、恋人との関係、インナーチャイルドのこと、神経症的症状について……。なかには、「私はどうも他の人とは違うのかもしれない」と感じる人も少なくないようだ。
「『普通の人』というのは、きっとこういう居場所を持ってるんでしょうね。私にはありません。無ければつくるしかないのですが、時間がかかりそうで……」
「最近普通の人が羨ましくて羨ましくて、羨ましくて、自分がACであった意味がほしくて苦しいです」
「今のうちはごまかしごまかし、人と違っていることには気づかれないよう……」
注目すべきは「普通の人」とは何か、が見えない点である。大雑把に言えば、アダルト・チルドレンではない人、ということにはなるだろう。しかし、それは前述したように「自己申告」によるものなのだから、「普通の人」の明確な像というものは、そ

もそもないのである。
しかし、自らがアダルト・チルドレンであるとマニフェストすることによって、「自分は他の人とは違う」という信念にも似た自意識を手に入れることができるのだろう。人と違うことに苦しみながら、同時にそれを誇りとするアンビバレンツがここにはある。もちろんそれは、アダルト・チルドレンに限らず、現実社会で自分の存在を確認しようとするとき、誰もが抱える不安の現れなのかもしれない。そして、さまざまな悩みを綴るそれらの発言に、たとえばこんな返事（レス）が届く。
「その気持ちよくわかります。でも、思うんでです。これまでは自分を大切にすることを知らずに生きてきました。だから何もないように感じるんです。でも、今は自分の問題についてよく理解しています」
「問題がはっきりしていてもそれを解くことができるとは限りません。でも、ひねくれて生きるのだけは、自分を傷つけるのだけはやめよう。お互い焦らずに、やっていきましょうね」
短い旅に出ていたとの発言には、「お帰りなさい」のレスが返されていた。
相手を励ますにしても、非常に気を遣った言葉使いになっている。お互い距離の取り方に悩んでいるという共通項が、優しく、間接的な文体になるのだろうとは思う。
その文体に加えて、アダルト・チルドレンの世界で頻繁に使われる用語が、お互いの親密さをよく表しているように思う。悩みの質、感性、距離の取り方。それらを総合して、ひとつの共通項を見出せるという安心感にも似た「空気」のようなものが、画面から浮かびあがってくるのだ。まして、

それを介在するモノがパソコンというメディアであるがゆえに、生な関係は必然的に回避されている。

自己の物語を語りながら、実は語ろうとする以前の段階から、いくつもの既成の言葉をクッションとして物語を形作ってしまう。同じ目的を持ち、顔の見えない人々が集うのだから、コミュニケーションを図ろうと思えばそれも当然のことなのかもしれない。しかし、彼らのコミュニケーションは、ディスプレイの前に座った瞬間、自分のことを他者のように「外部化」できるものなのではないか。むしろ、自分を語っているのではなく、自分を最初からガードすることに目的があるかのようだ。私にはアダルト・チルドレンと通信上のコミュニケーションの結びつきは、約束されていたもののようにさえ感じられた。

消費社会と「どうにもならない他者」

精神科医の斎藤環氏は、思春期の若者たちを数多く診る治療の現場に身を置いている。しかし、アダルト・チルドレンという概念に対しては一定の距離を持っていたい、という立場である。斎藤氏は言う。

「アダルト・チルドレンとは、非常に強力な場所ができたなという感じがします。内省的な葛藤を抱え込むタイプの人、すべてを取り込むことができる。今までブームになった概念のなかで、もっとも洗練されていると思います。しかも病理の原因、状態、治療の方向すべてがそこに含まれている」

しかし、診断的な意味で使われることは危険だと指摘する。

「自称することでみんながACになってしまう。そのことの問題点はあると思います。たしかにみずからをACとして再発見することで救われる人もいるでしょう。しかしその一方で精神病理的に重い人も軽い人も、ACという概念のなかで、平均化してしまう。ACとは、入り口としては広くありますが、では出口はあるのかと言えば、それは疑問な点もあります」

「アダルト・チルドレンの部屋」のスタッフ（「ドアボーイ」＝議長）も精神科医である。編集部から質問を送り、右の点に答えてもらった。質問の内容は、「ACという概念にとらわれすぎると、本来的に抱えている疾患（神経症・うつ病など）の治療を遅らせてしまうことにはならないか」というものである。回答はこうだった。

「そのとおりだと思います。うまく併用するのがベストでしょう。ただし病気や生活環境やその人が現在もっている機能レベルを考慮しないといけないし、そもそも、医療側からACという概念を押し付けないようにしないといけないだろうと思います。そういう意味では、自助グループも、医療機関も、ACという概念を乱暴に扱わないような質がこれから問われていくのでしょう」

たしかにアダルト・チルドレンという言葉は、病理ではないと事あるごとに言われてはいる。しかし現在、アダルト・チルドレンと名乗ることに積極的な意味を見出そうとする現象が強まっている。それは、ある意味でのナルシズムと受け取ることもできる。だからこそ、これまで述べてきたように、自己の物語がつぎつぎと繰り出されるのだ。

私には、アダルト・チルドレンという言

葉自体が、非常に平板化した没個性の用語のように思える。個とは何か、他者との差異とは何か――という疑問に、この一語はすべてを覆い隠してしまうような感じすら持つ。それは「個性」というものが、巨大な消費社会で巧みに用意された商品のひとつとなっている現象に通じていることかもしれない。逆に言えば、消費社会によって、つぎつぎと開拓されてきた顧客の最終形こそ、そのような「個性」を求める人々なのかもしれない。

　しかしそれでも、アダルト・チルドレンというフレームに乗って自己を語ることに、意味はあるのだろうか。斎藤氏は言う。

「自称しただけで仲間に入れるというのは、差別がなくていいのかもしれません。この会議室は共通言語があって、分かりやすい。意志疎通のためのインターフェイスとしての機能はあるでしょう。ただ、個別の複雑な要因が（ACという）枠のなかで、きれいに整理されすぎてしまうということはあるかもしれませんね。その結果、葛藤のありようが平板化している感じはあります。仲間意識は持てるけれども他者性ということでは希薄にも思います。自分にはどうにもならない他者を意識することも必要です。仲間同士の果てしない『受容』がもたらす功罪両方を考えたいですね」

　会議室のドアボーイにも次のような質問をした。

「この会議室の書き込みを見ていると、他者との関係をどう結びなおしていこうか葛藤している姿が想像できる。ネットワーク上で展開される『自分語り』は、他者性を獲得できるのか」

　このような回答が返ってきた。

「『つながり』というのはご指摘のように他者との再結合なわけですが、AC概念が目指すのは『内なる自分とのつながり』が主軸で、他者とのつながりはその結果、もしくは最終段階であるのでしょう。また本来、『語り』が有効に心に作用するのは、自分の五感をつかって行なわれるときだろうと思います。つまり、自分の口で声を出して話しその話し声を自分の耳でまた聴きながら、話しながら泣いてしまったり、詰まってしまったり…そういう意味で『肉声』を使わない語りは、やや効力が少ない印象は否定できないでしょう。

　しかし、文字が無意味なわけではないでしょう。まず、文字にしてみる、今度はそれを棒読みでもいいから、誰のいない部屋でもいいから自分で声に出して復唱してみる、それからやっと本物の自助グループで、要は生身の人の前で話してみる、このようなステップが有効なこともあるでしょう。

　まあそのようなネットの限界はともかく、AC部屋が有用なのは、『いままで体験してきたことを語るべき名前と場所がなかった』のが、パソコンとモデムさえあれば、それが可能になったことだろうと思います。

　そういう意味で、あそこの会議室は本当の癒しや他者性への再結合をめざしているというより、エンパワーメントが主体であるように感じています」

「普通の人」などいない

　私語りの「場」として、たしかにこういうものがある、ということを私はまず確認しておきたい。その繊細とも思える距離を保ちながら、呟くように語り合うことで何

かを獲得する世代がいるという事実を知っておきたい。

その彼らに向かって、今すぐ隣の人間と話し合えと肩を叩く気にもならない。しかし、これから先の時間を、老いたり、肉体的に病んだり、親しい人の死に向かい合うという、その時間も慈しんでほしいと思う。失われていくものはまだまだあるだろう。その欠落をこれからも埋めていかねばならない。

個々のトラウマは個々のものでしかなく、それを乗り越えるのも個人の時間と体験しかないだろう。生きるとは、体験に対する〝態度〟を持つことだと思う。

「普通の人」などいない。それぞれが苦しみ悩み生きているのだ。それが人間というものであろう。他者との関係に必要なのは想像力でしかない、と私は思う。人は他人のことなど分からない。想像することでしか他者との関係は結べないのだ。

人はすべてアダルト・チルドレンだ、とも言えるし、人はすべてアダルト・チルドレンではない、とも言える。ひとりひとりに物語はあるのだ。アダルト・チルドレンという物語からおりて、「私」の物語が紡がれる日がくることを願うばかりだ。

この社会は残酷で辛い。そのような社会が私たちを孤独に陥れ、そのような私たちがこの社会をつくった。溢れる情報の前に、溢れるさまざまな用語の前に、目を閉じてそのことを考えたいと思う。「私」の物語は、その闇のなかに現れるのではないだろうか。

（パソコン通信上の発言部につきましては、大意のみを伝え、言い回しを変えたものになっています）

EPILOGUE

マス・ジャーナリズムと謀略史観

神戸事件、オウム事件、そして『日本の黒い霧』。
電波文書、立花隆、松本清張の文体からあぶり出す、
東西二極構造崩壊後の日本に、「なぜ狂乱する人々が増殖したのか？」

朝倉喬司（犯罪評論家・ルポライター）

駅から歩いて五分、木立に薄く囲まれた高層マンションの真上を、旅客機が旋回していた。見上げると機影はかなり大きく、それは現に今上昇中の飛行機であるというより、灰色がかった青空にきっちりと図示された「飛行のメカニズム」そのもののように見えた。

「私は兵庫県警に、神戸の淳君殺害事件について情報提供した者です（この事件は組織犯罪である）。兵庫県警に送った2枚のファックスも送ります。14歳の少年が逮捕されて、さらに確信が強くなりました。2時に淳君を公園で見たと証言した子供達、PM2・30に淳君を見たと証言した主婦、PM3・00とPM3・30頃淳君を駅で見たと証言したタクシー運転手2人、PM6・00、淳君を見たと言った同級生、さらに『身長170㎝、年齢30～40歳ぐらい、がっしりした体格』と証言した人、これらの人達はすべて犯罪仲間です。この犯罪組織は家族ぐるみの犯罪活動をしています」

それぞれ十四階建ての、四つの棟からなる、しかるべき横文字の名が冠せられた集合マンション。周りに際限もなく広がった団地の建物群に比べて、マンションの背丈はひときわ高く、遠くから見ると、何がなし城砦めいても見える。駅の側からすると、マンションは、正面に向かい合ったショッピングセンターのちょうど裏手にあたる。ショッピングセンターの一階に大きく「BODY・SHOP」と表示されているのが目に入り、ヨガ行者風に座ったオールヌードの女性の写真がショーウィンドウに掲げてあった。

何の店だろうとのぞくと、輸入物の石鹸やタオルが並べてあった。要するに、入浴用品を売っているのだが、そこはそれ、「セラピー」だの「癒し」だの、からだへのいたわりだとか優しさにまつわる、いわゆるコンセプトというやつに、商品群はもってまわったやり方でくるまれているのだった。

「BODY・SHOP」の隣は、室内全体がローズピンクに彩られた、サンリオ系のキャラクターグッズの店。そのまた隣が、店一杯こまごまチカチカした破片のモザイクで成り立ったみたいなアクセサリーショップ。女子高生らしい客が二、三人。やはり彼女らはもっとうるさく、盛大に群れてこそ、消費の喚起装置といえるのであって、客とほぼ同数の店員の様子は、ひどく手もちぶさたに見えた。

駅前周辺で他に目立つのはスポーツクラブ、フィットネスクラブの建物。食堂はと捜すと、これがハンバーガーショップのたぐいが、芸もなく雁首を揃えて五軒、そのほかにはファミレスが一軒と、立ち食いソバ屋一軒だけ。俺をハンバーガー浸けにするつもりなのかお前らは、と理不尽な怒りにかられた。これひとえに食いものの恨み。お前ら、と言っても、もとより、それに該当する相手などどこにもいないのであるが。

淳君殺害事件の〝意外な〟真実!?

「私は神戸新聞社へ送られた犯行声明文も、このA少年の親が書いたのではないかと思っています。あの文章、文字は大人の過激派の犯行声明文と酷似しています。（略）D又、犯行の動機はなぞとされています。検察の発表だけでは納得しかねます。A少年はとり調べで『もう一人の自分に殺され

るように言われたから』と供述していますが、A少年はA少年の両親が属している犯罪組織のリーダーから、『誰でもいいから弱い者を殺せ』と命じられたのです。このことは首都圏で起きている女性を狙った連続通り魔事件や、女子中高生不明事件や、全国各地で起きている集団で登校中の児童の列に暴走車がとびこんで、多数の死傷者が出る、という事件（事故ではない）ともつながっています。私がそう断言できるのは、現在私が同じ犯罪組織に狙われていて、その実体がわかったからです」

駅から高層集合マンションへ、それが近まわりだと聞いて、表通りの一本裏側、ショッピングセンターの通用口に沿った舗道を歩く。「銀座・コージーコーナー」の、ままごとの道具みたいな小さなケーキが並んだショーウィンドウを過ぎて角を曲がると、左手前方に茫漠たる空地が広がった。フェンス際には背の高い雑草が茂り、空地の向う側には全面が緑色のビルが見える。

主婦と見える女が一人、次にまた一人と、ほぼ等間隔ですれ違っていく。そして自転車が追い越す。片手にハンドル、もう一方の手に買ったばかりの風呂場のスノコを抱えた中年男。あのビルはきっと、空から集中的に緑色の溶液を浴びせられて、あんな色の具合になったんだと、ふと思う。

「私は今、過激派（○○派革命軍＝旧国鉄の○○労組）に命を狙われています」

高層集合マンションは一階部分が駐車場になっていたが、うす暗く、ひどく陰気な印象の空間だった。

「何故過激派に命を狙われることになったのか。それはＮＨＫ○○放送局の○○部長と○○主任が私の殺害を過激派に依頼したからです（○○部長のセクハラに抗議し、受信料の公金横領に私が気づいたからです）」

駐車場のうそ寒いたたずまいは、停めてある車の一台一台に死体が乗せてあってもおかしくはなく、照準を定めるべき人の現れるのを待って迫害者が潜むにふさわしくもある。

「私は駐車場で殺されそうになりました。本当に『死』を感じました。このまま殺されたのでは無念です。私は『遺言』のつもりでお願いしているのです」

駐車場の外、マンション中庭の回廊めいた通路を小学生の男児が歩いているのが見えた。目当ての号棟が、建ち並ぶ建物のどれにあたるのか訊ねようと急ぎ足になった途端、「彼女」の視線がどこからかこちらに注がれているような気がした。「彼女」の視線からすれば、急ぎ足で小学生に近づこうとしている私も、きっと迫害者、または暗殺者と断定されてしかるべき姿に映るのだろう。

迫害者は○○派革命軍

さいぜんから断続的に引用してきた文章は、神戸の小学生殺害事件の少し後あたりから、マスコミ各社に送りつけられてきた、告発文めいたファクスからの抜粋である。一読して、書き手が強い思いこみに支配されていることは明らかだろう。こうした種類のファクスや手紙が、何か大きな事件が話題を呼ぶたびにメディアに送られてくるのは決して珍しいことではない。それどころか最近は激増と言ってもいいほどのありさまを呈しているのだが、あまり例のない

photo▶小島義秀

ことに、引用したファックスには差出人の名前（女性）と住所、電話番号が記されてあった。

電話をしてみると、たしかに文面にあった名を名乗る女性（声の調子から四十歳代と考えられる）が出て、最初は喜んだ様子だったが、しだいに警戒心を表に出しはじめ、会ってお話をうかがいたいというこちらの申し出は断わられた。「あなたがどっち側の人間だかわからないから」というのがその理由だった。「彼女」の主観では、世界は大きな対立する二勢力に占められていて、誰もがその「どちらか」に先験的に属していることになっているようだった。

文面にはまた、「私の住んでいるマンション（次に住所、マンション名明記＝引用者）を写真にとって下さい。この分譲マンションには○○労組＝○○派革命軍が100世帯以上住んでいること」（引用中、○○とした部分にはすべて実在の組織名、人名が記されてある）というクダリもあり、私はこの「写真にとって下さい」という言い方に、なぜか心ひかれるものがあって（理由は自分でもうまく説明できない。とにかくなぜだか）、いったいこの女性はどんな環境に暮らしているのだろうと、その「環境」だけを眺めに、記された住所の街へ出かけていった。

都心から電車で約三十分、街の印象は小学生殺害事件の起きた神戸市須磨区の〝あの一帯〟と、とてもよく似ていた。事件によって、その在り方が今さらながら問題視された、いわゆるひとつの典型的なニュータウン。「彼女」が住んでいるのは一帯でも高級な部類に属するマンションだった。

文面によれば、このマンションには○○派革命軍の構成員百人が組織的に居住しているのだという。とすれば「彼女」は自分の命を狙う敵の巣窟のまっただ中で生活していることになる。自分の部屋から外へ出るのもままならないのではないかと思われるが、これはおそらく、自分を内に閉ざしてしまった「彼女」が、その状態を一方的に外的世界に投影した結果、出てきたスト

ーリーなのだろう。つまり、なんらかの心的な事情で「外へ出ていけない」自分の存在様態への、あえて因果を逆さにした、必死の理由づけ。

「写真にとって下さい」

　という言葉には、この投影のメカニズムを、世界の側からなぞって（客観化して）ほしいという願望が含まれているようにも見える。

「確信への転落」、そして崩壊

　片側に雑草が列をなした道路を、「彼女」の投影によって世界にぽつりと刻印された幻にでもなったような気分で、マンションに近づく。そうやって近づくマンションは、前方に何がなし威圧的であり、「言われてみれば」悪の城砦めいて見えないでもなかった。

「一つの私的世界と、世界の非真実性への自己委譲と。この二つのものの逆説的な統一の中に、病の中心がある。べつなことばでいえば、病とは、もっとも極端な主観性の中にしりぞくことであると同時に、もっとも極端な客観性への転落なのである」（M・フーコー『精神疾患と心理学』）。

　フーコーの、このフレーズから言葉を借りて言えば「彼女」が精力的にマスコミに送りつけてきた文面の随所には「確信への転落」とでも言うべき心的現象の影が認められる。

　いや、客観世界への転落という形においてしか、「彼女」は、自分が「今、ここに在ることの確信に達することができないと言った方が正確だろう。

「私は～」、兵庫県警へ、事件について自ら到達した確信を情報として提供した「～者です」という出だしの形、これはいくつもの「彼女」の文面に共通のパターンであり、その提供先は、他に警視庁、○○地方検察庁から、国会議員に及んでいる。

　これは一面、自説、あるいは説をなす自分への権威づけでもあろうが、それ以上に、「確信への転落」が世界（当面のところは社会）に内包されて自分が在る唯一の方途であることを示している。「彼女」はきっと、端的に自分で在りつづけることじたいに、大変な労力を要する心的境遇にいるのだろう。フーコーの前掲書から再び言葉を借りて言えば、「彼女」は「つまり、世界の意味を持ちつづけることができないので」、その結果「いろいろな出来事に身をまかせるのである」。そして「このまとまりのない空間の中において、一つの崩壊のしるしがみとめられる」。

「彼女」が社会の要所要所に提供すべき情報は、形のうえでは推論によって成り立っているが、推論の方式そのものがのっけから「確信に転落」してガタガタになった趣であり、そこにまさしく「崩壊のしるし」が浮かび出している。と同時に、彼女が声を大にして言わんとするところは、つまるところ「私は～です」という、ひどく単調で、際限のない反復を強いられた、宿命と同一化してしまったような自己表明であることが判然としてくる。つまりは崩壊とひきかえの自己表明であり、そこに自らをたえずおびやかす迫害者の影が出現する必然があるのだろう。

　その反面、推論の方式が当初から確信に転落しているところは、自分を世論なるものに同一化して動じる風のないマスコミ一

般の論調に似ており、これはきっと「彼女」が「情報に身をまかせた」結果だろう。また、その推論と確信の重なり具合は、かつて小林秀雄が「金閣寺放火事件」にふれて書いた次のような文章を私に思い出させる。

「金閣を焼いた青年は、動機は、美に対する反感にあったと言っている。新聞に載った彼の自供は、いかにも狂人好みの推論のための推論、反省のための反省で、私の興味を惹いた。第一に、金閣の見物人を日々眺めているうちに、有閑階級に独占された美という考えを持つ、次に世人にとっての美は、自分にとって醜であると考える。次にそういう人を妬む自分の考え方自体が醜であると感ずる。原因は、おそらく自分を育てた悪い環境あるいは吃りという自分の生理構造にあると考える。矛盾した心を解決するために、放火を断行したが、これは自ら社会革命の端緒となるものである。(略) 悲しいかな、現代は狂人に充ちている。彼は意志を病んでいる。人間を信じないことをまず欲した。この発条だけはどうしても彼には理解できない」(「金閣焼亡」)

「他者」のパラダイス

金閣寺放火の青年と違って、「彼女」に推論の形骸はあるが、反省はない。そのことによって、彼女が孤独であるのなら、孤独で在ることが人にもたらす快楽からも隔てられてしまっているように見える。

そして、青年が眺めていたのが、境内に「有閑階級」の遊山客を集めた金閣の「美」であったのに対し、こちらが眺めているのは、もっぱらニュース、情報の空間である。彼女の日常は、圧倒的なまでに情報の空間性の侵蝕を受けており、そこに転落を〝保証〟すべき客観性が、「身をまかせる」べき異様な出来事、事件が生起しつづけている。

「いくつのも誤認のために、たえずくりかえされるさわぎ。そのさい、他人のひとりびとりが或る他人である、というわけではなく、主要な一人の『他者』なのであり、この他者はたえず出会われ、たえず追い払われ、たえず再発見される。ただひとりの存在なのだが、それが無数の顔をして立ちあらわれる。たとえばひとをあざむき、ひとを殺す、憎らしい男の顔。死の大陰謀を企てているどん欲な女の顔。どの顔も、知らないものであろうと、知っているものであろうと、一つのマスクでしかない。どのことばも、それがはっきりしていようと、不明瞭であろうと、ただ一つの意味をかくしている。つまり迫害者のマスクと、迫害者の意味である」

三たび、フーコーを引用してしまったが、「或る他人」であるべき他人の一人ひとりが、その境域から突出して、非現実的な「他者」に転化してしまいがちなのは、病んだ心においてのみならず、今の世の中の常態である。言葉をかえて言えば、私たち全員、他人への関心と無関心のバランスを崩したまま、生きている。

ことに、情報化社会ということが喧伝されだして以来、その傾向は加速度的に強まっている。情報の空間には、日常の現実には本来ありえない、たえず「自分」の方を向いた「他人」が頻繁に現れる。手っ取り早く、一人の部屋に置かれたテレビの画像

を想定してもらえればいい。そこにはいつも「自分」に視線をめぐらせ、意味あり気に笑いかけたり、語りかけてきたりする他人が現れる。そして「自分」も、非現実の「他者」として情報の空間に立ち交わるべき回路を大きく切り開いたのが、パソコン通信、インターネットである。そこではすでに、自ら迫害の仮面をつけた人間たちの跳梁が始まっている。

　ほかならぬ神戸の少年Aも、パソコンとは無縁だったようだが、情報空間には仮面をつけて登場した典型的な一人。そして「彼女」も、受動性に彩られてはいるが、同時に攻撃的な仮面をつけている。「過激派」の攻撃力を鏡のように反射させた仮面を。

　受動的な攻撃ということでいえば、去年の夏から秋にかけて、試験や文化祭を中止させようとして学校に自殺予告電話をかけた少年たちのことを思い出してもらってもいいだろう。

　情報化社会は、皮膜一枚めくれば、フーコーの言う意味での「他者」のパラダイスなのである。

「情報」の過剰流動は、まず何よりも「自分」と社会の空間との距離感覚を混乱させ、混乱は容易に他者との係わりの意識に波及する。と同時に、日常と非日常の区分も曖昧になり、非現実と現実の雑居が当たり前のことになる。双方の区分に基づいて醸成されてきた日常の種々の様式性も崩れていく。

ストーカーの出現とオウム真理教

「他者」にまつわる思いこみの心理を、社会的に制御する代表的な様式のひとつが、従来は「芸能」だった。

　まあたとえば全盛期のころの杉良太郎。彼のステージに押しかけ、感きわまった末に顔面を上気させて劇場を出てくるオバはんたちの、まず間違いなく十中八、九が、

「あの人は私のために歌い、演技してくれた」

　と思いこんでいたはずである。しかし「他者」はそこで様式にがんじがらめになっており、彼女たちはそのことで、つまり様式の呪縛力によって思いこみの暴走からガードされていたのである。

　時代が下るとともに、芸能を濃密に開花させる条件でもあった様式性は大幅に崩れた（テレビのニュースワイド番組を、報道のショー化、芸能化とかいって非難する人がよくいるが、あきらかに見当違いな話で、あれは芸能の様式性が成り立たなくなった「場所」に発生した放送の一形式なのである）。

　当然、それは日常の諸様式の崩壊と並行した現象だったのであり、「他者」への思いこみは平然と日常にあふれ、乱反射を繰り返すようになった。ベストセラー『脳内革命』のプロデューサー役だった船井幸雄の周辺に醸され、広がった〝薄められた〟神秘主義とでも称すべき発想領域に「乱反射」の様相は最も顕著である。

　相手のほんのちょっとした仕草や素振りに「自分を愛している」シルシを発見し、あっという間に人間トリモチ状態になるストーカーの出現は、そんな時代のスウ勢の、末期的な表れと言えるだろう。

「彼女」の告発文が病理に彩られているのだとするなら、それは非現実的な「他者」

のパラダイスと化した情報空間に蔓延した病理の反映に他ならないだろう。

　そのことでひとつ思い出すのは、オウム真理教のマスメディア登場にまつわる一場面である。

　サリン事件発生の二カ月ほど前から、オウム真理教は、自分たちこそ何か得体の知れない勢力からの毒ガス攻撃にさらされているのだと公然と主張しはじめた（米軍、あるいは自衛隊の介在をほのめかせながら）。信者の多くがそのことの確信に転落し、教団は本部道場の敷地に隣接する農家を、直接の実行行為者として告訴した。この時点で、オウムに集団妄想に類する病理が進行している気配はきわめて濃厚だったのだが、それを指摘したマスメディアは（私の知る限り）皆無だった。

　メディアは、彼らと同根の病いに包みこまれていて、的確に気づかなかった、気づけなかったと言って過言ではないだろう。そして事件の後、〝勇躍〟テレビに登場して、ああ言えばこう言う式の弁舌でシーンを活性化させた面々の、情報空間との注目すべき親和性については、今さら指摘する

までもないだろう。同じころ、オウムが作成した「被害立証ビデオ」がテレビで流されたが、その画面構成や、証言者の口調、表情に至るまでテレビのドキュメント番組の、まさしく鏡像だった。

「狂人好み」としての立花隆

オウムの妄想、犯罪は、一般に考えられているよりははるかに深く、情報空間に現れては消える「他者」との係わりに根ざしたものだったと思う。「彼女」がそうであろうように「彼ら」もまた、追いつめられた心情のまにまに、異様な出来事に「身をまかせ」、崩壊のシルシもあらわに、「他者」、すなわち迫害者の幻に直面し、激突したのだと。「彼女」も「彼ら」も、その思いこみの構成をジャーナリズムのレトリック、あるいはそれが織りあげる「論理のさわり」とでも言うべき部分に、大きく依拠している。告発の姿勢が、自動的に正義を体現するかのような言葉の調子に、まずそのことは示されている。

「彼女」は文面において、マスコミに目撃証言をした人はすべて犯罪組織の一員だと断定している。これは、少年の逮捕があって、目撃証言の当てにならなさへの言及がひとしきりマスコミをにぎわせた、そのにぎわいの「さわり」に明らかに感応したものである。犯行声明文を「大人が書いた」としているのも、犯人が少年であった意外性へとともに、声明文の大人びた論理性への「驚き」がメディア上にわき上がった、その「わき上り」の「さわり」を思いこみの構成にとり入れたものである。声明文に関して、たとえば立花隆は次のように書いている。

「あの声明文はなかなかの文章である。現役の大学生のレポートを相当読んでいる人間として断言できるが、あれだけの文章が書ける人間は、大学生にもそうはいない。（略）最初の死体の首に付けられていた、短い手紙は（略）支離滅裂の文章の典型である。あれは内容からいっても書き方からいっても、知性の輝きが全くうかがえない、暴走族レベルの文章である。（略）結局、私は、殺人の実行行為をした粗暴で知性が低い人物と、犯行声明文を書いたのは別の人物ではないかと思っている。（略）そう考えると、犯人について、妙にクールで第三者的視点からの叙述があるのもわかる」（『週刊現代』九七年六月二十八日号）

これは犯人逮捕前の文章だが、逮捕後も声明文の整序された論理性から推論を起こして、「別人の介在」に結びつける言説は他にいくつか現れた。立花のこの文章は、レトリックのうえでは緻密な印象を保っているが、犯行過程のそれぞれ異なる局面で、異なる方向感覚、文体意識で書かれた（にちがいない）二つの文を、文章一般として同一平面で比較するという、とても粗雑な部分をはらんでおり、それが思いこみを呼びよせている。

こうした「思いこみ」や、推論のもっともらしさの裏側にへばりついた「おぼつかなさ」も、ジャーナリズムのレトリックの実は「さわり」になるのであり（事件報道においてはとくに）、それを糸口にして出来事の「真相」や「裏の事情」への想像力のゲームが情報空間に繰り広げられることになる。言うまでもなく「彼女」も、このゲームへの積極的な参加者である。

なにしろ彼女はその存在をゲームに賭けているのであり、ゲームが場に呼び出す「他者」との葛藤は極限に達しつつある様子なのだが、このような人は今の世の中に無数に散らばっているのだろう。そしてこのゲーム、言葉を換えて言えば、かつて小林秀雄が「狂人好み」と形容した「推論のための推論」に他なるまい。

ジャーナリズムとは、元来は、この「推論のための推論」が、あるアクチュアリティ、リアリティをもって稼働しうる場であることをもって、そう称されていたはずである。そこに生ずる「思いこみ」も、事件なら事件のナゾ解きの必須の要件であるように、誰の目にも見えていたはずである。しかし今や「推論のための推論」は、そんな具合にはなかなか機能してくれない。

推論はいともたやすく確信に転落し、思いこみはリアリティへの回帰の道筋を見失って、別種の思いこみを誘発し、双方癒着しあってみたり、反発、葛藤を繰り返してみたり。まさにゲームとでも称するしかないそんな場面に、私たちはこの情報空間のいたるところでお目にかかることができる。

いったいなぜ、こういうことになったのかを、以下、少し考えてみよう。話は少し時代をさかのぼることになる。

松本清張、そのズサンな「替え玉説」

松本清張は、戦後、日本が米軍の占領下にあった時代に起きた種々の重大事件のナゾの解明に精力的にとりくんだ人として知られる。その方面での代表作が『日本の黒い霧』で、この著作には「下山国鉄総裁謀殺論」、「『もく星号』遭難事件」「ラストヴォロフ事件」「白鳥事件」「二大疑獄事件」「革命を売る男・伊藤律」「征服者とダイヤモンド」「帝銀事件の謎」「鹿地亘事件」「推理・松川事件」「追放とレッド・パージ」「謀略朝鮮戦争」といったタイトルの、そのままで戦後史の叙述になると言っていい諸論稿が収められている。

ジャーナリスティックな視野が歴史につなげられようとしており、論考の多くが事件の背後に米占領軍と、それと結んだ日本の反動勢力の謀略、陰謀、工作、強制の影を見、そこに推論のメスを入れたものである。この著作や、そこに貫徹された松本清張の「戦後史の隠された部分」への挑戦姿勢は、高く評価されて今に至っている。

ところが今回、私はかつて一度読んだことのあるこの本を読みかえして、とくに「下山事件」に関する彼の推理のズサンさには、ほとんど唖然としてしまった。細かくあたっている紙数はないので、一点だけとり出しておこう。

周知のように「下山事件」は、轢死体として発見された下山国鉄総裁の死が、自殺か他殺かで論議を呼んだのだったが、松本は他殺説＝米軍による謀殺説をとっている。そして警視庁捜査一課を中心とした自殺説を、謀殺の事実を隠蔽するためのものと疑い、一課が作成した「下山事件白書」に記された目撃証言のいくつかに出てくる、死の直前の下山総裁の姿を、米軍による替え玉だとする。具体的な根拠は全くなしに、ほとんど断定する。それはまだいいのだが、ではいったい米軍が、なぜそんなややこしい細工をしたのかとなると、松本の論の進め方からすれば他殺を自殺に見せかけるためというしかない。ところが松本は、米軍

が下山を殺したそもそもの動機について、
「米占領軍の中で日本の占領政策の転換（民主化から反共へ＝引用者）を望むものがあった。すなわち、国鉄総裁が殺害されたことによって、国鉄関係の極左尖鋭分子の犯行と思わせ（下山は当時、国鉄の大規模な人員整理に着手していた＝同）、当時伸びてきた共産党その他の民主勢力を『赤色暴力』の集団という恐怖感に変え、次の年の朝鮮戦争の可能性に備えたのではあるまいか」（前掲書所収『幻の謀略機関』をさぐる」）

　と述べているのである。ならば米軍は、下山の死体をはっきり他殺として、さらには「民主勢力」がやったように擬装して見せねばならないはずで、わざわざ替え玉まで使って自殺に見せかける必要など万が一にも生じようがない。替え玉説は言説をなすうえでの根本的な矛盾である。もっとも松本は、すぐ後のところで、
「下山事件に絞れば、G2と対立するGSが、G2の線のこの謀略を探りはじめたので、G2はあわてはじめ、折りから自殺説の警視庁捜査一課の方針を支持したと思われる」

　と、つじつまあわせめいたことを書いているが、とくに詮索するまでもなく、これでは米軍が替え玉を使った動機の説明には全くならない。なおG2、GSはともにGHQ内のそれぞれ参謀第二部、民政局の略称で、この両者は戦後日本の民主化の進め方等について何かと対立したが、松本は、下山謀殺はG2指揮下に行なわれたとしている。ただし、その直接的な根拠は何も示されておらず、すべて間接、情況的な判断に基づいている。GSが「探りはじめた」のも、G2が「あわてはじめた」のも、すべて松本の想像裡の話である。

謀略説より秀でたもの

　ここで話がちょっと脇にそれるかもしれないが、下山事件に関して、私がひどく感嘆したのが坂口安吾の「孤独と好色」という一文における推理である。こちらは松本の謀略説などとは比べものにならないくらい、スリリングで迫真的だった。どちらが事件の真相に近いかではなく、ひとつの事件についての可能性の呈示の仕方が見事だと思ったのである。

　坂口は下山はやはり自殺だったのではないかと見るのだが、推理の基底に「人間は、最も激しい孤独に襲われたとき最も好色になる」という、彼自身の経験知を置き、
「最後のギリギリのところで、孤独感と好色が、ただ二つだけ残されて、めざましく共存するということは、人間の孤独感というものが、人間を嫌うところからこずに、人間を愛することから由来していることを語ってくれているように思う」と述べている。

　そして坂口は、事件直前の下山が激しい孤独に襲われっぱなしの、メランコリーの極限状態にあったと見るのである（詳細は略すが、そのことを示すに足る証言はかなりの数、残されている）。
「こういう状態の時には別にさしたるショックや、見るべき動機がなくても、綱のきれた風船のように、フラフラとさまよいだすことがある」

　と坂口は言う。

　そして、「綱のきれた風船のように」な

ったとき自分の経験では「親しい人に合いたくなる」のだが、そんな場合はっきり言えるのは、肉親などの最も身近な人に会いたいと思わないことだ。なぜかと言えば「一番親しいものは病気の原因の中にいつも含まれているのだから」と続ける。そのうえで、下山の死体発見現場近くには彼が可愛がっていたタイピストが住んでいたのだが、下山はフラフラと、適度に親しい間柄の彼女に会いにいったのではないかと推理する。と言っても「それだけが彼の心の全部ではない。彼はその日GHQの人たちと会う約束であったというが、その時間はもうすぎている。そのことに思い付くと居たたまれない苦痛を覚えたであろうし、又、唐突に家族のことや、いろいろの職務のことや、それらはすべてそれらを思いだすたびに、彼を混乱させ、どうしてよいか分からなくさせたに違いない」。

タイピストと下山とはプラトニックな間柄であり、実の娘のように可愛がっていた。が、それでも男と女との関係は、それがどんなものであっても「底に肉欲的な願望が必ず潜在している」のであり、それは「綱のきれた風船の状態では、かなり露骨に表面に浮かびでてくる」。そのことを意識してタイピストを訪ねあぐねたりもしたのだろう。

また当時、現場近くの旅館に下山らしい中年男が現れて休憩したという証言があった。この中年男を松本は替え玉と見たのだが、男は、ちょっと休ませてくれと言いながら、女はいるか?と、妙な笑い方をしたというので、国鉄総裁ともあろう人が、そんな野卑な素振りをするものか、人違いだろうと考えられもした。

だが坂口は前記の理由から、それが下山本人だったとしても決して不自然ではないという。すべてはメランコリーの極限において、死に誘引されたり色欲にかられたりをめまぐるしく繰り返しながら自殺に追いこまれた男の彷徨の姿ではないかと。経験知と、人間への洞察と、下山が置かれた状況、現場の様子を鮮やかに重ねあわせた、この推理の一級品を知る人は少ないだろうが、「推論のための推論」のあばら骨が透けて見え、思いこみに思いこみを重ねたというしかない松本の謀略説は広く世に受け入れられた。ジャーナリズムの視野において、「推論のための推論」は、そうとは見えず、人を打つだけの説得力を獲得しえていたことの、これはまさに格好の例証である。

東西二極構造が支えた「リアリティ」

松本清張は「下山国鉄総裁謀殺論」の末尾で次のように述べている。

「下山事件の捜査はすでに事実上打ち切られたものであり、この謀略の実際の姿は、世界における日本の現在の位置が変更せぬ限り、永遠に発表されることはないだろう」

この短いクダリが、リアリティのよってきたる由縁を問わず語りしている。ナゾを解くべき推論の主体は実は松本であって松本ではなく、この国の歴史的未来、「いまよりもっと民主的になった日本」、あるいは「いずれもっと民主化さるべき日本」なのである。進歩への歴史の必然と、それに基づいた理想が広く信じられ、「推論のための推論」は、理想の脈絡に沿って、それ

を妨げる勢力の、そうであるがゆえの後暗い所業、謀略、悪徳へ向けてひたすら機能せしめられている。勢力は、進歩の必然に棹さしている社会に対する〝必然的〟な迫害者でもあり、推論はそれを暗黒のイメージで彩り、怪物めかせて像化する。もとより幻想には違いないが、この幻想は歴史的脈絡において消え去るべきものとして現れている。消えていくものの暗さによって、招来される未来の明るさもきわ立つ。

かくして「推論のための推論」は、「未来のための推論」「社会の明るみのための推論」として、ジャーナリズムの視野に定着し、説得力とアクチュアリティを獲得する。定着を保証したのは「進歩と反動」の、イデオロギーがらみの対立の構図である。さらに、この構図を大きく支えていたのが、米ソの対立を軸にした、世界政治のいわゆる二極構造だった。

松本の一連の〝戦後史もの〟が扱っている事件は、ちょうどこの二極構造の、流血をはらんだ形成期に起きたものであり、そのどれをとっても、形成の力動が醸し出す熱っぽい気分が「推論のための推論」を包みこんでいる。

東西の二極構造は、イデオロギー的にあくまで「理想」をめぐる対立を基盤にしたものであり、「未来」や「明るみ」へ向けた推論は、もちろん、進歩を標榜する「東」の専売特許というわけではなかった。一方が先験的に「進歩」で、他方があらかじめ「反動」のレッテルに甘んじるべくそこに在るのだったら、そもそも対立が構造を形成することなどありえない。

またしても小林秀雄を引用すると、一九六四年発表の彼の「ソヴェトの旅」に、次のようなクダリがある。

「ソヴェトを旅行して、たとえば、文士はこんなことを言いたがる。自分はシベリヤ鉄道で行きたいと言ったが許可しない。飛行機に乗せられてしまって残念である。これにはシベリアを見せたくない何か訳があるに違いない、と。どうも私にはわからぬ考えである。フルシチョフ氏は、スパイは警戒しているだろうが、文士など警戒するはずはない。文士にわかるような秘密は、国家の秘密ではあるまい。私がフルシチョフでも、鉄道なんか許可しません。さっさと飛行機で来てもらう。理由は簡明だ。忙しいからです」

少し後のところでも小林は「ソヴェトには地図がない」という「事実」を「明らかに、ソヴェトの国家の秘密主義と関連する現象である」として大論文を書いた「文士」をひきあいに出して、そうした「いかにもわが国の知識人らしい着想」に、へきえきした様子を見せている。

政治や社会に関係する、さまざまな未解明部分、あるいは克服されるべき〝後進性〟に、理想に照らして推論の光をあてる。これはジャーナリズム全般を律する、思考の、あるいは論述の強固なパターンでもあるのだが、そこに働いている推論は、一見そうは見えなくても、その原形質は「推論のための推論」でしかありえないのだと、小林は言っているように見える。さらに深読みすれば、そうした推論のリアリティ、ほんとらしさは、ただ世界政治の対抗の力学に支えられて、そこに醸し出されているに過ぎないのだと。ことのついでを装いながら、小林はそんなふうに言っているように読める。

そうしたパターンへのはまりこみを、小林は「いかにもわが国の知識人らしい着想」と言っている。

「推論のための推論」が、そうとは見えずに稼働していたのは、政治的な立場などとは関係なく、この国の広い意味でのジャーナリズム全般だったことの、これは歴史的証言と言うべきである。

職業病としての関係妄想

また、小林がここでやり玉にあげている「文士」には、明らかに関係妄想の気配が感じられるが、こうした社会の空間全域と「自分」とを軸にした、拡大関係妄想的とでも言うべき気分は、ジャーナリズムにきわめて一般的なものである。私の知り合いのジャーナリストの何人かにも、言ってはいが、あらゆる事象に陰謀、謀略の影を見つけ出してあきない、思いこみの達人がかつていたし、ある一人は、ジャーナリストをやめた途端、「みんなが俺を殺そうとしている」と突然口走るなどして、限りなくほんまもんに近づいていてしまった。

医者が病院のシステムによって病菌から守られているように、異様で分からない部分の多い社会や、そこで生起する事件に接近するのに、ジャーナリズムという制度の枠内にいることで、彼は狂気からガードされていたのである。関係妄想、それの派生形態と言うべき、作為＝陰謀妄想は、私はジャーナリストの職業病のひとつではないかと思うことがある。

それもこれも、「推論のための推論」の、ときならぬ暴走。

と、さて、時代が下るにつれて、世界政治の二極構造も、輪郭がしだいに曖昧になり、八〇年代のどんづまりには最終的に消滅した。事態は単に世界から大きな対立がなくなった（平和の条件が整った、めでたしめでたし）ということでは決して終わらない。ことの核心は「理想」をめぐる世界の変容なのであって、対峙の構造に惹起されて、未来に輪郭を保っていた「理想」は、大いにボヤけた。国内的に言えば、保守と革新、あるいは権力と大衆の区分が曖昧になって、政治劇からリアリティが蒸発してしまったのも、「理想」の輪郭のぼやけと大いに関連している。

こうした過程がジャーナリズムにもたらしたのは、「推論のための推論」を社会的な意味や価値につなぐ形式のゆるみだったと言っていいだろう。

このゆるみに乗じて、「推論のための推論」はその恣意性に満ちた原形質をあらわにして、アトランダムな形で世のさまざまな「事実」に係わるようになった。それが情報化社会といわれるもののある内実を形づくってきた。

オウム真理教の集団妄想に現れたのが、ことさらに「米軍」であったり、「彼女」が自らを迫害する正体と信じてやまないのが「過激派」であるあたり、私にはとても暗示的なことのように思える。

それらはともに、かつて世界に、推論のリアリティを保証していた対立構造の一方の立役者。

それが、時代の変遷とともに、柳田国男のいう「零落した神」さながらの、妖怪めいた姿になって、非現実的な「他者」のパラダイスに立ち交っている様を垣間見るような気がしてくるのである。

筆者紹介

●朝倉喬司 あさくら・きょうじ
'43年岐阜県生まれ。早稲田大学一文卒。週刊誌記者を経てフリーに。著書に『走れ！国定忠治』（現代書館）、『盗視者』（共著・幻冬社文庫）等多数がある。

●浅野恭平 あさの・きょうへい
'50年栃木県生まれ。北海道大学卒。著書に『「いなか」の挑戦』（実務教育出版）等がある。

●海老名ベテルギウス則雄 えびな・べてるぎうす・のりお
'67年神奈川県生まれ。横浜国立大学教育学部卒。畸人研究学会会員。

●大月隆寛 おおつき・たかひろ
'59年東京都生まれ。早稲田大学法学部卒、成城大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得。民俗学、民俗文化論専攻。著書に『民俗学という不幸』（青弓社）、『若気の至り』（洋泉社）等がある。

●春日武彦 かすが・たけひこ
'51年京都府生まれ。日本医科大学卒。精神科医。著書に『心の闇に魔物は棲むか』（大和書房）等がある。

●唐沢俊一 からさわ・しゅんいち
'58年北海道生まれ。青山学院大学卒、東京薬科大学中退。著書に『カルト王』（大和書房）等多数がある。

●黒崎犀彦 くろさき・さいひこ
'65年福岡県生まれ。横浜国立大学教育学部卒。畸人研究学会会員。

●呉智英 ご・ちえい
'46年愛知県生まれ。早稲田大学法学部卒。著書に『バカにつける薬』『サルの正義』（以上双葉文庫）等多数がある。

●今一生 こん・いっしょう
'65年群馬県生まれ。早稲田大学一文除籍。編著に『日本一醜い親への手紙』（メディアワークス）がある。

●今柊二 こん・しゅうじ
'67年愛媛県生まれ。横浜国立大学教育学部卒。畸人研究学会主幹。

●佐山順平 さやま・じゅんぺい
'57年生まれ。ルポライター。

●高橋秀実 たかはし・ひでみね
'61年神奈川県生まれ。東京外国語大学モンゴル語学科卒。テレビ番組制作会社を経てフリーに。著書に『にせニッポン人探訪記』（草思社）等がある。

●高邑秋人 たかむら・あきひと
'54年茨城県生まれ。早稲田大学卒。建築雑誌の編集を経てフリーライターに。

●田中聡 たなか・さとし
'62年富山県生まれ。富山大学文学専攻科修了。著書に『衛生博覧会の欲望』（青弓社）等がある。

●田原一樹 たわら・かずき
'64年東京都生まれ。出版社勤務を経てフリーに。

●遠山高史 とおやま・たかし
'46年新潟県生まれ。千葉大学医学部卒。著書に『医者がすすめる不養生』（新潮社）等がある。

●根本敬 ねもと・たかし
'58年東京都生まれ。'81年に月刊漫画誌『ガロ』誌上にて、「青春むせび泣き」を発表、特殊漫画家としてデビュー。著書に『怪人無礼講ララバイ』（青林堂）、『人生解毒波止場』（洋泉社）等多数。

●深沢薫 ふかざわ・かおる
'67年東京都生まれ。風俗誌、スポーツ紙を中心に執筆する。

●宝泉薫 ほうせん・かおる
'64年岐阜県生まれ。早稲田大学除籍後、ミニコミ誌編集を経て著述業に。著書に『ドキュメント摂食障害』（時事通信社・加藤秀樹名義）がある。

●見沢知廉 みさわ・ちれん
'59年東京都生まれ。中央大学法学部出身。一水会元議長、統一戦線義勇軍元総裁。'82年、「イギリス大使館火炎瓶ゲリラ事件」「スパイ処刑事件」で逮捕され、懲役12年の判決が下る。'94年、獄中で書いた「天皇ごっこ」で新日本文学賞受賞。

●村崎百郎 むらさき・ひゃくろう
'61年シベリア生まれ。中卒。著書には『電波系』（太田出版）等がある。

●森岡健作 もりおか・けんさく
'53年三重県生まれ。フリーライター。

●山形浩生 やまがた・ひろお
'64年東京都生まれ。東京大学工学部都市工学科卒、東京大学大学院修士課程修了。数多くの翻訳を手掛け、訳書にティモシー・リアリー『神経政治学』（トレヴィル）等多数。

●与那原恵 よなはら・けい
'58年東京都生まれ。図書館勤務を経てフリーライターに。共著に『「在日」外国人』（晶文社）、著書に『物語の海、揺れる島』（小学館）等がある。

●米本和広 よねもと・かずひろ
ルポライター。著書に『洗脳の楽園～ヤマギシ会という悲劇』（洋泉社）等。

別冊宝島三五六号【実録！サイコさんからの手紙】 一九九八年一月三日発行

編集長――梨本敬法
編集――井野良介・宮下郁子・田原一樹（太字は本号担当者）
編集局長――石井慎二
発行人――蓮見清一
発行所――株式会社宝島社©
〒102 東京都千代田区一番町25番地 電話〈営業部〉03・3234・4621 〈編集部〉03・3234・3692
郵便振替＝00170・1・170829㈱宝島社
印刷所――文唱堂印刷株式会社 Printed in Japan

帰ってきた、隣のサイコさん!!

［本書の内容から］

PART 1 キレ者まかり通る！
◎魂のスカッドミサイル被爆体験記！
◎競馬グッズと《逆ギレ・ミザリー》の面の皮
◎ゴミに賭ける〝新新新人類〟の肖像

PART 2 世紀末スラム空間を行く！
◎〝解放〟治療居酒屋のアブナイ面々
◎実録！エヴァンゲリオン症候群!!
◎毎日がインデペンデンス・デイ！

PART 3 電波来襲!!
◎皇位継承権は我にあり！
◎電波の迷宮を歩く
◎精神科医が妄想に組み込まれる時

PART 4 もの言う人びと
◎癒しとしての「歴史教科書問題」
◎クレームばばあ、血気ざかり！
◎泡沫候補撃退マニュアル！etc.

EPILOGUE マス・ジャーナリズムと謀略史観

雑誌65982-20
定価：本体900円＋税
9784796693561
ISBN4-7966-9356-4
C9436 ¥900E
1929436009007